長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　127

長野市

KOJIMA　　YANAGIHARA

小島・柳原遺跡群

一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

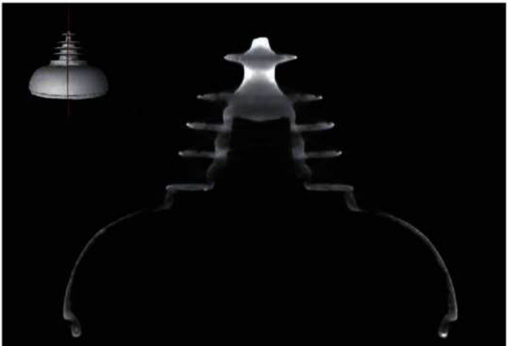
2020．3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

遺跡遠景　2017 年 6 月撮影（南西から）

SB04 出土遺物

塔鋺形合子　蓋



塔鋺形合子　蓋　X線CT画像（撮影　奈良国立博物館）

例　　言

1　本書は、長野県長野市に所在する、小島・柳原遺跡群の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。受委託契約については第1章を参照願いたい。

3　遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』33～36で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）をもとに作成した。

5　本書で取り扱っている国土座標は国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準としている。座標値は日本測地系を用いている。

6　発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託または御指導・御協力を得た（敬称略）。

○業務委託

放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ（令和元年度）

土器接着・復元・実測・トレース：有限会社毛野考古学研究所（平成30年度）

X線透過撮影：長野県立歴史館（平成28・30年度）

X線CT撮影：奈良国立博物館（平成29年度）

公益財団法人元興寺文化財研究所（平成30年度）

蛍光X線分析：長野県工業技術総合センター（平成28年度）

奈良国立博物館（平成29年度）

○調査指導

遺跡調査指導委員：長野県文化財保護審議会委員　市澤英利（委員長）

公益財団法人元興寺文化財研究所副所長　狭川真一

立正大学文学部教授　時枝　務

奈良国立博物館学芸部長　内藤　栄

宮内庁正倉院事務所長　西川明彦

京都美術工芸大学副学長　村上　隆（平成29～令和元年度　役職名は委任初年のもの）

遺跡調査指導：国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授　井原今朝男（平成29年度）

遺物調査指導：般若鋳造所　般若勘渓（平成30年度）

繊維同定：信州大学繊維学部助教　児山祥平研究室（平成28・30年度）

人骨・獣骨鑑定：京都大学名誉教授　茂原信生（平成28～令和元年度）

総合研究大学院大学准教授　本郷一美（平成28～令和元年度）

獨協医科大学解剖学講座マクロ教室事務長　櫻井秀雄（平成28～令和元年度）

日本大学松戸歯学部専任講師　五十嵐由里子（令和元年度）

7　発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の機関・諸氏に御指導・御協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。

〔機関〕宮内庁正倉院事務所、公益財団法人元興寺文化財研究所、古河市教育委員会、信州大学、高崎市教育委員会、東京国立博物館、長野県善光寺平土地改良区、長野県立歴史館、長野市埋蔵文化財センター、長野市立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所、日光二荒山神社宝物館、富士見市水子貝塚資料館、柳原地区住民自治協議会、株式会社 AB.do、株式会社コヤマ

〔個人〕新井栄子、石澤広明、飯島哲也、飯田茂雄、井出浩正、伊藤信二、風間栄一、加藤秀之、神田孝文、久保田正弘、高妻洋成、小林　聡、清水　健、白沢勝彦、隈本健介、高川昭良、田中瑞穂、田村朋美、鶴　真美、鳥越俊行、仲野泰裕、中村　忠、中村力也、藤澤典彦、松本誠吾、松本信之、福島正樹、矢島　浩、山田卓司、吉澤　悟、和氣洋誠

8　発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第2節に記載した。

9　本書の執筆担当分担は、以下のとおりである。

執筆分担

第1章　平林　彰

第2章　石丸敦史　川崎　保

第3章　第1節　寺内貴美子、第2節　石丸、第3・4節　遺構　石丸・寺内、遺物　鶴田典昭・石丸

第4章　第1節　石丸、第2・4節　寺内、第3節　村上 隆（遺跡調査指導委員）

第5章　第1節　寺内、第2節　川崎

第6章　第1節　寺内、第2・3節　石丸

おわりに　市澤英利（遺跡調査指導委員長）

校閲　調査部長　平林　彰、調査第2課長　川崎　保

総括　調査部長　平林　彰

10　本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。

報告書 PDF、遺構一覧表、遺物観察表、自然科学分析報告書、台帳、写真 他

凡　例

1　遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘調査で欠番としたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。

2　遺構番号は、本報告の本文・図表・写真のすべてに共通する。

3　本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

（1）遺構実測図

竪穴建物跡・竪穴状遺構（1：60）、溝跡（1：60、1：80、1：150、1：200、1：250）、
墓跡・焼成遺構・土坑・井戸跡（1：20、1：30、1：40）

（2）遺物実測図

土器（1：4）、石器・石製品（2：3、1：2、1：3、1：6）、
金属製品（2：3、1：2）、木製品（1：6、1：12）

（3）遺物写真

原則として遺物実測図とおおよそ共通であるが、任意縮尺にしているものもある。

4　遺物の器種名は、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。

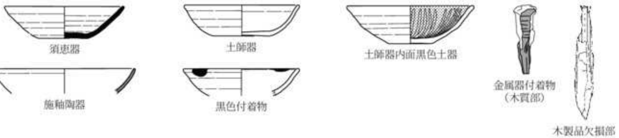
5　基本層序および遺構埋土、土器の色調、粒径の区分等は「新版　標準土色帳 2007 年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）」に準拠した。

6　実測図中のスクリーントーン等の凡例は、以下のとおりである。

遺構図

礫	火床	焼土	炭化物
地山	硬化範囲	● 土器	☆ 金属器、金属製品
◇ 歯骨	● ▲ 石器、石製品	◆ 木杭	

遺物図



7　本報告の本文・表で、遺構重複について、（新）は記述遺構より新しい遺構、（旧）は記述遺構より古い遺構のことを示す。

目　次

巻頭写真
例言
凡例
目次
図版目次
挿表目次
写真図版目次

第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　発掘作業の経過…… 6
　第３節　遺跡調査指導委員会……11

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……15
　第２節　歴史的環境……18

第３章　調査の方法と成果
　第１節　調査の方法……26
　第２節　基本層序……31
　第３節　古代の遺構と遺物……41
　第４節　中世以降の遺構と遺物…… 111

第４章　塔鋺形合子
　第１節　発掘調査の経過と出土状態の検討…… 148
　第２節　外部観察による形態と模様…… 152
　第３節　塔鋺形合子のＸ線CTによる構造と制作技術の調査…… 155
　第４節　塔鋺形合子付着繊維状物体の分析…… 157

第５章　自然科学分析
　第１節　出土骨鑑定…… 164
　第２節　放射性炭素年代測定…… 178

第６章　総括
　第１節　日本出土塔鋺形合子における小島・柳原遺跡群出土品の位置付け…… 182
　第２節　塔鋺形合子が出土した竪穴建物跡…… 192
　第３節　土地利用からみた小島・柳原遺跡群…… 199

おわりに…………………………………………………………………………………………………… 205

土器・土製品観察表
遺構一覧表
写真図版
報告書抄録
添付 DVD

図版目次

第１図　長野東バイパス位置図……………………3
第２図　調査範囲図…………………………………4
第３図　小島・柳原遺跡群の位置……………… 16
第４図　浅川・裾花川扇状地の遺跡分布……… 17
第５図　小島・柳原遺跡群調査地点…………… 18
第６図　小島・柳原遺跡群中心部……………… 19
第７図　旧長野市街地における条里遺構……… 23
第８図　調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称………………………………………… 27
第９図　トレンチ配置図………………………… 28
第10図　基本層序………………………………… 32
第11図　遺構配置図……………………………… 33
第12図　遺構分布図１…………………………… 34
第13図　遺構分布図２…………………………… 35
第14図　遺構分布図３…………………………… 36
第15図　遺構分布図４…………………………… 37
第16図　遺構分布図５…………………………… 38
第17図　遺構分布図６…………………………… 39
第18図　遺構分布図７…………………………… 40
第19図　SB02（１）　………………………… 41
第20図　SB02（２）　………………………… 42
第21図　SB03（１）　………………………… 43
第22図　SB03（２）　………………………… 44
第23図　SB03・04　…………………………… 45
第24図　SB04（１）　………………………… 46
第25図　SB04（２）　………………………… 47
第26図　SB04（３）　………………………… 48
第27図　SB05　………………………………… 49
第28図　SB06（１）　………………………… 51
第29図　SB06（２）　………………………… 52
第30図　SB06（３）　………………………… 53
第31図　SB07　………………………………… 54
第32図　SB08　………………………………… 55
第33図　SB09　………………………………… 56
第34図　SB10（１）　………………………… 57
第35図　SB10（２）　………………………… 58
第36図　SB13　………………………………… 59
第37図　SB14　………………………………… 60
第38図　SB15　………………………………… 61
第39図　SB17（１）　………………………… 62
第40図　SB17（２）　………………………… 63
第41図　SB22　………………………………… 64
第42図　SB23・SF20　………………………… 65
第43図　SB24　………………………………… 67
第44図　SB27　………………………………… 68
第45図　SB28　………………………………… 68
第46図　SB29　………………………………… 69
第47図　SB30（１）　………………………… 71
第48図　SB30（２）　………………………… 72
第49図　SB30（３）　………………………… 73
第50図　SB30（４）　………………………… 74
第51図　SB31（１）　………………………… 75
第52図　SB31（２）　………………………… 76
第53図　SB33　………………………………… 77
第54図　SB34・35　…………………………… 79
第55図　SX01　………………………………… 80
第56図　SX05・SF15　………………………… 81
第57図　SB01　………………………………… 82
第58図　SB11　………………………………… 83
第59図　SB12　………………………………… 84
第60図　SB18　………………………………… 84
第61図　SB19　………………………………… 85
第62図　SB20　………………………………… 86
第63図　SB21　………………………………… 87
第64図　SB25　………………………………… 87
第65図　SB26・32　…………………………… 88
第66図　SD02・03　…………………………… 91
第67図　SD04・05・06・07　………………… 92
第68図　SD17・18・20・21・22・23　……… 93
第69図　SF01・04・05・07・08　…………… 95
第70図　SX03　………………………………… 96
第71図　土坑　遺構図１………………………101
第72図　土坑　遺構図２………………………102
第73図　土坑　遺構図３………………………103
第74図　土坑　遺物図１………………………104
第75図　土坑　遺物図２………………………105

第76図　SX02　遺物図 ……106
第77図　遺構外　遺物図 ……107
第78図　石製品他 ……108
第79図　金属製品 ……109
第80図　SD01（1） ……111
第81図　SD01（2） ……112
第82図　SD09・13・16 ……114
第83図　SD25（1） ……115
第84図　SD25（2） ……116
第85図　溝跡出土遺物 ……117
第86図　墓跡（1） ……122
第87図　墓跡（2） ……123
第88図　墓跡（3） ……124
第89図　墓跡（4） ……125
第90図　墓跡（5） ……126
第91図　焼成遺構（1） ……128
第92図　焼成遺構（2） ……129
第93図　井戸跡（1） ……131
第94図　井戸跡（2） ……132
第95図　井戸跡（3） ……133
第96図　土坑（1） ……135
第97図　土坑（2） ……136
第98図　土坑（3） ……137
第99図　遺構外　遺物図 ……138
第100図　銭貨 ……139
第101図　金属製品 ……140
第102図　五輪塔1 ……142
第103図　五輪塔2・宝篋印塔 ……143
第104図　石製品 ……144
第105図　石臼 ……145
第106図　木製品 ……145
第107図　SB04検出状況 ……148
第108図　SB03・04土層断面 ……148
第109図　SB03・04床面と土層断面 ……149
第110図　塔鋺形合子出土状況 ……149
第111図　塔鋺形合子出土地点土層断面 ……149
第112図　土坑内出土状況と土層断面 ……149
第113図　カマド付近土層断面 ……150
第114図　炭化物の広がり ……150
第115図　土坑内出土状況 ……150
第116図　SB04及び塔鋺形合子・土器集中出土状況 ……151
第117図　塔鋺形合子各部位の名称 ……152
第118図　塔鋺形合子（出土直後） ……152
第119図　X線透過画像 ……153
第120図　X線透過撮影風景 ……153
第121図　蛍光X線分析位置 ……153
第122図　X線CT観察風景 ……155
第123図　X線CT撮影風景 ……155
第124図　X線CT ……155
第125図　塔部分断面 ……155
第126図　竜舎上面模様 ……156
第127図　相輪先端付近に付着した繊維状物体 ……157
第128図　高倍率実体顕微鏡観察 ……157
第129図　繊維状物体（試料大）の外観写真 …… 158
第130図　繊維状物体（試料小）の外観写真 …… 158
第131図　「試料大」マイクロスコープ観察画像 …… 158
第132図　「試料小」マイクロスコープ観察画像1 …… 159
第133図　「試料小」マイクロスコープ観察画像2 …… 159
第134図　「試料大」でのμEDX測定箇所 …… 159
第135図　「試料小」でのμEDX測定箇所 …… 160
第136図　「試料大」、麻繊維、絹繊維の赤外吸収スペクトル …… 161
第137図　「試料小-異物少」のSEM観察画像 …… 162
第138図　「試料小-c」切断面でのSEM観察画像 …… 162
第139図　「試料小-c」の切断面でのSEM観察画像拡大図 …… 162
第140図　小島・柳原遺跡群出土の人骨 …… 176
第141図　小島・柳原遺跡群出土の動物骨 …… 177
第142図　測定試料採集地点 ……178
第143図　X線CT画像による各断面 ……183
第144図　竜舎上面模様 ……183
第145図　相輪上面刻線 ……183
第146図　基壇上面刻線 ……183
第147図　蓋本体刻線 ……183
第148図　正倉院宝物の塔鋺形合子 ……184

第149図　日光男体山山頂遺跡出土塔鋺形合子…185
第150図　日光男体山山頂遺跡調査範囲と塔鋺形合子出土状況 ……………………186
第151図　塔鋺形合子他鋳型 ……………………187
第152図　塔鋺形合子　器形 ……………………188
第153図　塔鋺形合子　模様 ……………………189
第154図　SB04 …………………………… 192
第155図　SB04検出状況 ……………………… 193
第156図　千曲市社宮司遺跡の土器集中 …… 195
第157図　長野市南宮遺跡の土器集中 ……… 195
第158図　長野市南宮遺跡の長煙道カマドの竪穴建物跡 ……………………………… 196
第159図　現在の遺跡周辺の水路 …………… 200
第160図　遺跡周辺の旧河道 ………………… 201
第161図　古代の水路 ………………………… 202
第162図　古代・中世の条里地割と用水路 … 203
第163図　柄香炉 ……………………………… 206
第164図　千曲市扇平出土密教法具 ………… 206

挿表目次

第１表　調査のための発掘にかかわる行政手続 …………………………………………… 5
第２表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続…… 5
第３表　受委託契約の経過…………………… 5
第４表　浅川・裾花川扇状地上の古代・中世遺跡一覧……………………………… 20
第５表　小島・柳原遺跡群　発掘調査地点一覧……………………………………… 20
第６表　石製品他観察表…………………… 108
第７表　金属製品観察表…………………… 110
第８表　中世他の金属製品観察表………… 141
第９表　中世以降の石製品観察表………… 146
第10表　中世以降の木製品観察表………… 147
第11表　蛍光X線分析結果（１回目） ……… 153
第12表　蛍光X線分析結果（２回目） ……… 154
第13表　異物（水色）部分でのμEDX測定結果……………………………………… 160
第14表　異物（黒色）部分でのμEDX測定結果……………………………………… 160
第15表　繊維部分でのμEDX測定結果 …… 160
第16表　出土人骨一覧……………………… 169
第17表　出土動物骨一覧…………………… 175
第18表　測定試料一覧……………………… 179
第19表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果………………………………… 179
第20表　塔鋺形合子一覧…………………… 190

写真図版目次

PL１　遺跡遠景１
PL２　遺跡遠景２
PL３　遺構１
PL４　遺構２
PL５　遺構３
PL６　遺構４
PL７　遺構５
PL８　遺構６
PL９　遺構７
PL10　遺構８
PL11　遺構９
PL12　遺構10
PL13　遺構11
PL14　遺構12
PL15　遺構13
PL16　遺構14
PL17　遺構15
PL18　竪穴建物跡の土器１
PL19　竪穴建物跡の土器２
PL20　竪穴建物跡の土器３
PL21　竪穴建物跡の土器４
PL22　竪穴建物跡の土器５
PL23　竪穴建物跡の土器６
PL24　竪穴建物跡の土器７

PL25　竪穴建物跡の土器８
PL26　竪穴建物跡の土器９
PL27　竪穴状遺構の土器
PL28　溝跡の土器・焼成遺構の土器１
PL29　焼成遺構の土器２・土坑の土器１
PL30　土坑の土器２
PL31　遺物集中・遺構外の土器
PL32　溝跡・墓跡・焼成遺構の土器
PL33　井戸跡・土坑・遺構外の土器
PL34　金属製品１
PL35　金属製品２
PL36　銭貨
PL37　五輪塔１
PL38　五輪塔２・石臼他
PL39　石製品他
PL40　木製品

添付 DVD 収録データ

報告書PDF
遺物観察表
遺構一覧表
自然科学分析報告書
台帳
写真
その他

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

１　事業計画の概要

国道 18 号長野東バイパス（以下「長野東 BP」という。）は、長野市街地の通過交通を排除し、交通混雑の緩和、円滑な交通の確保、地域間の連携強化、都市の活性化などを目的に、1990（平成２）年度に都市計画決定された長野環状道路・東環状線 9.4km の一部を構成している。

長野東 BP は、（主）長野須坂インター線から国道 18 号柳原北交差点までの延長 2.8km、幅員 28m のバイパス道路で、2000 年度に事業化された。国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）は、事業化を受けて路線測量を開始するとともに、2004 年度から用地取得を行い、2011 年度には改良工事に着手した。工事は、2024 年供用開始を目指して現在も継続している（第１図）。

２　試掘確認調査と保護措置の調整

長野市教育委員会（以下「市教委」という。）は、2010（平成 22）年度に長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が照会した「平成 23 年度以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財及び史跡名勝天然記念物の保護について」に対し、長野東 BP の工事区間は小島・柳原遺跡群を南北に通過するため、保護措置を決定する上で事前調査が必要と判断し回答した。市教委はこの判断に基づき、2011 年７月５日から７日にかけて事業予定地内の任意の９地点について試掘確認調査を実施し、試掘坑⑤・⑦で中世土器を含む竪穴遺構や遺物包含層を確認した。調査結果を受けて市教委は、長野市道柳原 117 号線の北約 20m から北八幡川の南約 20m までの間は中世段階には安定した自然堤防上にあり、居住地として利用していた状況が想定できるため、記録保存のための発掘調査が必要と考えた（第２図）。

2011 年９月、市教委は長野東 BP 改築工事に係る埋蔵文化財の保護について、県教委を交えて長野国道と調整を行い、当該事業にかかる小島・柳原遺跡群の保護措置は記録保存調査とした。2015 年 12 月に（一財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）を加えた四者協議により、当該事業に伴う発掘調査は、長野国道が埋文センターへ委託して実施することで合意した。

３　行政手続の経過

長野国道は、文化財保護法第 94 条に基づき、2016（平成 28）年１月４日付け国関整長国工第 127 号で、市教委あてに「土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知」を提出した。これを受けて市教委は、同年１月８日付け 27 埋第 3-53 号で埋蔵文化財の発掘調査を実施するよう勧告するとともに、事前に、埋文センターと協議するよう通知した。埋文センターは、県教委を交えて長野国道と協議を行い、以下のとおり協定を締結することにした。

なお、この協定は 2017 年２月 16 日および 2019 年２月 19 日に変更し、第６条の発掘調査の期間を平成 31 年度まで、第７条の概算総額を 238,234,000 円としている。

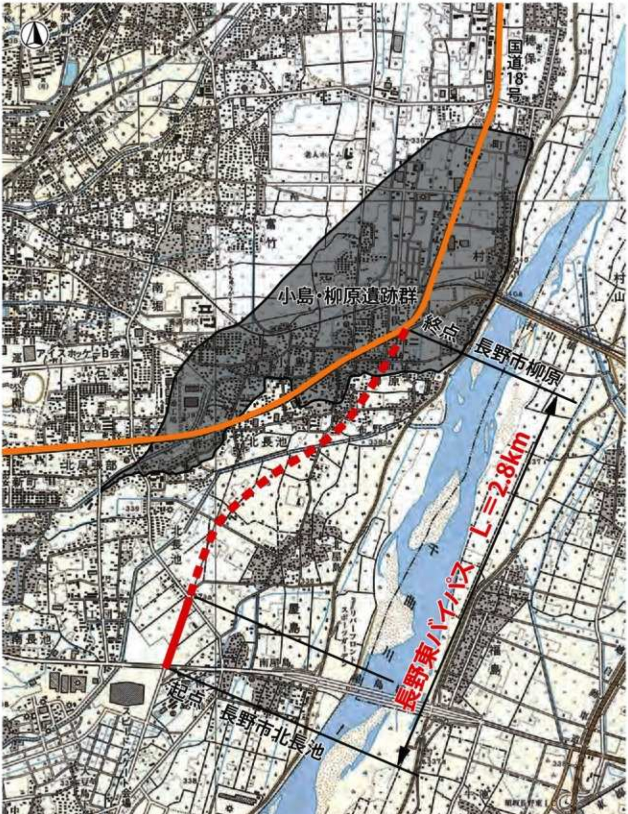
一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘の実施に関する協定書

一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施について、
国土交通省関東地方整備局長（以下「甲」という。）と長野県教育委員会教育長（以下「乙」という。）と一般財団法人長野県文化振興事業団理事長（以下「丙」という。）とは、次のとおり協定を締結する。

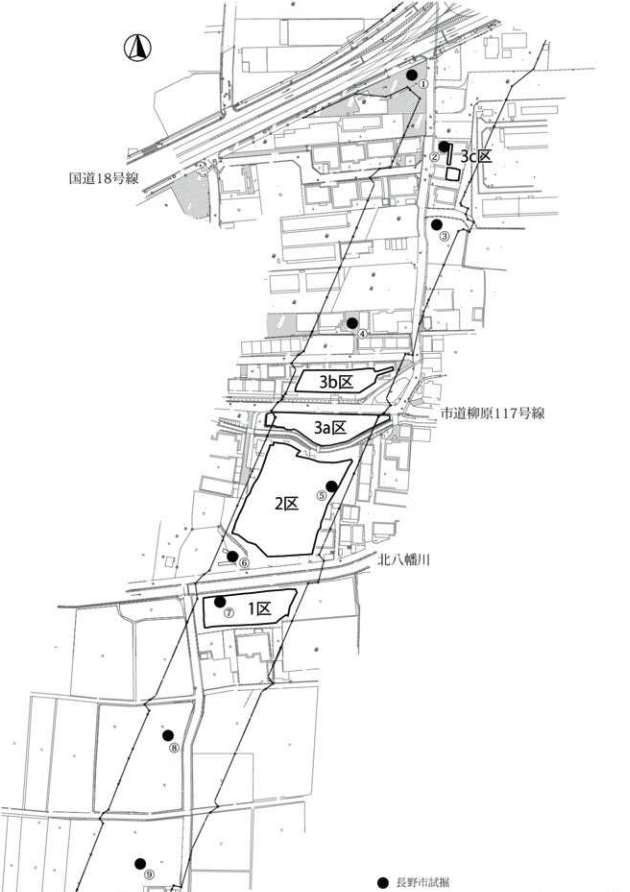
（目的）
第1条　この協定は、事業に伴う埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法等について定めることを目的とする。
（適用区間）
第2条　この協定を適用する区間は、長野県長野市柳原の位置図に示す区間とする。
（発掘調査の体制）
第3条　甲は丙に、前条の適用区間の発掘調査を委託する。
2　丙は、発掘調査を実施する組織を速やかに編成し、別添実施計画書に基づき発掘調査を実施する。
（発掘調査の指導）
第4条　乙は、丙が行う発掘調査内容・方法に対し、検査、指導、監督にあたるものとし、問題があった場合は改善を求めることができる。
（発掘調査場所及び対象面積）
第5条　発掘調査の実施場所及び対象面積は別添年度別計画書のとおりとする。
2　前項に予定する発掘調査の実施場所及び対象面積に変動がある場合は、甲乙丙協議して定める。
（発掘調査の期間）
第6条　丙は、平成29年度までに現場における全体の発掘作業を終了し、平成30年度までに出土品及び図面・写真等の記録類の整理作業と報告書の作成を完了する。
2　発掘作業の着手順序及び範囲は、甲乙丙協議して定める。
（発掘調査の費用）
第7条　この調査に要する費用は、別添年度別計画書のとおり概算総額100,056,000円とし、甲が負担する。
2　前項の費用は、工事区間内で新たに埋蔵文化財を発見した場合及び物価賃金の変動等により増減が生じた場合には、甲乙丙協議して変更する。
（発掘調査の契約及び経費の支払方法）
第8条　甲と丙は、前条第1項に定めた概算額の範囲内において、年度ごとの発掘調査について別途契約する。
2　前条第1項の費用は、前項の契約に基づいて年度ごとに作業の進ちょくに応じて支払う。
（報告書の提出）
第9条　丙は、業務が完了した時は、調査報告書を甲と乙に提出する。
2　丙は、各年度の発掘調査に係る業務実績報告書を、年度ごとに甲と乙に提出する。
（出土品及び記録類の取り扱い）
第10条　発掘された出土品に係る処置については、丙が法令の定めるところにより行う。
2　甲及び丙は、出土品についての権利を放棄する。
3　乙は、報告書刊行後、出土品及び記録類を保管する。
（著作権の帰属及び譲渡）
第11条　発掘調査に係る図面・写真等の記録類及び調査報告書の著作権は、乙に帰属するものとし、著作権法上、丙に著作権が生じた場合でも、丙は著作権を乙に無償で譲渡する。
（協定の変更）
第12条　この協定を変更する必要が生じたときは、甲乙丙協議して定める。
（協定の有効期限）
第13条　この協定の有効期限は、協定の締結の日から第6条の発掘調査が完了し、委託金の精算行為が完了した日までとする。
（その他）
第14条　この協定に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、その都度、甲乙丙が協議して処理する。

この協定締結の証として本書3通を作成し、甲乙丙記名押印のうえ、各々1通を保有する。
平成28年6月1日

埋文センターは、文化財保護法第92条に基づき発掘届を県教委に提出し、協定第8条に基づいて年度ごと長野国道と契約を締結し、4か年にわたる事業を実施することとなった。



第１図　長野東バイパス位置図（１：25,000）



第２図　調査範囲図（１：2,000）

第１表　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016. 5. 6	28 長埋第 43 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	4,800㎡
2016. 5.18	28 教文第 6-2 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2017. 1.12	28 長埋第 12-9 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	3,000㎡
2017. 3. 2	29 長埋第 9-9 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	1,800㎡
2017. 3.15	29 教文第 6-17 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2017.12.20	29 長埋第 4-5 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	1,800㎡
2018. 3. 7	29 長埋第 1-7 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	1,500㎡
2018. 3.12	29 教文第 6-11 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2018. 9. 5	30 長埋第 5-1 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	1,500㎡

第２表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第 102・105・108 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2017. 1.12	28 長埋第 11-9 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器 54 箱、石製品 21 箱 金属製品 3 箱、木製品 8 箱 骨 28 箱
2017. 1.20	28 埋第 204 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2017. 1.25	28 教文第 635 号	県教委	文化財の認定通知	埋文センター	2017.7.6 に県帰属
2017.12.20	29 長埋第 2-5 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器・土製品 31 箱、石製品 15 箱、金属製品 3 箱、木製品・炭化物・種子 4 箱 骨 30 箱
2018. 1. 4	29 埋第 175 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2018. 1. 9	29 教文第 655 号	県教委	文化財の認定通知	埋文センター	2018.6.26 に県帰属
2018. 9. 4	30 長埋第 4-1 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器 1 箱
2018. 9.13	30 埋第 124 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2018. 9.20	30 教文第 381 号	県教委	文化財の認定通知	埋文センター	2019.3.7 に県帰属

第３表　受委託契約の経過

年度	予　算	経　　過	備考
2016	73,644,000 円	6.1 契約（57,340,000 円）　2.16 変更契約（16,304,000 円増）	発掘作業 3,000㎡
2017	66,441,600 円	4.3 契約（57,997,000 円）　2. 8 変更契約（ 8,444,600 円増）	発掘作業 1,800㎡
2018	56,152,000 円	4.2 契約（56,538,000 円）　2.22 変更契約（　386,000 円減）	発掘作業 1,500㎡ 整理等作業
2019	41,913,000 円	4.1 契約	整理等作業
計	238,150,600 円		

第２節　発掘作業の経過

1　発掘作業

2016（平成 28）年度

小島・柳原遺跡群は、市教委によって、千曲川左岸の自然堤防と後背湿地に広がる弥生時代から平安時代の集落跡として登録されている。本事業における調査地区は、遺跡群の南東縁辺部にあたる。

2011 年度に市教委が実施した試掘確認調査では、中世の遺物包含層とともに、竪穴遺構や北八幡川の旧流路が確認された。そこで埋文センターは、遺跡群の縁辺部における集落跡の様相や旧地形の把握に努めることを目的に調査を開始した。また用地内には、かつての善光寺往来道を踏襲したとされる道が通っている。これは、条里遺構上に乗り古代高井郡へ向かう官道の系譜を引く可能性があるとされ（第２章２節参照）、その点も念頭に置いた。

発掘作業では、調査範囲を北八幡川の南（１区）と村山堰の北（３区）、その間の２区に分け、2016 年度は１区と２区の調査を行うことにした（第２図）。当初の予定通り、２区から中世の土坑群や溝跡が見つかったが、作業の進ちょくに伴って、検出面までの土量が極めて多いこと、２区は堰と川に挟まれており排土搬出が困難なこと、中世面の下から古代の竪穴建物跡等が見つかり二面調査が必要なことなどが明らかになった。こうした状況を受けて、県教委、市教委および長野国道と協議し、調査方法・工程を変更して、2016 年度は１区全体と２区西側まで調査を行うことになった。

2017 年度

前年度の調査では、２区の西側で南北に延びる中世の大溝跡を検出した。埋土に、空風輪を中心とした五輪塔が 30 点以上廃棄されていたため、城館や寺院の区画溝を想定した。大溝跡の東側からは、中世以降の土葬および火葬の墓群も見つかった。また、下層からは、古代の竪穴建物跡や土坑、焼土跡を検出し、集落跡が広がっていることも明らかになった。とくに、竪穴建物跡（SB04）の埋土から出土した金属製の蓋は、その後の資料調査によって国内 25 点目の希少品の塔鋺形合子であることが判明し、保存方法を含めた遺物の取扱い方、材質や製作技法の解明、形態や文様の観察、小島・柳原遺跡群から出土した意義の考察など、有識者の知見を交えて進めることとした。

こうした状況を受けて 2017 年度は、前年度に調査できなかった２区の東側を中心に発掘作業を行った。中世面では、検出した大溝跡の性格を解明し、墓域の広がりを把握することを目指した。また、古代面では、集落域の構成要素と広がりの把握を目的とした。塔鋺形合子については、遺跡調査指導委員会を立上げ、有識者の指導を得ながら必要な分析等資料調査を行った。

2018 年度

村山堰の北方には、条里地割と想定される地割がかつて存在していたことがわかっており（第２章２節参照）、条里地割の南端起点部分が３区に相当する可能性があった。したがって、2018 年度の発掘作業は、条里制にかかわる溝跡や道路跡等の遺構確認を目指したが、特筆する遺構・遺物の発見はなかった。

2 整理等作業

2018（平成 30）年度

図面等の記録類の点検と照合、遺物洗浄・注記、各種台帳の作成等の基礎整理作業は、発掘作業の一環として、各年度の冬期間に実施した。

2018 年度に開始した本格的な整理作業では、図面等の点検と照合など基礎整理作業期間中に実施でき

なかった分を片付けて、遺構図のトレース作業を行った。遺物については、観察と分類・選別を行った上で、土器類は接合、復元、実測、トレースを含めて委託し、金属製品の計測等を実施した。また、発掘調査報告書の作成に向けた編集会議を行い、章立てや図表の編集方針等を確認した。塔鋺形合子に関しては、必要な分析等資料調査を継続した。

2019年度

遺構関係の図面・写真等については、編集・版組を行い種類別に遺構一覧表を作成した。一方、遺物については、土器以外の遺物の観察と分類・選別を行った上で、実測、トレースを行い、土器とともに編集・版組を実施した。また、一部の遺物を選別して写真撮影を行い、同じく編集・版組を行った。これらの作業に併せて、編集会議で確認した章立てにしたがって原稿を執筆し、発掘調査報告書を作成した。

なお、記録類や遺物の収納作業は、発掘調査報告書の校正作業と並行して実施した。

3　普及啓発活動

（1）遺跡説明会および発掘体験等

2016.7.5 ～ 7.7	長野市立三陽中学校職場体験	5名
2016.8.17 ～ 19	長野市立長野高等学校選択授業	2名
2016.9.28	長野市柳原地区住民自治協議会の見学会	12名
2016.10.19	長野市柳原地区住民自治協議会の見学会	20名
2016.11.12	現地説明会	130名
2017.6.28	長野市柳原地区住民自治協議会の見学会	23名
2017.7.7	長野市埋蔵文化財センターの見学会	18名
2017.7.8	現地説明会	114名
2017.10.10・20	長野市立柳原小学校の見学会	79名
2017.11.9	長野市柳原地区住民自治協議会の見学会	22名
2018.5.16	信州大学教育学部附属長野小学校の見学会	36名
2018.6.7	長野市立柳原小学校の見学会	66名
2018.6.19	信州大学教育学部の見学会	9名

（2）展示会および講演会等

2017.2.18 ～ 2.24	掘るしん in しののい 2017	埋文センター	199名
2017.3.7 ～ 3.10	長野市柳原地区展示会	長野市柳原支所	
2017.3.11	小島・柳原遺跡群調査報告会	長野市柳原公民館	
2017.3.18 ～ 6.25	速報展「長野県の遺跡発掘 2017」	長野県立歴史館	12,066名
2017.7.29 ～ 8.20	速報展「長野県の遺跡発掘 2017」	長野県伊那文化会館	1,146名
2017.8.26 ～ 9.24	速報展「長野県の遺跡発掘 2017」	安曇野市豊科博物館	944名
2017.9.30 ～ 11.26	速報展「長野県の遺跡発掘 2017」	浅間縄文ミュージアム	955名
2017.11.5	長野市柳原地区文化祭出土品展	長野市柳原公民館	
2018.1.27	長野郷土史研究会	長野市朝陽公民館	
2018.5.24	塔鋺形合子をどう作ったのか	信州大学教育学部附属長野小学校	36名
2018.5.26	小島・柳原遺跡群出土品展	長野市東部文化ホール	70名
2018.5.26	煌めく柳原の古代文化	長野市柳原公民館	70名
2019.2.14 ～ 2.22	掘るしん in しののい 2019	埋文センター	270名
2020.3.1	掘るしん in ながの 2020 －塔鋺形合子は何を語る－	JA グリーン長野グリーンパレス	

（3）調査情報誌等の発行

2017.2.3	「最新の調査成果から 小島・柳原遺跡群」『信州の遺跡』通巻 10 号
2017.3.24	「発掘作業の概要 小島・柳原遺跡群」『年報』33
2017.7.19	「最新の調査成果から 小島・柳原遺跡群」『信州の遺跡』通巻 11 号
2018.3.23	「発掘調査の概要 小島・柳原遺跡群」『年報』34
2019.3.22	「発掘調査・整理等作業の概要 小島・柳原遺跡群」『年報』35
2020.3.23	「発掘調査・整理等作業の概要 小島・柳原遺跡群」『年報』36

（4）その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載。

4　発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

（1）発掘作業

2016（平成 28）年度

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	竹内　誠	調査部長：	平林　彰	担当課長：	川崎　保
調査担当：	寺内貴美子	石丸敦史	柴田洋孝	小林伸子			
作 業 員：	大内秀子	大澤紅美	小根山貞子	菅　雅孝	小池美香	小林紀代美	小林真子
	坂本清一	清水秋子	鈴木友江	関　國明	田中邦男	塚田光男	中澤和剛
	中村　誠	中村守一	藤沢豊治	松本正美	山岸あや子	山口良則	山田寿恵
	若林　敏						

2017 年度

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林　彰	担当課長：	川崎　保
調査担当：	寺内貴美子	長谷川桂子	石丸敦史	小林伸子			
作 業 員：	大内秀子	大澤紅美	小根山貞子	菅　雅孝	小池美香	小林紀代美	小林真子
	清水秋子	鈴木友江	関　國明	塚田光男	中澤和剛	中村　誠	中村守一
	松倉昌市	松本正美	山岸あや子	山口良則	山田寿恵	若林　敏	春日皓介

2018 年度

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林　彰	担当課長：	川崎　保
調査担当：	寺内貴美子	石丸敦史					
作 業 員：	大澤紅美	小根山貞子	菅　雅孝	小池美香	小林紀代美	小林真子	清水秋子
	鈴木友江	関　國明	中澤和剛	中村　誠	中村守一	峯村通夫	山岸あや子
	山田寿恵						

（2）整理等作業

2018 年度

作 業 員：	荻原幸子	細野夏未

2019 年度

所　　長：	原田秀一	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林　彰	担当課長：	川崎　保
調査担当：	寺内貴美子	鶴田典昭					
作 業 員：	赤川雅俊	窪田　順	塩野入奈菜美	相馬麻織	中村恵美		

5　作業日誌抄録

2016（平成28）年度

6月 1日　発掘作業開始
6月 9日　1区確認調査開始
6月15日　1区確認調査終了
6月20日　2区確認調査開始
7月 8日　2区1面調査開始
7月11日　市澤英利県文化財保護審議委員による指導
7月19日　測量委託契約
7月22日　2区で土坑、溝跡を検出
7月27日　市教委飯島氏、田中氏による調査指導
8月 2日　2区で竪穴建物跡らしき方形の落込みを検出
8月 8日　2区で土坑墓（人骨）を検出
8月10日　SB01から銅鋺らしき破片が出土
8月17日　2区2面調査開始
8月31日　長野中央署員来跡し、出土人骨の事情聴取
9月 1日　2区竪穴建物跡床面から小鍛冶らしき焼土検出
　　　　　2区の墓域から五輪塔出土
9月14日　1区調査開始
10月 7日　竪穴建物跡（SB04）の埋土から塔鋺形合子の蓋が出土
10月18日　1区でも竪穴建物跡等を検出
　　　　　2区で溝跡（SD01）の調査開始
11月 9日　県教委、長野国道と調査工程について協議
11月10日　SB04南東の土坑から坏が集中出土
11月12日　現地説明会
11月21日　1区調査終了
12月 2日　埼玉県埋蔵文化財調査事業団田中広明氏他見学
12月 9日　3区確認調査開始
12月14日　塔鋺形合子について元興寺文化財研究所等で資料調査（～15日）
12月21日　長野県立歴史館で塔鋺形合子のX線撮影実施
12月27日　2区西側発掘作業終了・3区の確認調査終了
1月 4日　基礎整理作業開始
1月16日　遺物台帳作成（～2月3日）
　　　　　遺物洗浄（～13日）
　　　　　ぜい弱遺物の抽出・確認・台帳作成（～2月9日）
1月20日　図面整理（～1月31日）
　　　　　長野県工業技術総合センターで塔鋺形合子の蛍光X線分析実施
1月23日　遺物箱ラベル貼付（～26日）
1月26日　信州大学繊維学部で塔鋺形合子付着繊維の鑑定指導
　　　　　写真台帳作成・ファイル収納（～2月3日）
2月 1日　遺物台帳作成（～20日）
2月 3日　県庁にて塔鋺形合子のプレスリリース
2月 6日　委託測量図面の校正（～10日）
2月 8日　図面台帳作成（～3月2日）
2月21日　デジタル写真分類（～28日）
2月28日　所見カード作成等（～3月31日）
3月 6日　測量委託成果品の完了検査と納品
3月13日　実績報告書作成（～23日）
3月21日　次年度調査準備（～31日）
3月27日　受託事業完了検査
3月31日　基礎整理作業終了

2017年度

4月 7日　発掘作業開始
4月10日　2区東側表土掘削（～6月1日）
4月12日　2区東の南端で東西方向の大溝跡を検出
4月19日　遺構検出作業開始（～6月7日）
　　　　　五輪塔（火輪）を転用した礎石が出土
4月21日　土坑・墓坑・溝跡の調査開始
4月26日　測量委託契約
5月 2日　竪穴建物跡の調査開始
5月11日　土器焼成遺構らしき遺構検出
5月19日　曲物に埋葬した人骨出土
5月30日　京都・奈良で塔鋺形合子について指導（～31日）
6月 7日　県文化財保護審議会史跡・考古資料部会委員指導
6月13日　仲野泰裕氏による中世陶器指導
6月20日　井原今朝男氏による条里等の指導
7月 8日　現地説明会
7月18日　竪穴建物跡から丸鞆出土
7月27日　表土掘削再開（～9月21日）
8月 3日　遺跡調査指導委員会（～4日）
8月10日　遺構検出作業再開（～10月4日）
8月17日　SD01内から五輪塔出土

9月26日　竪穴建物跡（SB30）の遺物集中から緑釉陶器出土
10月 4日　SB30床面で壁柱穴を検出
11月10日　県教委、市教委、長野国道と四者協議
11月27日　遺構調査終了
12月 1日　基礎整理作業開始　図面整理（～25日）
12月 4日　遺物注記（～1月24日）
12月12日　茂原信生氏による出土骨鑑定指導
12月18日　発掘作業終了
12月19日　長野市埋蔵文化財センターで古代瓦の資料調査
12月26日　写真整理（～1月19日）
1月10日　遺物台帳整理（～2月23日）
1月18日　奈良国立博物館で塔鋺形合子のX線CT観察を実施
1月19日　図面台帳整理（～3月16日）
2月 1日　個別遺構図作成（～23日）
　　　　所見カード作成（3月30日）
2月 9日　栃木県日光二荒山神社宝物館で男体山出土遺物調査
2月16日　時枝務氏による遺跡調査指導
　　　　測量委託成果品の完了検査と納品
2月19日　骨出土遺構の図面・写真整理（～22日）
2月20日　図面修正（～3月16日）
2月26日　次年度調査準備（3月30日）
　　　　遺構全体図作成（～3月3日）
3月 5日　ぜい弱遺物台帳作成（～6日）
3月13日　実績報告書作成（～20日）
3月22日　受託事業完了検査
3月30日　基礎整理作業終了

2018年度

4月 2日　発掘作業開始
4月 9日　3区表土掘削開始（～5月2日）
4月20日　3区遺構検出開始（～5月17日）
4月25日　測量委託契約
5月21日　出土骨のクリーニング（～6月27日）
5月22日　土器接合（～8月17日）
6月 8日　遺構なく発掘作業終了
6月22日　信州大学繊維学部で塔鋺形合子付着繊維の分析
7月 6日　埼玉県富士見市宮脇遺跡出土の鋳型調査
7月13日　遺物注記（～14日）
7月17日　信州大学繊維学部から塔鋺形合子付着繊維について中間報告
7月19日　測量委託成果品の完了検査と納品
8月 1日　遺跡調査指導委員会（～2日）
8月21日　鉄製品のクリーニング（～30日）
8月31日　発掘現場を長野国道へ引渡し
9月 3日　本格整理作業開始
9月20日　遺物接着・補強・実測・トレース委託契約
9月25日　図面整理（～27日）
9月27日　遺構図トレース（～1月18日）
10月 4日　出土骨ファイル作成（～11月1日）
10月15日　遺構属性表作成（～26日）
10月17日　鉄製品の簡易計測（～26日）
11月 5日　土層注記入力（～9日）
11月 9日　長野県立歴史館で鉄製品のX線撮影
11月21日　元興寺文化財研究所で塔鋺形合子のX線CT観察を実施
11月21日　デジカメデータの整理（～29日）
12月 7日　群馬県黒熊・徳山遺跡出土の鋳型調査
12月18日　茂原信生氏らによる出土骨鑑定指導（～19日）
1月11日　般若勘渓氏による塔鋺形合子製作技法の指導
1月21日　遺構図版組（～3月15日中断）
1月28日　原稿作成（～3月29日中断）
1月30日　遺跡調査指導委員長に調査状況報告
2月 4日　実績報告書作成（～3月18日）
2月21日　茂原信生氏らによる出土骨鑑定指導
2月25日　東京国立博物館で日光男体山出土遺物および法隆寺献納宝物塔鋺調査
2月27日　発掘調査報告書編集会議
3月18日　次年度調査準備（～3月29日）
　　　　遺物接着・補強・実測・トレース委託の成果品完了検査と納品
3月19日　受託事業完了検査
3月29日　本格整理作業終了

2019年度

4月 1日　本格整理作業開始
4月 3日　石器・石製品・金属製品実測（～6月21日）
4月 4日　全体図作成・遺構図修正（～6月11日）
4月17日　遺構・遺物観察表作成（～11月29日）
5月20日　遺構図版組
　　　　年代測定委託契約

6月12日　石器・石製品・金属製品トレース（～7月5日）
6月17日　遺跡図、分布図作成（～7月5日）
6月30日　遺跡調査指導委員会
8月 6日　茂原信生氏らによる出土骨鑑定指導（～9日）
8月26日　原稿作成
9月24日　遺物写真撮影（～11月12日）
3月19日　報告書刊行

第3節　遺跡調査指導委員会

1　委員会の設置

埋文センターは、「埋蔵文化財の発掘調査に関する事務の改善について」（平成12年11月17日付庁保記第236号　文化庁長官通知）に従い、最古級の旧石器を発見した飯田市竹佐中原遺跡、保存処理とその後の活用について課題となった千曲市八幡遺跡群出土の六角木幢[1]、弥生時代の青銅器が一括出土した中野市柳沢遺跡の調査にあたり、「発掘調査についての客観性を確保するための第三者による検討の仕組み」として遺跡調査指導委員会を設置してきた。

小島・柳原遺跡群では、2016年度の発掘で竪穴建物跡の埋土から金属製塔鋺形合子の蓋が出土し、その後の資料調査等によって、国内25点目の極めて希少な遺物であることが判明した。そこで埋文センターは、以下の要項を定めて指導委員会を組織し、調査内容を公開するとともに、材質、形態・文様、遺跡、保存・活用など、さまざまな観点から検討を加えて調査を進めることにした。

小島・柳原遺跡群調査指導委員会設置要綱

（趣　旨）

第1条　国道18号（長野東バイパス）改築事業に伴う長野市小島・柳原遺跡群の発掘調査について、客観性を確保しつつ効率的に推進するとともに、出土品を将来にわたって保存・活用していくにあたり、専門的な見地から指導・助言を得るため、小島・柳原遺跡群調査指導委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（組　織）

第2条　委員会は、委員7名以内で組織する。

2　委員は、古代・中世の調査研究、出土品等の保存分析に関し、学識経験を有する者のうちから長野県埋蔵文化財センター所長が委嘱する。

（任　期）

第3条　委員の任期は、第1回委員会の開催日から長野市小島・柳原遺跡群発掘調査報告書刊行時まで（平成32年3月刊行予定）とする。

2　補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長等）

第4条　委員会に委員長を置き、委員が互選する。

2　委員長に事故ある時は、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する。

（会　議）

第5条　会議は所長が招集し、委員長が座長となる。

（事　務）

第6条　委員会の事務は、長野県埋蔵文化財センター調査部が行う。

（補　則）

第7条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附　則

この要綱は、平成29年（2017年）7月4日から施行する。

1　六角木幢は2011年に長野県宝に指定され、名称が木造六角宝幢となった。

委嘱した委員は次のとおりである[2]。県教委、市教委、長野県立歴史館には、オブザーバー参加していただいた。

委員長：市澤英利 長野県文化財保護審議会委員　　委　員：狭川真一 元興寺文化財研究所副所長
委　員：時枝 務　立正大学文学部教授　　委　員：内藤 栄　奈良国立博物館学芸部長
委　員：西川明彦 宮内庁正倉院事務所所長　　委　員：村上 隆　京都美術工芸大学副学長

2 委員会の概要

委員会は、都合３回開催した。各回の議題および指摘事項は次のとおりである。

第１回 2017年８月３日・４日　埋文センター、長野市柳原公民館および遺跡現地

遺跡現地で周辺環境や遺構を視察し、塔鋺形合子等の出土遺物を観察した上で、次のような所見および指導があった。

ア　遺跡・遺構について

・塔鋺形合子が出土した竪穴建物跡（SB04）は、壁柱穴があること、他の建物跡より大きいことなどを考慮すると、壁立の建物であったと考えられる。建物はお堂であった可能性もある。

・塔鋺形合子の出土状態、SB04との関係すなわち時期を、客観的に説明できるように整理すること。

・中世の大溝跡（SD01）は薬研堀の典型である。

イ　塔鋺形合子について

・現状観察を精密に行うことが大切である。

・型式や分類、編年、製作技法の調査が重要になる。そのためにも、可能な限りＸ線ＣＴや電子顕微鏡、蛍光Ｘ線等を用いた観察や分析を行うこと。土砂の除去や実測を行った上で、さらに必要な分析を検討すること。

・保存処理は拙速を避ける。定期的な観察を行い、進行性のサビを見落とさないよう気を付けること。現状を維持のため、ＲＰ剤等の劣化原因を除去する薬剤を入れた密閉できる環境での保管が望ましい。

ウ　その他

・別の竪穴状遺構（SB01）の埋土から出土した青銅製品は、口縁部の形態や推定口径から判断して普通の銅鋺ではない。もっと大きな器である。仏具の可能性が高い。

第２回　2018年８月１日・２日　埋文センター、遺跡現地および長野市立博物館

遺跡現地で調査状況を確認し、長野市立博物館で長野市内から出土した仏教関連遺物を視察調査するとともに、当センターが実施した資料調査の報告を受けて、次のような所見および指導があった。

ア　調査成果について

・竪穴建物跡SB04（塔鋺形合子出土）とSB30は、壁立の大形建物という点で共通している。類例を集めて遺構および遺跡の性格解明につなげてほしい。

イ　Ｘ線ＣＴ観察について

・奈良国立博物館の装置での観察では、塔の部分が一鋳か別鋳か判然としない箇所がある。装置の特性もあるため、奈良文化財研究所や京都国立博物館などに導入された別会社製の装置でも観察を実施し、クロスチェックを行うと、よりはっきりした所見が得られる可能性がある。

ウ　比較資料の調査成果について

・日光男体山山頂遺跡出土塔形合子は、小島・柳原遺跡群出土の塔鋺形合子との比較検討に有効な資料

2　職名は委嘱当時

である。二荒山神社宝物館が東京国立博物館に貸出中の２点と法隆寺献納品の１点についても追加調査を実施し、類例調査の充実を図るとよい。

・埼玉県富士見市宮脇遺跡出土の鋳型は、塔鋺形合子の製作方法や地方でのあり方を考えるうえで有効な資料である。群馬県の黒熊・徳山遺跡の出土例を含め、さらに充実をはかるとよい。

・既存資料の中に認知されていない鋳型がある可能性を指摘された。

エ　塔の欠損部付着の繊維状物体について

・信州大学繊維学部で行った分析では、繊維状物体は絹繊維ではなく、セルロース系繊維であることが判明したが、どのようなセルロース系繊維であるかの同定はできなかった。正倉院や奈良文化財研究所で分析事例がある。信州大学での分析データを提供し、繊維特定を進めてほしい。

オ　長野市内出土の仏教関連遺物について

・南宮遺跡出土の火熨斗（ひのし）や駒沢新町遺跡の懸仏の鋳型などから新たな知見が得られた。既存資料の再検討の必要性を指摘された。

カ　その他

・貴重で、関心の高い資料であるため、公開・活用を前提として、復元品を製作することを考えてみてはどうか。製作技法もできるだけ復元できると遺物への理解が進み、なお良い。現代の鋳物製作者に意見を聞くのも有効であろう。

・次回の指導委員会は報告書の原稿執筆が本格化する前に実施予定とし、個々の課題については、指導委員と個別に連絡をとりながら調査を進めることとなった。

第３回　2019年６月30日　奈良市元興寺文化財研究所

発掘作業が完了し整理作業を進めている中で、これまでの調査内容を報告し、遺漏している点について指摘を受けるとともに、発掘調査報告書の作成や塔鋺形合子の活用にかかわる留意点を指導いただいた。

ア　Ｘ線ＣＴ観察（追加）の成果について

・塔部分の製作技法が、一鋳か、別鋳かの決定的な証拠を得たとは言い難い。指導委員会での結論が報告書に反映されるならば、結論を急がず、慎重に取り扱った方がよい。

・相輪上面の模様から判断して、製作年代は奈良時代末から平安初頭の間としてよいのではないか。

イ　比較資料の調査成果について

・法隆寺献納品の相輪の圏線は、規則正しく付いている。後で付けたとは考えにくい。一方、利部分の魚々子はやや乱れており、後に打ちこんだと考えられる。模様をどのように刻んでいるかを考えることは、製作方法の解明につながる。慎重な検討が必要である。

・高崎市黒熊遺跡、徳山遺跡出土品の中には、仏教関係の鋳型はそれほど多くはない。一方、前回報告があった富士見市宮脇遺跡出土の鋳型は、本遺跡の塔鋺形合子を考える上で、重要な資料である。写真を掲載するなどにより報告した方がよい。

ウ　製作技法にかかわる調査成果について

・般若勘渓氏から正倉院宝物の黄銅合子の復元品を製作した際の所見を得た。遺物を理解するために、復元品を製作した職人と試行錯誤することでわかることが多い。参考にされたい。

・再現模造を製作する場合は、金属組成を正確に知る必要がある。

エ　発掘調査報告書について

・塔鋺形合子の廃棄にかかわる埋文センターの解釈はやや唐突である。遺物の製作年代と廃棄年代の時間差をしっかり説明する必要がある。

・仏教についての記述が少ない。モノの背景にある文化にも注目することが大切である。

・観察や分析をきっちり実施し、事実報告をしっかりする。その上でわかったことを記すことが重要で、わからないことは無理に結論を出さなくてよい。
・活用を考えるためには、正倉院や法隆寺をはじめとする文化的背景や歴史的環境等、様々な関連付けを行うことが重要である。

参考文献

国土交通省関東地方整備局 2015「一般国道 18 号長野東バイパス事業評価監視委員会資料」
国土交通省長野国道事務所 2010「長野東バイパス事業説明パンフレット」

指導委員会の様子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１　遺跡の位置と範囲

小島・柳原遺跡群は、長野市の北東部に位置し、千曲川を挟んだ対岸は須坂市となる（第３図）。発掘調査地点は、長野市柳原（代表地番は1714）、字名は北から上見・東組・村東・居村東にあたる。小島・柳原遺跡群は、北は大町から南は北長池までの全長3.5km、幅1.2kmの範囲に広がる。その範囲は、南東から東縁かけては高低差によって明確に線引きできるが、西縁部分は大量の河川堆積物によって平準化してしまい、高低差などの地理的違いはなく暫定的に括られている。

２　遺跡周辺の地理的環境

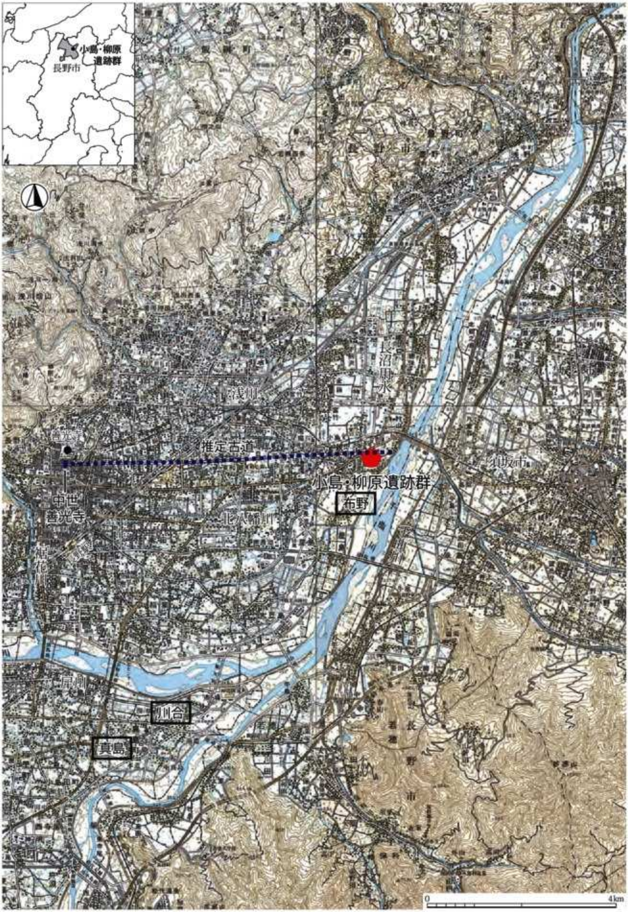
遺跡をとりまく地形　小島・柳原遺跡群は、長野盆地の北東部に位置する。その盆地底は「善光寺平」と呼ばれているように広大な平地となっている[1]。このように盆地内に平地が広大に形成されることは珍しく、東端部を貫流する千曲川とそれに向かって流れ込む山地からの河川がもたらす堆積土によって厚く覆われている。また千曲川に流れ込む河川は、盆地外縁部に多くの扇状地を形成し、善光寺平を広く占めるほど発達している。

小島・柳原遺跡群は、千曲川左岸に形成された自然堤防から後背湿地、そしてその後背湿地に囲まれた島状の微高地にかけて広がっている。本遺跡の西方には浅川扇状地がひかえているが、遺跡一帯は千曲川や北八幡川などの北流する河川の堆積土によって形成されている。遺跡のある千曲川左岸に広がる自然堤防は、千曲川に沿って形成されたものの他に、後背湿地内に島状に独立した微高地として確認できるものがある。今回の調査地点は、この島状微高地の南縁辺部に位置する。千曲川の旧河道は、対岸の須坂市側では確認できるが、本遺跡のある左岸側にはみえないことからも、島状の微高地は後背湿地内を流れる北八幡川によって形成されたものと考えられる。北八幡川は、裾花川の旧流路を流れているともされ、当地の基幹河川と言える。なお後述するが、北八幡川の本流は、現在の長沼用水（長沼１号幹線排水路）の方で、柳原地区を貫流する河川であった。

北八幡川によって形成された島状微高地は、小島という地名にも反映されている。遺跡は、その島状微高地に形成されているが、大量の河川堆積土と近年の市街地化も重なってそのような微地形の把握は困難になっている。しかし、本来は複雑な起伏が広がり、その微地形が近代以降も当地の人々の生活と大きくかかわってきていた。例えば柳原小学校の北東側にあたる現在住宅地となっているあたりは、地元では「たかあぜ」と呼ばれ、西側に広がる水田よりも一段高い場所と認識されていた[2]。現在では宅地造成もあり、その地形は把握できず埋没してしまっている。

1　善光寺平という呼称は広く普及しているが、記述されているものとしては1887（明治20）年刊行の『小学信濃地理書　全』（白井毅　編／慶林堂）が初見で、明治の近代的地理教育のなかで作られたものとされている。1899年刊行の『信濃新地誌』（津島壹城　編／水琴堂書店）によると、善光寺平は、北は上水内郡から南は埴科郡にわたる平坦な土地、とされるだけで地形学上厳密に定義されたものではない。

2　柳原地区住民自治協議会において松本誠吾氏からご教示頂いた。

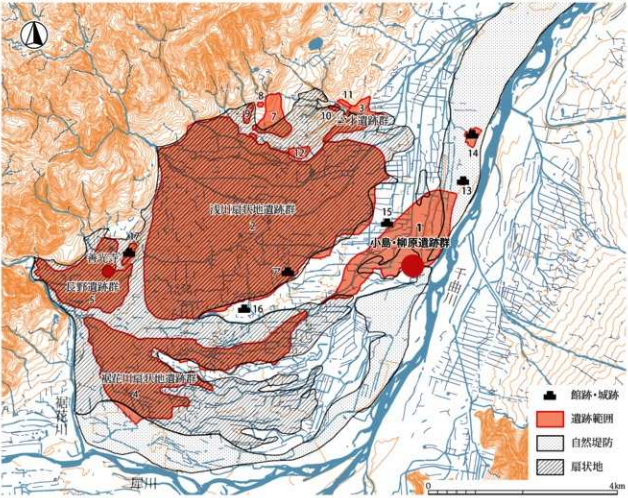


第３図　小島・柳原遺跡群の位置（1：80,000）

北八幡川について　小島・柳原遺跡群は、千曲川だけでなく北八幡川と大きく関わった地であった。北八幡川は、長野盆地西縁にあたる旭山の麓を流れる裾花川から取水した後、八幡川から北・南八幡川に分岐する。北・南八幡川は、裾花川扇状地内を東流し徐々に北上する。現在の北八幡川は、長野市小島で長沼用水と分岐し、東方向へ流れ千曲川に接続する流路の方を指すことが多い。地図上でこのような表記となったのは、1988（昭和 63）年に現在の北八幡川の末端部、千曲川との合流地点に排水機場が設置された以降のようである。それまでは現在の長沼用水の方を北八幡川もしくは八幡川（堰）と記載しており、現在の北八幡川はその支流・排水路とされていた。北八幡川の本流である長沼用水は、小島地区で分岐したのち、長沼地区一帯の水田に水を供給しながら北流し、最終的には浅川へ接続する。一方、現在の北八幡川は、周辺用水の排水路として東流するが、その流路は後背湿地から微高地を抜けており人工水路の様相を示す。かつては長沼用水路との分岐地点とその先の東側へ屈曲する地点の２か所に水車小屋があったと地元で記憶するものもおり、生活用水としても利用されていたようである [3]。

現在の遺跡周辺は、国道 18 号線および長野電鉄長野線を主軸に市街地化が進んでいる。先述した北八幡川の排水機場も水田への配水量の調整施設から長野市街地の都市型洪水を防ぐ防災施設としての役割も果たすようになってきており、街の変貌に合わせて水路の機能も以前と変わりつつある。

3　2018 年 10 月 20 日の柳原住民自治協議会主催の「第６回車座で話す柳原の歴史」における地元住民の話による。

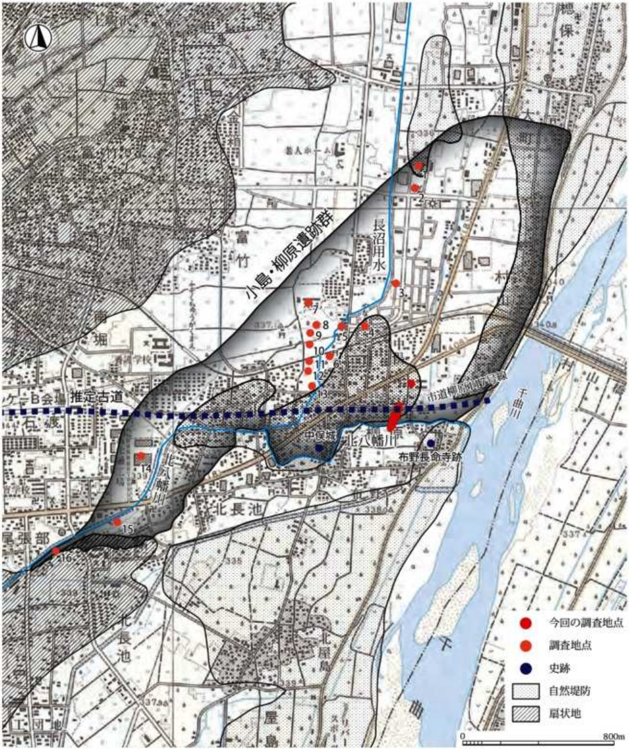


第４図　浅川・裾花川扇状地の遺跡分布（1：80,000）

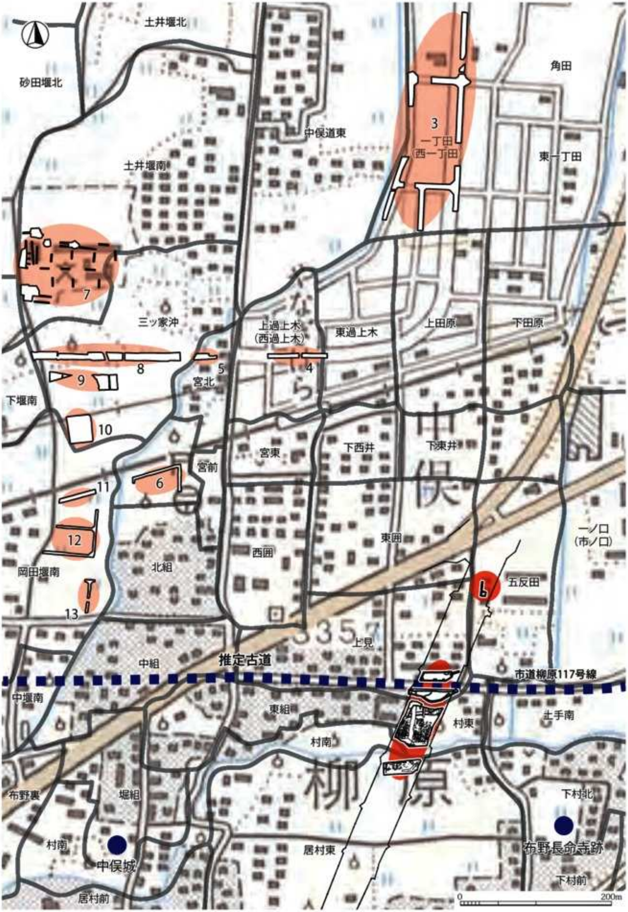
第２節　歴史的環境

1　周辺の遺跡

長野市の犀川以北には、浅川扇状地遺跡群、裾花川扇状地遺跡群、そして小島・柳原遺跡群という３つの大きな遺跡群がある（第４図、第４表）。それぞれの遺跡群内には個別の遺跡があり、それらを総括して遺跡群を設定している。これは第１節でも述べたように、長野盆地が多くの河川堆積物によって微地形



第５図　小島・柳原遺跡群調査地点（1：20,000）



第６図　小島・柳原遺跡群中心部（1：5,000）

が埋没してしまっていることに起因している。小島・柳原遺跡群内は、水内坐一元神社遺跡と中俣遺跡に大別し、その中を事業地点名もしくは字名を冠して呼称している。なお、最初に調査された水内坐一元神社遺跡は、字名ではなく遺跡北西に位置する神社名に由来している。本節で扱う遺跡名はとくに断りのない限りにおいては、小島・柳原遺跡群内のものである。過去の調査例は第５表にまとめた（第５図）。

第４表　浅川・裾花川扇状地上の古代・中世遺跡一覧

No.	遺跡名称	市番号	種別	時代			地区	所在地（区）小字
				奈良	平安	中世		
1	**小島・柳原遺跡群**	**B - ①**	**散布地**	○	○		**柳原・朝陽**	
2	浅川扇状地遺跡群	A - ①	散布地	○	○	○	浅川・若槻・吉田・三輪・上松	
ア	東和田城跡	B - 213	城館跡			○	古牧	東和田下組東沖
3	三才遺跡群	A - ②	散布地	○	○		古里	三才・西三才
4	裾花川扇状地遺跡群	B - ②	散布地	○	○		古牧・芹田	
5	長野遺跡群	C - ②	集落跡	○	○	○	長野	
6	上野遺跡	A - 008	散布地				若槻	上野
7	牟礼バイパスＢ地点遺跡	A - 077	集落跡		○		若槻	若槻東条　川原
8	牟礼バイパスＣ地点遺跡	A - 078	集落跡		○	○	若槻	若槻東条　蚊里田
9	宮前遺跡	A - 030	散布地		○		若槻	若槻東条　宮前
10	籠沢遺跡	A - 097	集落跡	○	○		古里	三才籠沢
11	両堰遺跡	A - 098	集落跡		○		古里	三才両堰
12	徳間本堂原遺跡	A - 083	集落跡		○		若槻	徳間（東徳間）本堂原
13	西厳寺館跡	B - 208	城館跡			○	長沼	大町
14	長沼城跡	B - 201	城館跡			○	長沼	穂保　城跡
15	砂田城跡	B - 210	城館跡			○	柳原	小島砂田堰北
16	西和田城跡	B - 214	城館跡			○	古牧	西和田和田堰
17	横山城跡	C - 202	城館跡			○	長野	箱清水　城山

※長野市教育委員会提供の遺跡台帳（2018.9.21 改訂版）に基づいて、編集したものである。

第５表　小島・柳原遺跡群　発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	地点名	弥生	古墳	奈良平安	中近世	調査年度	長野市の埋蔵文化財シリーズ番号
1	中俣	（株）永楽開発支店	○	○			H6 年度	第 76 集
2	中俣	中央消防署柳原分署	○	○			H3 年度	第 48 集
3	中俣	中俣土地区画整理事業Ｂ区	○	○			S63 ～ H2 年度	第 41 集
4	中俣	中俣土地区画整理事業Ａ区	○	○			S63 ～ H2 年度	第 41 集
5	中俣	市道柳原東西線	○			○	H18 年度	第 125 集
6	宮西	中俣住宅地造成	○	○		○	H5 年度	第 64 集
7	水内坐一元神社	柳原小学校	○	○			S54 年度	第 6 集
8	水内坐一元神社	市道柳原東西線	○	○	○	○	H15･16 年度	第 125 集
9	水内坐一元神社	柳原総合市民センター	○	○		○	H19 年度	第 125 集
10	水内坐一元神社	柳原体育館	○				H8 年度	第 88 集
11	水内坐一元神社	（株）山二小島団地	○	○			H8 年度	第 80 集
12	水内坐一元神社	（株）山二小島団地二期	○	○	○		H17 年度	第 113 集
13	水内坐一元神社	ガーデンパーク小島	○	○	○		H17 年度	第 113 集
14	小島境	富士通長野工場	○	○			S57･58 年度	－
15	南川向			○	○		S61 年度	第 25 集
16	上中島				○		H5 年度	第 62 集

2　歴史事象

集落の始まり　小島・柳原遺跡群において、本格的に居住域が展開するようになるのは、弥生時代からである。中俣遺跡（中俣土地区画整理事業地点）では、弥生時代中期の栗林式期の集落跡が確認されている。太形蛤刃石斧の製作も小規模ながら確認されており、この時期の中核的集落とみられている。浅いながらもすでに直線的な溝（３号溝）が掘削されているのは、低地に集落が展開し始めた要因が水田耕作の開始にあると予察できる。

環濠集落の成立と解体　弥生時代後期になると、水内坐一元神社遺跡（柳原市民体育館建設地点）において環濠集落が構築され、当地の中核をなす。さらに長野県内にも「環濠」だけでなく「高地性」集落も出現する時期であり、政治的緊張関係が発露した時代であった。環濠内からは木製盾のほか弓・槍先などの武器形木製品が出土しており、環濠が防衛的機能を持っていたことを示している。

環濠は、古墳時代前期には完全に埋まっている。環濠埋土中からは、東海系土器や北陸系土器などのいわゆる外来系土器が出土しており、長野盆地を超えた交流の活発化、さらにはそこからの集団の到来によって環濠集落は解体していったと考えられる。

外来集団の到来と古墳築造の活発化　環濠集落の解体と相前後するように、古墳・墳丘墓が築造されるようになる。宮西遺跡や中俣遺跡（㈱永楽開発支店地点）では、弥生時代後期には集落であった地が、墓域へと転換していく状況がみられる。しかし、小島・柳原遺跡群内には、明確な墳丘が目視できる古墳は存在せず、削平等によって埋没してしまっている。確認されている古墳の多くは、古墳時代前期のもので、墳丘の高さは低く、周溝墓とも呼ばれるようなものである。墳丘形態は方形基調で、方形墳丘のほかに前方後方形のものが水内坐一元神社遺跡で確認されている。古墳時代前期における造墓活動は活発で、それに比例するように当該期の集落も確認されている。集落では東海系土器・北陸系土器のほか、畿内系土器も確認できる。また小島境遺跡では、玉製品製作遺物が出土しており、その出土土器には北陸北東部地域の影響が強くみられる。このように当地の墓制や生産活動に外来集団が大きくかかわっていたことが指摘できるのである。

ところが古墳時代中期以降になると造墓活動は低調となり、さらに集落も縮小・減少し、古墳時代後期の集落跡となると非常に限られた分布となる。

律令社会への移行　弥生時代に始まったと想定される水田開発は、条里制の施行によって大きく転換する。小島・柳原遺跡群では、戦後の米軍の航空写真から、条里地割の存在が指摘されている（小穴 1992・小出 1992）。実際に調査で確認できたものはなく、その成立年代も不明であるが、千曲市の更埴条里遺跡の古代条里地割が８～９世紀に成立しているため、当地の条里地割もそれにほぼ並行するものとされている[1]。水内坐一元神社遺跡（㈱山二小島団地二期工事地点）の調査では、弥生時代以来集落域であった微高地を、奈良時代以降に削平して水田化するという土地変遷が捉えられている。

古代以降の集落は、水内坐一元神社遺跡などの一部を除き、南川向遺跡や上中島遺跡といったこれまで集落が展開しなかった南域へと移っている。すなわち、これまで集落が営まれていた北側は広く水田化され、集落は南側へ移動したとみることができる。

古代善光寺との関係　北側に広がる条里地割における南端部の基線は、江戸時代には「中道」と呼ばれた東西に直線的に走る道にあたる。おおよそ布野の渡しから善光寺の旧本堂地点とされる仁王門までをほぼまっすぐに結んでいる。調査区を横断する市道柳原 117 号線は、ちょうどその沿線上の位置にあたる。

1　福島正樹は条里の基軸の一つが水内郡衙と高井郡衙を結ぶ官道であり、今回の調査地点を横断する想定をしている（福島 2000）。

善光寺は、550（欽明13）年に百済から渡ってきた阿弥陀三尊を602（推古10）年に仏の託宣により本田善光が水内郡に送った、という有名な縁起をもつ。しかし、善光寺は、元々は一郡寺に過ぎず、平安時代末から中世になって東国有数の霊場へと変わっていったとされている（牛山2016）。ただし、善光寺の立地は条里地割と関係しており、有力豪族が関わっていたことは否定できない。さらに条里地割にみる水田開発にともなって水路網も大規模に整備されている。鐘鋳堰は、条里地割の北縁を流れ南側の水田へ配水する。その流路は、等高線に平行して流れていることなどからも、条里制の施工にあわせて掘削された人工水路とされている（福島2002）。このように善光寺の建立は、当地域の大規模な開発と大きくかかわっていたと言うことができるのである。

律令社会の解体と善光寺の霊場化　888（仁和４）年にいわゆる「仁和の大洪水」が起こり、長野盆地も甚大な被害を受けることになる。小島・柳原遺跡群では、この洪水の痕跡は確認できていないが、10世紀以降集落が減少するという長野盆地全体の傾向と同調している。

善光寺は、天台宗の有力寺院である園城寺の末寺となり、徐々に中央との結びつきを強めていく。全国有数の山岳霊場をひかえる戸隠寺が、園城寺とは敵対する延暦寺の末寺となっているため、結びつきはより強固にされたのかもしれない。善光寺が園城寺の末寺となったことで、善光寺は本山である園城寺に財政的に寄与することとなる。『吾妻鏡』のなかで、1186（文治２）年に記された信濃の荘園には、「河居・馬島・村山・吉野」が善光寺領とされている。吉野は古野の誤記であり、布野のことであろう[2]（井原2000）。また河居は川合、馬島は真島のことであり、いずれも犀川・千曲川沿いに位置する（第３図）。布野の渡しが史料として確認できるのは江戸時代以降であるが、善光寺は川沿いの地を領有し、渡し場を管理していたとみられる[3]。

平安時代の信濃国では、中央においても知られるような（呪力をもった）高僧を生み出している。例えば、脳を砕いて護摩を焚くという熱祷によって惟仁親王の皇位継承に寄与した恵亮が、「信濃国水内縣」の出身とされていたり（『本朝高僧伝』）、奈良県信貴山朝護孫氏寺に伝わる『信貴山縁起』の主人公であり、信貴山の中興の祖である命蓮が、信濃国出身とされていたりする。また、最澄の東国巡錫においては、信濃国大山寺の正智が、神坂峠越えの際に布施屋を設けるだけでなく、上野・下野国での法会に参加している（『叡山大師伝』）。善光寺には最澄の高弟、円仁の銘のある平安時代鉦鼓が伝わっているが（善光寺大勧進1999）、その背景として中央との宗教的繋がりが平安時代にはすでにあり（善光寺との関係が大いに考えられる）、鉦鼓といった先進的な法具が入ってきたのであろう。

中世になると、善光寺は徐々に霊場化され、著名人も参詣するようになる。『とはずがたり』巻四では、1291（正応４）年に御深草院二条が善光寺詣でを行った際、善光寺の奉行人であった高岡の石見入道の館に滞在している。この館の詳細は不明であるが、善光寺の東方、中道沿いにある古牧東和田の東和田城跡（第４図ア：現在の県営運動公園総合運動場）を比定する説もある（小林1975）。また、『とはずがたり』と同時代に書かれた『宴曲抄』には、鎌倉から善光寺までの道程が詠まれている。そこでは碓氷峠を越え、更科、姨捨山、篠ノ井を経て犀川から様々な渡しを越えて善光寺へ参詣している。そして最後に「西天月氏の古。信心の窓を照らしては。三尊光を並ひゝ」といった善光寺に西方浄土をみるような文言が並ぶ。このように善光寺仁王門から東にのびる中道が、善光寺詣での参道となっていたと考えられているのである。幕末に記された『朝陽館漫筆』には、善光寺如来堂などは、本来は東向きで建っており、元禄年間の

2　なお、現在の布野地区には「古野神社」がある。

3　例えば金沢北条氏の菩提寺となっている称名寺（横浜市）は、天竜川や旧利根川のそばなどにも所領を持ち、橋の普請や管理を行うとともに、往来するものに対して通行料を徴収している。他にも多くの地方寺院が、渡し場付近に所領を有している。柴田洋孝も同様な見解を示している（柴田洋孝2019）。

焼失後の再建の際に現在のように南向きになった、と書かれている。その真偽は定かではないが、東向きであることに注目されたのは、善光寺が西方浄土の思想と関わっていたからであろう。

ところが『大塔物語』には、1400（応永７）年に新たに守護となった小笠原長秀が善光寺に入った際に「見物の人々は、善光寺の南大門から蒼花川（すすばなかわ、裾花川）の高畠にかけて、足の踏み場もないほどだ。」としており、今の北石堂町から善光寺につながる直線の参道は、この時期にはすでに存在していたことがわかる。この現在も残る南北の参道は、中道と直交しており、条里地割の仕法で作られた可能性がある。すなわち善光寺は、条里地割に基づいて立地している。このように当初、古代では善光寺もしくはその前身寺院は、条里地割に基づいて建立されたのであり、浄土思想といった宗教的観念は、後になって付加されていったとみることができる。

要衝としての中・近世の柳原　大田荘の地頭職として島津忠久が補任され、以後島津氏が地頭職を務めることになる。『吾妻鏡』では、大田荘には当初、神代・石村南・小嶋（小島）・津乃（津野）・大倉・石村の６郷が記されており、柳原地区では小島が大田荘に属していたことがわかる。大規模な荘園であり、柳原の地とも深いかかわりを持つ。とくに北八幡川は島津堰とも呼ばれ、島津氏が大きく関与していたことがわかる。現在は北八幡川の雨水調整池となっている古牧の三重公園は、北八幡川のほか鐘鋳堰（川）を源とする北からの排水を集め、そこから北八幡川や六ヶ郷用水などへ配水しており、水利においても重要な地点である。その脇に建つ守田廼神社には、1301（正安３）年に長沼五郎や島津元始らが、八幡堰を掘り直す際に社殿を移築したという話が伝わっており[4]、島津氏が北八幡川をめぐる水利と関わっていた可能性を示すものである。

第７図　旧長野市街地における条里遺構（福島 2002 を一部改変）

4　守田廼神社（長野市高田）境内案内板

また、島津氏は信濃に所領を有したことから、諏訪大社の五月会・御射山祭りの頭役まで勤めている。そのため最大の所領島津荘のあった南九州にも諏訪神社を勧請し、また逆に南九州に多い鹿射ち神事が信濃の地に持ち込まれたとされており、島津氏と信濃は深いつながりを持つようになる（吉村 2017）。

鎌倉時代から江戸時代初めまで、柳原地区には長命寺・勝善寺・勝楽寺・円光寺・正安寺・光明寺が、建立されていた。長命寺は、『二十四輩順拝図会』によると、西念が武蔵国足立郡野田に建立したことに始まる。その後、三世西祐の時に建武の乱で寺が破壊され、信州駒沢へ寺を移すことになる。そして七世信貞の時に布野に移り、享保年間に今ある南堀へ移転したという。なお布野長命寺という呼称は、現在の南堀に移っても継続していた。布野長命寺の跡は現在、地割として痕跡をとどめており、大門という地名も残っている。また布野地区が所蔵している 1825（文政８）年作成の地図には、当該地点に「南堀村長命寺古屋鋪除地」と記されている（第６図）。

勝善寺は 1199（正治元）年、井上頼重によって中俣城内に柳頭山勝善寺として建立された。中俣には 1595（文禄４）年まであったが、その後須坂市へと移転している。なお、弟の井上頼光は、1231（寛喜３）年、水内郡西久保（長野市上高田）に柳原山勝善寺を建立し、現在は長野市西尾張部に移転し光蓮寺の寺号を称している（光蓮寺 2006）。

その他、円光寺は布野、正安寺は中俣、光明寺は小島にあったとされているが、移転もしくは廃寺となっており現在の柳原地区には寺院がない（長野市 1997）。

このように古代に引き続いて中世・近世においても集落の中心は、南側の布野・中俣地区にあることがわかる。布野・中俣地区に寺院が集中していたことは当時、千曲川対岸からは渡しが通っており、この地が交通の要衝であったことと関係している。柳原側は布野の渡しと呼ばれ、その場所は現在の柳原排水機場のあるあたりとされている。『上州草津温泉道中続膝栗毛』では、福島（布野）の渡りとして、一本の綱をつたって舟が往来していた様が描かれている。善光寺詣でには、この布野の渡し場を通っており、布野－小島－石渡－太田（下越）－三輪－淀ヶ橋と通じる「中道」が使われたといわれている（長野市 1997）。なお、明治時代初期に記された「大蔵省　考課状　駅逓寮　渡船橋梁之部」には、古来より渡し舟の渡し賃が布野村の収入源となっていることが記されており、おそらく先述した善光寺領となっていた頃から当地の生業となっていたと推察できる。

近代における交通路の変化　布野の渡しは、1833（明治８）年に村山に舟橋が架けられたことによって終焉する。その後、舟橋は木橋へと架け替えられ、1926（大正 15）年に村山鉄橋の完成により須坂－権堂間に鉄道が走るようになった。これによって柳原の中心地は徐々に柳原駅のある北側へと移っていく。

先述した中道の延長線上にあたる市道柳原 117 号線は、千曲川の南側からの溢流を堰き止める堤防としての役割を果たしている。明治期に道路の高さを引き下げることによって洪水時に自然溢水させることを取り決めたが守られず、道路を挟んで利害関係が相反していた。そこで 1913（大正２）年に地役権設定者である上野磯右衛門と地役権者との間で、自然流水を妨げないように建物・竹林・土盛りを設けないこと、道路面より高い作物は耕作しないことを取り決め、この契約は 999 年間継続するものとした（長野市 1997）。それを受けて市道脇には道路面との水平線が刻まれた石碑が現在でも建っている。このようにこの市道 117 号線は、古代・中世には交通幹線であったが、その後堤防としての機能が重視されるようになってきたことがわかる。

万葉歌に詠まれた中麻奈　「中麻奈（なかまな）に浮きをる船のこぎ出なばあふこと難し今日にしあらずは」

これは『万葉集』の東歌のなかに信濃国の歌として採録されているものであるが（『万葉集』巻 14、3401）、柳原の人々にとって非常に馴染のある歌である。中俣区南公民館のそばには、この歌の歌碑が建っているが、これは伊勢神宮の神官で信濃とも繋がりのあった江戸時代中期から後期の国学者である荒木田

久老が、中麻奈を中俣と比定したことに由来する。明治期に柳原村の戸長も務めた寺田久連松は、伊勢神宮神官であった荒木田家と親交もあり、中俣が万葉集に詠まれたことを地域の方に広く知ってもらうために、この歌碑を建立したのである。

荒木田久老の言説を記した『信濃漫録』（刊行したのは子、久守）によると、「旧説では「中麻奈」は川（の）中島としていた。ところが岡田村の小泉好平が言うには、水内郡に中俣という村があるという。そこは千曲川へ犀川と裾花川が流れ込む河股であり長股である。そして今でも上古の舟を繋いだ木もあるし、大樹の株もある。」としている。

まず中麻奈が何を指すのかはいまだ定説はなく、江戸時代においても「麻奈」を「真砂（子）マネ」として川の中州もしくは川中島とする説もあった。その他、中麻奈を「なかまな」と読むのは湯桶読みであるからして、「ちぐ（ちゅう）まな」と読むのが正しく、「な」はアイヌ語で川を意味する「ナイ」の転訛とみて千曲川のことであるという説も有力である（都竹 1953）。

次に、舟を繋いだ木というのは、古野神社にある舟つなぎ石のことではないかと考えられる。この古野神社の南側には旧河道が確認できる。また、目洗い水が溜まったというケヤキの巨木もある。しかし、千曲川一帯の舟つなぎ石には、大きな湖があったという言い伝えを伴うことが多く、さらに小高い場所に据えてあるものもあり、本来の舟を繋ぐという機能ではなく、洪水などの水害を後世に伝える意味を持っていたと考えられている（細井 1998）。

このようにみていくと、荒木田久老の説は分が悪い。しかし、中麻奈は「川の中州」といった一般名詞ではなく、地名などの固有名詞であろうが、あえてここにもってくるのには中麻奈に象徴されるものがあったに違いない[5]。布野の渡しなど交通の要衝となった当地が、歌垣の場として恋歌に象徴される地となっていたとしたら、中俣とする説もあながち無視できないであろう。現在、柳原には中麻奈の里公園も造られており、現代においても中麻奈の歌は語り継がれている。

5　そもそも信濃国の歌として分類されているため、中麻奈が一般名詞である「川の中州」ではおかしい。また東歌は、派遣された国司などが帰京する際に、歓迎・餞別の酒宴の席で詠まれた歌を中央官人が記録したものであろうとされており（土橋 1978）、中央官人でも理解できる著名な地であったに違いなく、歌の内容からして交通の要衝となった地名であったと考える。

参考文献

井原今朝男 2000「北信濃の公領と地頭」『長野市誌第二巻歴史編原始・古代・中世』長野市

牛山佳幸 2016『善光寺の歴史と信仰』法蔵館

小穴芳実 1992「善光寺平の条里瞥見」『地域史研究法』信毎書籍

小出　章 1992「善光寺平の条里遺構」『文化財信濃』18巻4号

小林計一郎 1975「二条の善光寺参詣について」『長野』64号　長野郷土史研究会

柴田洋孝 2019「古代信濃国水内郡における寺院と周辺遺跡からみる土地利用状況」『国士舘考古学』第7号

善光寺本坊大勧進宝物集刊行会 1999『善光寺大本願宝物集』郷土出版社

土橋　寛 1978『萬葉開眼（下）』NHK出版

都竹（つづく）通年雄 1953「巻十四の「中麻奈」」『萬葉』第9号　萬葉学会

長野市誌編さん委員会 1997『長野市誌第八巻旧市町村史編』長野市

細井雄次郎 1998「地域探訪『千曲川』その5―舟繋ぎ石の話―」『長野市立博物館だより』第42号　長野市立博物館

福島正樹 2002「古代における善光寺平の開発について」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第96集

吉村睦志 2017『天竜川流域の鹿射ち神事』幻冬舎

宗教法人柳原山光蓮寺 2006『蓮如上人五百回御遠忌記念　光蓮寺』中央公論事業出版

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

1　発掘作業の方法

（1）調査区とグリッド設定

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則して実施している。

①遺構名称と遺構記号

遺跡名称と遺跡記号は、小島・柳原遺跡群（KOJIMA・YANAGIHARA）「BKM」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表したもので、1文字目の「B」は長野県内を10地区に分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡の地区を示し、2文字目、3文字目は遺跡名のローマ字表記の2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

②調査区・グリッドの設定と呼称（第8図）

南から1区、2区、3a区、3b区、3c区の調査区を設定した。国土地理院の水平直角座標第Ⅷ系の原点（X＝東経138° 30′ 00″、Y＝北緯36° 00′ 00″）を基準に、200の倍数値を選んで測量基準線を設け、調査対象範囲全体をカバーするようにグリッドを設定した。なお、座標値は、日本測地系である。

大々地区は、200×200mの区画で、北西から南東へローマ数字で表記した。

大地区は、大々地区を40×40mの25区画に分割し、北西から南東へA～Yまでのアルファベットで表記した。

中地区は大地区を8×8mの25区画に分割し、北西から南東へ01～25のアラビア数字で表記し、調査では中地区を遺構測量等の基準単位とした。

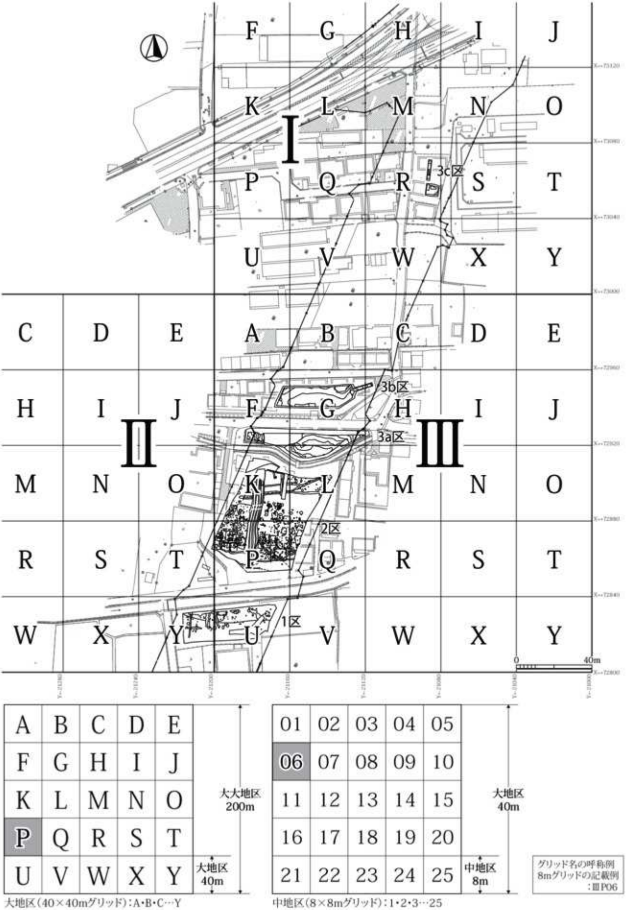
また、グリッド設定は、遺構検出がほぼ終了した段階で業務委託により行なった。

（2）　表土の掘削と遺構の検出

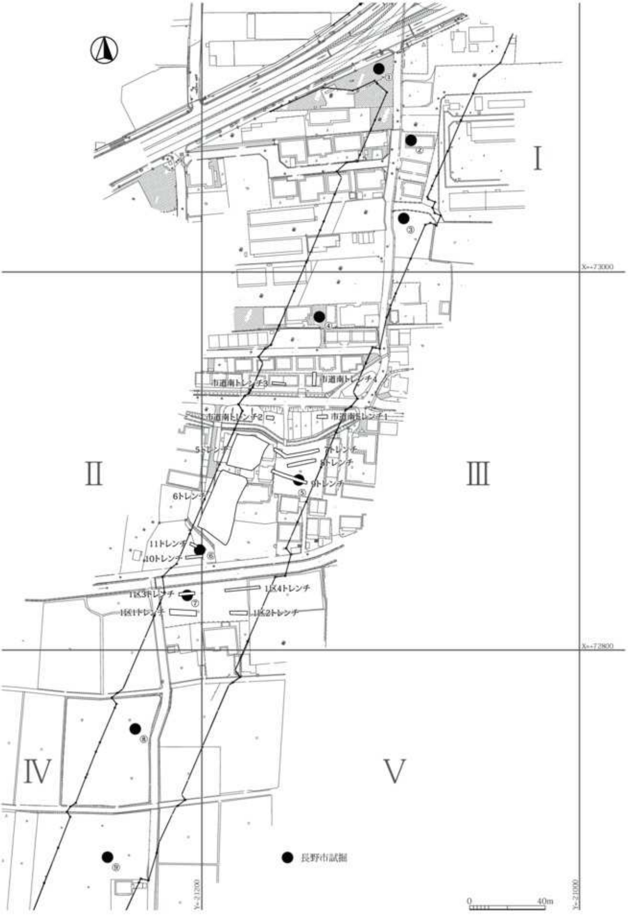
2016（平成28）年6月1日から調査が始まり、2016年度は1区と2区西半分の調査を実施した。1区は重機により4か所のトレンチを掘削し、土層観察による確認調査を行った。遺構があることを確認したが、出水が激しいため全体の調査は秋に行うことにし、2区の調査を先行することにした。2区西半分では、掘削した5トレンチ、6トレンチをそのままトレンチを広げて全面調査を行った。調査では、遺構確認面直上までを重機によって掘削した。中世以降と古代の2時代があることが判明したが、面として明確に区別できない場所もあった。この場合は、古代面まで掘下げた。西半分の遺構密度が予想より高かったため、東半分で掘削した7～9トレンチでは遺構等を確認し、2区東半分の全面調査は次年度とした。

また、2区南西で北八幡川に挟まれた三角形の地区には10・11トレンチを掘削し、旧河道であること確認した。3区でも確認調査を行った。その結果、3a区の地中に大量の産業廃棄物が含まれることが判明し、次年度以降撤去の方向で事業者と協議することとなった。

2017（平成29）年度は2区東半分を調査した。2016年度と同様に、遺構確認面直上までを重機によって掘削した。中世以降と古代の2時代があることが判明したが、中世が面として明確に判別できない場合は、古代面まで重機での掘下げを行った。また、発掘調査後の1～3月に、3a区地中の産業廃棄物の撤去が事業者によっ



第８図　調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称（１：2,000）



第９図　トレンチ配置図（1：2,000）

て行われた。

2018（平成30）年度は、３区の調査をした。3a区は事業者により産業廃棄物の除去が行われたため、地表下約1.5～２mまでの土が除去された状態で調査開始となった。3b区は重機による表土掘削を行った。精査の結果、どちらの地区でも遺構を確認することができなかった。また、条里区割の可能性がある用地内（3c区）に確認調査を実施したが、痕跡を見つけることはできなかった。発掘調査は８月30日で終了した。

（３）　遺構精査

埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

ＳＢ：２mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。

ＳＤ：帯状の掘り込み。

ＳＫ：単独、もしくはほかの掘り込みとの関係がないＳＢより小さな掘り込み。

ＳＭ：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。

ＳＦ：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。および、炭化物の集中範囲。

ＳＸ：以上に記した以外のもの。

遺構精査は、竪穴建物跡（SB）については、検出面で遺構の形状を確認したのち、土層観察ベルトを残し、移植ごておよび両刃鎌で埋土の層位ごとに床面まで掘り下げた。土層観察ベルトは記録後に外し、趣向、柱穴、カマド等の精査、記録を行い、プラン全体を記録した。その後床下を確認した。土坑・墓・焼土（SK・SM・SF）は、検出面での遺構の形状を確認後に半裁し、土層断面の記録後に完掘し、プラン全体を記録した。溝跡（SD）は、検出面での遺構の形状を確認後にサブトレンチで断面の形状や深さを確認、土層断面の記録後に完掘し、全体を記録した。

遺物は遺構ごとに層位を分けて取り上げ、出土地点の記録が必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。

終了した調査面は、下層の遺構・遺物の有無を再確認するため、重機による深掘りを行った。

なお、墓、焼土址などからは科学分析を行うことを目的にサンプルを採取し、炭素14年代測定法（AMS）を実施した。墓などからの出土骨については、専門家による鑑定指導を受けた。

（４）　記録作成

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもと発掘作業員が行った。前記の測量基準杭による簡易遣り方測量と電子平板測量を基準としたが、一部業務委託による単点測量も併用した。遺構測量は、中地区（８m×８m）単位に図面用紙に記録した割付平面図と、必要に応じて個別の遺構ごとの図面用紙に記録した個別図を作成した。土層断面図は図面用紙に記録した。遺構図は、1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、トレンチ位置図、調査範囲図、地形測量図は、業者に委託し作成した。

遺構の写真記録は、６×７リバーサル・モノクローム、１眼レフデジタルカメラを併用し、撮影は調査研究員が行った。また、調査区全体等の空中写真は、業務委託によって、６×７リバーサル・モノクローム、１眼レフデジタルカメラで実施した。デジタル写真は、JPEGとLAWのデータ形式を保存した。

２　整理作業等の方法

（１）整理作業

土器洗いや遺物注記、図面整理などの基礎整理作業は、発掘作業の雨天時や冬季基礎整理作業時に実施した。遺物実測や遺物・遺構のトレース作業などは2018年の９月から開始した。

①遺物の整理

ブラシを用いた水洗作業後、取り上げ袋ごとに台帳登録した。土器・土製品・石器・石製品は微細な資料を除きすべて注記した。遺跡名は遺跡記号 BKM、出土地点等は以下の表記を用い、台帳登録番号とともに注記した。なお、注記には、現場での管理のため遺物台帳の現場テンパコ番号と袋番号（例 123-11）も記している。

袋記載→注記記号：

床付近→床付　カマド周辺→カマド付　カマド煙道→エン道　焼土→ショウ土　土器集中→集
ベルト→フ　埋土→フ　北東区→北東フ　検出面→検　包含層→包　流路→流　グライ化層→グ
試掘→試　表土→表　かく乱→カク　排土→Z

土器・土製品は、遺構別、グリッド別に分類し、種類別に重量を計測した。遺構の時期決定など資料化が必要なものを抽出し、遺物管理台帳を作成した。実測は業務委託により行なった。

石器・石製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、管理台帳を作成した。手実測により図化した。

木製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、管理台帳を作成した。手実測により図化した。

金属器は、発掘調査後はシリカゲルを入れた密閉容器に保管し、長野県立歴史館においてＸ線透過写真撮影を実施した。その後、報告書掲載遺物を抽出し管理台帳を作成し、保存処理を実施した。手実測により図化した。

出土骨については土砂取りや水洗·乾燥後、鑑定指導を受け、必要な資料については写真撮影を行った。

②遺構図の整理

中地区のグリッドを基準にして 1/20 の縮尺で測量し図面用紙に記録したものと、電子平板で作成したもの、業務委託で単点測量後結線しデジタルトレースしたものがある。原図は、記載内容を点検・修正しながら整理し、台帳に登録した。全体図、個別遺構図はこれらをもとに作成し、Illustrator CC を用いてデジタルトレースを行った。

③写真の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。デジタル写真データは LAW·JPEG を撮影日順にカットごとにまとめ、ポータブルハードディスクと DVD に収録した。

遺物写真は、デジタル撮影を調査研究員が行った。撮影番号をファイル名とした撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。デジタル写真データは JPEG・TIFF・LAW のデータ単位で撮影番号順にポータブルハードディスクと DVD に記録した。

（2）報告書の作成と資料収納

①報告書作成

本格的な編集作業は2019年度から着手した。報告書の作成にあたり、編集会議を2019年２月22日に行った。報告書は、埋蔵文化財関係機関、大学、地域の図書館などに配布する。

②資料収納

遺物は、材質・種類ごとに報告書掲載と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納し、最終的な収納用天箱番号を付与し、遺物収納台帳を作成した。

写真は、遺構・遺物写真ともに整理段階で作成したアルバムと台帳をテンバコに収納した。

遺構割付図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）をつけて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。また、遺構・遺物のデジタルデータはポータブルハードディスクに収納した。

第２節　基本層序

１　土層の概要

基本層序は、遺構が多く分布する２区を基準とし、Ⅰ～Ⅸ層（現地表下約 3.5m）までを把握した。調査で全面掘削したのは、Ⅰ層から遺構検出面であるⅤ層までであり、そのⅠ～Ⅴ層中には、砂粒は包含するものの砂層の堆積は確認できなかった。なお、Ⅴ層以下は、シルトと砂を主体とした軟弱地盤であり、Ⅰ～Ⅸ層までを通したトレンチ掘削が叶わなかったため、２区を縦断する SD01 の壁面にトレンチを入れて把握した（第 10 図）。

Ⅰ層は、耕作土で、２区全域で確認できる。

Ⅱ層は、盛土で、層厚約１m 以上ある。Ⅱ層中には、プラスチック・ビニール片も含むことから、現代に帰属する。とくに２区においては、洪水対策の嵩上げ工事として盛られたようである。

Ⅲ層は、遺物包含層で、古代の遺物が主体となるが、中世の遺物もわずかに含む。２区北側では上下に分層できた。

Ⅳ層上面では、おもに中世以降の遺構を検出することができ、「第１検出面」とした。Ⅳ層は、灰黄褐色を呈し、遺構埋土の主体となる暗褐色土との識別は比較的困難である。

Ⅴ層上面では、おもに古代の遺構を検出することができ、「第２検出面」とした。Ⅴ層は、暗褐色を呈する箇所が多いが、２区中央部では黄褐色土として確認できた。Ⅵ層以下が強くグライ化している箇所は、暗褐色を呈する傾向があるようである。また、Ⅴ層中において砂層が確認できる地点もあり（SD01：A-B）、複雑な堆積状況をなしている。

Ⅴ層以下では遺構・遺物は、確認できない。シルトを主体とするが、Ⅷ層では粗粒砂を主体とし、２区において広く認めることができた。

なお、現地表下５m 地点までトレンチ掘削を行ったところ、シルト層を主体としており、礫層は確認できなかった。

２　層序の対応関係

２区で把握した基本層序をもとに、１区と３区とで対応関係を検討した。１区と２区との間には、北八幡川が、２区と３区との間には村山堰が横断する。

２区は、現在の地表面の高さで比較すると、１区より１m 以上も高い位置にある。しかし、これは現代の盛土（Ⅱ層）に起因する。基本層序を把握したところ、とくにⅣ層上面の高さを比較すると、２区が最高所にあるものの、１区との比高差は約 25cm、３区とは約 50cm になる。これは遺構数にも反映しており、集落がわずかな比高差でも最高所を選択していたと言える。

１区では、古代遺構の地山層となるⅤ層の堆積が薄い。それ以下は砂層が多く堆積しており、シルトを主体とする２区とは異なっている。Ⅴ層以下では、２区同様、遺構・遺物は確認できない。

３区では、Ⅱ層が確認でき、おおよそ２区と同時期の盛土である。３区一帯では、戦後、周辺の道路工事のための土取りによって大きな窪地が溜池となって残っていたようであり、Ⅱ層はその埋土であろうか。ところが、３区では遺物包含層であるⅢ層が確認できない。そもそも３区内において遺構・遺物がほぼ皆無であることから、Ⅲ層は削平によって消失したのではなく、元来形成されなかったと言える。Ⅳ層の上層にある５層・６層は、耕起されたような空隙を持つシルト層で、かつ鉄分の集積も伴うことから、水田土壌の可能性が高い。その時期は確定できなかったが、Ⅳ層より上の土壌を耕土としていることから、近

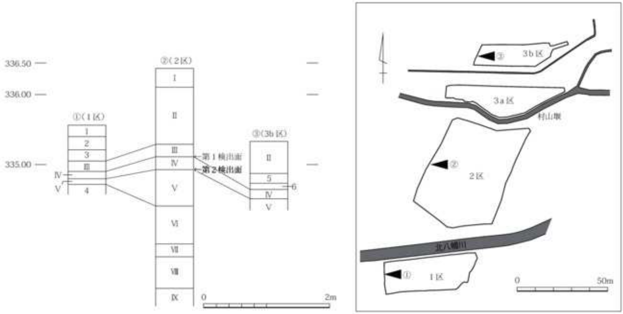
世以降のものと判断した。ただし、畦畔は、平面検出・断面観察でも確認できなかった。５層上面に、Ⅱ層盛土施工の際に大きく削られた痕跡が確認でき、旧耕作面は消失したのであろう。

Ⅴ層以下は、軟弱地盤であり湧水もあることから正確な土層観察・計測はできなかったが、部分的なトレンチ調査によって、おおよそⅤ層～Ⅷ層までが堆積していることを確認した。

3　遺構の検出面

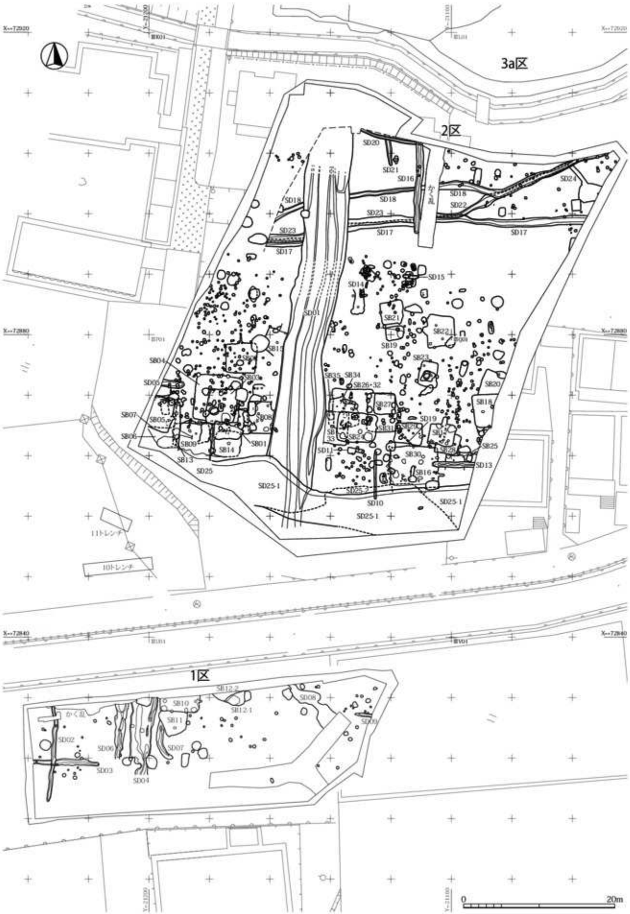
市教委の試掘調査では遺物包含層は単層であったが、初年度の１・２区の面的調査で遺物包含層が２つに分層されることが判明した（基本土層Ⅲ・Ⅳ層）。しかし、包含層厚は 10cm 程度と薄く、古代と中世の遺構は同一レベルでとらえられた。一方、２区の一部では、包含層厚が増し、Ⅲ層下部で中～近世、Ⅳ層下部で古代の遺構がレベル差をもって検出されている。

個別の遺構の時期については、どの検出面（レベル）で捉えられたかは重要であるが、共伴遺物や埋土土層によって総合的に判断している。ここでは、古代から中世の遺構分布を示す（第 11 ～ 18 図）。個別の遺構の時期については本章第３・４節を参照されたい。

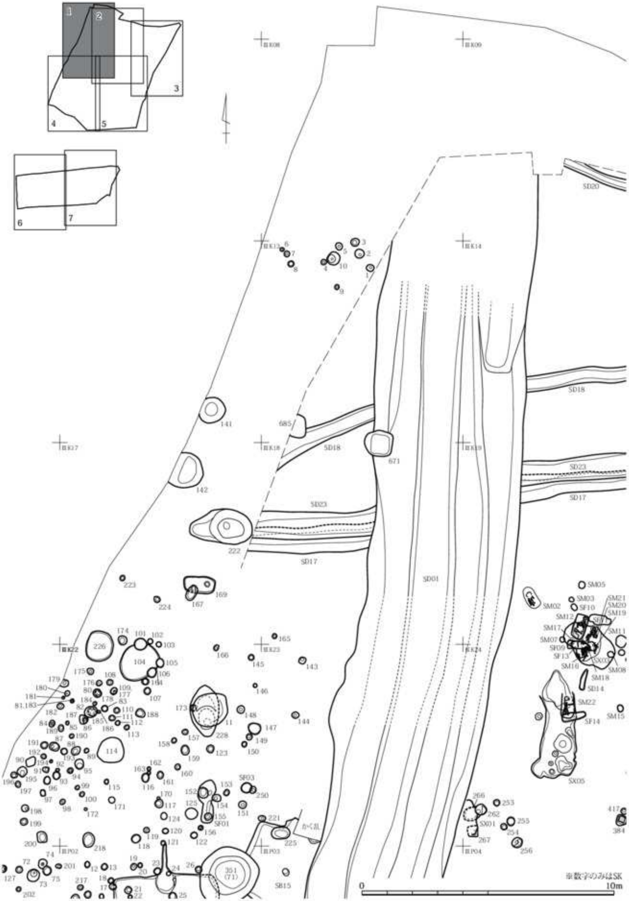


基本層序
Ⅰ　表土耕作土。
Ⅱ　盛土。
Ⅲ　黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。シルト。遺物包含層。
Ⅳ　灰黄褐色 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。シルト。遺物包含層。
Ⅴ　暗褐色 (10YR3/3) しまりあり。粘性あり。シルト。一部黄褐色土を呈する。自然堆積層。
Ⅵ　灰黄褐色 (10YR4/2) しまりあり。粘性強。シルト。下面に鉄分集積あり。
Ⅶ　オリーブ黒色 (10Y3/1) しまりあり。粘性あり。粗砂。グライ化。
Ⅷ　青黒色 (5PB2/1) しまりあり。粘性強。シルト。グライ化。
Ⅸ　明青灰色　しまりあり。粘性強。シルト。
各地区のみに見られる土層
1　灰黄褐色 (10YR4/2) しまりあり。粘性強。旧水田層。鉄分集積。
2　にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりあり。粘性強。旧水田層。1 層より鉄分集積多い。
3　にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりあり。粘性あり。砂粒混。鉄分集積。
4　褐灰色 (10YR4/1) 砂層。
5　灰色 (5Y6/1) しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック主体。砂粒微量混。水田層。
6　褐灰色 (10YR6/1) しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック主体。砂粒少量混。鉄分集積。水田層。

第 10 図　基本層序

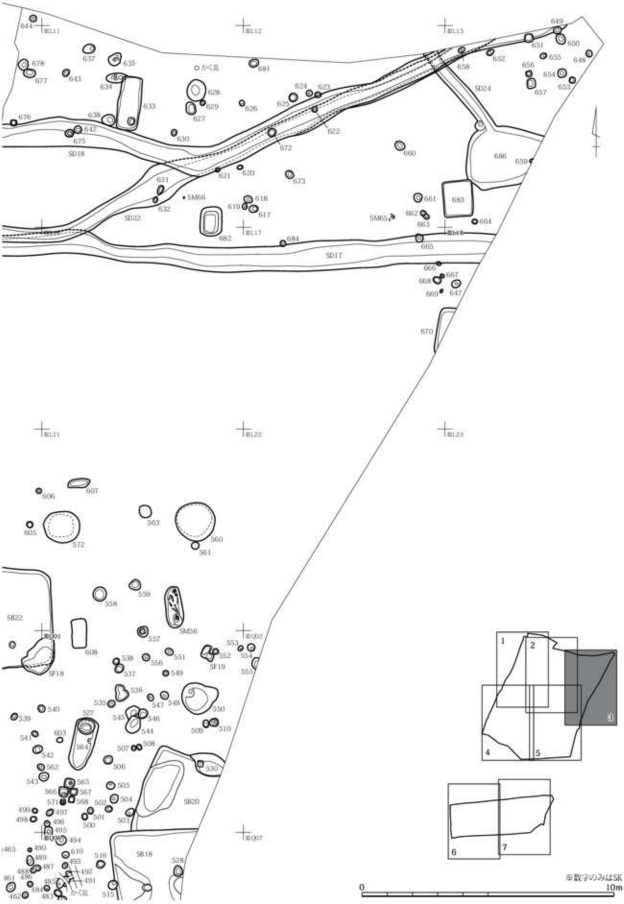


第 11 図　遺構配置図（1：500）



第 12 図　遺構分布図１（１：150）

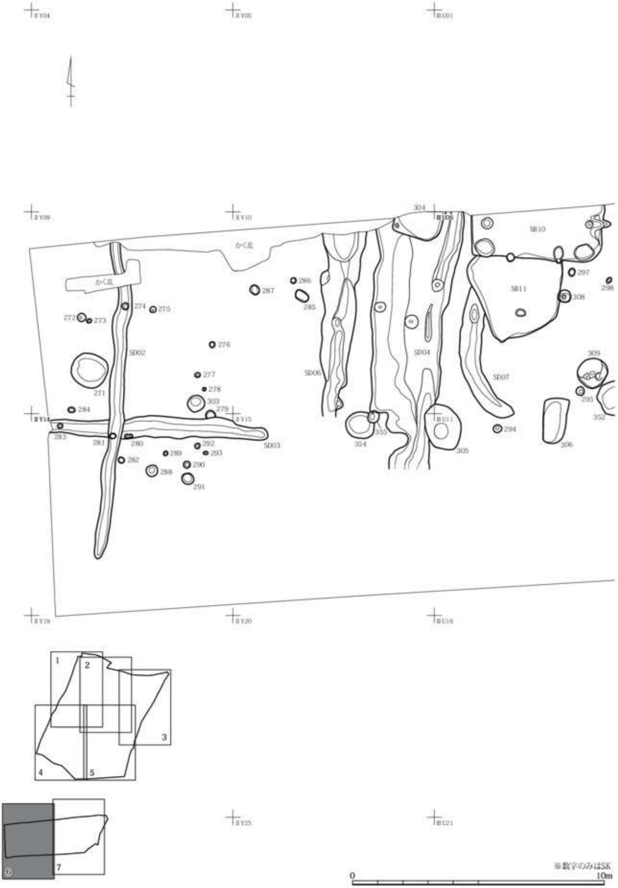
第 13 図　遺構分布図２（１：150）



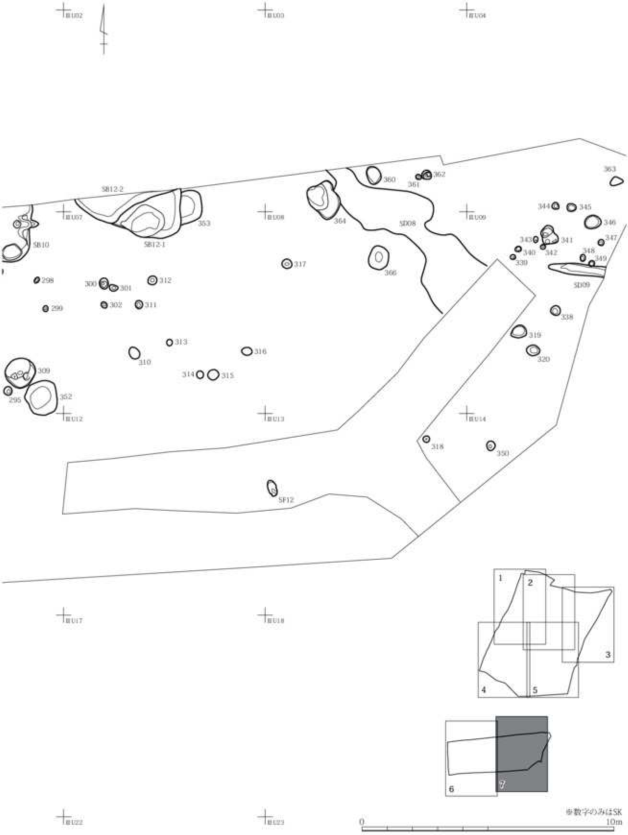
第 14 図　遺構分布図３（１：150）

第 15 図　遺構分布図４（１：150）

第16図　遺構分布図５（1：150）



第 17 図　遺構分布図 6（1：150）



第 18 図　遺構分布図７（1 ：150）

第３節　古代の遺構と遺物

1　古代の時期区分と年代

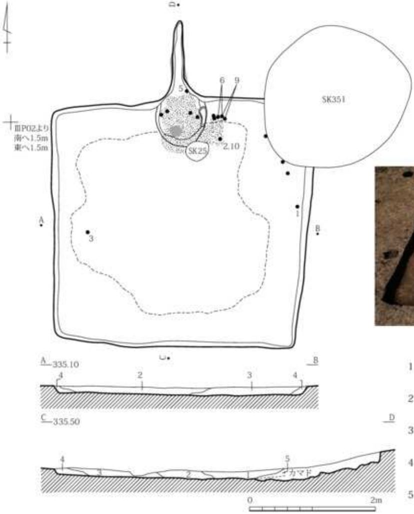
古代の遺構と遺物の大半は平安時代に帰属する。土器編年及び年代は、屋代遺跡群の成果によった（長野県埋蔵文化財センター 1999・2000）。本書では、平安時代を前期、中期、後期の３時期に区分した。時期区分及び年代は下記のとおりである。遺構の多くは平安時代中期であり、前期と後期のものはわずかであった。なお、12 世紀に下る遺構遺物は確認されなかった。

平安時代前期：屋代編年古代５期～古代７期　　８ 世紀末～９世紀後半（第３四半期）
平安時代中期：屋代編年古代８期～古代 12 期　　９ 世紀後半（第４四半期）～ 10 世紀後半
平安時代後期：屋代編年古代 13 期～ 15 期　　10 世紀末～ 11 世紀

2　竪穴建物跡

SB02

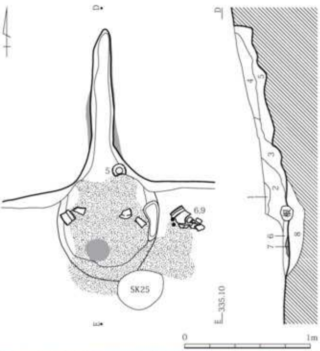
位置：２区Ⅲ P02 グリッド。**検出**：方形を呈する埋土の輪郭を確認した。**重複**：（新）SK25・SK351：遺構検出で確認。**埋土**：Ⅲ層起源の黒褐色土を主体とし、おおむね竪穴外側から内側へ向かって堆積している。**形態**：主軸方位 N-1° -E。長軸 4.43m。短軸 3.58m。深さ 0.13m。**構造**：平面形は正方形。床面はほぼ平坦で、貼床は施さず、広く地山を硬化させている。硬化面は、壁面付近では認められないが、西側中央では壁近くまで硬化面が張り出している。柱穴は、確認できなかった。**カマド**：北壁中央に位



SB02 遺物出土状況（南から）

1　暗灰黄色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。炭化物少量、焼土粒微量、径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック多量混。
2　黒褐色 (10YR3/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック中量、炭化物・焼土粒微量混。
3　オリーブ褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性あり。炭化物微量、径 0.5 ～ 2cm 黄褐色シルトブロック中量混。一部鉄分沈着。
4　暗灰黄色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック中量、炭化物微量混。
5　黒褐色 (10YR3/2) しまりあり。粘性あり。炭化物・径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、径 0.5 ～ 1cm 焼土ブロック微量混。カマド崩落土。

第 19 図　SB02（１）

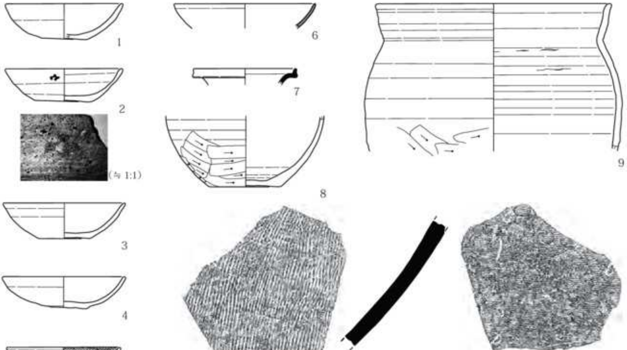


1　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 黄褐色ブロック中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック中量、炭化物微量混。
2　暗灰黄色 (2.5YR4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色（地山？）ブロック多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、炭化物・焼土粒微量混。
3　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色ブロック中量、径 0.5cm 焼土ブロック少量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。
4　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 黄褐色ブロック少量混。
5　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色ブロック・径 0.5 ～ 1cm 焼土ブロック中量、炭化物微量混。カマド崩落土か。
6　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色中量、炭化物・焼土粒微量混。
7　にぶい赤褐色 (5Y4/4)　しまりややあり。粘性あり。径 0.5 ～ 2cm 焼土ブロック多量、炭混。
8　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 炭混。

SB02 カマド遺物出土状況（南から）

SB02 カマド南北断面（東から）

SB02 カマド東西断面（南から）



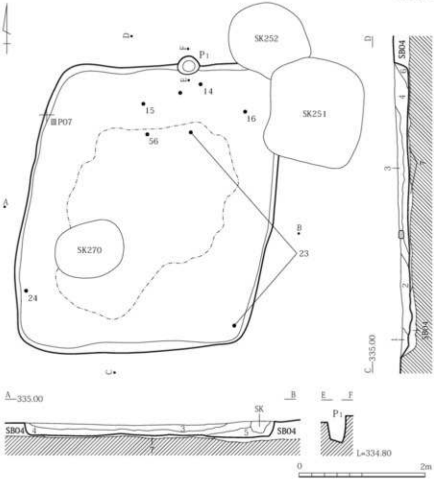
第 20 図　SB02（２）

置する。燃焼部は壁面前面に、煙道部は壁面を掘り込んで構築する。煙道は、竪穴外へまっすぐ伸びる長煙道で、煙道口から煙出口に向かって斜めに上昇する。煙道壁面には強い被熱痕がある。燃焼部は、破壊されており、袖石の抜取痕も確認した。炭化物が、燃焼部内から燃焼部外側にまで広がっている。**遺物出土状況：**遺物はカマド付近に多く、カマド内では炭化物層上面で出土した。１・３は埋土、他は床面付近およびカマド内から出土した。**遺物：**１～４は土師器坏で２には墨書が認められる。５は黒色土器坏、６は灰釉陶器埦、７は須恵器長頸壺、８・９は土師器甕、10は須恵器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器828g、黒色土器375g、須恵器16g、煮炊・貯蔵具その他が、土師器1,347g・須恵器655gである。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB03

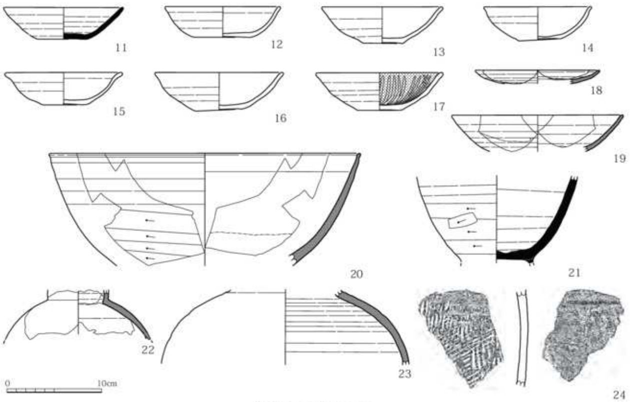
位置：２区Ⅲ P01・02・06・07グリッド。**検出：**SB04の埋土を掘り込んでおり、埋土の輪郭を明瞭には捉えられなかった。トレンチによる土層断面観察によってSB04を切る遺構であることを確認し、規模・形を確定した。**重複：**（新）SK251・SK252・SK270：遺構検出で確認。（旧）SB04：土層断面観察で確認。**埋土：**暗褐色土を主体とし、おもに北東側から流れ込んでいる。**形態：**主軸方位N-10°-E。長軸4.65m。短軸3.50m。深さ0.26m。**構造：**平面

SB03遺物出土状況（南から）



1　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・炭化物少量混。
3　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物少量混。鉄分集積顕著。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルト主体とする。貼床。

第21図　SB03（１）



第 22 図　SB03（２）

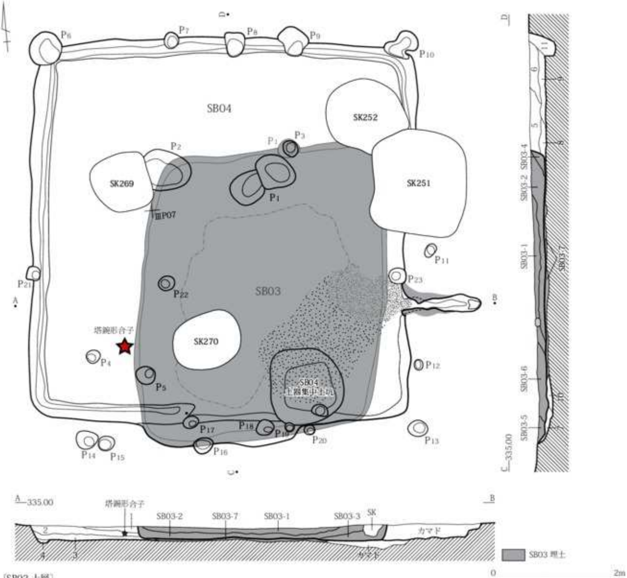
形は、南北に長軸を持つ長方形。床面は平坦で、地山を硬化させている。北壁にピットが１基あるが、柱穴は確認できなかった。**カマド：**燃焼施設は、まとまった焼土・炭化物もなく、認められない。**遺物出土状況：**土師器坏が、北側床面直上に伏せた状態で出土した。**遺物：**11 は須恵器坏、12 ～ 16 は土師器坏、17 は黒色土器坏、18 ～ 20 は灰釉陶器皿・埦・鉢、21 は須恵器長頸壺、22・23 は灰釉陶器壺、24 は土師器甕である。なお、11 ～ 13・17・20・22 は「SB03・SB04」として取り上げた遺物で SB04 埋土に包含されていた可能性がある。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 1,108g、黒色土器 182g、須恵器 68g、灰釉陶器 38g、煮炊・貯蔵具その他が、土師器 853g、須恵器 534g、灰釉陶器 215g である。この他、敲石１点、軽石１点が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB04

位置：２区Ⅲ P01・02・06・07 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を検出した。当初、埋土内に SB03 の輪郭を確認したが、明瞭ではなかった。そこでトレンチによる土層断面観察によって、SB03 の規模・形態を確定し調査した後、SB04 の調査に入った。**重複：**（新）SB03：土層断面観察で確認。SK251・SK252・SK269・SK270：遺構検出で確認。**埋土：**砂粒を含む埋土が、床面から約 10cm の厚さで堆積する。**形態：**主軸方位 N-95°-E。長軸 6.30m。短軸 5.95m。深さ 0.26m。**構造：**平面形は正方形。床面は、地山を硬化させているが、硬化範囲は正確には捉えられなかった。主柱穴は２基（P1・P2）確認した。壁際柱穴が、北壁には５基並び、西壁に１基ある。南壁付近にもピットがあるが、北壁に比べて不規則な配置となっている。東壁には壁外にピットが並ぶ。**カマド：**カマドは、東壁の中央東寄りに位置する。燃焼部は壁面前面に、煙道部は壁面を刳り貫いて構築する。煙道は、竪穴外へまっすぐ伸びる長煙道で、煙道口から煙出口に向かって斜めに上昇する。煙道壁面には強い被熱痕がある。燃焼部は破壊されており、火床も確認できなかった。燃焼部底面を中心に炭化物が広がっているが、その範囲はカマド燃焼部の外にまで及んでいる。**遺物出土状況：**南西部にあたる埋土中から塔鋺形合子が出土した。南東部土坑から多量の土器が出土した。土師器坏を主体とし、灰釉陶器埦が含まれる。カマド内からは土師器坏が出

土しているが、カマド内で被熱した痕跡はなく、カマド解体後に廃棄されている。**遺物：**塔鋺形合子（第79図1）の詳細は第4章に記す。25は須恵器坏、26～57は土師器坏[1]、58・59は土師器埦、60～62は黒色土器埦、63～65は灰釉陶器埦、66は須恵器平瓶、67は土師器小甕である。27、46、57には黒色付着物が認められる。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器5,944g、黒色土器772g、須恵器83g、

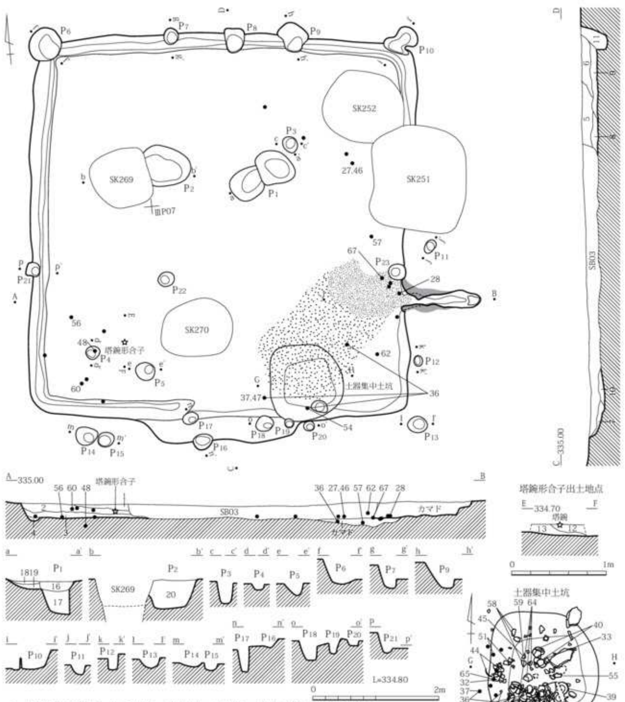
SB04完掘（西から）

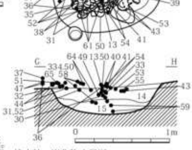


〔SB03 土層〕
1　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物少量混。鉄分集積顕著。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
5　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・炭化物少量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルト主体とする。貼床。

第23図　SB03・04

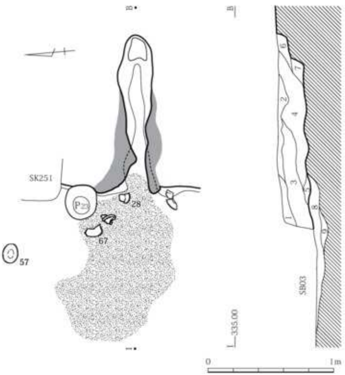
1　脱稿後、第26図56の土師器坏はSB03で出土したことが判明した。図版番号の変更ができないため、遺物図版の修正はせず、遺物観察表および写真図版のみを修正した。





1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、炭化物微量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、砂粒混。
4　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量、砂粒混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性ややあり。シルトに砂粒均一混。
8　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
9　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、砂粒混。
10　褐灰色 (10YR6/4)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。
11　灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。P8 埋土。
12　暗褐色 (7.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、炭化物微量混。1 層相当。
13　暗褐色 (7.5Y3/4)　しまりあり。粘性ややあり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。3 層相当。
14　暗褐黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5cm 灰色シルトブロック中量、焼土粒・炭化物少量混。
15　暗褐黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 灰色シルトブロック・炭化物粒・砂粒少量混。鉄分集積。
16　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック中量混。
17　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
18　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量混。
19　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック中量混。
20　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック中量混。

第 24 図　SB04（1）



1　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性ややあり。シルトに砂粒を均一に混。
2　オリーブ褐色 (2.5Y4/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5 ～ 1cm 焼土ブロック中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量混。煙道天井部崩落土。
3　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、焼土粒少量混。
4　暗灰黄色 (2.5YR4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック・焼土粒少量混。
5　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、焼土粒少量混。
6　暗灰黄色 (2.5YR4/2) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック中量、焼土粒微量混。
7　暗灰黄色 (2.5YR4/2) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、焼土粒微量混。
8　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、炭化物多量混。
9　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性ややあり。炭・シルト中量混。

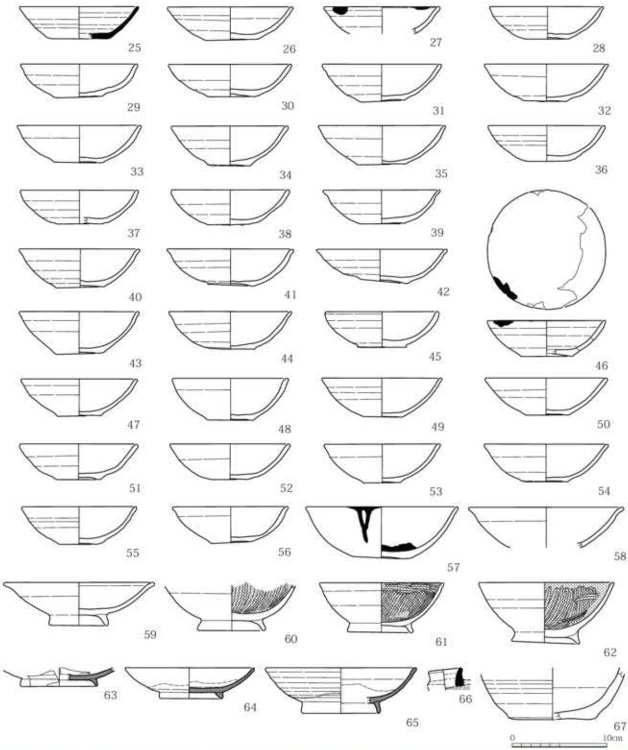
カマド（西から）

土器集中土坑（南東から）

塔鋺形合子出土状況（南から）

塔鋺形合子出土状況（南から）

第25図　SB04（2）



46　黒色付着物部分拡大

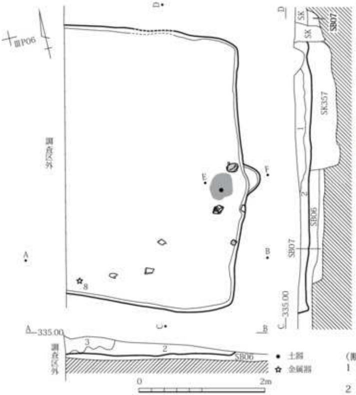
57　黒色付着物部分拡大

第 26 図　SB04（３）

灰釉陶器 276g、煮炊・貯蔵具その他が、土師器 1,420g、須恵器 58g、灰釉陶器 55g である。この他、鉄滓１点、軽石２点、焼けた粘土塊６点が出土した。**時期:**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

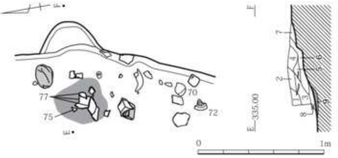
SB05

位置：２区Ⅲ P06 グリッド。**検出：**西側は、調査区外となっている。SB06 の埋土を掘り込んで構築しており、輪郭を明瞭に捉えることはできなかった。トレンチによる土層断面観察および硬化した床面範囲を検出することによって規模・形を確定した。**重複：**（旧）SB06・SK357：土層断面観察で確認。**埋土：**Ⅲ層起源の黒褐色土を主体とする。**形態:**方位 N-110° -E。長軸 4.39m。短軸 2.20m（残存値）。深さ 0.28m。

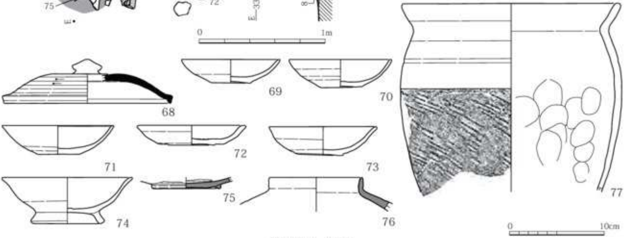


（断面 A-B・C-D）
1　黒褐色 (2.5Y3/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック中量、炭化物少量、焼土粒微量混。
2　黒褐色 (2.5Y3/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、炭化物・焼土粒微量混。
3　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性ややあり。径 0.5cm 黄灰色ブロック少量混。河川堆積土。

SB05 カマド遺物出土状況（西から）



（断面 E-F）
1　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・焼土粒少量。
2　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性あり。焼土粒大量、径 0.5cm 焼土ブロック多量、黄褐色シルト粒子微量混。
3　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性あり。焼土粒少量、黄褐色シルト粒子・炭化物・径 0.5 ～ 1cm 焼土ブロック微量混。
4　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、焼土粒微量混。
5　褐色 (7.5YR4/6)　しまりあり。粘性あり。焼土層。天井崩落土か。
6　黒褐色 (10YR3/2)　しまりあり。粘性あり。炭化物少量、黄褐色シルト粒子・径 0.5cm 黄褐色シルトブロック微量混。
7　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。



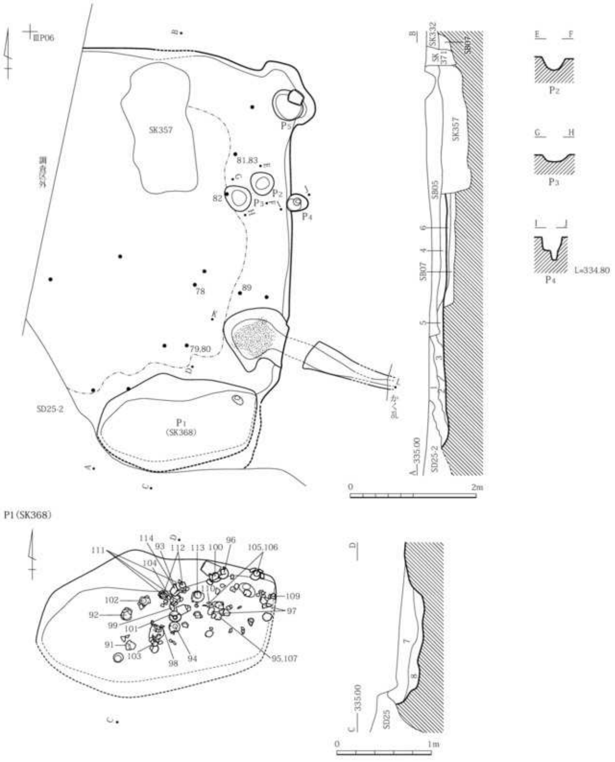
第 27 図　SB05

構造：平面形は方形。西壁は調査区外におよぶ。柱穴は確認できない。床面はSB06の埋土を硬化させており、貼床は認められなかった。**カマド：**カマドは、東壁中央に位置する。燃焼部は壁面をわずかに掘り込んで構築している。煙道部は確認できず、水平に伸びる形ではないようである。カマドは破壊されているが、火床とその両脇に袖石が残存している。**遺物出土状況：**叩き調整の土師器甕片などが、カマドから出土した。**遺物：**68は須恵器坏蓋、69～73は土師器坏、74は土師器埦、75は灰釉陶器皿、76は灰釉陶器短頸壺、77は土師器甕である。なお、71・73・74・76はSB05とSB06の重複部より出土しており、どちらの遺構に属するのか不明である。埋土内土器の総量は、食膳具が土師器1,719g、黒色土器487g、須恵器198g、灰釉陶器60g、煮炊・貯蔵具が土師器2,256g、須恵器240g、灰釉陶器20gである。金属器は３点出土し、第79図７は刀子状の鉄製品を折り曲げたもの、第79図８は鎌の刃先、図示していないが釘状の鉄製品もある。この他、軽石１点、焼けた粘土塊４点が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB06・SK368

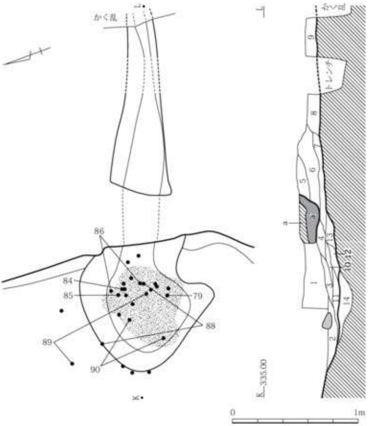
位置：２区Ⅲ P06グリッド。**検出：**西側は調査区外となっている。南東隅の土坑は当初、別遺構（SK368）として調査していたが、土坑が竪穴床面で検出できたことから本建物跡に伴うものと判断した。**重複：**(旧) SB07：床下で検出。SB09・13・SK377：遺構検出で確認。（新）SB05：土層断面観察で確認。SD25-2・SK357：遺構検出で確認。**埋土：**シルトブロックを比較的多く含み、竪穴中央南寄り付近から埋没していった状況がみられる。**形態：**主軸方位N-118°-E。長軸6.04m。短軸3.00m（残存値）。深さ0.25m。**構造：**平面形は方形。西壁は調査区外におよび、東壁はSD25-2によって切られている。床面は貼床を施している。主柱穴は確認できなかったが、北東隅角に底面に礫を伴うピットと東壁際に１基ピットが確認できた。**カマド：**カマドは東壁南寄りに位置する。燃焼部は壁面前面に、煙道部は壁面を刳り貫いて構築する。煙道は竪穴外へまっすぐ伸びる長煙道で、燃焼部底面より一段高い位置からほぼ水平に伸びる。カマドは破壊されており袖部分は残存しない。**遺物出土状況：**カマド周辺の床面に須恵器甕片が散在していた。P1に坏と埦が多量に出土した。P1の遺物はSK368と注記している。**遺物：**78～85・91～108は土師器坏、109・110は土師器埦、111～113は黒色土器埦、86は土師器盤、87は灰釉陶器長頸壺、88～90・114は須恵器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が土師器2,784g、黒色土器392g、須恵器88g、灰釉陶器30g、煮炊・貯蔵具が土師器1,110g、黒色土器180g、須恵器4,345g、灰釉陶器13gである。この他、焼けた粘土塊が２点出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB06完掘（西から）



1　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5cm 黄灰色ブロック少量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。
2　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 黄灰色ブロック中量、黄褐色シルト粒子少量混。
3　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、炭化物・焼土ブロック微量混。
4　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック多量、炭化物・焼土粒少量混。硬化面。
5　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック・炭化物中量、径 0.5cm 黄灰色ブロック少量混。
6　暗褐色 (10YR3/4)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック多量、炭少量。径 0.5cm 灰色土ブロック少量混。貼床。
7　にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5cm 黄褐色土ブロック少量、径 0.5cm 焼土ブロック微量、径 0.5cm 灰色土ブロック（地山）少量混。
8　にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、焼土粒微量、炭化物微量、径 0.5cm 灰色土ブロック（地山）中量混。

第28図　SB06（1）



1　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5cm 灰色土ブロック少量 焼土粒・炭化物微量混。
2　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、焼土粒・径 0.5cm 焼土ブロック・炭化物微量混。
3　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、焼土粒・炭化物・灰少量混。
4　黒褐色 (10YR3/2)　しまりあり。粘性あり。焼土粒・灰多量、黄褐色シルト粒子・炭化物・径 0.5cm 焼土ブロック微量混。天井崩落土を含む。
5　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 暗褐色ブロック中量混。
6　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・焼土粒中量、灰・径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量混。天井崩落土か。
7　黄灰色 (2.5Y4/1)　しまりあり。粘性あり。灰中量、黄褐色シルト粒子・炭化物少量、焼土粒微量混。
8　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、焼土粒・炭化物・灰微量混。
9　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、焼土粒・炭化物微量混。
10　黒褐色 (10YR3/1)　しまりややあり。粘性ややあり。灰多量、焼土粒少量混。
11　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰多量混。下面被熱によりやや硬化。
12　暗褐色 (10YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土粒中量、黄褐色シルト粒子・灰少量混。
13　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、焼土粒少量、炭化物微量混。
14　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。炭少量、黄褐色シルト粒子微量混。旧火床面。
a　にぶい赤褐色 (5YR4/4)　しまり強。粘性ややあり。a' に比べるとブロック化していない。天井部。
a'　赤褐色 (5YR4/8)　しまり強。粘性ややあり。焼土ブロック状。被熱した天井部。

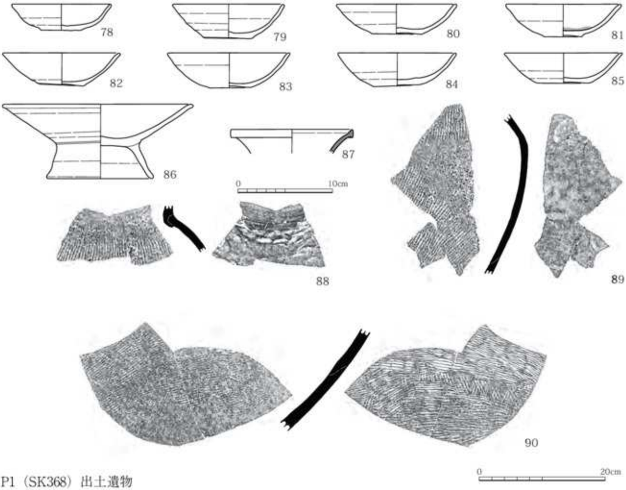
SB06 遺物出土状況（南から）

SB06 P1（SK368）遺物出土状況（南東から）

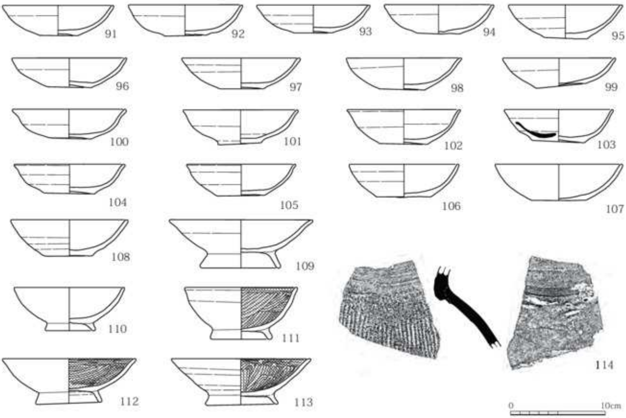
SB06 カマド完掘（西から）

SB06 カマド遺物出土状況（西から）

第 29 図　SB06（２）



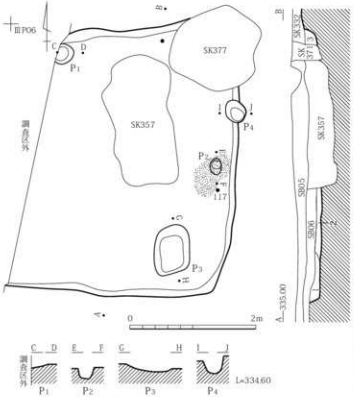
P1（SK368）出土遺物



第30図　SB06（３）

SB07

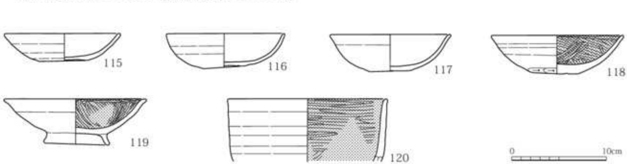
位置：２区Ⅲ P06 グリッド。**検出：**SB06 の床下で確認した。西側は調査区外となっている。当初、SB06 の掘方の可能性も考え調査を行ったが、平面方形を呈する壁と硬化した床面が確認できたことから竪穴建物跡と判断した。**重複：**（旧）SK377：遺構検出で確認。（新）SB06・SK357：遺構検出で確認。**埋土：**残存する埋土は少なく、シルトブロックを含んでいる。**形態：**主軸方位 N-91° -E。長軸 4.44m。短軸 2.95m（残存値）。深さ 0.39m。**構造：**平面形は方形。西壁は調査区外へおよぶ。**カマド：**カマド等の燃焼施設は確認できなかったが、東壁中央手前に炭化物が広がっており、カマドが存在していた可能性が考えられる。**遺物出土状況：**東壁中央手前の炭化物付近で土師器坏（117）が出土した。**遺物：**115 ～ 117 は土師器坏、118 は黒色土器坏、119 は黒色土器埦、120 は黒色土器鉢である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 735g、黒色土器 488g、須恵器 70g、灰釉陶器１g、煮炊・貯蔵具が、土師器 1,005g、須恵器 70g、灰釉陶器 13g である。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。



1　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。褐色シルト粒子中量。径0.5cm 黄褐色シルトブロック少量。径0.5～1cm 灰色土ブロック中量。炭微量。シルト質。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5cm 黄褐色シルトブロック・径 0.5 ～ 1cm 灰色土ブロック中量、炭微量混。SB06 の影響か上面やや硬化。
3　オリーブ褐色 (2.5Y4/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック多量、径 0.5cm 灰色土ブロック少量混。

SB07 完掘（南東から）

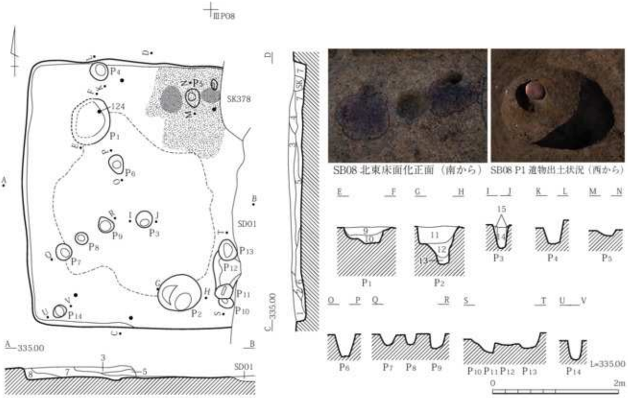
SB07 カマド残存（西から）



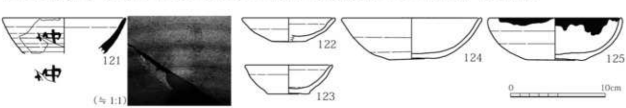
第 31 図　SB07

SB08

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を捉えた。遺構検出の時点で、東壁はSD01 によって切られていることを確認した。**重複：**（新）SD01・SK378：遺構検出で確認。**埋土：**おおむね外側から埋没しているが、炭化物・焼土を含むことが特徴的である。**形態：**主軸方位 N-92°-E。長軸4.25m。短軸 3.80m（残存値）。深さ 0.23m。**構造：**平面形は方形。東壁は SD01 によって切られているが、主柱穴の位置から竪穴は東側へ大きくは広がらないと想定できる。P2 は断面形からも主柱穴で、P1 はその位置から主柱穴の可能性がある。P3 は柱痕が確認でき、支柱であろうか。その他、11 基のピットを確認したが、柱穴配列については明らかにできなかった。床面は竪穴中央部に硬化面が認められた。**カマド：**北壁東寄り手前に炭化物の広がりがみられ、その下面からは被熱した床面が検出でき、カマドの可能性がある。**遺物出土状況：**土師器坏（124）が、P1 の埋土上層から出土した。**遺物：**121 は須恵器坏、122 ～



1　暗灰黄色土 (2.5Y4/2)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、焼土粒少量混。
2　暗灰黄色土 (2.5Y4/2)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック中量、焼土粒少量、炭化物少量混。
3　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒中量、炭化物中量、焼土粒中量混。
4　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒中量、炭化物少量、焼土粒微量混。
5　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量、焼土粒少量混。
6　暗灰黄色土 (2.5Y4/2)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒少量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量、焼土粒微量混。
7　オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒中量、炭化物微量、褐鉄鉱中量、暗褐色粒少量混。
8　暗灰黄色土 (2.5Y4/2)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒少量、炭化物微量、褐鉄鉱中量、暗褐色粒少量混。
9　オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 灰黄色土ブロック中量、黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。
10　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 灰黄色土ブロック多量、炭化物少量混。
11　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5 ～ 1cm 灰黄色土ブロック・炭化 物・径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量混。
12　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量混。
13　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
14　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物・焼土粒微量混。柱痕。
15　黄褐色 (2.5Y5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 灰色土ブロック少量、炭化物・焼土粒微量混。

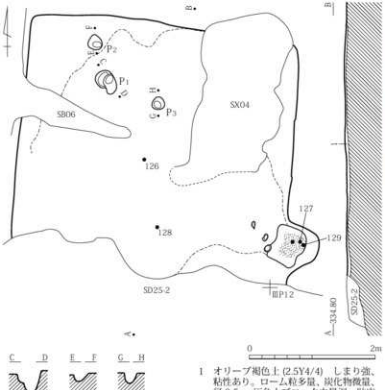


第 32 図　SB08

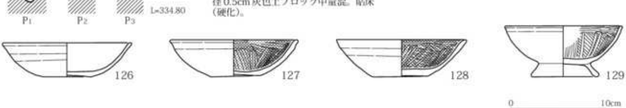
125 は土師器坏である。121 には墨書、125 口縁部には黒色付着物が認められる。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 997g、黒色土器 639g、須恵器 163g、灰釉陶器 45g、煮炊・貯蔵具が、土師器 1,586g、黒色土器 107g、須恵器 527g である。この他、釘状の棒状鉄製品１点、敲石と思われる石１点、焼けた粘土塊１点、人骨片が出土した。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB09

位置：２区Ⅲ P06・07 グリッド。**検出**：遺構検出時にすでに床面が露出していたため床面の範囲を追うことによって形・規模を確定した。**重複**：(旧) SB13：床下で検出。(新) SB06・SD25-2・SX04：遺構検出で確認。**埋土**：残存しておらず、堆積状況は分からなかった。**形態**：主軸方位 N-95° -E。長軸 4.38m。短軸 3.49m（残存値）。深さ 0.05m。**構造**：平面形は方形。南側は SD25-2 によって切られており、南壁の位置は不明である。P3 は主柱穴の可能性がある。床面は貼床を施しており、カマド前面で最も顕著に確認され、そこから離れるにつれて厚みおよび硬化具合は徐々に減少していく。**カマド**：カマドは東壁南寄りの位置で確認でき、燃焼部底面と考えられる炭、灰、焼土の広がりを検出した。その位置から燃焼部は東壁を掘り込んで構築されたと想定した。平面検出時においてもカマド構築材とみられる粘土や礫は確認できなかったことから、カマドは破壊されていると想定した。**遺物出土状況**：カマド内から土師器坏・埦が出土した。**遺物**：126 は土師器坏、127・128 は黒色土器坏、129 は土師器埦である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 401g、黒色土器 373g、須恵器 5g、灰釉陶器 5g、煮炊・貯蔵具が、土師器 426g である。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。



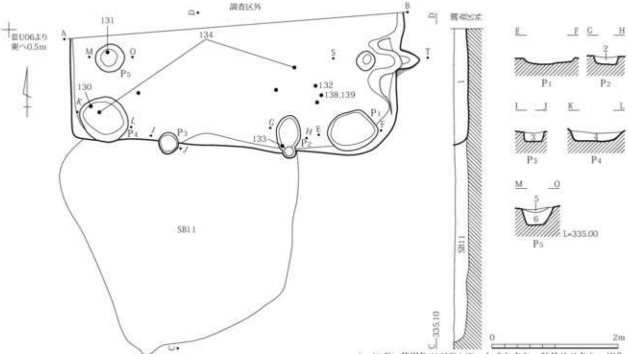
SB09 カマド遺物出土状況（西から）

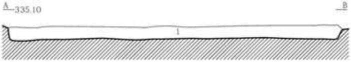


第 33 図　SB09

SB10

位置：１区Ⅲ U06 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を捉えた。北側は調査区外となっている。**重複：**(旧) SB11：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土：**単層で、炭化物を微量に含むシルト層である。**形態：**方位 N-90° -E。長軸 5.28m。短軸 1.58（残存値）。深さ 0.23m。**構造：**平面形は方形。ピットを南東・南西の両隅角および西側中央で確認したが、明確な柱穴の痕跡はなかった。硬化面は認められなかった。**カマド：**カマドは東壁で確認した。カマドは破壊されていたが袖部の一部を確認した。燃焼部はカマド前面に構築し、煙道部は壁面を掘り込んでおり斜め上方へ立ち上がる。被熱は煙道部にまで及んでいる。**遺物出土状況：**P5 の底面付近において土師器坏（131）が伏せた状態で出土した。**遺物：**130 ～ 140 は土師器坏、141 は土師器埦、142 は黒色土器埦、143 は灰釉陶器埦、144 は緑釉陶器埦、145 は土師器甕である。138 ～ 140 には黒色付着物が認められる。また、143 の口縁には輪花状の刻みが１か所みられる。なお、144･145 は SB10 と SB11 のいずれに属するか不明である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 3,236g、黒色土器 732g、須恵器 100g、灰釉陶器 119g、煮炊・貯蔵具が、土師器 1,334g、須恵器 155g である。この他、軽石２点、焼けた粘土塊１点が出土した。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。



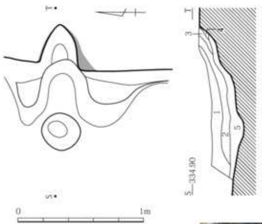


1　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物粒微量混。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物・焼土混。
3　暗褐色 (10YR3/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物混。
4　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物混。
5　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまり弱。粘性ややあり。焼土・炭化物混。
6　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。

SB10 P1 完掘（北から）

SB10 P3 完掘（南から）

第 34 図　SB10（１）

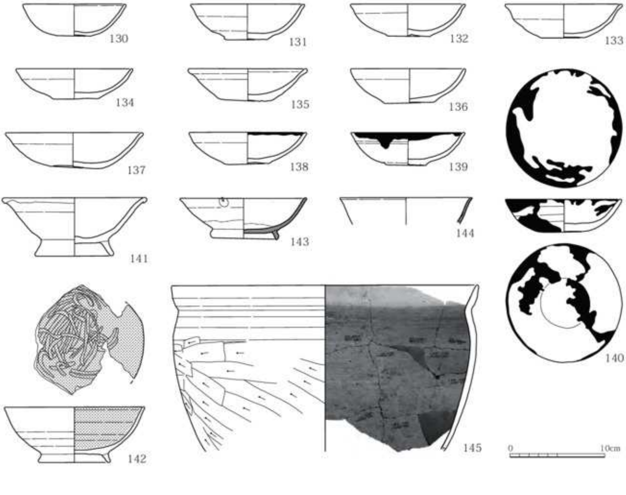


SB10 カマド（西から）

1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭・焼土粒微量混。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭・焼土粒やや多く混。
3　２層より焼土多い。
4　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭・焼土粒微量混。
5　黒色 (10YR1.7/1)　しまりなし。炭化物層。粒子細かい。

SB10 P2 遺物出土状況（南から）

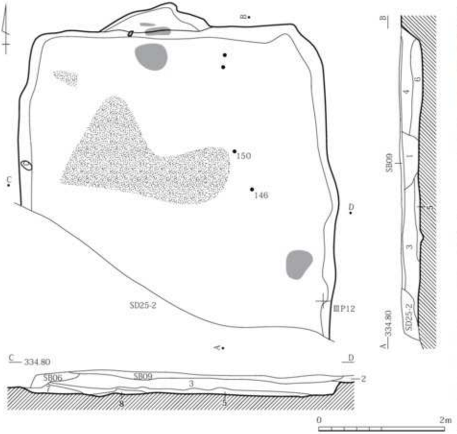
SB10 P5 遺物出土状況（南から）



第 35 図　SB10（２）

SB13

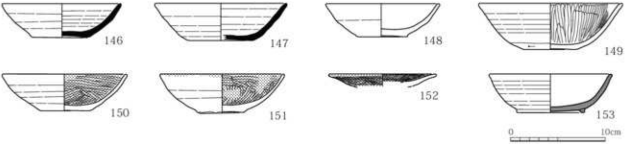
位置： ２区Ⅲ P06 グリッド。**検出：** SB09 の床面をたち割るトレンチを設定したところ SB09 の下層に本竪穴建物跡が存在することがわかった。トレンチによる土層断面観察によって規模・形を確定した後、埋土掘削に入った。**重複：**（新）SB06・SB09：土層断面観察で確認。SD25-2：遺構検出で確認。**埋土：** おおむね北西方向から南東方向に向かってシルト質土が堆積する。埋土中層では炭化物が面的に広がっていた。**形態：** 主軸方位 N-8° -E。長軸 5.03m（残存値）。短軸 4.08m（残存値）。深さ 0.32m。**構造：** 平面形は方形であるが、南側は SD25-2 によって切られている。柱穴は確認できなかった。床面は地山整形で、硬化面が認められた。柱穴は確認できなかった。**カマド：** 北壁中央と東壁南寄りの床面において焼土・炭化物の広がりを確認した。とくに北壁の方には埋土からカマド構築材と想定できる被熱した崩落土が確認できた。竪穴壁面は掘り込まれておらず、壁面前面に燃焼部を設けていたと想定できる。煙道部の掘り込



SB13 北カマド（南から）

SB13 東カマド（西から）

1　オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)　しまりあり、粘性強（ややシルト質）。炭化物微量、焼土微量、径 0.5cm 灰色土ブロック少量混。
2　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性あり。ローム粒多量、焼土粒微量、炭化物微量混。二次堆積か。
3　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性あり。ローム粒中量、径 0.5cm ロームブロック少量、径 0.5 ～ 1cm 灰色土ブロック中量、焼土粒少量混。
4　オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)　しまりあり、粘性ややあり。ローム粒中量、径 0.5cm 灰色土ブロック中量混。シルト質。
5　暗灰黄色土 (2.5Y4/2)　しまりあり、粘性ややあり。ややシルト。ローム粒中量混。一部炭集中。
6　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性ややあり。ローム粒少量、径 0.5 ～ 1cm 灰色土ブロック中量混。
7　黒褐色土 (2.5Y3/1)　しまりあり、粘性あり。炭化物多量。ロームブロック混。
8　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性ややあり。ローム粒少量、径 0.5 ～ 1cm 灰色土ブロック多量、炭化物微量混。ややシルト質。

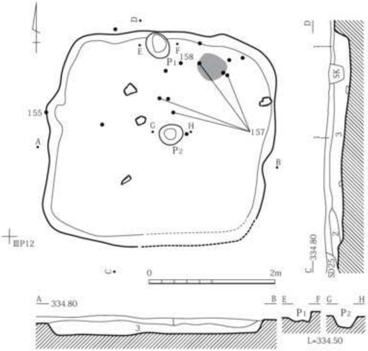


第 36 図　SB13

みは確認できなかった。**遺物出土状況：**遺物の多くが埋土中から出土したもので、床面で出土した遺物は少ない。**遺物：**146・147は須恵器坏、148・149は土師器坏、150・151は黒色土器坏、152は黒色土器皿、153は灰釉陶器埦である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器773g、黒色土器705g、須恵器705g、灰釉陶器73g、煮炊・貯蔵具が、土師器2,847g、黒色土器85g、須恵器1249gである。この他、刀子１点、軽石１点、焼けた粘土塊１点、鉄滓１点が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代前期に帰属すると判断した。

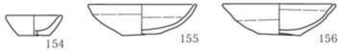
SB14

位置：２区Ⅲ P07グリッド。**検出：**埋土の輪郭は不明瞭で、トレンチによる土層断面観察によって規模・形を確定した後、埋土掘削に入っていった。なお埋土上面にはSX02（遺物集中）が位置する。埋土上層の黄褐色シルト粒を多量に含む層（１層）は、SX02の埋土の可能性もあるが明確にはできなかった。**重複：**（新）：SB01・SK369・SX02：遺構検出で確認。**埋土：**暗褐色シルト土層を主体とする。南側に流出する土層（２層）を確認したが、遺構としては捉えることはできなかった。**形態：**方位N-8°-E。長軸3.55m。短軸2.87m。深さ0.31m。**構造：**平面形は隅丸正方形。ピットは２基あり、P1の埋土には土器とともに焼



SB14 遺物出土状況（南から）

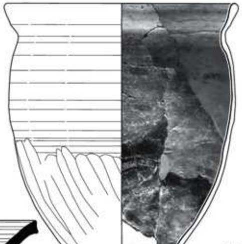
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり、粘性あり。径5mm以下白色パミス、黄褐色シルト粒多量混。Ⅳ層相当か。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり、粘性あり。灰色粘土粒、黄褐色シルト粒多量混。Ⅳ層相当か。
3　暗褐色土(10YR3/3)　しまりあり、粘性あり。黄褐色シルト粒均一混。炭化物粒少量混。



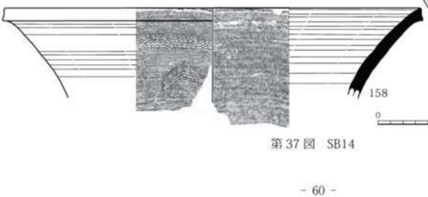
154

155

156



157



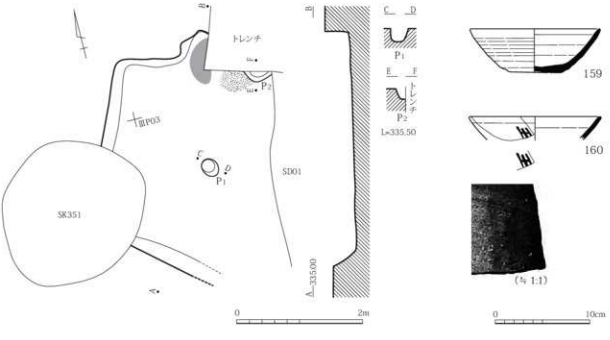
158

第37図　SB14

土粒が混入していた。P2 はほぼ中央に位置するが、明確な柱の痕跡はみられなかった。床面には顕著な硬化面は認められなかった。**カマド：**北東隅床面において焼土の広がりを確認したが、硬化した火床面は確認できなかった。しかし、西脇にある P1 からは土器とともに焼土がみられ、またカマド構築材の可能性がある礫が床面から出土しており、焼土部分をカマドと判断した。**遺物出土状況：**遺物の多くは北東隅から出土した。**遺物：**154 ～ 156 は土師器坏、157 は土師器甕、158 は須恵器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 659g、黒色土器 370g、須恵器 331g、灰釉陶器 57g、煮炊・貯蔵具が、土師器 4,954g、黒色土器 81g、須恵器 2,963g、灰釉陶器 78g である。この他、焼けた粘土塊１点、人骨片が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB15

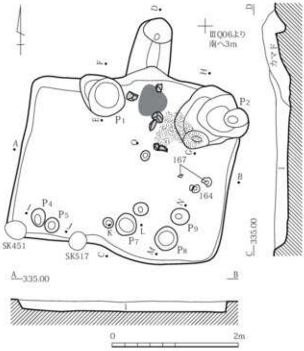
位置：２区Ⅲ K22・23、Ⅲ P02・03 グリッド。**検出：**地山よりやや暗色を呈する埋土の広がりを捉えたが、輪郭は確定することができなかった。トレンチによる土層断面観察を行ったところ、炭化物・焼土を含む埋土を確認した。再度遺構検出を行ったが、埋土の輪郭を捉えることはできず、土層断面観察を繰り返すことによって規模・形を確定した。**重複：**（新）SD01：遺構検出、土層断面観察で確認。SK351：遺構検出で確認。**埋土：**基本土層Ｖ層に近い色調を呈している。**形態：**主軸方位 N-22° -E。長軸 3.10m。短軸 2.35m（残存値）。深さ 0.38m。**構造：**平面形は方形を呈するが、東壁は SD01 によって切られている。また、北東側はトレンチによって欠損している。ピットは２基あり、いずれも柱痕は確認できなかった。P2 は貯蔵穴の可能性があるが、浅く、遺物は出土していない。床面は地山成形で、硬化面は認められなかった。**カマド：**北壁中央に位置する。燃焼部は壁面を掘り込んで構築しており、底面には火床が残存する。煙道は確認できなかった。カマドは破壊されており、袖部等は残存していない。カマドから掻き出されたと考えられる炭化物が P2 周辺に広がっている。**遺物出土状況：**遺物の多くはカマド内から出土した。**遺物：**159・160 は須恵器坏で、160 には墨書「王」が認められる。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 140g、黒色土器 39g、須恵器 148g、灰釉陶器 15g、煮炊・貯蔵具が、土師器 951g である。この他、ヒトの頭蓋骨片が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代前期に帰属すると判断した。

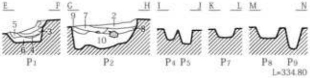


第 38 図　SB15

SB17

位置：２区Ⅲ P10、Ⅲ Q06 グリッド。**検出**：方形を呈する埋土の輪郭を捉えた。重複する SB28 埋土よりも暗色で明瞭に輪郭を確認することができた。**重複**：(旧) SB28：遺構検出・土層断面観察で確認。(新)：SK451・SK517：遺構検出で確認。**埋土**：単層で基本土層Ⅲ層と類似する黒褐色土を主体とする。**形態**：主軸方位 N-9°-E。長軸 3.33m。短軸 2.91m。深さ 0.21m。**構造**：平面形はやや横長の方形。カマド西脇（P1）、北東隅（P2）に掘り込みを有するが、いずれも竪穴壁面を壊しており、建物廃棄時以降に掘削された可能性がある。その他ピットは南壁付近で多く確認した。**カマド**：北壁中央に位置する。燃焼部は壁面前面に、煙道部は壁面を掘り込んで構築する。煙道は竪穴外へまっすぐ伸び、煙道口から煙出口に向かって斜めに上昇する。カマドは破壊されていたが、構築材とみられる礫が周囲に散在している。**遺物出土状況**：土器の多くは、カマドから P2 にかけて出土した。黒色土器坏（164）と灰釉陶器（167）は床面からやや浮いた位置で出土した。**遺物**：161・165 は土師器坏、162 ～ 164 は黒色土器坏、166・167 は灰釉陶器埦、168 は土師器甕、169 は須恵器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 919g、黒色土器 919g、須恵器 44g、灰釉陶器 375g、煮炊・貯蔵具が、土師器 1,695g、須恵器 710g である。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。



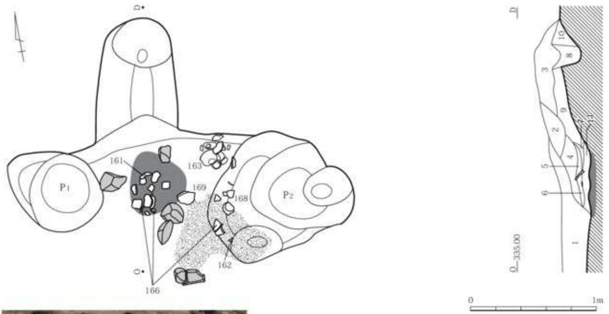


1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。黄褐色シルト粒多量混。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
3　黄褐色 (10YR5/6)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。床由来か
4　黒色 (7.5YR2/1)　しまりなし。粘性あり。炭化物層。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
7　黄褐色 (10YR5/6)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。床由来か。
8　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。 黄褐色シルトブロック少量混。
9　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰多量混。
10　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。

SB17 完掘（南から）

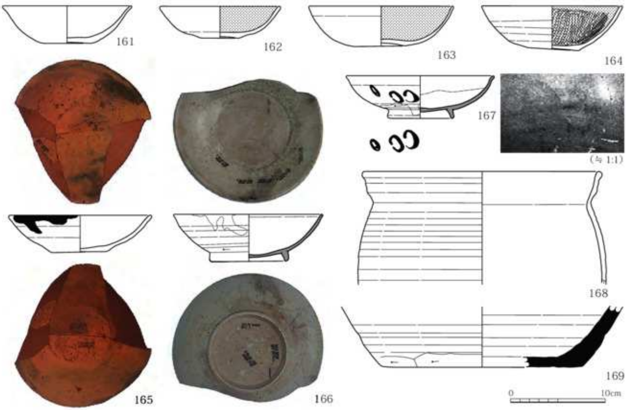
SB17 P2 断面（東から）

第 39 図　SB17（1）



SB17 カマド完掘（南から）

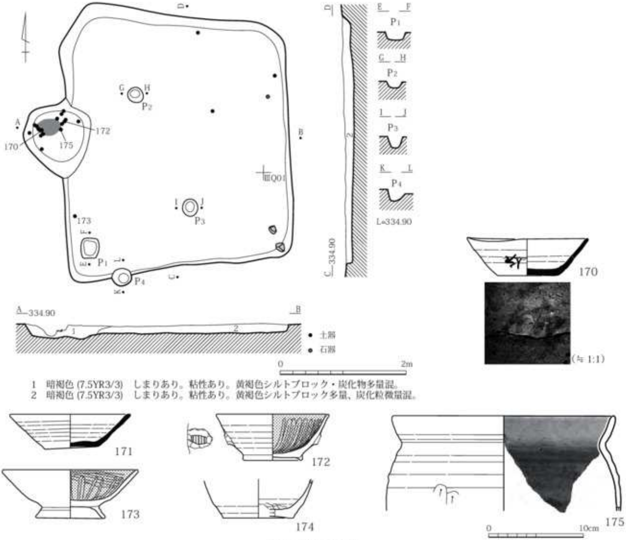
1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。黄褐色シルト粒多量混。炭化粒微量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土粒多量、黄褐色シルトブロック少量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。焼土粒少量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化粒微量混。
5　橙色 (7.5YR6/8)　しまり強。粘性あり。焼土多量混。
6　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰多量、焼土粒少量混。
7　褐灰色 (7.5YR4/1)　しまりややあり。粘性あり。灰層。
8　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
9　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。地山黄褐色土主体。焼土・灰微粒混。
10　注記なし。
11　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰多量混。



第 40 図　SB17（2）

SB22・SK411

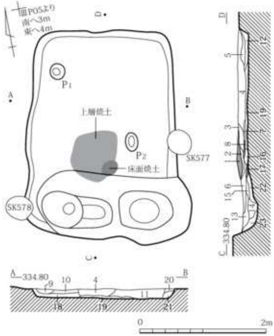
位置：２区Ⅲ K25、Ⅲ L21、Ⅲ P05、Ⅲ Q01 グリッド。**検出**：西側の円形プランを検出し、SK411 として先行調査したが､本住居のカマドと判断した。方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができた。南東隅角部分では焼土を伴う SF18 が壁面上半を切っており、一部東壁に沿うような平面形をなしているが、本建物跡との関係については明らかにはできなかった。**重複**：(新)：SF18：遺構検出で確認。**埋土**：単層で基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多く含む。**形態**：主軸方位 N-86°-W。長軸 3.95m。短軸 3.60m。深さ 0.15m。**構造**：平面形は、南北方向に長軸を持つ方形。床面は硬化しておらず不明瞭で、土層断面観察によって地山層との境を床面とした。ピットは４基あり、P1 は平面方形。**カマド**：西壁中央部において底面に火床を持つ掘り込みが確認でき、カマド燃焼部と判断した。燃焼部は竪穴壁面を掘り込んで構築している。煙道部は確認できなかった。埋土には炭化物を多量に含む。**遺物出土状況**：土器の多くは、カマド内から出土した。**遺物**：170・171 は須恵器坏、172 は黒色土器双耳坏、173 は黒色土器埦、174・175 は土師器甕である。170 には墨書が確認されるが、判読できない。172 の双耳坏 は把手が欠損しており、内面の黒色処理が明確ではなく黒色部分が部分的にみられ、全体ににぶい黄橙色であるが、カマド内から出土し二次焼成の可能性があること、ミガキ調整があることから、黒色土器と判断した。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 228g、黒色土器 200g、須恵器 390g、煮炊・貯蔵具が、土師器 2,175g、黒色土器 5g、須恵器 784g である。**時期**：出土した遺物から平安時代前期から中期前半に帰属すると判断した。



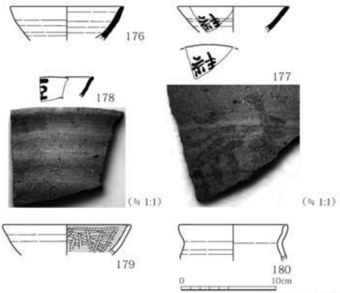
第 41 図　SB22

SB23・SF20

位置：２区Ⅲ P05 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができ、とくに南東隅には多量の炭化物が広がっていた。**重複：**（新）SF17・SK577・SK578：遺構検出で確認。**埋土：**南側には炭化物・焼土を多く含む。南側中央の上層で火床（上層焼土）があり、燃焼の痕跡を確認した。**形態：**方位 N-12°-E。長軸 3.31m。短軸 2.20m。深さ 0.15m。**構造：**平面形は、南北方向に長軸を持つ長方形。床面は地山成形であり、顕著な硬化面はみられない。また南側は窪んでおり、14 層にみられるような埋土の掘り返しが行われた可能性がある。この部分を当初 SF20 として調査していたが、SB23 の施設と判断した。**カマド：**南東隅角から大形の板状礫が出土した。**遺物出土状況：**土器の多くは南東隅の板状礫付近から出土した。**遺物：**176 ～ 178 は須恵器坏、179 は黒色土器坏、180 は土師器甕で、いずれも小破片である。177・178 には墨書が認められるが、判読できない。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 90g、黒色土器 158g、須恵器 111g、煮炊・貯蔵具が、土師器 1,055g、須恵器 7g である。この他、焼けた粘土塊２点が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代前期から中期に帰属すると判断した。



1　焼土
2　暗赤褐色 (5YR3/2)　焼土下被熱痕。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・炭化物少量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量、黄褐色シルト粒子少量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
6　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。
7　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。焼土、炭化物多量混。
8　焼土
9　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。やや砂質。
10　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
11　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物少量混。
12　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。
13　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
14　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまり強。粘性あり。焼土多量、炭化物少量混。
15　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量、炭化物微粒混。
16　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量、炭化物微量混。
17　焼土　しまりあり。粘性あり。焼土主体とし、炭化物少量混。
18　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
19　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまり強。粘性強。灰色シルトブロック多量、炭化物微量混。
20　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
21　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。18 層より明色。
22　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。
23　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。



SB23 焼土検出状況（北から）

SB23 南北断面（東から）

第 42 図　SB23・SF20

SB24

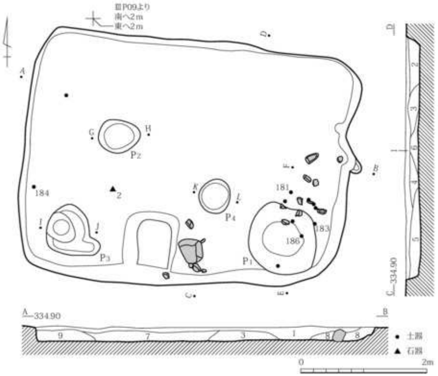
位置：２区Ⅲ P09 グリッド。**検出**：方形の埋土を確認したが、北壁と西壁は他の遺構の埋土を掘り込んでいるため輪郭が不明瞭でトレンチによる土層断面観察によって規模・形を確定した。**重複**：（旧）SB31・SB34：遺構検出で確認。SB33：床下で検出。（新）SK383・SK386・SM33・SM58・SM59：遺構検出で確認。**埋土**：基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多く含む。埋土中には炭化物を主体とする土層（３層）がある。**形態**：主軸方位 N-6° -E。長軸 5.17m。短軸 3.72m。深さ 0.23m。**構造**：平面形は、東西方向に長軸を持つ長方形。床面は地山成形で、わずかに硬化している。南壁際中央は一段高くなっており出入り口施設の可能性がある。ピットは４基確認した。**カマド**：東壁中央北寄りに煙道部の掘り込みが確認できた。周囲にはカマド構築材とみられる礫が散在している。**遺物出土状況**：土器の多くはカマド周辺からP1 の埋土にかけて出土した。南西部床面から石製の丸鞆が出土した。**遺物**：第 78 図２は石製の丸鞆で、長さ 2.2cm、幅 3.2cm、厚さ 0.65cm である。２つの穴には金属の鋲が残っており、鋲に錆はみられない。石材鑑定はしていないが、光沢がある緻密な石材で、透緑閃石岩と思われる。181 ～ 184 は土師器坏、185 ～ 187 は黒色土器埦、188 は須恵器甕、189 は須恵質の土錘である。185 の内面は橙色部分が多いが、ミガキ調整であり、カマド内から出土し二次焼成の可能性があることから、黒色土器と判断した。この他、SB30 出土の緑釉陶器埦と同一個体の可能性がある胴部破片が１点出土した。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 2,920g、黒色土器 1,163g、須恵器 32g、灰釉陶器 28g、緑釉陶器 3g、煮炊・貯蔵具が、土師器 2,192g、須恵器 435g、灰釉陶器 29g である。この他、焼けた粘土塊１点、ヒトの上顎歯・下顎歯が出土した。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

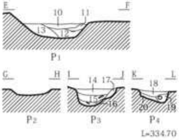
SB27

位置：２区Ⅲ P04・05・09・10 グリッド。**検出**：方形を呈する埋土の広がりを捉えたが、SB31 の埋土を掘り込んでいるため輪郭は確定できず、トレンチによる土層断面観察によって規模・形を確定した。**重複**：（旧）SB31：遺構検出・土層断面で確認。（新）SK589・SK590：遺構検出で確認。**埋土**：単層。基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルト粒を多量に含む。**形態**：主軸方位 N-0°。長軸 2.69m。短軸 2.69m。深さ 0.20m。**構造**：平面形は正方形。床面は下層遺構埋土を平坦に成形し、わずかに硬化している。ピットは確認できなかった。**カマド**：北壁中央西寄りに位置する。燃焼部は壁面前面に構築され、煙道部は壁面をわずかに掘り込んでいる。カマドは破壊されており、袖部も残存しておらず、火床のみを確認した。**遺物出土状況**：土器はおもにカマド周辺から出土した。**遺物**：190 は須恵器坏、191・192 は土師器甕、193 は須恵器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 527g、黒色土器 365g、須恵器 135g、灰釉陶器 3g、煮炊・貯蔵具が、土師器 2,309g、須恵器 1,484g、灰釉陶器 30g である。この他、鉄滓１点が出土した。**時期**：出土した遺物から平安時代前期に帰属すると判断した。

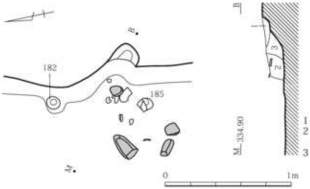
SB28

位置：２区Ⅲ P10、Ⅲ Q06 グリッド。**検出**：重複する SB17 の輪郭は明瞭に捉えられたが、本建物跡は不明瞭で複数回にわたる検出によって規模・形を確定した。**重複**：（新）SB17：遺構検出・土層断面で確認。SB30 との重複関係は確定できなかった。**埋土**：単層。基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルト粒を多量に含む。**形態**：主軸方位 N-115° -E。長軸 3.02m（残存値）。短軸 2.75m。深さ 0.20m。**構造**：平面形は隅丸正方形。床面は地山成形で、硬化面は確認できない。カマドに接するピットを１基確認した。**カマド**：東壁中央北寄りに位置する。燃焼部は壁面前面に構築される。カマドは破壊されており、袖部と火床が残存する。**遺物出土状況**：カマド周辺から少量の土器が出土した。**遺物**：194・195 は黒色土器坏である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 102g、黒色土器 68g、灰釉陶器 6g、煮炊・貯蔵具が、土師器 292g、須恵器 71g である。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

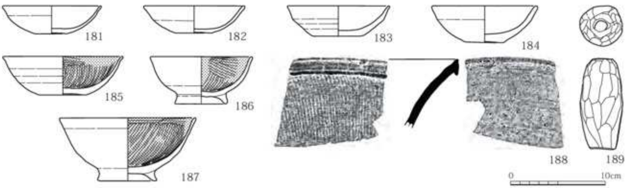




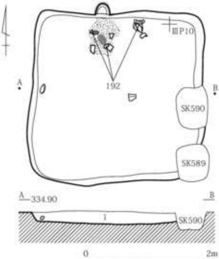
1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・黄褐色シルト粒子多量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
6　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。
8　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量、焼土粒微量混。
9　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック微量、炭化物微量混。
10　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
11　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・焼土微量混。
12　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量、焼土微量混。
13　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。やや明色。
14　黒褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、焼土微量混。
15　黒褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
16　黒褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性強。
17　黒褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック微量混。
18　褐灰色 (7.5YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
19　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりややあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
20　褐灰色 (7.5YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。1層より暗色。



1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。焼土粒微量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭少量、焼土粒微量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭多量混。

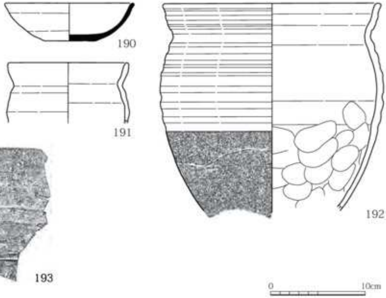


第43図　SB24

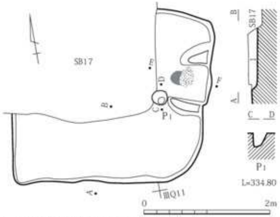


1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。
　黄褐色シルト粒子多量混。

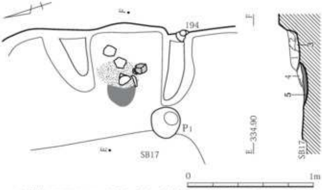
SB27 カマド完掘（南から）



第 44 図　SB27



1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子
　多量混。SB28 埋土。

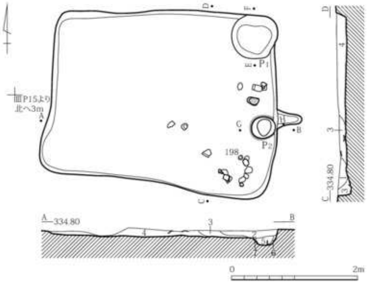


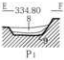
1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、
　炭化物少量混。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量、黄褐色シルト
　粒子少量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、
　炭化物微量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量混。
5　暗赤褐色 (5YR3/6)　しまりあり。粘性あり。焼土多量、炭化物少量混。

第 45 図　SB28

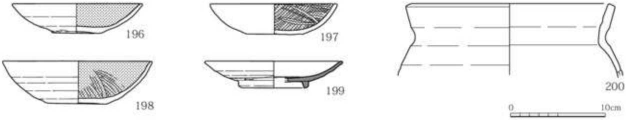
SB29

位置：２区Ⅲ P10 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができた。**重複：**(旧) SB31：遺構検出で確認。**埋土：**暗褐色土を主体とする。埋土堆積途中には南東部一帯に炭化物を多く含む土層（３層）が堆積する。**形態：**主軸方位 N-81°-E。長軸 3.57m。短軸 2.92m。深さ 0.09m。**構造：**平面形は、東西方向に長軸を持つ長方形。床面は地山を平坦に成形しているが、硬化面は確認できなかった。ピットは２基あるが、柱穴は確認できなかった。**カマド：**東壁中央南寄りに位置する。燃焼部は壁面前面に構築され、煙道部は壁面をわずかに掘り込んでいる。カマドは破壊されており、袖部も残存していない。火床部分にはピットが掘り込まれている。**遺物出土状況：**遺物はおもに東側床面から出土した。**遺物：**196 ～ 198 は黒色土器坏、199 は灰釉陶器皿、200 は土師器甕である。196・197 は摩耗しており、黒色処理が不明瞭である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 439g、黒色土器 784g、須恵器 32g、灰釉陶器 57g、煮炊・貯蔵具が、土師器 2,934g、須恵器 829g である。この他、鉄滓２点が出土した。**時期：**出土した遺物から 平安時代中期に帰属すると判断した。





1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、炭少量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、灰色シルトブロック・炭少量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭多量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。白色粒子少量、炭微量混。
5　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。
7　暗赤褐色 (5YR3/2)　しまりあり。粘性あり。被熱痕。
8　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
9　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。



SB29 完掘（西から）

SB29 カマド遺物出土状況（西から）

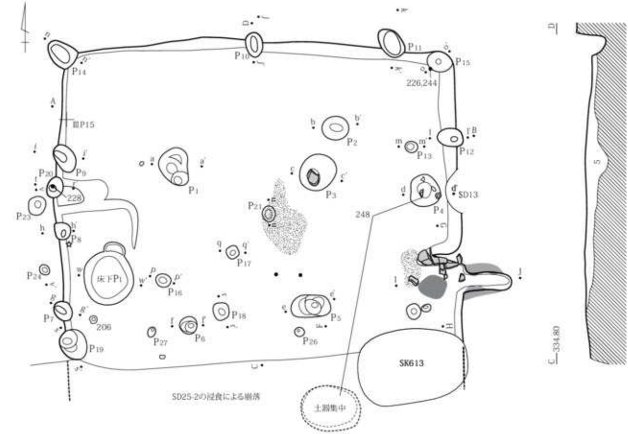
第 46 図　SB29

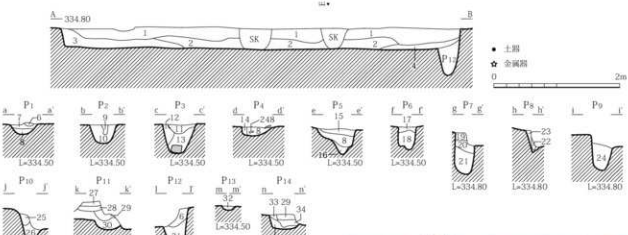
SB30

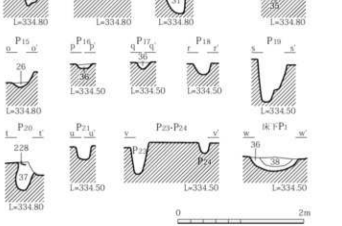
位置：２区Ⅲ P09・10・14・15 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を捉えることができた。南側は SD25-2 によって切られていることが遺構検出時に明確であった。SD25-2 側にある土器集中は、当初 SD01 土器集中[2]として調査したが、調査過程で SD25-2 内に崩落した SB30 埋土内に残されたもので、SB30 に帰属する遺物と認識した。**重複：**（新）SB16・SD13・SK444-1・SK613：遺構検出で確認。SD25-2：遺構検出・土層断面で確認。**埋土：**基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多く含む。中央部にある炭化物は、床面から埋土下層にかけて広がる。**形態：**主軸方位 N-87° -E。長軸 6.34m。短軸 5.16m（残存値）。深さ 0.33m。**構造：**平面形は方形。床面は地山成形で、カマド前面に顕著な硬化面が広がる。西壁際中央に一段高くなる所があり、出入り口施設の可能性がある。ピットは 27 基あり、P1・P3・P5・P6 が主柱穴にあたる。P3 の底面には礎盤石が置かれている。一部欠損する円礫で、上・下面は平坦であり、被熱している。壁には壁柱穴が巡る。柱穴の半分は壁面を掘り込んでおり、断面形から想定される柱はほぼ直立する。**カマド：**東壁に位置する。燃焼部は壁面前面に構築され、煙道部は燃焼部から斜め上方へ立ち上がる。カマドは破壊されているが、左袖部が残存し扁平な礫を構築材としている。火床から煙道部に至るまで強く被熱している。**遺物出土状況：**土器集中を南東側で確認した。中世の河川（SD25-2）が浸食したことによって、土器集中を含む南東側は約 50cm 下に崩落している。土器集中には土師器坏・埦、黒色土器坏・灰釉陶器皿など（204・205・208 ～ 225・227・229・230・233 ～ 235・237・239・240・242・243・248）がまとまって出土した。土器集中と P4 から出土した緑釉陶器が接合した（248）。**遺物：**201 ～ 233 は土師器坏、234 ～ 236 は黒色土器坏、237・238 は土師器埦、239・240 は黒色土器埦、241 は黒色土器鉢または盤、242・243 は灰釉陶器皿、244 ～ 247 は灰釉陶器埦、248 は緑釉陶器埦である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 7,021g、黒色土器 2,309g、須恵器 430g、灰釉陶器 591g、緑釉陶器 85g、煮炊・貯蔵具が、土師器 5,070g、黒色土器 75g、須恵器 3,581g、灰釉陶器 13g である。この他、焼けた粘土塊４点、鉄滓３点が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB30 土器集中（北西から）

2　調査当初、SD25 は L 字状に曲がる SD01 の一部と認識して記録を残したが、SD25 は SD01 とは別個の溝と判明し、調査の途中から SD25 の遺構名を付した。そのため、土器集中の遺物注記、写真・図面等の記録類では「SD01 土器集中」とした。





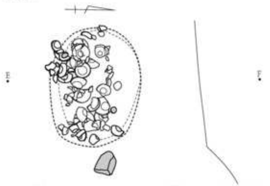


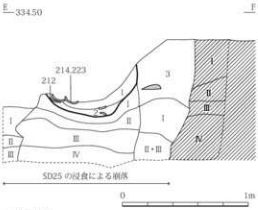
SB30 完掘（南東から）

第47図　SB30（1）

1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒多量混。
2　暗褐色 (7.5YR2/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒少量、炭化物微量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
6　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
7　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒微量混。
8　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
9　褐灰色 (7.5YR6/1)　しまり弱。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
10　褐灰色 (7.5YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。
11　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量、黄褐色シルト粒微量混。
12　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物少量混。
13　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
14　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子混。
15　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。褐色粘土多量、炭化物微量混。
16　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。褐色シルトブロック大量混。
17　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
18　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。褐色シルトブロック多量混。
19　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
20　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。
21　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。
22　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりなし。粘性あり。灰色シルトブロック主体とする。
23　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭微量混。
24　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、灰色シルトブロック微量混。
25　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
26　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
27　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
28　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。
29　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量混。
30　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
31　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。砂質。
32　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック大量混。
33　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
34　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
35　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量、黄褐色シルトブロック少量混。
36　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
37　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
38　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量混。

土器集中



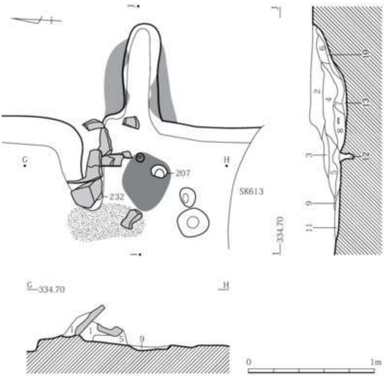


1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物少量混。土器集中埋土。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量混。土器集中埋土。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物少量混。SB30 埋土。
(地山)
Ⅰ　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。
Ⅱ　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量、炭化物微量混。やや砂質。
Ⅲ　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。Ⅱ層より砂質やや少。
Ⅳ　黄灰色 (2.5Y6/1)　しまり強。粘性強。シルト層。

土器集中（西から）

土器集中断面（西から）

第 48 図　SB30（２）



1　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック主体。
2　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。焼土ブロック多量、炭化物微量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土粒少量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土ブロック多量、黄褐色シルトブロック微量、灰を均一に混じる。
5　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性あり。灰多量、焼土粒少量混。
6　にぶい橙色 (7.5YR7/4)　しまりあり。粘性あり。焼土粒大量混。
7　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量､焼土微量混。
8　にぶい黄褐色（10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。還元焔気味の焼土多量混。
9　暗赤褐色 (5YR3/6)　しまりあり。粘性あり。還元焔気味の焼土混。
10　暗赤褐色 (5YR3/6)　しまりあり。粘性あり。還元焔気味の焼土混。
11　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。
12　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。支脚石抜き取り痕。
13　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・焼土多量、炭化物少量混。

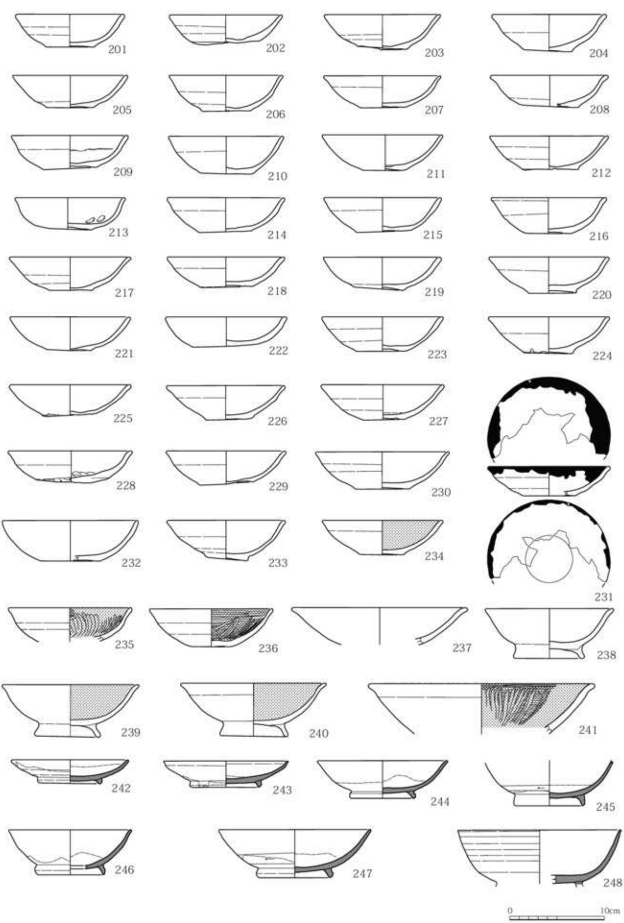
SB30 カマド断面 I-J（西から）

SB30 カマド断面 G-F（西から）

SB30 カマド完掘（南から）

SB30 カマド掘方完掘（西から）

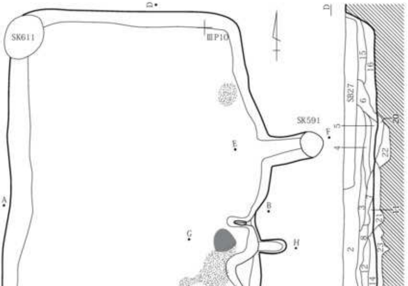
第 49 図　SB30（３）


201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
0
10cm

第 50 図　SB30（４）

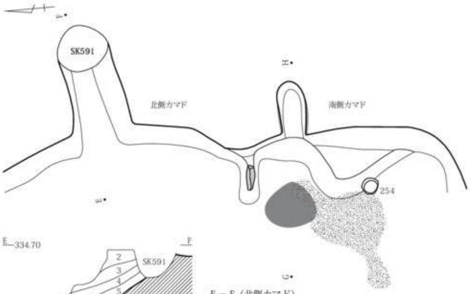
SB31

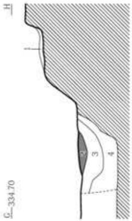
位置：２区Ⅲ P04・05・09・10 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の広がりを捉えた。南縁以外では、埋土の輪郭は、明瞭であった。南壁は、隣接する遺構埋土によって不明瞭で、土層断面観察によって確定した。**重複：**重複する竪穴建物跡のなかで最も古い。（新）SB24・SB27・SB29・SK611：遺構検出で確認。（不明）SB26・32。**埋土：**Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多く含む。床面上には砂質土を確認した。南側の埋土中（８・９・12・16 層）と床面と炭化物の広がりが２面あった。草本植物で柱材のような幹材はなかった。**形態：**主軸方位 N-82° -E（北カマド）、N-95° -E（南カマド）。長軸 5.13m。短軸 4.10m。深さ 0.55m。**構造：**平面形は、南北に長軸を持つ長方形。床面は地山を平坦に成形している。南側カマド前面がとくに硬化している。柱穴は確認できなかった。**カマド：**東壁に２基設置している。北側カマドは燃焼部を壁面前面に構築する。煙道部は燃焼部から斜め上方へ立ち上がる。カマドは破壊されており、Ⅴ層起源の黄褐色シルトで埋め戻されている。南側カマドは燃焼部を壁面前面に構築する。煙道部は燃焼部上位から水平にのびる。カマドは破壊されているが、左袖および火床が残存する。残存状況から北側カマドが破棄された後に南側カマドが構築されたと判断した。**遺物出土状況：**土器の多くは南側カマド周辺から出土した。**遺物：**249 ～ 253 は須恵器坏、254 は須恵器坏 B 、255 は黒色土器埦、256・257 は土師器甕である。252 は判読できない墨書が、254 の底部には朱墨痕が認められる。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 228g、黒色土器 870g、須恵器 967g、煮炊・貯蔵具が、土師器 5,416g、須恵器 125g である。**時期：**出土した遺物から平安時代前期に帰属すると判断した。

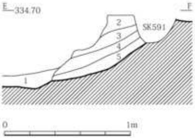


1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。シルト質。土坑埋土。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子大量、炭化物微量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。５層より明色。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量、炭化物微量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物多量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物多量混。やや砂質。
8　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物大量、黄褐色土粒子少量混。
9　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。やや砂質。
10　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルト多量、炭化物微量混。やや砂質。
11　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物多量混。やや砂質。
12　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量、炭化物多量混。
13　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量、炭化物微量混。
14　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量、炭化物微量混。砂質。
15　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりややあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。
16　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。下面は砂質。
17　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。
18　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルト多量混。やや砂質。
19　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。やや砂質。
20　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量、炭化物少量混。
21　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。
22　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量、炭化物微量混。
23　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック大量混。

第 51 図　SB31（１）



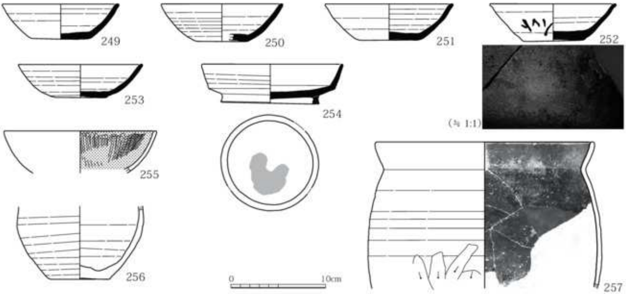




E－F（北側カマド）
1　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト主体。灰色シルトブロック・炭化物微量混。
2　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。炭化物微量混。天井崩落土。
3　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。焼土少量混。上面は焼土層。
4　赤褐色 (5YR4/8)　しまりあり。粘性あり。煙道被熱部分の崩落。
5　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。焼土・炭化物微量混。
G－H（南側カマド）
1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
2　火床。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量、焼土微量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。

SB31 カマド（西から）

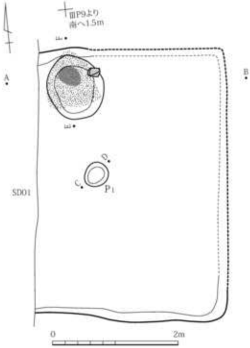
SB31 炭検出状況（西から）

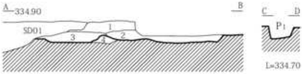


第 52 図　SB31（２）

SB33

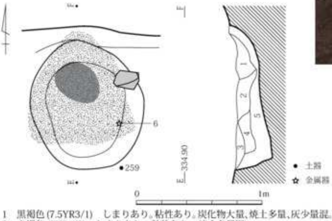
位置：２区Ⅲ P08・09 グリッド。**検出：**残存する埋土が浅いため輪郭は不明瞭で、土層断面観察と掘削によって埋土の広がりを捉え規模・形を確定した。**重複：**（旧）SB34・SB35：遺構検出・土層断面で確認。（新）SB24・SD01：遺構検出で確認。**埋土：**基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多く含む。**形態：**主軸方位 N-0°。長軸 4.21m。短軸 3.39m（残存値）。深さ 0.13m。**構造：**平面形は方形。床面は地山を平坦に成形し、わずかに硬化している。ピットを１基確認したが、柱痕はない。**カマド：**北壁に位置する。煙道は確認できなかった。カマドの袖は破壊されているが、火床が確認でき、その周囲には炭化物が広がっていた。**遺物出土状況：**土器は少量である。カマドの床面から刀子と高坏脚部が出土した。**遺物：**第 79 図４は鉄鏃、第 79 図６は刀子である。第 53 図 258 は黒色土器埦、259 は古墳時代の高坏脚部である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 162g、黒色土器 190g、須恵器 7g、煮炊・貯蔵具が、土師器 193g、須恵器 210g である。この他、軽石 23 点が出土した。**時期：**出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。



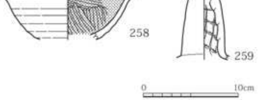


1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、灰色シルトブロック少量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土・炭化物少量混。
3　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。焼土多量、黄褐色シルト粒子少量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。

SB33 カマド完掘（南から）



1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物大量、焼土多量、灰少量混。
2　赤褐色 (5YR4/8)　しまりあり。粘性あり。焼土多量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性強。炭化物・黄褐色シルトブロック多量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。炭化物少量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。炭化物微量混。



第 53 図　SB33

SB34

位置：２区Ⅲ P08・09 グリッド。**検出**：SB24・SB33 の床下で埋土を確認した。輪郭は不明瞭で土層断面観察および床面の広がりで規模・形を確定した。**重複**：(旧) SB26・SB32・SB35：土層断面観察で確認。(新) SB24・SB33：遺構検出で確認。**埋土**：基本土層Ⅳ層起源の灰色シルトを多く含む。**形態**：主軸方位 N-0°。長軸 4.09m。短軸 3.97m（残存値）。深さ 0.48m。**構造**：平面形は方形。掘方を有し、床面には硬化面がみられる。ピットは６基確認したが、柱痕はみられなかった。**カマド**：北壁に位置する。燃焼部は壁面前面に設置される。カマドは破壊されており、袖石の抜き取り痕を確認した。火床が残存する。**遺物出土状況**：土器はおもにカマド周辺から出土した。カマド内には土師器鉢と甕が出土した。**遺物**：260 ～ 262 は須恵器坏、263 は土師器坏、264 は黒色土器皿、265 はミニチュア土器[3]、266・267 は土師器鉢、268 は土師器甕である。260 には墨書「土」が認められる。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 568g、黒色土器 797g、須恵器 521g、灰釉陶器 16g、煮炊・貯蔵具が、土師器 5,079g、須恵器 230g である。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

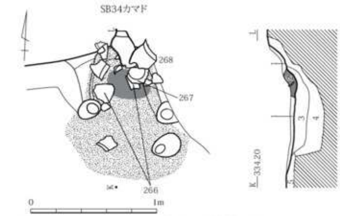
SB35

位置：２区Ⅲ P08・09 グリッド。**検出**：輪郭は不明瞭であった。SB34 の西壁をたち割ってトレンチを設定したところ遺構埋土を確認し、SB35 とした。北壁・南壁は SB34 の延長上にある。また SB34 東壁で確認できたカマドは、燃焼部は完全に破壊され、火床にあたる部分は SB34 の床面が構築されており、かつ煙道部は埋められていることから SB35 のものである可能性が高い。**重複**：(新) SB33：遺構検出で確認。SB34：土層断面観察で確認。**埋土**：基本土層Ｖ層起源の黄褐色シルトを非常に多く含んでいる。**形態**：主軸方位 N-2° -E。長軸 2.39m。短軸 0.34m（残存値）。深さ 0.49m（残存値）。**構造**：大部分を SB34 が壊しているが、想定される平面形は方形。掘方を有し、平坦な床面が残存する所もあるが、おおむね壊されている。**カマド**：東壁に位置する。燃焼部は SB34 によって一掃されている。煙道部が SB34 壁面中位に開いており、壁面を刳り貫いて構築したことが分かる。**遺物**：出土遺物なし。**時期**：切合い関係から平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

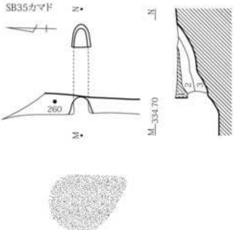
SB34 完掘（南から）

SB34・35 掘方完掘（南から）

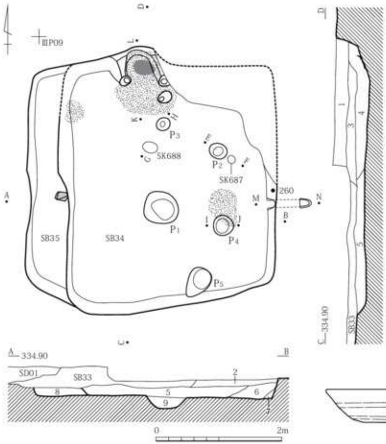
3　脱稿後、ミニチュア土器（第 54 図 265）は SB32 で出土したことが判明した。図版番号の変更ができないため、遺物図版の修正はせず、遺物観察表および写真図版のみを修正した。

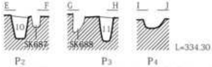


1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物大量混。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物大量、焼土多量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土ブロック少量､炭化物微量混。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土・炭化物微量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまり強。粘性あり。貼床。



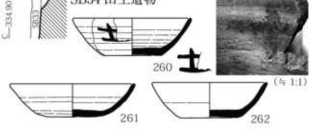
1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。被熱天井部。
2　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト、焼土ブロック混。
3　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト主体。焼土ブロック少量混。

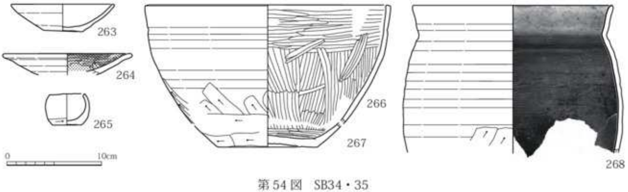




1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。
2　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
3　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。シルト質。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、焼土微量混。
7　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量、焼土少量混。
8　黄褐色 (10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
9　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック主体。P1 埋土。
10　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性強。シルト質。
11　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性強。シルト質。

SB34 出土遺物





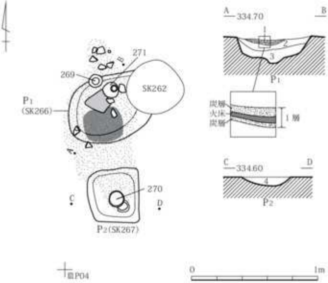
第 54 図　SB34・35

SX01

位置：２区Ⅲ K24 グリッド。**検出**：焼土、炭化物の広がりを遺構の輪郭として捉えた。竪穴が想定される掘り込みは確認できなかった。**重複**：（新）SD01・SK262：遺構検出で確認。**埋土**：草本系植物の炭化物が全面に広がる。その下層に焼土が広がり、中央部は火床となる。火床下にはP1（SK266）が掘り込まれており、火床直下に炭層がある。P2（SK267）は、灰色シルトを主体とし、炭化物ブロックを含む。**形態**：長軸 2.76m（残存値）。短軸 0.42m（残存値）。**構造**：火床と炭化物の堆積からカマドの痕跡と判断し竪穴建物跡と推定したが、竪穴および柱穴は確認できなかった。**カマド**：東カマドと推定した。火床のみが残存し、その周囲には構築材と想定される扁平礫がある。火床下には炭化物が層状に入ることから、カマドの作り替えが想定できる。**遺物出土状況**：火床周辺から、土師器坏などがまとまって出土した。煮沸具である甕は出土していない。**遺物**：269・270 は土師器坏、271 は黒色土器埦、272 はミニチュア土器である。埋土内土器の総量は、土師器 844g・黒色土器 231g・須恵器２g である。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

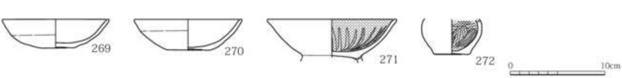
SX05・SF15

位置：２区Ⅲ K24 グリッド。**検出**：焼土・炭化物を含む埋土の輪郭を検出した。当初 SF15 として調査を進めたが、火床面が認められず SX05 に遺構名を変更した。**重複**：（新）SM22・SF14：遺構検出で確認。**埋土**：地山起源のにぶい黄褐色土を主体とし、焼土・炭化物を含む。**形態**：4.28m（残存値）。短軸 1.15m（残存値）。深さ 0.26m。**構造**：南北に長軸を持つ掘り込みは不整形で、底面は凹凸をなす。ピットが２基確認でき、いずれも柱痕跡が確認できた。掘り込みの形と埋土の状況から、竪穴建物の掘方と推定した。**カマド**：確認できなかったが、埋土中に焼土・炭化物がみられることから、この周囲にあった可能性がある。**遺物出土状況**：土器の多くは、遺構底面もしくは底面付近で出土した。**遺物**：273 ～ 287 土師器坏、288・289 は黒色土器埦である。287 は口縁部と内面に黒色付着物が認められる。埋土内土器の総量は、土師器 2,604g・黒色土器 259g・須恵器 12g・灰釉陶器 5g である。この他、焼けた粘土塊１点が出土した。**時期**：出土した遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

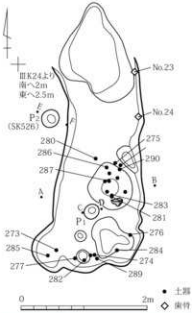


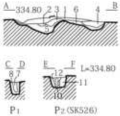
1　黒褐色 (10YR3/2)　しまりなし。粘性弱。炭化物層と焼土の互層。
2　黒褐色 (10YR3/1)　しまりあり。粘性あり。径１～ 3cm 炭化物・被熱土混。
3　褐灰色 (10YR4/1)　しまりあり。粘性あり。炭・焼土粒微量混。
4　灰色 (10YR4/1)　しまりあり。粘性あり。径0.1 ～ 0.3cm炭化物混。

SX01 遺物出土状況（東から）



第 55 図　SX01

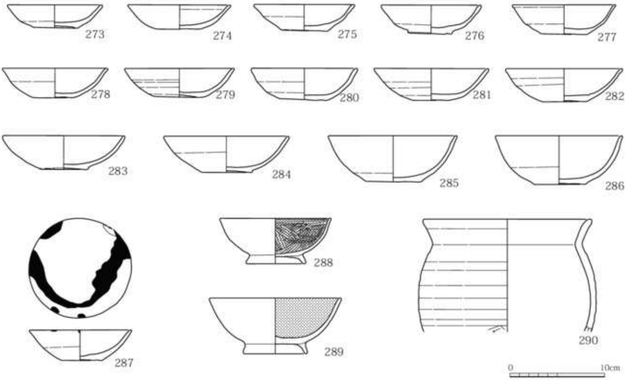




1　暗褐色 (10YR3/3)　しまり弱。粘性ややあり。炭化物・焼土粒・にぶい黄褐色土微量混。
2　暗赤褐色 (5YR3/2)　しまりあり。粘性ややあり。焼土。
3　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまり弱。粘性ややあり。炭化物中量混。
4　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。焼土粒微量混。
5　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物・焼土粒・暗褐色土微量混。
6　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。焼土粒微量混。
7　暗褐色 (10YR3/3)　しまり弱。粘性あり。にぶい黄褐色土少量混。
8　暗褐色 (10YR3/3)　しまりあり。粘性あり。にぶい黄褐色土微量混。
9　にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。褐色土少量混。
10　炭層。
11　にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。褐色土少量混。
12　褐色土 (10YR4/6)　しまりあり。粘性ややあり。

SX05 断面（北から）

SX05 遺物出土状況（東から）



第56図　SX05・SF15

3　竪穴状遺構

埋文センター『遺跡調査の方針と手順』によれば、「２m（以上）を目安とした掘り込み」をSBと呼称している。SBの中でも、カマド跡（痕跡を含む）があるものはもとより、火処が無くても、踏み固めたような堅緻面が認められたものは「竪穴建物跡」とした。しかし、建物跡の可能性は高いが、こうした根拠を欠くものは「竪穴状遺構」として以下に報告する。

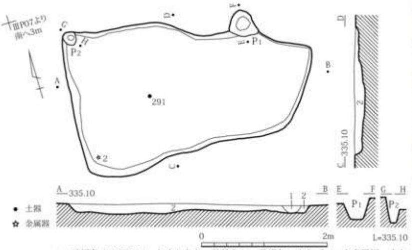
SB01

SB01 銅鋺状金属製品出土状況（北から）

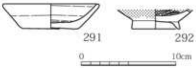
位置：２区Ⅲ P07グリッド。**検出：**埋土は、地山よりわずかに暗色を呈する程度で、輪郭を明瞭に捉えることができなかった。埋土の範囲は、トレンチによる土層断面観察で把握し、遺構の規模・形を確定した。**重複：**（旧）SB14・SX02：遺構検出で確認。**埋土：**単層で、基本土層Ⅲ層に類似する黒褐色土を主体とする。埋土には、ブロック状の炭化物が少量含まれるが、焼土は認められない。**形態：**長軸方位N-4°-E。長軸3.96m。短軸1.57m。深さ0.16m。**構造：**平面形は不整な長方形。底面は起伏しており、硬化面は形成していない。ピット２基が北壁際にあるが、柱痕はない。**カマド：**カマド・炉などの燃焼施設は確認できなかった。**遺物出土状況：**銅鋺状の青銅製品が、南西隅から出土した。土器が、埋土中に散在していた。**遺物：**第79図２は銅鋺状金属製品の破片である。口径21.1cmで口縁部が肥大しており、同様の形態のものが屋代遺跡群SB4201から出土している（長野県埋蔵文化財センター 2000）。遺跡調査指導委員会にて、仏具の可能性が指摘された。291は土師器坏、292は黒色土器塊で内外面に黒色処理がなされる。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器387g、黒色土器147g、灰釉陶器９g、煮炊・貯蔵具は、土師器305g、須恵器115gである。この他、軽石４点、人骨片が出土した。**時期：**遺構の重複関係から平安時代中期以降に帰属すると判断した。ただし、291は中世の「カワラケ」によく似ており、中世まで下る可能性も否定できない。

SB11

位置：１区Ⅲ U06グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を捉えた。**重複：**（旧）SD07：遺構検出で確認。（新）SB10：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土：**単層で、黄褐色シルト層が堆積していた。**形態：**長軸方位不明。長軸3.51m。短軸2.71m。深さ0.26m。**構造：**平面形は不整な隅丸方形を呈し、北側は

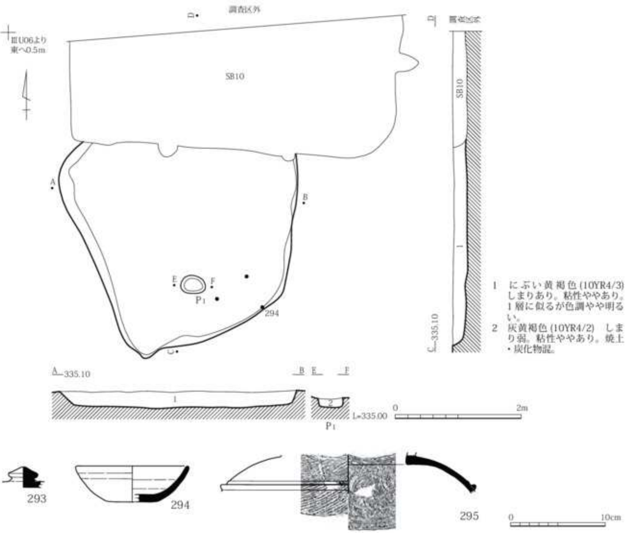


SB01 全景（東から）



1　暗褐色(10YR3/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。上からの掘り込み。
2　黒褐色(10YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭ブロック 少量混。

第57図　SB01

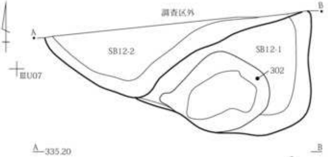


第58図　SB11

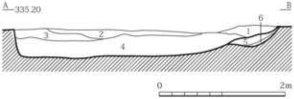
SB10に切られる。南側にピットを1基確認したが、柱穴は認められなかった。床面の一部では強い粘性を帯びる所がみられ、貼床を施していた可能性がある。**カマド：**カマドは確認できなかった。しかし、東壁北端、SB10に切られている所において床面上から炭化物が多く確認され、燃焼施設が存在していた可能性がある。**遺物：**293は須恵器坏蓋、294は須恵器坏、295は凸帯付四耳壺である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器511g、黒色土器563g、須恵器442g、灰釉陶器5g、煮炊・貯蔵具が、土師器4,186g、須恵器785g、灰釉陶器79gである。この他、焼けた粘土塊が1点出土した。**時期：**出土遺物から平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SB12-1・SB12-2

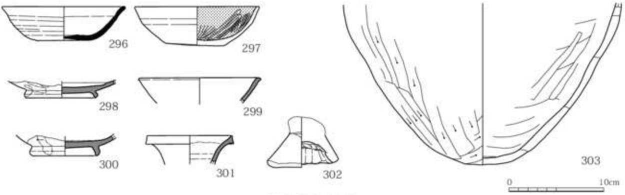
位置：1区Ⅲ U02・07グリッド。**検出：**北側は調査区外におよぶが、方形を呈する褐色の埋土の輪郭を検出し、SB12として調査を行った。しかし、土層断面観察を行ったところ2基の竪穴状遺構が重複していることがわかった。東側のものをSB12-1、西側をSB12-2とした。ただし遺物はSB12として取り上げている。重複関係は、SB12-1→SB12-2の順に構築している。**重複：**(旧) SK353：遺構検出で確認。**埋土：**SB12-1は灰黄褐色土を主体とする。SB12-2は黒褐色土を主体とし、炭化物を部分的に層状に含む。**形態：**長軸方位不明。SB12-1は長軸2.28m（残存値）、短軸1.18m（残存値）、深さ0.48m。SB12-2は長軸1.82m（残存値）。短軸1.57m（残存値）。深さ0.43m。**構造：**平面形はいずれも隅丸方形で、SB12-2の床面がSB12-1より一段下がる。いずれも地山成形で硬化面は認められない。燃焼施設は、確認できなかった。



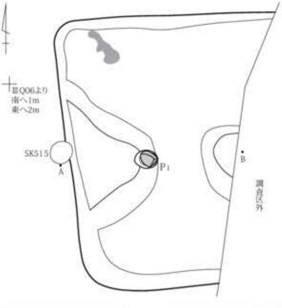
SB12 302 出土状況（西から）

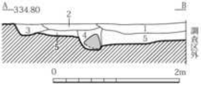


1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。
2　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。やや砂質。
3　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭・焼土少量混。
4　黒褐色 (10YR3/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭、所々に層状。
5　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまり弱。粘性ややあり。
6　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性強。

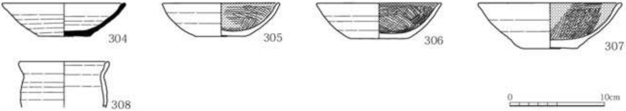


第 59 図　SB12





1　褐灰色 (7.5YR6/1)　しまりあり。粘性強。灰色粘土。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・灰色粘土粒多量混。Pit1 埋土。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・灰色粘土粒多量混。



第 60 図　SB18

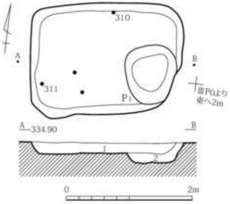
遺物：296 が須恵器坏、297 が黒色土器坏、298 が灰釉陶器皿、299・300 が灰釉陶器埦、301 が灰釉陶器長頸壺、302 が土師器高坏脚部（古墳時代）、303 が土師器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 607g、黒色土器 1047g、須恵器 333g、灰釉陶器 10g、煮炊・貯蔵具が、土師器 3,092g、黒色土器 38g、須恵器 1,253g、灰釉陶器 34g である。この他、敲石 1 点、凹石 1 点、軽石 1 点、鉄滓 1 点が出土した。**時期：**出土遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB18

位置：２区Ⅲ Q01・06 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができた。とくに北壁は SB20 の埋土を掘り込んでいるが、その境は明瞭に確認できた。東側は調査区外。**重複：**（旧）SB20：遺構検出で確認。（新）SK515：遺構検出で確認。**埋土：**下層にはⅣ層起源の灰褐色シルト粒を多く含む。おおよそ埋土５層上面において焼土と炭化物が部分的に広がっている。**形態：**長軸方位 N-3°-W。長軸 4.30m。短軸 2.99m（残存値）。深さ 0.35m。**構造：**平面形は方形だが、東側は調査区外となる。床面は硬化しておらず不明瞭で、地山砂層との境を床面とした。さらに床面は平坦ではなく、西壁際中央から一段高い高まりが舌状に張り出し、また中央部分も高くなる。柱穴は確認できなかった。P1 は底面に大礫を有するが、埋土中から掘り込まれている。燃焼施設は、確認できなかった。**遺物出土状況：**遺物は、埋土中に散在しており、床面上に置かれた状態で出土したものはない。**遺物：**304 は須恵器坏、305 ～ 307 は黒色土器坏、308 は甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 405g、黒色土器 719g、須恵器 160g、灰釉陶器 32g、煮炊･貯蔵具が、土師器 1,866g、黒色土器 101g、須恵器 391g、灰釉陶器 25g である。この他、鉄滓１点が出土した。**時期：**出土遺物から平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

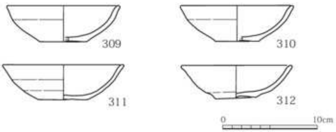
SB19

位置：２区Ⅲ K24・25、Ⅲ P04・05 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができた。**重複：**（新）SK385：遺構検出で確認。**埋土：**単層でⅣ層起源の灰色シルトを多く含む。**形態：**長軸方位 N-11°-W。長軸 2.41m。短軸 1.78m。深さ 0.17m。**構造：**平面形は東西方向に長軸を持つ隅丸長方形。床面は硬化しておらず不明瞭で、土層断面観察によって地山層との境を床面とした。南東隅角には不整形なピットを有する。柱穴は確認できなかった。燃焼施設は確認できなかった。**遺物出土状況：**遺物は、埋土中に散在しており、床面上に置かれた状態で出土したものはない。**遺物：**309 ～ 312 は土師器坏である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 584g、黒色土器 35g、須恵器 5g、煮炊・貯蔵具が、土師器 30g、須恵器 50g、灰



1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルト粒多量混。やや砂質。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。P1 埋土。1 層よりやや暗色。

SB19 遺物出土状況（南から）



第 61 図　SB19

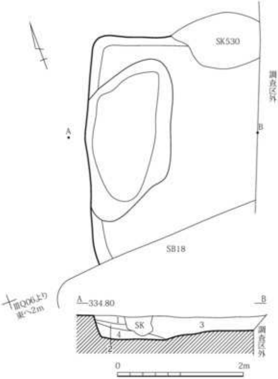
釉陶器 100g である。この他、軽石１点が出土した。**時期**：出土遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SB20

位置：２区Ⅲ Q01 グリッド。**検出**：方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができた。SB18 に切られており、その重複関係は遺構検出時に確認できた。東側は調査区外。**重複**：（新）SB18・SK530：遺構検出で確認。**埋土**：Ⅳ層起源の灰色シルトおよびⅤ層起源の黄褐色シルトを多く含む。**形態**：長軸方位 N-17°-W。長軸 3.32m（残存値）。短軸 2.56m（残存値）。深さ 0.38m。**構造**：平面形は方形。東側は調査区外、南側は SB18 に切られているため全形は不明である。床面は硬化しておらず不明瞭で、土層断面観察によって地山層との境を床面とした。床面は平坦ではなく、西壁際は土坑上に落ち込み、東に向かって徐々に立ち上がっている。柱穴は確認できなかった。燃焼施設は確認できなかった。**遺物出土状況**：遺物は、埋土中に散在しており、床面で出土したものはない。**遺物**:313 は黒色土器埦、314 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 32g、黒色土器 250g、須恵器 12g、灰釉陶器 10g、緑釉陶器 7g、煮炊・貯蔵具が、土師器 585g、須恵器 99g である。**時期**：出土遺物と重複関係から平安時代前期～中期に帰属すると判断した。

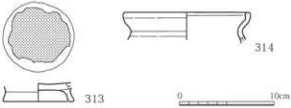
SB21

位置:２区Ⅲ K24･25 グリッド。**検出**:方形を呈する埋土の輪郭を明瞭に捉えることができた。**重複**:（新）SK419：遺構検出で確認。**埋土**：単層でⅣ層起源の灰色シルトを多く含む。**形態**：長軸方位 N-9°-W。長軸 2.90m。短軸 2.89m。深さ 0.15m。**構造**：平面形は正方形。床面は硬化しておらず不明瞭で、土層断面観察によって地山層との境を床面とした。床面は平坦で、壁面は緩やかな立ち上がりをなす。燃焼施設は確認できなかった。**遺物出土状況**：遺物は埋土中に散在しており、床面で出土したものはない。**遺物**：図示した遺物はない。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 32g、黒色土器 21g、須恵器 33g、煮炊・貯蔵具が、土師器 270g である。**時期**：平安時代に帰属するが、年代は不明である。



SB20 断面（南から）

1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック微量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色粘土ブロック・黄褐色シルトブロック多量混。
4　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。灰色粘土主体。黄褐色シルトブロック少量混。



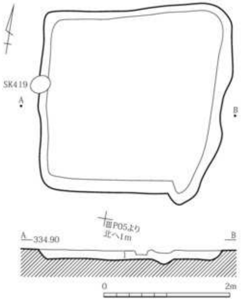
第 62 図　SB20

SB25

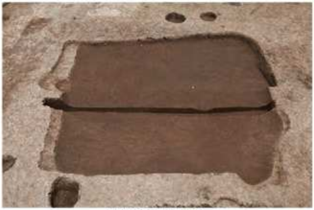
位置：２区Ⅲ P10・15、Ⅲ Q06・11 グリッド。**検出：**方形を呈する埋土の広がりを明瞭に捉えることができた。しかし、南側は削平されていたため南壁は残存していない。**重複：**（新）SD13：遺構検出で確認。**埋土：**単層。Ⅲ層起源の黒褐色土を主体とし、Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多く含む。形態：長軸方位 N-5°-E。長軸 2.52m。短軸 1.12m（現存値）。深さ 0.07m。**構造：**平面形は方形。床面は地山成形で平坦である。ピットは２基あるが、柱痕は確認できなかった。燃焼施設は、確認できなかった。**遺物出土状況：**出土した土器片は少量で、埋土中に散在していた。**遺物：**315 は灰釉陶器埦である。埋土内土器の総量は、食膳具が、黒色土器 30g、灰釉陶器 60g、煮炊・貯蔵具が、土師器 12g、須恵器 25g、灰釉陶器 15g である。この他、P2 から砥石が１点出土した。**時期：**出土遺物から平安時代中期以降に帰属すると判断した。

SB26・32

位置：２区Ⅲ P04・09 グリッド。**検出：**二つの遺構が重複していると想定しそれぞれに遺構名を付して調査したが、整理段階で一つの遺構と判断した。第２検出面で検出した。北壁を確認したが、南壁は確認できなかった。トレンチの土層観察で埋土を確認し、SB34 の北側に位置する浅い竪穴建物跡と判断した。

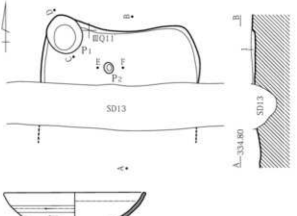


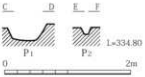
1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量、灰色粘土粒子少量、炭化粒微量混。



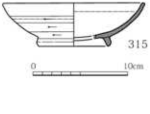
SB21 完掘（南から）

第 63 図　SB21



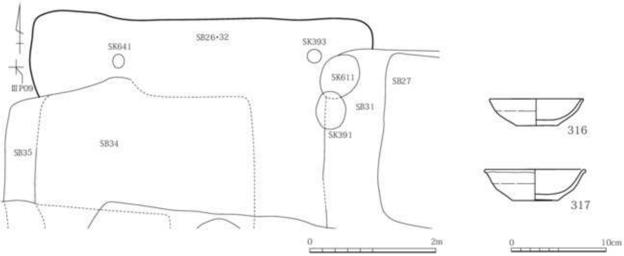


1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。黄褐色シルトブロック多量混。



SB25 完掘（南から）

第 64 図　SB25



第 65 図　SB26・32

重複：（新）SB34・SB35：土層断面で確認。なお、土層観察での SB31 との新旧関係は不明。**埋土：**暗褐色土を主体とする単層である。**形態：**長軸方位 N-0。長軸 5.42m。短軸 1.24m（残存値）。深さ不明。**構造：**燃焼施設・柱穴等の施設は確認できなかった。**遺物：**316・317 は土師器坏である。埋土内土器の総量は、食膳具が、土師器 788g、黒色土器 650g、須恵器 15g、灰釉陶器 3g、煮炊・貯蔵具が、土師器 1,354g、黒色時 5g、須恵器 447g である。この他、鉄製紡錘車の紡輪、棒状鉄製品が出土した。なお、SB26「南西区」「南東区」としたものは SB34 に帰属する可能性があり、317 は南西区で出土した。**時期：**出土遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

4　溝跡

SD02

SD02 完掘（南から）

位置：１区Ⅱ Y09・14 グリッド。**検出：**帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。南端部は確認できたが、北側は調査区外へおよぶ。**重複：**（旧）SD03：遺構検出で確認。**埋土：**単層で、砂粒を少量含む。鉄分集積あり。**形態：**方位北 - 南。長さ 12.6m（残存値）。幅 0.48m。深さ 0.24m。**構造：**わずかに蛇行するが、おおむね南北にまっすぐ延びる。SD03 と直交するが、重複関係を有する。断面は U 字形を呈する。**遺物：**318 は須恵器坏である。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD03

位置：１区Ⅱ Y14・15 グリッド。**検出：**帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。東端部は確認できたが、西側は調査区外へおよぶ。**重複：**（新）SD02：遺構検出で確認。**埋土：**単層で、砂粒を少量含む。**形態：**方位東 - 西。長さ 8.78m（残存値）。幅 0.76m。深さ 0.21m。**構造：**東西にまっすぐ延びる。SD02 と直交するが、重複関係を有する。断面は V 字形を呈する。**遺物：**319 は須恵器坏、320・321 は土師器甕である。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD04･06 完掘（南から）

SD04

位置：１区Ⅱ Y10・15、Ⅲ U06 グリッド。**検出：**帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。北端部は、北八幡川の旧河道とみられる埋土に切られる。平行する２条の溝が重複しており、東側を SD04-1、西

側を SD04-2 とした。SD04-1 の方が新しいことが土層断面で確認できたが、その西壁は SD04-2 の埋土中にあたり、検出できなかった。**重複**：（新）SK304・SK305：遺構検出で確認。**埋土**：一定ではなく、部分的に炭化物を多く含む所がある。**形態**：方位北 - 南。長さ 10.02m（残存値）。幅 3.44m。深さ 0.20m。**構造**:SD04-1 の断面形は、塊形。その西壁は検出できなかったが、底面が窪みとして残存する。SD04-2 は、幅広の底面をもち、断面形は逆台形を呈する。SD04-1 は調査区を南北に縦断するが、SD04-2 では南端部を確認した。２つの溝は、大きく形が異なっており、掘り直しではなく、SD04-2 が埋没した後に SD04-1 が掘削されたと考える。**遺物出土状況**：SD04-1 の方から土器が多く出土した。**遺物**：322 は須恵器坏、323 は土師器坏、324 は黒色土器坏、325 は須恵器甕である。この他、２～６cm 大の軽石 24 点、鉄滓３点が出土した。**時期**：出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD05

位置：２区Ⅲ P01 グリッド。検出：周囲に SB05 などの遺構があるため不鮮明であったが、帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。東端部を確認したが、西側は調査区外へおよぶ。**重複**：（新）SK334・SK335：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土**：単層で、Ⅴ層起源の黄褐色シルトを含む。**形態**：方位東 - 西。長さ 2.98m（残存値）。幅 0.96m。深さ 0.18m。**構造**：東西にまっすぐ延びる。断面形は、浅い塊形。**遺物**：326 は須恵器坏、327 は須恵器壺で自然釉がかかっており、在地の須恵器にはみられない器形であることから、東海地方等からの搬入品の可能性がある。この他、黒色土器蓋の破片が１点出土している（PL28 遺物管理番号 274）。**時期**：出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD06

位置：１区Ⅱ Y10・11 グリッド。**検出**：帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。北端部は、北八幡川の旧河道とみられるかく乱に切られる。**重複**：なし。**埋土**：単層。シルトで、砂は含まない。**形態**：方位北 - 南。長さ 0.70m（残存値）。幅 1.76m。深さ 0.58m。**構造**：SD04 とほぼ平行し、南北にまっすぐ延びる。断面形は、Ｖ字およびＵ字形。底面は凹凸をなす。**遺物**:328 は黒色土器坏、329 は灰釉陶器長頸壺である。この他、軽石１点、鉄滓１点が出土した。**時期**：出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD07

位置：１区Ⅲ U6・11 グリッド。**検出**：帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。弧を描き、南側は SB11 に切られている。**重複**：（新）SB11：遺構検出で確認。**埋土**：単層。シルトで、炭化物を含む。**形態**：方位北 - 南。長さ 5.22m（残存値）。幅 0.78m。深さ 0.12m。**構造**:湾曲しながら南北に延びる。断面形は、塊形。**遺物**：図示した遺物はないが、埋土内土器の総量は、土師器 1,923g、黒色土器 353g、須恵器 387g、灰釉陶器１g である。**時期**：出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD07 完掘（南から）

SD17

位置：２区Ⅲ K17・18・19・20、Ⅲ L11・16・17・18 グリッド。**検出**：帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。本溝を切る SD23 の輪郭が不明瞭であったため、本溝を先行して掘削した。東西両端は確認できず、調査区外へ延びる。**重複**：（新）SD01：遺構検出・土層断面観察で確認。SD16：遺構検出で確認。SD23：土層断面観察で確認。**埋土**：単層で、鉄分の集積あり。**形態**：方位東 - 西。長さ 42.32m（残存値）。幅 1.03m。深さ 0.32m。**構造**:東西に延びる。断面形は塊形。**遺物出土状況**:土器は埋土中に散在しており、とくに集中して出土するような状況はみられなかった。**遺物**:330 は灰釉陶器埦、331 は灰釉陶器壺である。**時期**：出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD18

位置：２区Ⅲ K13・14・15・18、Ⅲ L11・12・13 グリッド。**検出：**帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。東側で SD23（SD22）と重複していたが、平面検出時には重複関係は把握できず、土層断面観察によって SD23（SD22）を掘り直していることを確認した。東西両端は確認できず、調査区外へ延びる。**重複：**(旧) SD23（SD22）：土層断面観察で確認。（新）SD01：遺構検出・土層断面観察で確認。SD16・SK649・SK651：遺構検出で確認。**埋土：**地山起源の黄褐色シルトを多く含む。**形態：**方位東 - 西。長さ 43.07m（残存値）。幅 1.21m。深さ 0.15m。**構造：**西側からわずかに北へ湾曲しながら東へ走り、SD23（SD22）重複か所で屈曲した後、北東方向へ延びる。断面形は、上端が大きく広がる逆台形を呈する。**遺物出土状況：**図示した遺物はないが、埋土内土器の総量は、土師器 33g、黒色土器 14g、須恵器 4g、灰釉陶器 3g とわずかである。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD20

位置：２区Ⅲ K09・10 グリッド。**検出：**調査区北壁沿いに埋土の輪郭を確認した。東西両端は確認できず、調査区外へ延びる。**重複：**(旧) SD21：遺構検出で確認。（不明）SD16。**埋土：**単層で、細砂粒を含むシルト。鉄分の集積あり。**形態：**方位南東 - 北西。長さ 8.42m(残存値)。幅 0.45m。深さ 0.07m。**構造：**わずかに南へ湾曲しながら東西に延びる。断面形は、浅いため窪み状。**遺物：**出土遺物なし。**時期：**遺構の重複関係から平安時代に帰属すると判断した。

SD21

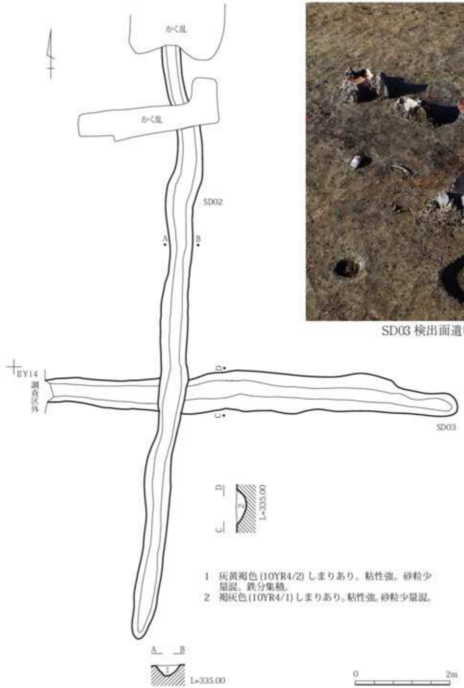
位置：２区Ⅲ K9・10・14・15 グリッド。**検出：**わずかな窪みとして検出できた。残存する深度が浅いため、埋土の広がりを追った。北側は調査区外へおよぶ。**重複：**（新）SD20：遺構検出で確認。**埋土：**Ⅲ層が堆積する。**形態：**方位北 - 南。長さ 4.06m（残存値）。幅 0.64m。深さ 0.08m。**構造：**南北にまっすぐ延びる。断面形は、浅いため窪み状。**遺物：**出土遺物なし。**時期：**遺構の重複関係から平安時代に帰属すると判断した。

SD22・23

位置：２区Ⅲ K15・17・18・19・20、Ⅲ L11・16 グリッド。**検出：**帯状に広がる埋土の輪郭を検出した。本溝が切る SD17 の輪郭が明瞭であったため、SD17 の方を先行して掘削した。SD17 と重複した後、北東方向へ大きく屈曲する。当初、屈曲部より北東側は、別の溝（SD22）の可能性も考慮して調査を進めたが、埋土が続くこと、土層断面（I-J・K-L）では本溝が確認できないことから一連の一条の溝と判断した。**重複：**（新）SD01：遺構検出・土層断面観察で確認。SD16：遺構検出で確認。（旧）SD17：土層断面観察で確認。**埋土：**地山に近い色調の暗褐色土。**形態：**方位東 - 西。長さ 29.50m（残存値）。幅 1.64m。深さ 0.18m。**構造：**西から SD17 の北壁を切るように東へ走り、屈曲した後、北東方向へ延びる。断面形は、埦形で、底面の位置は SD17 より浅い。**遺物：**図示した遺物はないが、埋土内土器の総量は、土師器 184g、黒色土器 34g、須恵器 60g とわずかである。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SD16・17（西から）

SD18・22（北から）

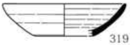


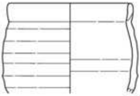
SD03 検出面遺物集中（南から）

SD02 出土遺物

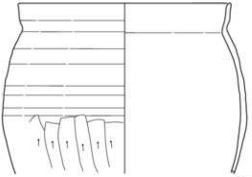
318

SD03 出土遺物


319


320

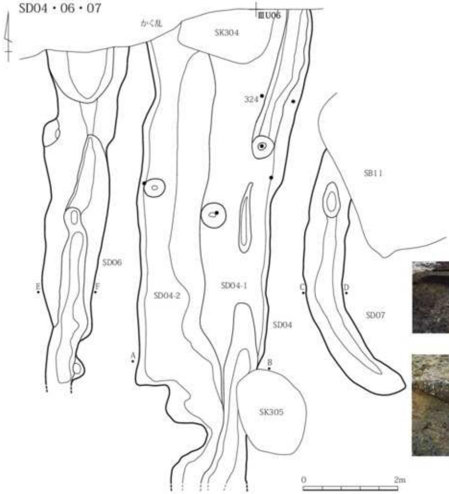
SD02 断面（南から）

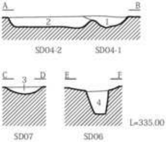

321

0　10cm

第66図　SD02・03

SD04・06・07



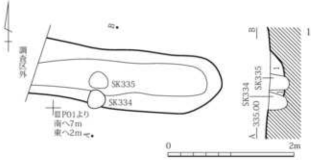


1　褐灰色 (10YR4/1)　しまりあり。粘性強。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性強。炭化物多量混。
3　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物混。
4　褐灰色 (10YR4/1)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物混。

SD04 断面（北から）

SD06 断面（南から）

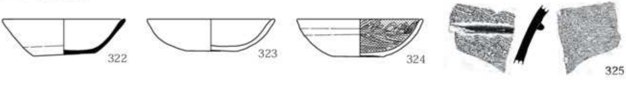
SD05



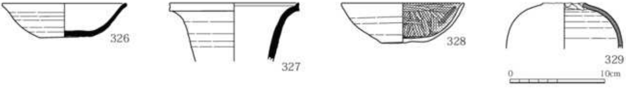
1　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック・炭化物少量混。

SD05 完掘（東から）

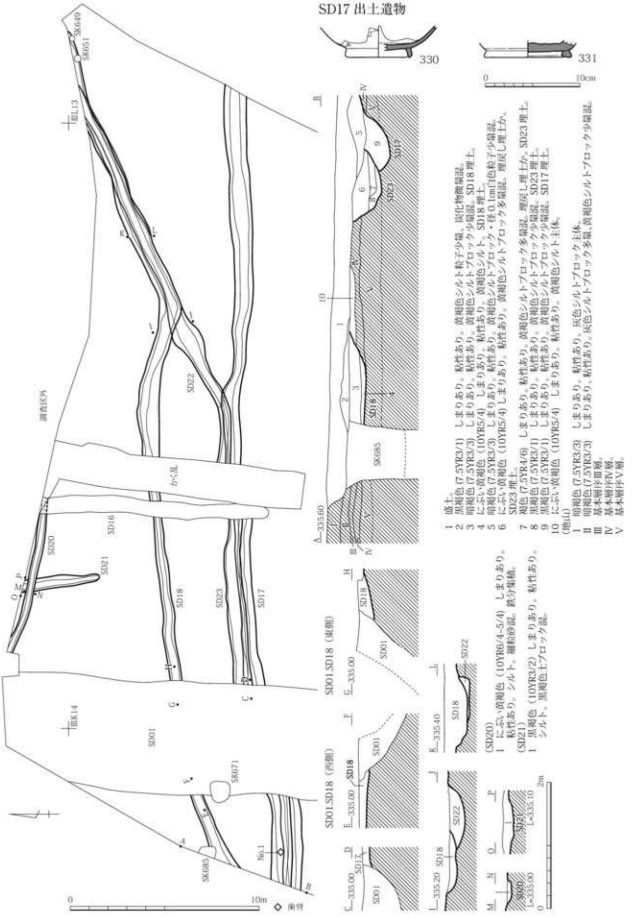
SD04 出土遺物



SD05 出土遺物　　SD06 出土遺物



第 67 図　SD04・05・06・07



第 68 図　SD17・18・20・21・22・23

5　焼成遺構

以下のSFは、本遺跡の中世の墓もしくは火葬施設のような、はっきりした落ち込み（立ちあがり）がなく、古代土器のみで、骨も共伴していないことから、小鍛冶やカマド等の痕跡が想定され、平安時代の遺構として報告する。

SF01

SF01（北から）

位置：２区Ⅲ K22 グリッド。**検出**：埋土の輪郭は、不明瞭であった。**重複**：（新）SK152・SK154・SK155：遺構検出で確認。**埋土**：北側の土坑状部分では、暗褐色土を主体とし、下層に炭化物が堆積する。南側の溝状部分は砂が多く、鉄分の集積がみられた。**形態**：方位 N-5° -E。長さ 3.38m。幅 0.66m。深さ 0.20m。**構造**：長楕円形の土坑の南に溝状の掘り込みが付く。深度は浅く、土坑と溝状部分との連結部が最深部となる。土坑部分の底面には、火床が２か所ある。**遺物**：332 は須恵器坏である。埋土内土器の総量は、土師器 1,086g、黒色土器 415g、須恵器 503g である。**時期**：遺構検出面および遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SF04

位置：２区Ⅲ P04 グリッド。**検出**：焼土の広がりを遺構の輪郭として捉えた。**重複**：（旧）SF07：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土**：灰黄褐色シルトを主体とし、焼土ブロック・炭化物粒を多く含む。**形態**：長さ 0.52m。幅 0.45m。深さ 0.13m。**構造**：平面形は円形。断面形は逆台形で、底面に２か所ピット状の掘り込みを有する。火床は認められないが焼成遺構の関連施設と判断した。**遺物**：図示した遺物は無いが、埋土内土器の総量は、土師器 165g、黒色土器 8g、須恵器 11g とわずかである。**時期**：出土遺物から平安時代の遺構と推定したが、中世以降の可能性もある。

SF05

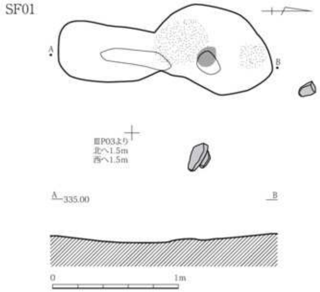
位置：２区Ⅲ P04 グリッド。**検出**：炭化物の広がりを遺構の輪郭として捉えた。**重複**：（旧）SK264：遺構検出で確認。（新）SK259：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土**：灰黄褐色シルトを主体とし、炭化物ブロックを多く含む。**形態**：方位 N-2° -E。長さ 0.95m。幅 0.38m。深さ 0.14m。**構造**：平面形は楕円形。断面形は埦形。埋土に炭化物を多く含んでおり、焼成遺構の関連施設と判断した。**遺物**：333 は土師器甕である。胴下半部をケズリ調整した後叩いて丸底状の底部を作り出している。埋土内土器の総量は、土師器 338g、黒色土器 10g、須恵器 170g とわずかである。**時期**：出土遺物から平安時代の遺構と推定したが、中世以降の可能性もある。

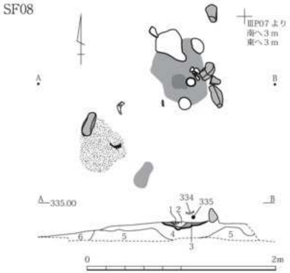
SF07

位置：２区Ⅲ P04 グリッド。**検出**：炭化物の広がりを遺構の輪郭として捉えた。**重複**：（新）SF04：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土**：灰黄褐色土を主体とし、炭化物ブロックを含む。焼土は無い。**形態**：長さ 0.58m。幅 0.56m。深さ 0.15m。**構造**：平面形は円形。断面形は逆台形で、底面にピット状の掘り込みを有する。埋土に炭化物を多く含んでおり、焼成遺構の関連施設と判断した。**遺物**：図示した遺物は無いが、埋土内土器の総量は、土師器８g、黒色土器１g とわずかである。**時期**：出土遺物から平安時代の遺構と推定したが、中世以降の可能性もある。

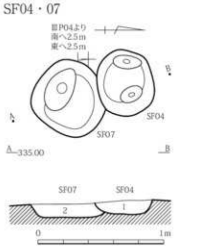
SF08

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**：焼土の広がりを捉え、その周囲に点在する礫も関連する遺物とし

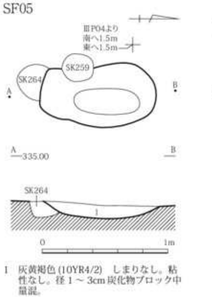




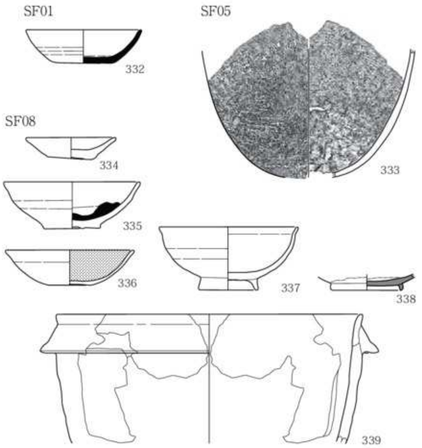
1　にぶい赤褐色 (5YR4/4)　しまり強。粘性ややあり。被熱。
2　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・焼土粒・炭化物少量混。被熱層 (1・3 層) 間埋土。
3　極暗褐色 (7.5Y2/3)　しまり強。粘性ややあり。被熱。上面堅緻。下位に黄褐色シルトブロック混。
4　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 黄褐色シルトブロック中量、炭化物・焼土粒微量、遺物混。
5　オリーブ褐色 (2.5Y4/4)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 黄灰色土ブロック中量、焼土粒・炭化物微量混。
6　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、焼土粒・炭化物・径 0.5cm 黄灰色土ブロック微量混。



1　灰黄褐色 (10YR4/2)　径 1 ～ 3cm 焼土ブロック・炭化物粒多量混。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりなし。粘性ややあり。径 1 ～ 3cm 炭化物ブロック少量混。



1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりなし。粘性なし。径 1 ～ 3cm 炭化物ブロック中量混。



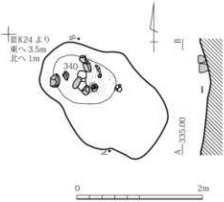
第 69 図　SF01・04・05・07・08

て調査した。**重複**：なし。**埋土**：なし。**形態**：長さ 0.72m。幅 0.46m。深さ 0.08m。**構造**：焼土範囲２か所、炭範囲１か所を確認した。北東の焼土範囲には、火床がある。被熱した礫があるが、原位置は留めていない。しかし、礫の抜き取り痕とみられるピットがあることから、これらの礫は燃焼施設に関わるものと考える。**遺物出土状況**：土器が焼土と炭の上に散在するが、土器に被熱した痕跡はない。**遺物**：334・335 は土師器坏、336 は黒色土器坏、337 は土師器埦、338 は灰釉陶器埦、339 は土師器羽釜である。この他、灰釉陶器小瓶の底部（PL28 遺物管理番号 314）などが出土した。埋土内土器の総量は、土師器 2,062g、黒色土器 300g、須恵器 150g である。**時期**：出土遺物から平安時代後期に帰属すると判断した。

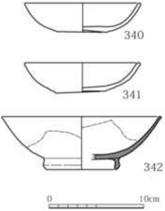
SF08（北西から）

SX03

位置：２区Ⅲ K19・24 グリッド。**検出**：焼土・炭化物の広がりを遺構の輪郭として捉えた。**重複**：（新）SM07・SM08・SM12・SM16・SM17・SM18・SM19・SM20・SM21・SF09・SF13：遺構検出で確認。**埋土**：焼土・炭化物を主体とし、その上面には黄褐色土が堆積する。**形態**：長さ 2.20m。幅 1.37m。深さ 0.17m。**構造**：平面形は、南北に主軸を持つ涙滴形。構築材と推測する礫が確認できた。**遺物出土状況**：土器が、埋土黄褐色土から底面にかけて出土している。**遺物**：340・341 は土師器坏、342 は灰釉陶器埦である。埋土内土器の総量は、土師器 617g、黒色土器 190g、須恵器２g、灰釉陶器 90g である。**時期**：出土遺物から平安時代中期以降に帰属すると判断した。



SX03 遺物出土状況（南東から）



第 70 図　SX03

6　土坑

SF17

位置：２区Ⅲ P05 グリッド。**検出**：埋土の輪郭は不明瞭で、土層断面観察を繰り返すことによって遺構の輪郭を捉えた。周囲の礫も本遺構に関連するものとして調査した。**重複**：（旧）SB23：遺構検出で確認。**埋土**：Ⅴ層起源の黄褐色シルトブロックを多く含む。**形態**：方位 N-57°-E。長さ 1.83m。幅 0.52m。深さ 0.28m。**構造**：２基の土坑が連なる。同一石材とみられる大形礫が、両土坑から出土していることから、一連の遺構と判断した。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかである。**遺物**：第 74 図 343 は土師器坏、344 は黒色土器坏、345 は黒色土器鉢、346 は高台を想定して土師器盤、347 は羽釜である。**時期**：出土遺物から平安時代後期に帰属すると判断した。

SK78

位置：２区Ⅲ P01 グリッド。**検出**：暗褐色を呈する埋土の輪郭を確認した。**重複**：なし。**埋土**：径２cm 大の炭化物・焼土を含む。**形態**：長さ 0.92m。幅 0.60m。深さ 0.12m。**構造**：平面形が円形の土坑が２基

連なる。断面形は、掘削中に埋土の把握が困難となり、詳細不明。**遺物出土状況：**埋土中に多数の土器が散在していた。**遺物：**第 74 図 348 は須恵器坏、349 は両面に黒色処理がなされた黒色土器皿、350 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 225g、黒色土器 129g、須恵器 100g である。**時期：**出土遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SK303

位置：１区Ⅱ Y09 グリッド。**検出：**円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**シルトブロックに多量の炭化物と焼土粒を含む。**形態：**長さ 0.68m。幅 0.63m。深さ 0.12m。**構造：**平面形は円形。断面形は埦形。**遺物：**第 74 図 352 は黒色土器坏、353 は黒色土器埦で、いずれも埋土上部から出土した。埋土内土器の総量は、土師器 78g、黒色土器 178g、須恵器７g である。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SK304

位置：１区Ⅱ Y10、Ⅲ U06 グリッド。**検出：**方形の埋土の輪郭を検出した。北半部は、旧北八幡川と推定されるかく乱に切られている。**重複：**（旧）SD04：遺構検出で確認。**埋土：**黒褐色土を主体とするが、最上層の１層には、Ⅴ層起源の黄褐色シルトが堆積する。**形態：**長さ 1.84m。幅 1.07m（残存値）。深さ 0.33m。**構造：**平面形は隅丸方形。断面形は逆台形。南西隅に浅いピットを有する。**遺物：**第 74 図 354 は黒色土器坏である。埋土内土器の総量は、土師器 398g、黒色土器 308g、須恵器 67g である。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SK305

位置：１区Ⅱ Y10・15、Ⅲ U06・11 グリッド。**検出：**楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（旧）SD04：遺構検出で確認。**埋土：**暗褐色土を主体とし、一部基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトブロックを多く含む。**形態：**長さ 1.99m。幅 1.35m。深さ 0.24m。**構造：**平面形は楕円形。断面形は埦形。**遺物：**第 74 図 355 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 623g、黒色土器 442g、須恵器 218g、磁器２g である。この他、軽石１点が出土した。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断したが、SD04 より新しく、磁器小破片が１点出土しており、中世の可能性もある。

SK319

位置：１区Ⅲ U09 グリッド。**検出：**円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**砂粒と炭化物を多く含む。１層は柱痕の可能性があるが、傾いており、断定できない。**形態：**長さ 0.63m。幅 0.49m。深さ 0.28m。**構造：**平面形は不整な円形。断面形は箱形。**遺物出土状況：**第 74 図 356 は須恵器坏、357・358 は鞴の羽口である。これらは土坑底面付近で出土し、坏はいわゆる軟質須恵器で口縁を下にして出土した。埋土内土器の総量は、土師器 150g、須恵器 48g である。この他、焼けた粘土塊３点、鉄滓３点が出土した。**時期：**出土遺物により平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK344

位置：１区Ⅲ U04 グリッド。**検出：**不鮮明ではあったが、円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**暗褐色土を主体とする。**形態：**長さ 0.28m。幅 0.26m。深さ 0.10m。**構造：**平面形は円形。断面形は埦形。**遺物：**第 74 図 360 は黒色土器埦で、埋土上部で口縁を下にして出土した。埋土内土器の総量は、黒色土器 106g、須恵器 33g である。**時期：**出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SK353

位置：１区Ⅲ U02・07 グリッド。**検出：**SB12 の東側で、隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（新）SB12-1：遺構検出で確認。**埋土：**黒褐色土を主体とし、下層には基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトブロックが堆積する。**形態：**長 1.48m（残存値）。幅 0.85m（残存値）。深さ 0.19m。**構造：**平面形は隅丸方形。

断面形は浅い逆台形。**遺物**：第 74 図 361 は黒色土器坏である。埋土内土器の総量は、土師器 290g、黒色土器 126g、須恵器２g である。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物により平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK357

位置：２区Ⅲ P06 グリッド。**検出**：SB06 の調査中に隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：(旧) SB06・SB07：土層断面観察で確認。(新) SB05：遺構検出・土層断面観察で検出。**埋土**：基本土層Ｖ層起源の黄褐色シルトブロックを多く含む。**形態**:方位 N- 7°-E。長さ 2.06m。幅 0.96m。深さ 0.3m。**構造**:平面形は隅丸長方形。断面形は逆台形、底面は凹凸をなす。SB06 の埋土を掘り込む土坑で、竪穴建物の掘方ではないと判断した。**遺物**：第 74 図 362 は須恵器坏 B、363・364 は土師器坏、365 は黒色土器鉢である。364 が土坑底面で出土した。埋土内土器の総量は、土師器 1,028g、黒色土器 37g、須恵器 35g である。この他、鉄滓１点が出土した。**時期**: 遺構の重複関係と出土遺物から平安時代中期に帰属すると判断した。

SK358・370・373・376

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**：埋土は地山の色調と類似しており、輪郭は不明瞭であった。埋土を除去しながら、遺構の形態を把握していった結果、埋土の近似する４基の土坑が重複していることがわかった。**重複**：SK370・SK373・SK376 → SB08 → SK358 の順に構築。**埋土**：SK358 では、灰黄褐色土を主体とし、下層になるほどグライ化していた。SK370・376・373 も同様の堆積状況である。**形態**:【SK358】方位：N- 2°-W。長さ：1.16m。幅：1.10m。深さ：1.00m。【SK370】長さ：1.02m。幅：0.78m（残存値)。深さ：0.55m。【SK373】長さ：1.50m。幅：0.53m。深さ：0.52m。【SK376】長さ：0.98m（残存値)。幅：0.91m。深さ：0.47m。**構造**:SK358 の平面形は隅丸方形、断面形は逆台形。SK370 の平面形は不整な円形、断面形は逆台形。SK373 の平面形は不整な長楕円形、断面形は逆台形。SK376 の平面形は不整な円形、断面形は埦形。SK358 は、SK370・376・373 とは異なり、深く掘り込まれる。**遺物**：第 75 図 372・373 は須恵器坏、374 は黒色土器坏である。SK376 に遺物はなく、他の遺構の埋土内土器の総量は、土師器 378g、黒色土器 205g、須恵器 483g である。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物によりいずれも平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK366

位置：１区Ⅲ U08 グリッド。**検出**：楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする。土坑周囲には、焼土ブロック・炭化物が広がる。**形態**：長さ 1.00m。幅 0.80m。深さ 0.10m。**構造**：平面形は楕円形。断面形は皿形。**遺物**：第 74 図 366 は須恵器坏、367 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 2,620g、黒色土器 127g、須恵器 625g である。**時期**:366 は所謂軟質須恵器であり、平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK367

位置:２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**:SB08 床面下で検出した。埋土の輪郭は不明瞭で、土層断面観察によって遺構の壁面を確認した。**重複**：(旧) SK375：遺構検出で確認。(新) SB08：遺構検出で確認。**埋土**：灰黄褐色土を主体する。基本土層Ｖ層と類似した単層である。**形態**:方位 N- 1°-E。長さ 1.82m。幅 0.94m。深さ 0.22m。**構造**：平面形は隅丸長方形。断面形は箱形。底面には、炭化物が方形に広がり、その厚さは２cm。重複する SK375 にも、同様に底面に炭化物が広がる。**遺物**：第 74 図 368 は須恵器坏 B、369 は土師器甕である。369 は床面炭化物直上で出土した。埋土内土器の総量は、土師器 198g、黒色土器 77g、須恵器 115g とわずかである。この他、鉄滓１点が出土した。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物から平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK369

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**：楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：（新）SB01：遺構検出で確認。**埋土**：詳細不明。**形態**：長さ 0.52m。幅 0.35m。深さ 0.11m。**構造**：平面形は隅丸方形。断面形は有段。土坑の周囲には、被熱痕がある。**遺物**：第 75 図 370 は土師器坏、371 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 880g、黒色土器 24g、須恵器 35g である。**時期**：出土遺物から平安時代中期から後期に帰属すると判断した。

SK374

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**：SB03・SB04 の床下で検出した。**重複**：（新）SB03・SB04：遺構検出で確認。**埋土**：記録なし。**形態**：長さ 0.73m。幅 0.53m。深さ 0.19m。**構造**：平面形は円形。断面形は皿状。**遺物**：第 75 図 375・376 は土師器坏である。**時期**：出土遺物により平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK375

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**：埋土は地山の色調と類似しており、輪郭は不明瞭であった。一部は、SB08 の床下で検出した。**重複**：（旧）SK356：遺構検出で確認。（新）SB08・SK367：遺構検出で確認。**埋土**：灰黄褐色土を主体とする。基本土層Ｖ層と類似した単層である。**形態**：長さ 1.79m（残存値）。幅 1.27m（残存値）。深さ 0.30m。**構造**：平面形は不整な方形。断面形は箱形。底面には、方形に広がる炭化物がある。炭化物層には、わずかに焼土を含む。重複する SK367 にも、同様に底面に炭化物が広がる。**遺物**：第 75 図 377 は土師器坏、378 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 820g、黒色土器 15g、須恵器 95g である。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物により平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK377

位置：２区Ⅲ P01・06 グリッド。**検出**：SB06・SB07 の掘削後、埋土の輪郭を確認した。**重複**：（新）SB06・SB07：遺構検出で確認。**埋土**：埋土下層で、炭化物・焼土ブロックを確認した。**形態**：長さ 1.54m。幅 1.30m。深さ 0.56m。**構造**：平面形は不整な円形。断面形は有段。**遺物**：第 75 図 379 は須恵器坏 B、380 は須恵器壺である。埋土内土器の総量は、土師器 488g、須恵器 206g である。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物により平安時代前期から中期に帰属すると判断した。

SK417

位置：２区Ⅲ K24 グリッド。**検出**：円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトをわずかに含む。**形態**：長さ 0.25m。幅 0.23m。深さ 0.13m。**構造**：平面形は円形。断面形はＵ字形。**遺物**：土器は出土しなかった。**時期**：平安時代の遺構と推定したが、中世以降である可能性がある。

SK444-1

位置：２区Ⅲ P09・10 グリッド。**検出**：隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。調査したところ、土坑北側に、五輪塔の地輪を伴う円形の土坑が切っていることがわかった。**重複**：（新）SK444-2：土層断面観察で確認。**埋土**：暗褐色土を主体とし、黄褐色シルトを含む。**形態**：長さ 1.22m。幅 1.13m。深さ 0.26m。**構造**：平面形は隅丸方形。断面形は逆台形。**遺物**：第 75 図 385・386 は黒色土器埦、387 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 618g、黒色土器 350g、須恵器 302g、灰釉陶器７g で、埋土上層からまとまって出土した。この他、鉄滓が１点出土した。**時期**：出土遺物により平安時代に帰属すると判断した。

SK445

位置：２区Ⅲ P14 グリッド。**検出**：楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：（新）SD10：遺構検出で確認。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**形態**：長さ 0.91m。幅 0.69m。深さ 0.10m。**構造**：平面形は不整な楕

円形。断面形は浅い埦形。**遺物:** 第 75 図 388 は黒色土器鉢、389 は土師器甕である。埋土内土器の総量は、土師器 998g、黒色土器 76g、須恵器３g である。この他、拳大の焼けた角礫が出土した。**時期**：出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

SK447

位置：２区Ⅲ Q06 グリッド。**検出**：楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：なし。**埋土**：灰色シルトを主体とする。**形態**：長さ 1.62m。幅 0.88m。深さ 0.24m。**構造**：平面形は不整な楕円形。断面形は浅い逆台形。**遺物**：第 75 図 390 ～ 395 は土師器坏である。埋土内土器の総量は、土師器 737g、黒色土器 27g、須恵器５g、灰釉陶器２g である。この他、鉄滓が１点出土した。**時期**：出土遺物から平安時代中期以降に帰属すると判断した。

SK529

位置：２区Ⅲ Q06 グリッド。**検出**：埋土の輪郭は不鮮明であった。**重複**：（旧）SK691・SK692：遺構検出で確認。（不明）SB18。**埋土**：暗黄褐色土を主体とする。**形態**：長さ 0.98m（現存値）。幅 0.66m（現存値）。深さ 0.23m。**構造**：平面形は円形。断面形は逆台形。**遺物**：第 75 図 397 ～ 400 は土師質の土錘である。埋土内土器の総量は、土師器 356g、黒色土器 170g、須恵器 64g である。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物から平安時代中期以降に帰属すると判断した。

SK567

位置：２区Ⅲ Q01 グリッド。**検出**：隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。南側には、同様の形態および埋土の SK568 があるが、関係性については明確にできなかった。**重複**：なし。**埋土**：灰色シルトを主体とする。**形態**：長さ 0.29m。幅 0.26m。深さ 0.19m。**構造**：平面形は隅丸方形。断面形は U 字形。**遺物**：第 75 図 401 は黒色土器皿である。埋土内土器の総量は、土師器５g、黒色土器 113g とわずかである。**時期:** 出土遺物から平安時代に帰属すると判断した。

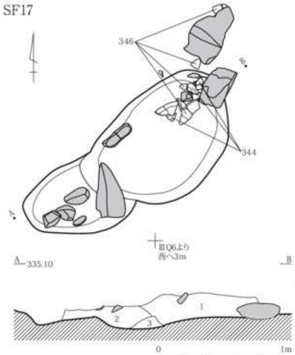
SK611

位置：２区Ⅲ P04・09 グリッド。**検出**：SB31 の北西隅角付近で、円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：（旧）SB31：遺構検出で確認。**埋土**：暗黄褐色土を主体とする。**形態**：長さ 0.77m。幅 0.61m。深さ 0.30m。**構造**：平面形は楕円形。断面形は埦形。**遺物**：第 75 図 402 は土師器盤である。埋土内土器の総量は、土師器 260g、黒色土器 45g、須恵器７g とわずかである。**時期**：遺構の重複関係と出土遺物から平安時代中期以降に帰属すると判断した。

SK319 遺物出土状況（南から）

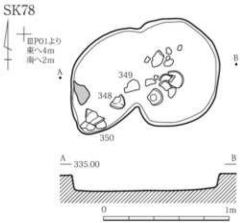
SK445 遺物出土状況（南東から）

SF17

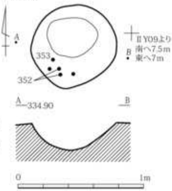


1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。２層より明色。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。

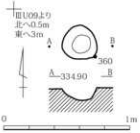
SK78



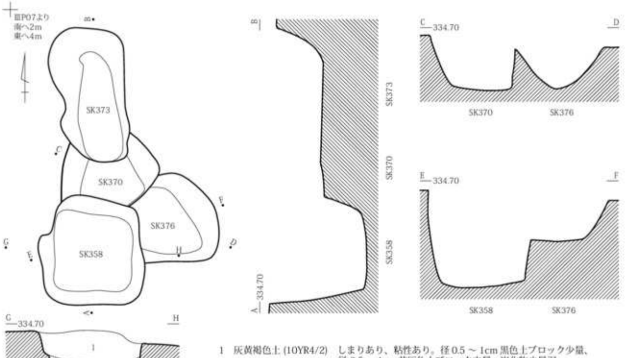
SK303

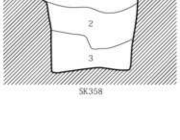


SK344



SK358・370・373・376



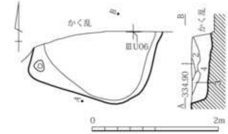


1　灰黄褐色土 (10YR4/2)　しまりあり、粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黒色土ブロック少量、径 0.5 ～ 1cm 黄灰色土ブロック中量、炭化物少量混。
2　オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)　しまりあり、粘性あり。径 0.5cm 黒色土ブロック少量、炭化物微量混。ややシルト質。
3　暗灰黄色土 (2.5Y4/2)　しまりあり、粘性強。径 0.5cm 黒色土ブロック少量、炭化物微量混。シルト質。

0　1m

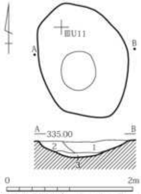
第 71 図　土坑　遺構図１

SK304



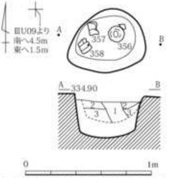
1　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量混。
2　暗褐色 (10YR3/3)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量混。
3　黒褐色 (10YR3/1)　しまりあり。粘性ややあり。褐色土ブロック混。
4　黒褐色 (10YR3/1)　しまりあり。粘性ややあり。褐色土ブロック、焼土粒混。

SK305



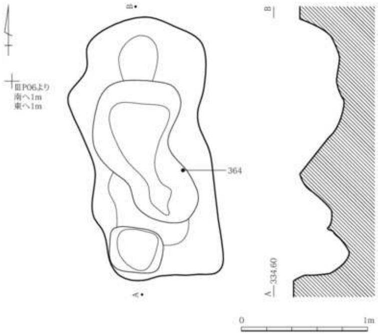
1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性強。炭化物粒微量、褐色土混。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性強。炭化物粒微量、褐色土、地山ブロック混。
3　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性強。炭化物粒微量、褐色土混、地山ブロック多混。

SK319

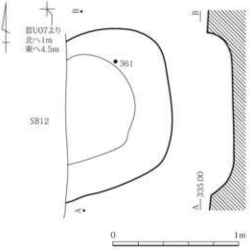


1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりなし。粘性あり。やや砂質。炭化物多量混。
2　黒色 (10YR2/1)　しまりなし。粘性弱。砂質。
3　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりなし。粘性あり。砂質。炭化物混。

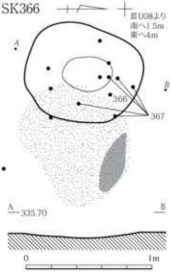
SK357



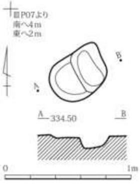
SK353



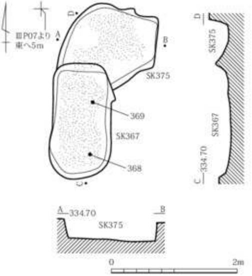
SK366



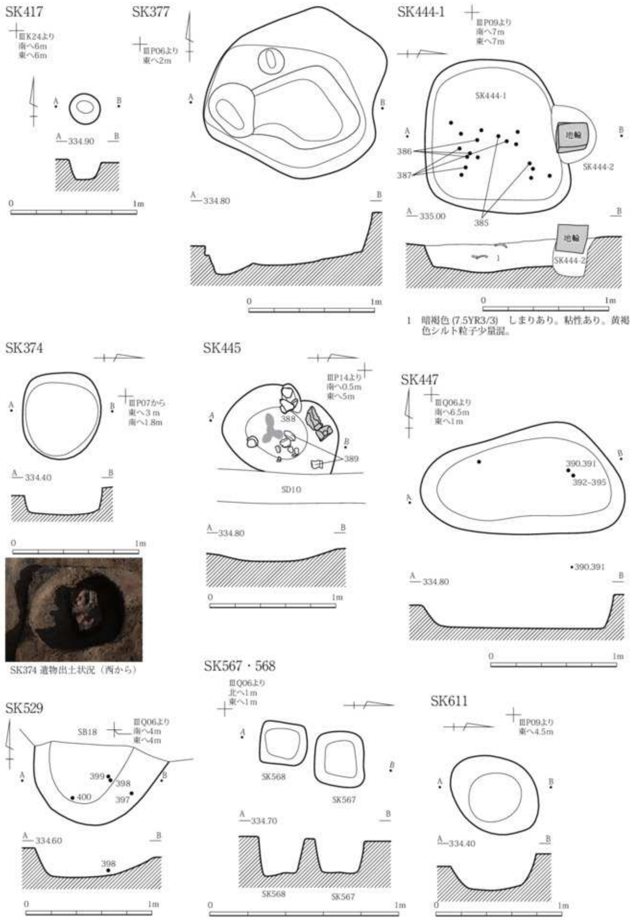
SK369



SK367・375

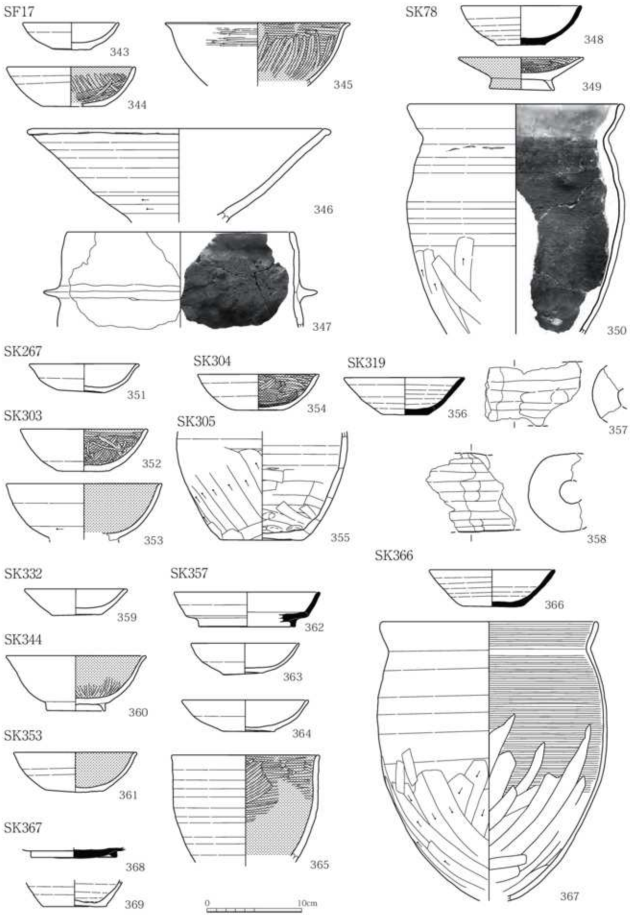


第 72 図　土坑　遺構図２

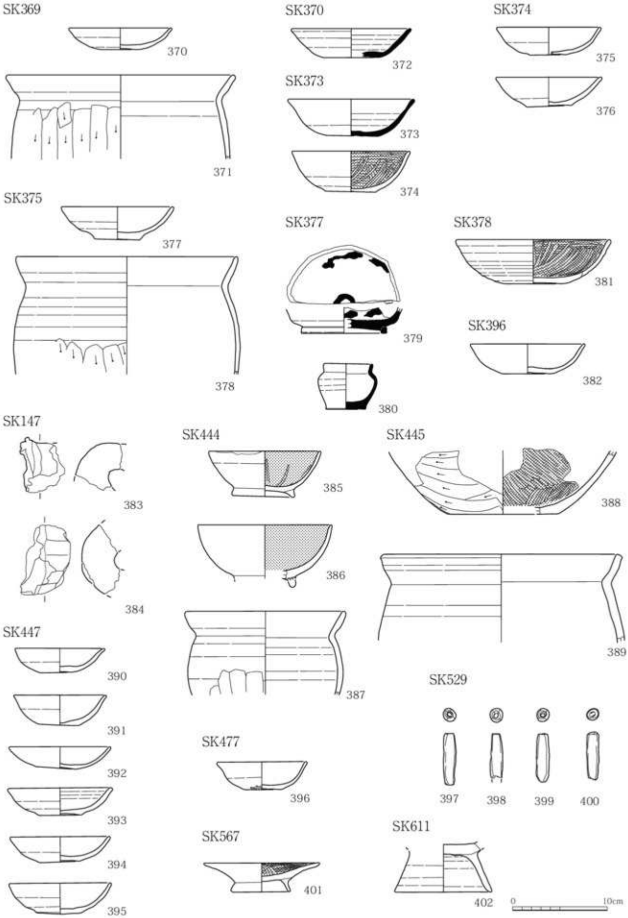


SK374 遺物出土状況（西から）

第７３図　土坑　遺構図３


SF17
343
344
345
346
347
SK78
348
349
350
SK267
351
SK304
354
SK319
356
357
SK303
352
353
SK305
355
358
SK366
366
367
SK332
359
SK357
362
363
364
365
SK344
360
SK353
361
SK367
368
369
0
10cm

第74図　土坑　遺物図1


SK369
370
371
SK370
372
SK373
373
374
SK374
375
376
SK375
377
378
SK377
379
380
SK378
381
SK396
382
SK147
383
384
SK444
385
386
387
SK445
388
389
SK447
390
391
392
393
394
395
SK477
396
SK567
401
SK529
397
398
399
400
SK611
402
0
10cm

第75図　土坑　遺物図２

7　遺物集中

SX02

位置：Ⅲ P07 グリッド。**検出：**土器が集中する所を確認したが、プランが確認できなかったため、土器集中として記録した。**重複：**（旧）SB14。（新）SB01。**構造：**0.84m × 0.80m の範囲に遺物がまとまって出土した。**遺物：**403 は土師器杯、404 ～ 406 は黒色土器塊、407 は須恵器壺、408 は須恵器甕である。404 は底部糸切痕と円形の沈線が確認され、高台貼付の作業工程が観察できる。**時期：**平安時代に帰属すると判断した。

8　遺構外の遺物

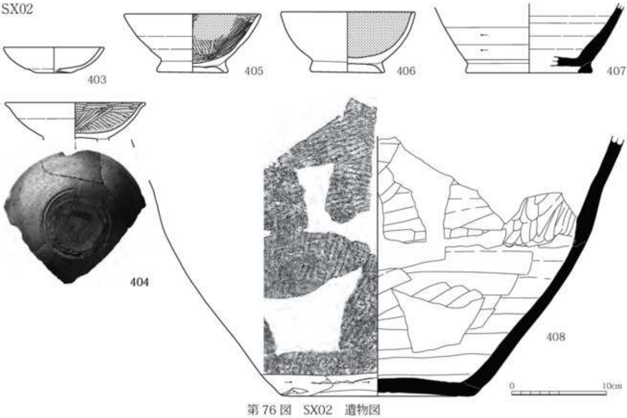
第 77 図 409 ～ 411 は須恵器杯で墨書が認められる。412 は黒色土器杯、413・414 は黒色土器埦、415 は灰釉陶器皿、416 は灰釉陶器小瓶、417・418 は須恵器壺、419・420 は土師器小甕、421 は土師器甕で線刻が認められる。422 は古墳時代の土師器高坏、423 須恵器四耳甕、424 は平瓦である。この他、Ⅲ P01・Ⅲ P02・Ⅲ P07・Ⅲ K22 グリッドでほぼ完形の黒色土器坏、土師器杯、土師器小甕などが出土した（第 77 図写真）。

第 78 図 1 はガラス小玉である。

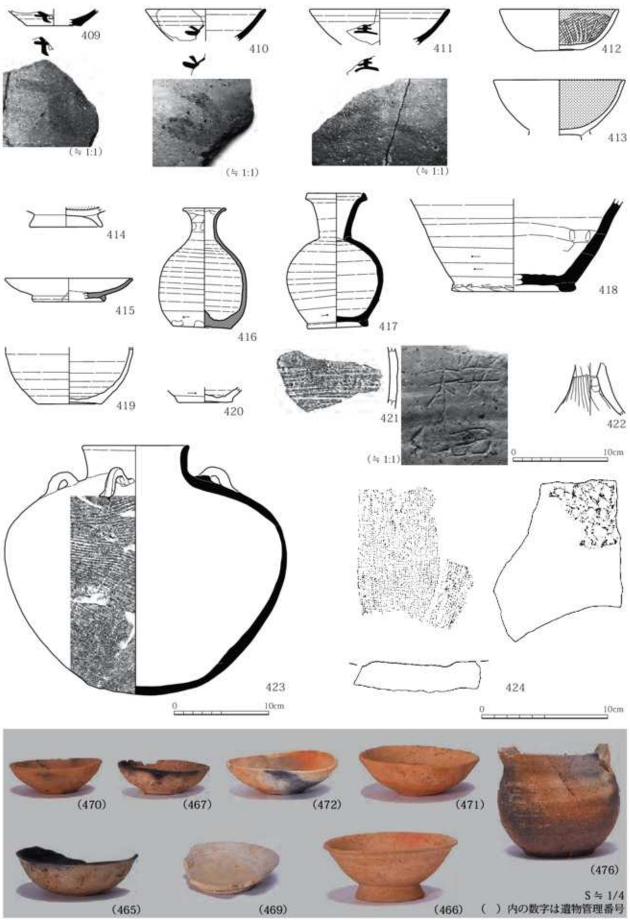
参考文献

長野県埋蔵文化財センター 1999『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 － 古代 1 編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42

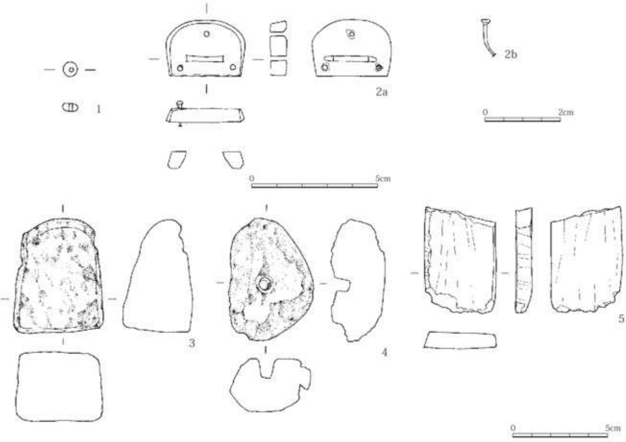
長野県埋蔵文化財センター 2000『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 － 古代 2・中世・近世編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50



第 76 図　SX02　遺物図


409
410
411
412
413
(≒1:1)
(≒1:1)
(≒1:1)
414
415
416
417
418
419
420
421
(≒1:1)
422
0
10cm
423
0
10cm
424
0
10cm
(470)
(467)
(472)
(471)
(476)
(465)
(469)
(466)
S≒1/4
(　) 内の数字は遺物管理番号

第77図　遺構外　遺物図

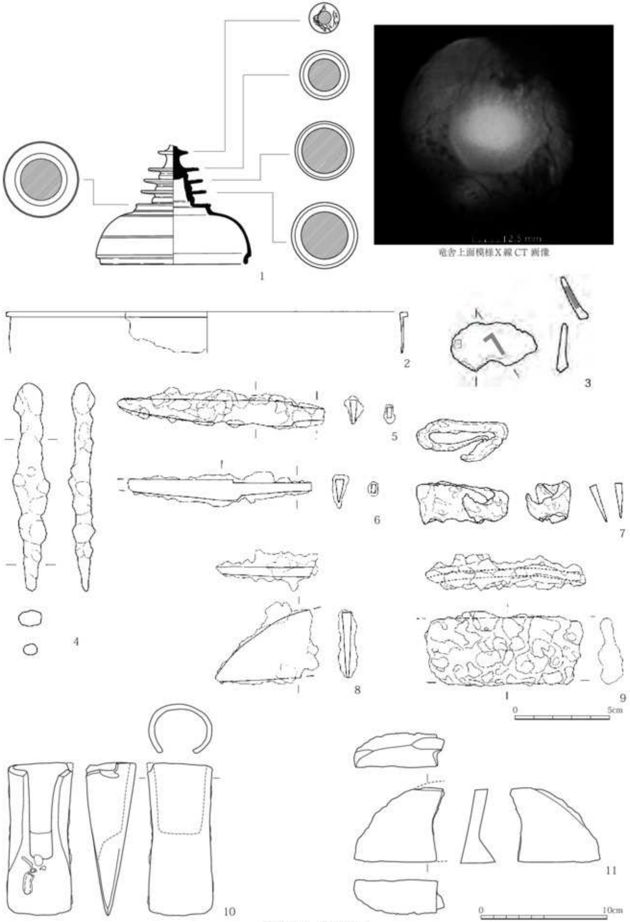


第78図　石製品他

第６表　石製品他観察表

図版番号	PL番号	管理番号	材質・石材	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	PL39	103	ガラス	ガラス小玉	2区5ﾄﾚﾝﾁ南	0.6	0.6	0.4	0.1
2	PL39	54	透緑閃石岩か	丸鞆・鋲	SB24南西区下層	2.2	3.2	0.65	8.54
3	PL39	53	軽石	石製品	SB33・SB34	6.0	4.7	3.7	38.6
4	PL39	52	軽石	有孔石製品	SB31	6.4	3.9	2.8	21.6
5	PL39	55	凝灰岩	砥石	SB25Pit2	(5.6)	3.7	0.9	30.8

（　）内の数値は残存値を示す。



第79図　金属製品

第７表　金属製品観察表

図版番号	PL番号	管理番号	材質	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	PL34	204	銅	塔鋺形合子	SB04No.1	口径 7.8 最大径 8.2	器高 (6.3)	0.07～0.2	97.2
2	PL34	1	銅	銅鋺か	SB01No.2	口径 21.1	器高 (2.2)	0.07 (胴厚)	7.4
3	PL34	6	銅	銅片	SK71	(4.5)	(2.6)	0.6	19.5
4	PL35	83	鉄	鉄鏃	SB33	11.1	0.8	0.3	23.6
5	PL35	36	鉄	刀子	ⅢP7	(10.9)	1.3	0.4	23.8
6	PL35	82	鉄	刀子	SB33刀子No.1	(9.7)	1.1	0.4	11.9
7	PL35	28	鉄	不明	SB05東区	4.9	2.0	0.4	19.9
8	PL35	22	鉄	鎌の刃先	SB05No.18	(5.4)	(3.5)	0.6	6.4
9	PL35	78	鉄	鉄鎌	SB23 北東	(8.4)	3.1	0.5	57.8
10	PL35	37a	鉄	鉄斧	ⅡY09 No.1	11.95	5.27	3.91	303.56
11	PL35	37b	鉄	不明	ⅡY09 No.1	6.63	6.30	2.74	107.69

（　）内の数値は残存値を示す。

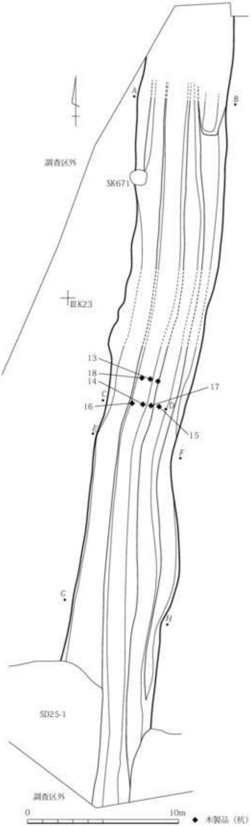
第４節　中世以降の遺構と遺物

１　溝跡

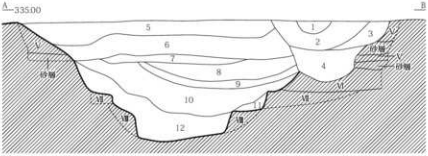
SD01

位置：２区Ⅲ K08・09・13・14・18・19・23・24、Ⅲ P03・07・08・12・13・18 グリッド。**検出：**第１検出面で埋土の広がりを確認したが、第２検出面で輪郭を確定した。断面形および埋土の状況を把握するために北端部（Ⅲ K13・14グリッド）・中央部（Ⅲ K23・24 グリッド）・南端部（Ⅲ P13・18 グリッド）を人力で掘削した。その他は重機等を用いて掘削し遺物の取り上げに努めた。２区の北端から南端まで確認できた。しかし村山堰の北にあたる 3a 区と北八幡川の南にあたる１区では認めることができなかった。**重複：**（旧）SB08・SB15・SB33・SD17・SD18・SD23・SD25-2・SX01：遺構検出・土層断面観察で確認。SK378：遺構検出で確認。（新）SD25-1：遺構検出・土層断面観察で確認。SD01 の上半が切られる。SK378・SK379・SK671：遺構検出で確認。**埋土：**シルトを主体とし、下層には砂粒を多く含む。北部では埋土中層に枝葉を多く含む有機物層が面的に広がる。**形態：**方位南－北。長さ 52.24m（残存値）。幅 5.70m。深さ 1.77m。**構造：**南北両端は確認できなかった。しかしその延長にあたる北側の 3a 区と南側の１区では確認できず、底面は北から南へ傾斜していることから、村山堰と北八幡川をつなぐ水路であったと言える。薬研堀状で、幅約 0.8 ～ 1.7m の平らな底面から急角度に立ち上がり外方へ開く。南端部には東壁中位に平坦面を有する所がある。遺構に伴う構造物としては、Ⅲ K18 グリッドにおいて木杭列を確認した。溝を横断するように２列の木杭が打ちこまれているが、その先端は、埋土中（４・５層）にとどまっており、埋没途中に構築されている。木杭の先端は加工されているが、幹の樹皮は残存し、かつ細いものであることから堅牢な構造物は想定されない。**遺物出土状**

SD01 全景（北から）

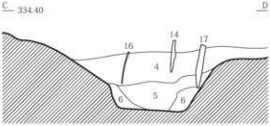


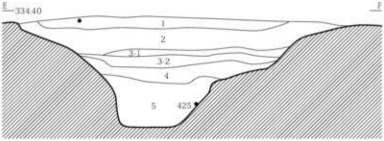
第80図　SD01（１）



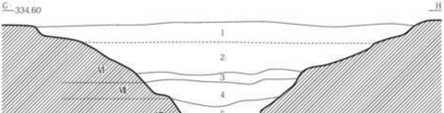
A－B
1　にぶい黄褐色（10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。掘り込み埋土。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。掘り込み埋土。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量混。掘り込み埋土。
4　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黒色シルトブロック少量混。掘り込み埋土。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
6　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
7　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黒色シルト混。
8　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黒色シルトブロック少量混。
9　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。有機物（木片）多量混。土器出土。
10　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黒色シルトブロック少量、砂ブロック状混。
11　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黒色シルトブロック多量混。
12　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。砂多量、黒色シルトブロック少量混。
(ローマ数字は基本層序に対応)

SD01 中央断面（南から）





SD01 中央断面（南から）



C－D　E－F　G－H
1　暗褐色土 (10YR3/3)　しまりあり、粘性あり。ローム粒微量、土器片混。
2　暗褐色土 (10YR3/3)　しまりあり、粘性あり。褐鉄鉱多量混。
3　灰黄褐色土 (10YR4/2)　しまりあり、粘性強。粘土層。上面、鉄分集積。
　3-1　上面、鉄分集積。
　3-2　3-1 層より鉄分集積薄い。
4　オリーブ黒色土 (10Y3/1)　しまりあり、粘性強。粘土層。溝壁面近くに地山由来の砂層混。
5　オリーブ黒色土 (10Y3/1)　しまりあり、粘性強。粘土層。４層より暗色。
6　青黒色土 (5PB2/1)　しまりあり、粘性強。地山Ⅷ層起源。
(ローマ数字は基本層序に対応)

SD01 遺物出土状況（南から）

第 81 図　SD01（２）

況：おもに中層の有機物層より上位において焙烙・内耳鍋のほか五輪塔が出土した。五輪塔はⅢ K18・19・23 グリッドの中層から投げ込まれたような状態である。下層は遺物は少なく、平安時代の土師器坏が出土した。平安時代と中世の遺物が出土しているが、層位的に時代区分ができるかどうか判明しなかった。**遺物**：第 85 図 425･426 は土師器坏、427 は黒色土器耳皿で底部中央に穿孔がある。428 は唐津陶器皿、429 は天目茶碗、430 は土師器甑、431・432 は内耳鍋である。この他、無文銭２点、刀子１点、鉄滓、宝篋印塔２点（第 103 図 36）、五輪塔 41 点（風空輪 23 点、火輪６点、水輪９点、地輪３点）（第 102･103 図６・７・９～ 19・21 ～ 25・29 ～ 31・33）、石臼２点、砥石１点、石鉢１点、凹石１点、軽石２点（第 104 図 45･46）、板状木製品２点（第 106 図４・５）、杭６点（第 106 図 13 ～ 18）などが出土した。この他、焼けた粘土塊２点、鉄滓３点、ヒトの下顎歯・頭蓋骨・四肢骨・寛骨・上腕骨、動物骨（ウマ・シカ・イノシシ）が出土した。**時期**：遺構の重複関係から平安時代末から中世に掘削され、近世の遺物が上層で出土していることから、埋没したのは近世であると判断した。

SD09

位置：１区Ⅲ U9 グリッド。**検出**：埋土の輪郭は不明瞭で、土層断面観察で埋土を確認しながら掘削した。西端部を確認し、東側は調査区外へおよぶ。**重複**：なし。**埋土**：地山黄褐色土ブロックを多く含む。**形態**：方位東－西。長さ 2.28m（残存値）。幅 0.44m。深さ 0.31m。**構造**：東西にまっすぐ延びる。断面形はＵ字形。底面は凹凸をなす。**遺物**：第 85 図 433 は埋土下層から出土した軟質須恵器坏である。**時期**：出土した遺物は古代のものであるが、第１検出面で確認できたことから、埋没時期は中世であると判断した。

SD13

位置：２区Ⅲ P15、Ⅲ Q11 グリッド。**検出**：帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。西端部は SB30 の壁面を壊しており、東側は調査区外へおよぶ。**重複**：（旧）SB25・SB30：遺構検出で確認。**埋土**：黒褐色土を主体とする。黄褐色シルトブロックを多量に含み、人為的な埋戻しである。**形態**：方位東－西。長さ 5.42m（残存値）。幅 0.74m。深さ 0.43m。**構造**：東西にまっすぐ延びる。断面形は埦形。底面の幅は一定でなく、長楕円形の土坑を連続させるようにして掘削している。**遺物**：第 85 図 434 は雷文帯を持つ青磁である。**時期**：遺構掘り込み面の高さ、および出土遺物から中世以降と判断した。

SD16

位置：２区Ⅲ K10・15・20 グリッド。**検出**：第２検出面で、帯状に広がる埋土の輪郭を確認した。南端部を確認したが、北側は調査区外へおよぶ。**重複**：（旧）SD17・SD18・SD23：遺構検出で確認。（新）SK679：遺構検出で確認。なお、SD20 との新旧関係は確認できなかった。**埋土**：単層のシルト質で鉄分の集積がある。**形態**：方位南－北。長さ 11.82m（残存値）。幅 0.87m。深さ 0.23m。**構造**：南北にまっすぐ延びる。断面形は埦形。**遺物**：土師器、黒色土器破片が数点出土したのみである。**時期**：中世以降。

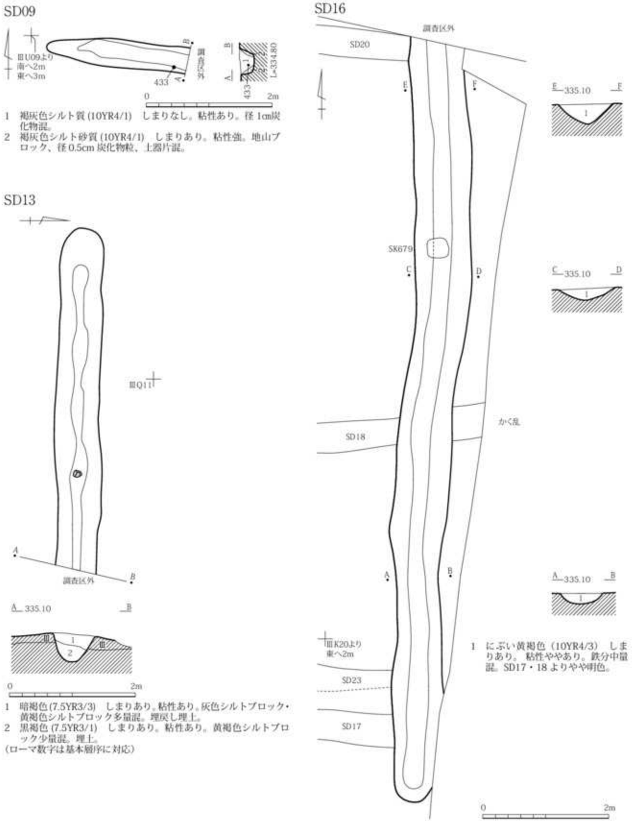
SD25-1

位置：２区Ⅲ P06・11・12・13・14・15・18・19・20、Ⅲ Q11・16 グリッド。**検出**：調査区南端部で埋土の広がりを検出した。**重複**：（旧）SB06・SB09・SB13・SB30・SK613・SD01・SD25-2：遺構検出で確認。**埋土**：にぶい黄褐色土を主体としており、水成堆積とは考えにくい。**形態**：方位東－西。長さ 35.34m（残存値）。幅 4.79m。深さ 2.78m。**構造**：西から流れ込み、やや蛇行気味ではあるが、ほぼ東西にまっすぐ走る。底面は平坦で、壁面はまっすぐ外側に開く。**遺物**：ほとんど出土していない。**時期**：遺構の重複関係から、近世以降。

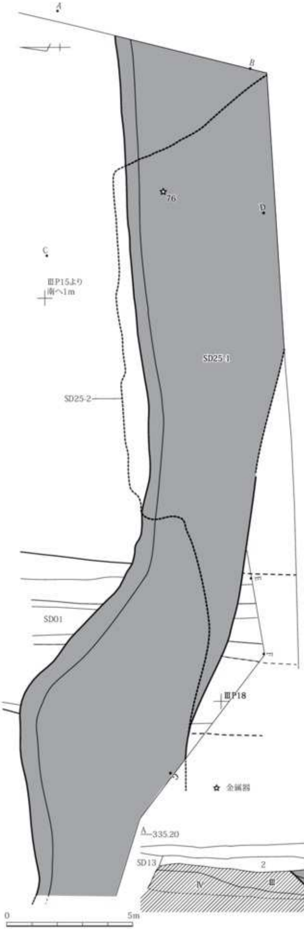
SD25-2

位置：２区Ⅲ P12・13・14・15・18・19・20、Ⅲ Q16 グリッド。**検出**：SD25-1 直下で大規模な地山の崩落を確認した。軟弱地盤であったため、底面までは掘削できなかった。**重複**：（旧）SB30：遺構検出・

土層断面観察で確認。（新）SD01・SM62：遺構検出で確認。SD25-1：遺構検出・土層断面で確認。**埋土：**地山の大形ブロックを主体とする。**構造：**壁面は、崩落によって急角度に傾斜しており、下位においては壁面が抉られオーバーハングしている所もあった。**遺物出土状況：**埋土中に平安時代と中世の遺物が散在



第 82 図　SD09・13・16

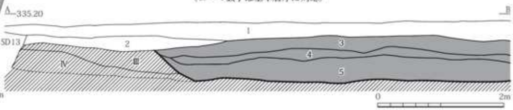


SD25 完掘（東から）

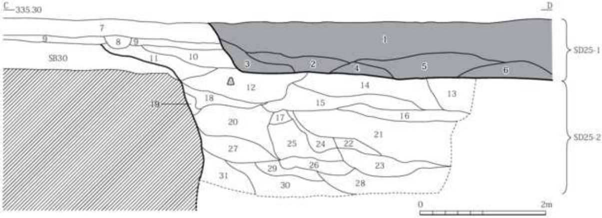
SD25 断面 E-F-G（北から）

SD25-1 と SD01 の重複関係（北東から）

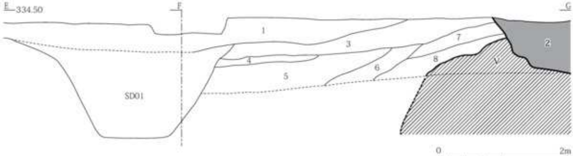
1　暗褐色 (7.5YR3/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。１層より暗色。SD25-1 埋土。
4　暗褐色 (7.5YR3/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。整地土層。SD25-1 埋土。
5　暗褐色 (7.5YR3/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。SD25-1 埋土。
（ローマ数字は基本層序に対応）



第 83 図　SD25（１）

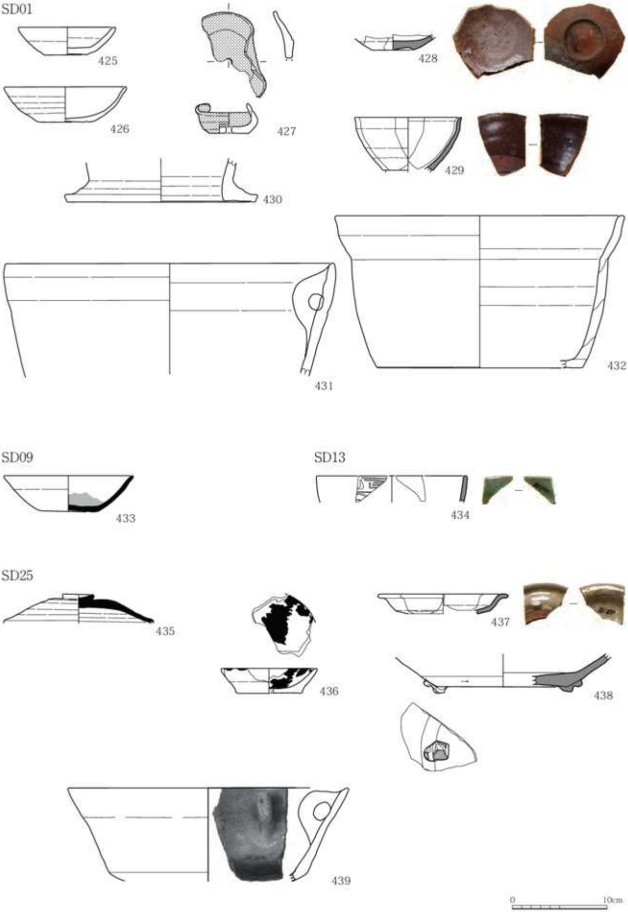


1　にぶい黄褐色（10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量、炭化物微量混。SD25-1 埋土。
2　にぶい黄褐色（10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。1 層より暗色。SD25-1 埋土。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。SD25-1 埋土。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性強。灰色シルトブロック少量混。SD25-1 埋土。
5　にぶい黄褐色（10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。1 層より暗色。SD25-1 埋土。
6　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性強。灰色シルト層。SD25-1 埋土。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
8　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量、黄褐色シルトブロック少量混。土坑埋土。
9　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。整地土層。
10　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。SD25-2 埋土。
11　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。SD25-2 埋土。
12　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。SD25-2 埋土。
13　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。SD25-2 埋土。
14　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。やや砂質。SD25-2 埋土。
15　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。14 層よりやや暗色。SD25-2 埋土。
16　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。15 層と 21 層の漸移層。SD25-2 埋土。
17　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、砂層混。SD25-2 埋土。
18　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。SD25-2 埋土。
19　黄褐色（(10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック。SD25-2 埋土。
20　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性強。灰色シルトブロック大量混。SD25-2 埋土。
21　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。底面鉄分集積。SD25-2 埋土。
22　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。SD25-2 埋土。
23　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。シルト質。SD25-2 埋土。
24　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。鉄分集積斑状。SD25-2 埋土。
25　にぶい褐色 (7.5YR5/4)　しまり強。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。鉄分集積。SD25-2 埋土。
26　黄灰色 (2.5Y6/1)　しまり強。粘性強。シルト層。鉄分集積。SD25-2 埋土。
27　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性強。砂微量混。グライ化。SD25-2 埋土。
28　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性あり。砂多量混。SD25-2 埋土。
29　灰色 (5Y6/1)　しまりあり。粘性あり。砂大量混。SD25-2 埋土。
30　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。砂ブロック状混。SD25-2 埋土。
31　暗灰色 (N3/)　しまりあり。粘性あり。シルト。グライ化。SD25-2 埋土。



1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子、砂多量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック少量混。SD25-1 埋土。
3　にぶい褐色 (7.5YR6/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。SD25-2 埋土。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。SD25-2 埋土。
5　にぶい褐色 (7.5YR6/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト層。炭化物微量混。SD25-2 埋土。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック微量混。SD25-2 埋土。
7　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・炭化物少量混。SD25-2 埋土。
8　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。SD25-2 埋土。
(ローマ数字は基本層序に対応)

第 84 図　SD25（２）


SD01
425
426
427
428
429
430
431
432
SD09
433
SD13
434
SD25
435
436
437
438
439
0
10cm

第85図　溝跡出土遺物

している。なお、SD25 のⅢ P15 グリッド上層部分において、平安時代の土器がまとまって出土したが、SB30 出土のものと接合し、SB30 に帰属することが判明した。**遺物：**第 85 図 435 は須恵器坏蓋、436 はカワラケで黒色付着物が認められる。437 は古瀬戸挟み皿、438 は古瀬戸深皿、439 は内耳鍋である。**時期:** 出土遺物と遺構の重複関係から、中世と判断した。

2　墓跡・火葬施設

SM01

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P07 グリッド。**検出：**長方形の埋土の輪郭を検出した。土坑は浅く、検出時に骨片が確認できたため墓跡と判断した。**重複：**(旧) SK135：遺構検出で確認。**埋土：**灰色シルトを主体とする。**形態：**方位 N- 2°-E。長さ 1.10m。幅 0.66m。深さ 0.15m。**構造：**墓坑掘方は、南北に長軸を持つ長方形で、短辺はわずかに弧を描く。北頭位。仰臥屈葬で、顔は西向き。**遺物：**副葬品はなし。土師器 27g が出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM02

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K19 グリッド。**検出：**長楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**灰色シルトを主体とする。**形態：**方位 N-30°-W。長さ 0.92m。幅 0.47m。深さ 0.21m。**構造：**墓坑掘方は、南北に長軸を持つ長楕円形。手足を強く曲げた屈葬である。**遺物：**副葬品はなし。土師器 12g が出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM06

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P04 グリッド。**検出：**長楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**１層は人骨上面の埋土。２層は人骨部分。３層は人骨と土坑間の埋土。４層は人骨下埋土。**形態：**方位 N-10°-W。長さ 0.84m。幅 0.48m。深さ 0.16m。**構造：**墓坑掘方は、南北に長軸を持つ長楕円形。掘方底面には、粘性の強い褐灰色シルトを敷いている。側臥屈葬か。**遺物：**副葬品はなし。土師器 147g・黒色土器 17g・須恵器 21g・灰釉陶器２g が出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM12

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K19 グリッド。**検出：**埋土の輪郭は不鮮明で、骨を検出した後、埋土を除去しながら土坑の壁を検出した。**重複：**(旧) SX03：遺構検出で確認。**埋土：**灰色シルトを主体とする。**形態：**方位 N-19°-E。長さ 0.98m。幅 0.51m。深さ 0.15m。**構造：**墓坑掘方は、南北に長軸を持つ長方形。北頭位。側臥屈葬。右上肢は肘を強く曲げており、左は 90 度程度肘を曲げている。左右とも膝は強く曲げている。南端部では、骨（脚）の上面から、拳大の礫がまとまって出土している。**遺物：**膝付近から銭貨が３点（第 100 図 26）出土したが、錆で凝着しており銭種は不明である。その他、土師器 90g・黒色土器 53g・灰釉陶器６g が出土したが、これらは混入である。**時期：**中世以降。

SM18

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K19 グリッド。**検出：**人骨のみが検出でき、それに伴う土坑は、確認できなかった。**重複：**(旧) SF09：遺構検出で確認。**埋土：**なし。**形態：**不明。**構造：**北頭位。屈葬である。左上腕は肘を強く曲げ手を顎付近に置いている。股関節も強く曲げているようである。**遺物出土状況：**副葬品はなし。土師器 62g と鉄滓１点が出土した。SM17 ～ 21 付近をはじめ、墓群周辺では平安時代後期（11 世紀代）の土師器も出土しているが、共伴する炭化物はいずれも 13 世紀代以降の年代を示しており（第５章２節）、いずれも混入と判断した。**時期：**中世以降。

SM21

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K19 グリッド。**検出：**SM12 より下層で検出した。人骨のみが検出でき、

それに伴う土坑は、確認できなかった。**重複**：(旧) SX03。**埋土**：なし。**形態**：不明。**構造**：北頭位。側臥屈葬で、顔は西向きか。**遺物**：副葬品はなし。黒色土器２g・灰釉陶器 15g が出土し、いずれも混入である。**時期**：中世以降。

SM22

種別：土葬墓。**位置**：２区Ⅲ K24 グリッド。**検出**：長方形の埋土の輪郭を検出した。検出時に頭骨が確認できた。**重複**：(旧) SX05：遺構検出で確認。(新) SF14：遺構検出で確認。**埋土**：粘性の強い灰色シルトを主体とする。焼骨片を含む。**形態**：方位 N-3° -W。長さ 0.90m（残存値）。幅 0.52m。深さ 0.30m。**構造**：墓坑掘方は、南北に長軸を持つ長方形で、南東隅が張り出す。北頭位。屈葬。左肘はほぼ直角に曲げて手は腹部に置いている。下肢は股関節・膝関節ともに強く曲げている。**遺物**：副葬品はなし。土師器 153g・黒色土器 95g・須恵器 114g・灰釉陶器 27g・磁器４g が出土し、いずれも混入である。**時期**：中世以降。

SM29

種別：土葬墓。**位置**：２区Ⅲ K25 グリッド。**検出**：人骨のみが検出でき、それに伴う土坑は確認できなかった。下層には墓坑を伴う SM55 があるが、関係性については明らかにできなかった。**重複**：(旧) SK604：遺構検出で確認。**埋土**：なし。**形態**：不明。**構造**：北頭位。側臥屈葬で、顔は西向きか。**遺物**：副葬品はなし。土師器 23g・須恵器 18g 出土し、いずれも混入である。**時期**：中世以降。

SM31

種別：火葬遺構。**位置**：２区Ⅲ P09 グリッド。**検出**：長楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：(旧) SB26・32・SB34：遺構検出で確認。**埋土**：炭化物を多量に含む。**形態**：方位 N-114° -E。長さ 1.74m。幅 0.58m。深さ 0.21m。**構造**：東西主軸で、西端に土坑を有し、東へ溝状の掘り込みが延びる。火床が中央床面に確認でき、壁面も被熱する。炭化物は東半に広がり、その下から焼骨が出土した。**遺物**：永楽通宝他の銭貨３点（第 100 図 27）と釘が出土した。銭貨は錆で凝着しており、２点の銭種は不明である。この他、土師器片 50g・黒色土器片４g が出土したが混入である。**時期**：中世以降。

SM32

種別：火葬遺構。**位置**：２区Ⅲ P14・15 グリッド。**検出**：平面長方形の被熱した壁面を検出し、遺構範囲とした。**重複**：(旧) SB30：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土**：円礫を含む暗褐色土を主体とし、底面に炭化物・焼骨を多く含む。**形態**：方位 N-114° -E。長さ 1.74m。幅 0.58m。深さ 0.21m。**構造**：平面形は、東西に主軸を持つ隅丸長方形。壁面全面が被熱しており、底面には炭化物・焼骨が広がる。１層は廃棄後の埋土と判断した。**遺物**：底面から鉄釘（第 101 図 55）が４点出土した。その他、土師器 51g、黒色土器５g、焼けた粘土塊１点が出土したが、これらは混入である。**時期**：中世以降。

SM33

種別：土葬墓。**位置**：２区Ⅲ P09 グリッド。**検出**：長方形の埋土の輪郭を検出したが、不鮮明であった。検出時に頭骨が確認できた。**重複**：(旧) SB24・SK386：遺構検出で確認。**埋土**：暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物はなし。**形態**：方位 N-77° -W。長さ 1.13m。幅 0.79m（残存値）。深さ 0.17m。**構造**：墓坑掘方の平面形は、東西に主軸を持つ長方形。西頭位。屈葬で、膝のあたりで礫を抱え込むような形となる。**遺物**：副葬品はなし。土師器 29g・須恵器５g が出土し、いずれも混入である。**時期**：中世以降。

SM34

種別：土葬墓。**位置**：２区Ⅲ P14 グリッド。**検出**：楕円形の埋土の輪郭を検出した。検出面で人骨の大半が露出していた。**重複**：なし。**埋土**：暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物はなし。**形態**：方位 N-5° -W。長さ 1.33m。幅 0.81m。深さ 0.45m。**構造**：墓坑掘方の平面形は、南北に主軸を持つ長楕円形。北頭位。

仰臥屈葬。顔をやや西に向け、肘は左右ともに深く曲げて手を頸付近に置いている。股関節はほぼ90度に曲げる。膝は左に倒しており膝を強く曲げ胡坐をかく。**遺物：**副葬品はなし。**時期：**中世以降。

SM47

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K25グリッド。**検出：**骨を確認した後、埋土の輪郭を検出した。**重複：**（新）SM40・SM41・SM46：遺構検出で確認。**埋土：**単層。**形態：**長さ0.59m。幅0.37m（残存値）。深さ0.02m。**構造：**墓坑掘方の平面形は円形。中央に骨が集積する。**遺物：**副葬品はなし。土師器１gが出土し、混入である。**時期：**中世以降。

SM48

種別：火葬墓。**位置：**２区Ⅲ K20グリッド。**検出：**骨を含む埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**褐色土を主体とし、焼骨を含む。**形態：**長さ0.44m。幅0.42m。深さ0.12m。**構造：**平面形は円形。断面形は箱形。埋土全体に焼骨が散在しており、蔵骨器は存在しない。**遺物：**副葬品はなし。土師器５g・黒色土器３gが出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM49

種別：土葬墓。位置：２区Ⅲ K20グリッド。**検出：**検出面で人骨を確認し、長方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**にぶい黄褐色土を主体とする。**形態：**方位N-9°-W。長さ0.94m。幅0.58m。深さ0.11m。**構造：**平面形は隅丸長方形。北頭位。側臥屈葬。**遺物：**副葬品はなし。**時期：**中世以降。

SM51

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K20グリッド。**検出：**楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**にぶい黄褐色土を主体とする。**形態：**方位N-113°-E。長さ0.80m。幅0.61m。深さ0.10m。**構造：**平面形は楕円形。側板を締めるタガを確認し、その内側から人骨が出土した。土坑の南寄りに小さな桶状の容器を棺として設置していると考えられる。**遺物：**副葬品はなし。**時期：**中世以降。

SM53

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K20・25グリッド。**検出：**第２検出面で、隅丸長方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（旧）SM54：遺構検出で確認。（新）SD15：遺構検出で確認。**埋土：**レンズ状堆積。１層は焼骨・炭化物を含んでおり、上層の火葬墓群からの混入と判断した。**形態：**方位N-0°。長さ1.22m。幅0.95m。深さ0.37m。**構造：**平面形は、南北に長軸を持つ隅丸方形。断面形は箱形。床面四隅と中央および短辺中央に棺台となる礫が置かれる。鉄釘が壁際から出土していることから木棺が想定できる。人骨は、底面および棺台礫直上から出土した。**遺物：**鉄釘が47点出土した（第101図56～58・62・64・67～72）。釘には木質部が不着したものが複数認められる。**時期：**中世以降。

SM54

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K25グリッド。**検出：**第２検出面で、楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（新）SM53・SD15：遺構検出で確認。**埋土：**にぶい黄褐色土を主体とする。**形態：**方位N-5°-E。長さ1.04m。幅0.63m。深さ0.12m。**構造：**平面形は南北に主軸を持つ長楕円形。北頭位。顔を西に向けている。屈葬。右肘は軽く曲げ、股関節や膝関節は強く曲げている。**遺物：**副葬品はなし。土師器５g・須恵器７gが出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM55

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ K25グリッド。**検出：**第２検出面で、隅丸長方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**骨はおもに２層から出土しており、１層は墓坑埋土、３層は整地土。**形態：**方位N-5°-W。長さ1.05m。幅0.85m。深さ0.33m。**構造：**平面形は、南北に主軸を持つ隅丸長方形。断面形は箱形。歯が北壁付近から出土していることから北頭位。その他の人骨は、遺存状態が悪く、埋葬姿勢については

不明である。**遺物：**埋土上層から五輪塔風空輪（第102図20）が１点出土した。**時期：**中世以降。

SM56

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ L21グリッド。**検出：**長方形の埋土の輪郭を検出した。検出面で人骨が確認できた。**重複：**なし。**埋土：**暗褐色土を主体とする。**形態：**方位N-12°-W。長さ1.64m。幅0.66m。深さ0.14m。**構造：**平面形は、南北に主軸を持つ隅丸方形。北頭位。伸展葬。**遺物：**副葬品はなし。土師器20g・黒色土器４gが出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM58

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P09グリッド。**検出：**人骨を検出したが、それに伴う土坑は確認できなかった。**重複：**（旧）SB24。**構造：**北頭位。屈葬か。**遺物：**副葬品はなし。**時期：**中世以降。

SM59

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P09グリッド。**検出：**人骨を検出したが、それに伴う土坑は確認できなかった。**重複：**（旧）SB24。**構造：**北頭位。屈葬で、脚は胡坐をかく。**遺物：**副葬品はなし。土師器２g・黒色土器２gが出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SM60

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P04・09グリッド。**検出：**人骨を検出したが、それに伴う土坑は確認できなかった。**重複：**（旧）SB26：遺構検出で確認。**構造：**北頭位。側臥屈葬で、顔は西向き。左手は折り曲げ右胸に置き、右手は下方に伸ばしているようである。**遺物：**副葬品はなし。**時期：**中世以降。

SM64

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P13・14グリッド。**検出：**第２検出面で、楕円形の埋土の輪郭を検出した。残存する掘り込みは浅い。**重複：**なし。**埋土：**暗褐色土を確認した。**形態：**方位N0°。長さ1.67m。幅0.66m。深さ0.07m。**構造：**北側から頭骨を検出し、北頭位と推定した。木棺の北短側板および東長側板の圧痕とみられる落ち込みが確認できた。**遺物：**副葬品はなし。**時期：**中世以降。

SF09・SF13

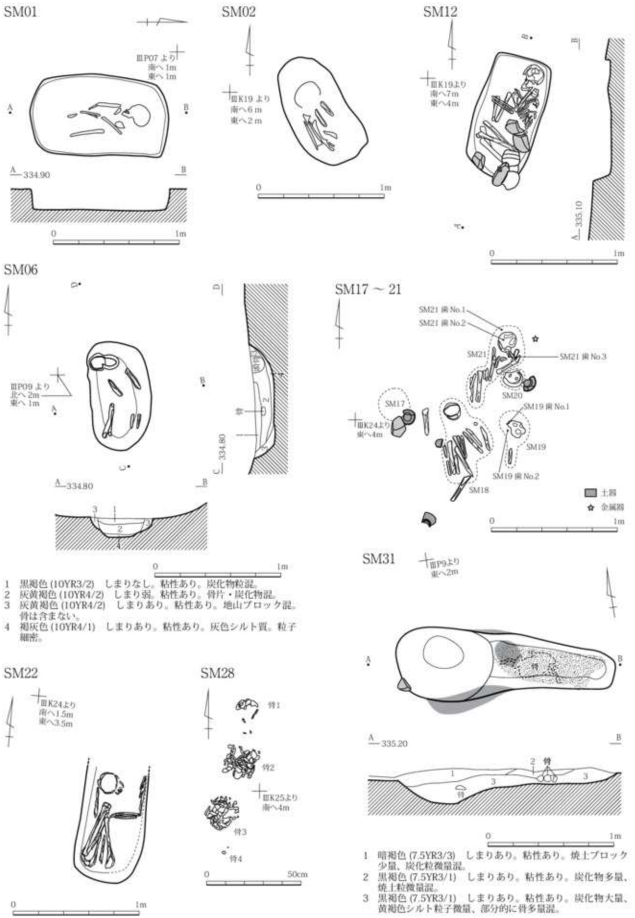
種別：火葬遺構。**位置：**２区Ⅲ K19・24グリッド。**検出：**検出した炭化物の範囲をSF09、焼土の範囲をSF13とした。同一遺構。**重複：**（新）SM16～19：遺構検出で確認。**埋土：**焼骨片・炭化物を多量に含む。**形態：**方位N-99°-E。長さ1.16m。幅0.74m。深さ0.22m。**構造：**炭化物はT字形に広がり、その中央に長楕円形の燃焼部を有する。燃焼部は、壁面が被熱する。**遺物：**銭貨（第100図30）と釘（第101図60）が出土した。銭貨は燃焼部より出土し、被熱している。その他、土師器５g・黒色土器１g出土したが、これらは混入である。**時期：**中世。

SF11

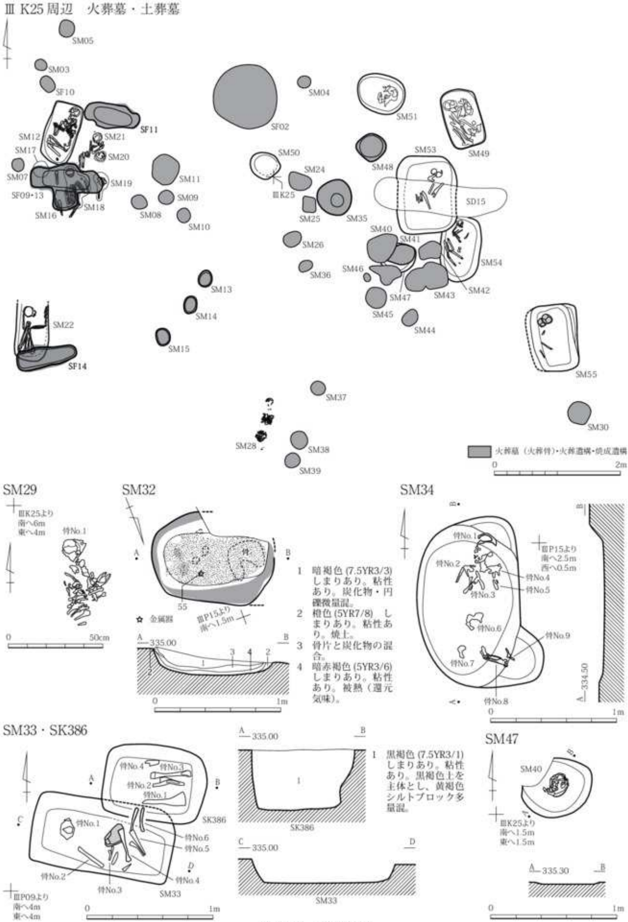
種別：火葬遺構。**位置：**２区Ⅲ K19グリッド。**検出：**長楕円形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**なし。**埋土：**炭化物を主体とし、焼骨・焼土を含む。**形態：**方位N-98°-E。長さ0.90m。幅0.38m。深さ0.11m。**構造：**平面形は、東西に主軸を持つ長楕円形。東側壁面は被熱している。**遺物：**なし。**時期：**中世以降。

SF14

種別：火葬遺構。**位置：**２区Ⅲ K24グリッド。**検出：**長方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（旧）SX05・SM22：遺構検出で確認。**埋土：**焼土・炭化物・骨を含む。下層に炭化物が堆積する。**形態：**方位N-82°-E。長さ0.95m。幅0.32m。深さ0.17m。**構造：**平面形は隅丸長方形。底面が傾斜しており西端が最深部となる。長辺にあたる北・南壁が被熱している。**遺物：**東側に焼骨が集中する。土師器１片が出土した。**時期：**中世以降。

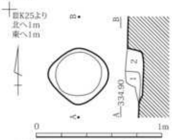

SM01
ⅢP07 より
南へ 1m
東へ 1m
A
B
334.90
0
1m
SM02
ⅢK19 より
南へ６ｍ
東へ２ｍ
0
1m
SM12
ⅢK19より
南へ7m
東へ4m
335.10
0
1m
SM06
ⅢP09 より
北へ 2m
東へ 1m
334.80
骨
0
1m
1　黒褐色 (10YR3/2)　しまりなし。粘性あり。炭化物粒混。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまり弱。粘性あり。骨片・炭化物混。
3　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。地山ブロック混。骨は含まない。
4　褐灰色 (10YR4/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルト質。粒子細密。
SM17 ~ 21
SM21 歯 No.1
SM21 歯 No.2
SM21 歯 No.3
SM21
SM20
SM17
ⅢK24より
東へ4m
SM19 歯 No.1
SM19
SM19 歯 No.2
SM18
土器
金属器
0
1m
SM22
ⅢK24より
南へ1.5m
東へ3.5m
0
1m
SM28
骨1
骨2
骨3
骨4
ⅢK25より
南へ4m
0
50cm
SM31
ⅢP9より
東へ2m
A
B
骨
335.20
0
1m
1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土ブロック少量、炭化粒微量混。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物多量、焼土粒微量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物大量、黄褐色シルト粒子微量、部分的に骨多量混。

第 86 図　墓跡（１）


Ⅲ K25 周辺　火葬墓・土葬墓
SM05
SM03
SF10
SM04
SF02
SM51
SM49
SF11
SM12
SM21
SM17
SM20
SM07
SM19
SF09・13
SM18
SM16
SM11
SM09
SM08
SM10
SM50
SM24
ⅢK25
SM25
SM35
SM48
SM53
SD15
SM40
SM41
SM54
SM26
SM36
SM46
SM47
SM43
SM42
SM45
SM44
SM13
SM14
SM15
SM22
SF14
SM55
SM37
SM28
SM38
SM39
SM30
火葬墓（火葬骨）・火葬遺構・焼成遺構
0
2m
SM29
ⅢK25より
南へ6m
東へ4m
骨No.1
0
50cm
SM32
A
B
55
☆ 金属器
ⅢP15より
南へ1.5m
335.00
1
2
3
4
0
1m
1　暗褐色 (7.5YR3/3) しまりあり。粘性あり。炭化物・円礫微量混。
2　橙色 (5YR7/8)　しまりあり。粘性あり。焼土。
3　骨片と炭化物の混合。
4　暗赤褐色 (5YR3/6) しまりあり。粘性あり。被熱（還元気味）。
SM34
骨No.1
骨No.2
骨No.3
骨No.4
骨No.5
骨No.6
骨No.7
骨No.8
骨No.9
ⅢP15より
南へ2.5m
西へ0.5m
334.50
0
1m
SM33・SK386
A
B
C
D
骨No.1
骨No.2
骨No.3
骨No.4
骨No.5
骨No.6
SK386
SM33
ⅢP09より
南へ4m
東へ4m
0
1m
335.00
SK386
335.00
SM33
1　黒褐色 (7.5YR3/1) しまりあり。粘性あり。黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトブロック多量混。
SM47
SM40
ⅢK25より
南へ1.5m
東へ1.5m
335.30
0
1m

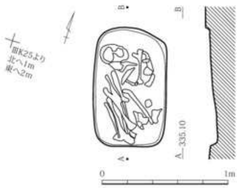
第 87 図　墓跡（２）

SM48

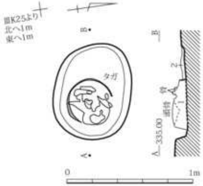


1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性あり。焼骨微量混。
2　暗褐色 (10YR3/4)　しまりややあり。粘性あり。焼骨微量混。

SM49

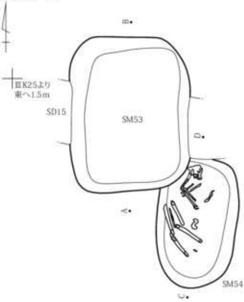


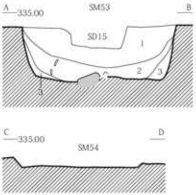
SM51



1　暗褐色 (10YR3/3)　しまり弱。粘性ややあり。骨間埋土。
2　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。埋戻し土か。

SM53・54

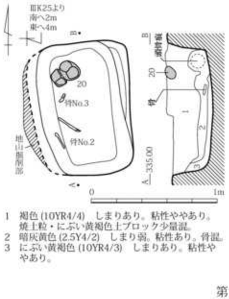




1　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまり弱。粘性ややあり。焼骨片・炭化物片微量混。
2　褐色 (10YR4/6)　しまり弱。粘性ややあり。１層ブロック微量混。
3　褐色 (10YR4/6)　しまり弱。粘性ややあり。２層と類似。１層ブロックなし。

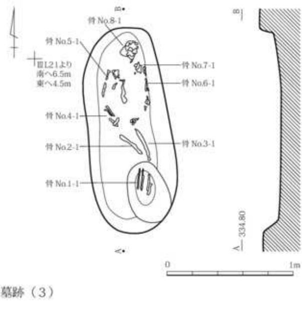
SM53釘・骨出土状態

SM55



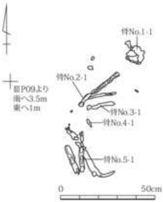
1　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。焼土粒・にぶい黄褐色土ブロック少量混。
2　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまり弱。粘性あり。骨混。
3　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。

SM56

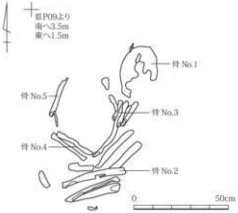


第88図　墓跡（３）

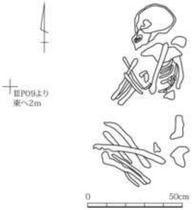
SM58



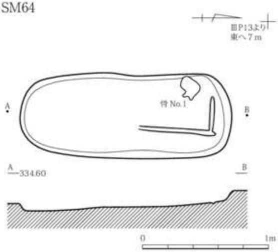
SM59



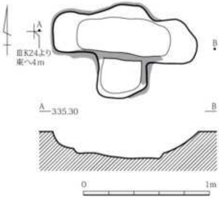
SM60



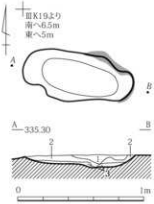
SM64



SF09・13

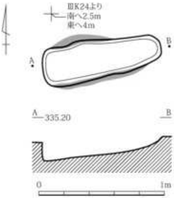


SF11



1　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。焼土・炭化物粒混。
2　黒色 (10YR1.7/1)　しまりあり。粘性ややあり。炭層。焼骨片・焼土粒混。
3　褐色 (10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物粒微量混。

SF14



第 89 図　墓跡（４）

SF16

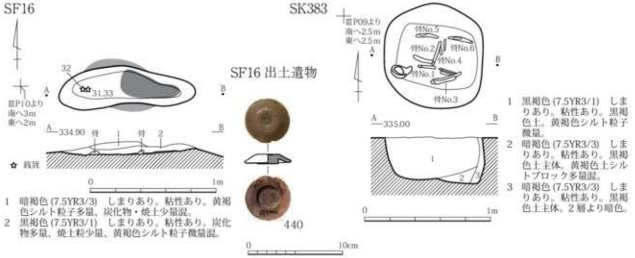
種別：火葬遺構。**位置：**２区Ⅲ P10 グリッド。**検出：**長楕円形の炭化物の広がりを確認し、遺構の輪郭と捉えた。**重複：**なし。**埋土：**炭化物・焼土を主体とする。**形態：**方位 N-89° -E。長さ 1.06m。幅 0.23m。深さ 0.10m。**構造：**平面形は不整な楕円形で、皿状に窪む。東半部床面には火床を有する。中央部の東西壁面が被熱している。西半部で、焼骨が炭化物に混入した状態で多く確認でき、その下から銭貨が出土した。**遺物：**440 は陶製合子蓋である。この他、元豊通宝・景祐元宝・熙寧元宝（第 100 図 31 ～ 33）が出土した。**時期：**中世。

SK383

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P09 グリッド。**検出：**不鮮明ではあったが、隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（旧）SB24：遺構検出で確認。**埋土：**黒褐色土を主体とする。**形態：**方位 N-83° -E。長さ 0.82m。幅 0.78m。深さ 0.40m。**構造：**平面形は、東西に長軸を持つ隅丸方形。断面形は箱形。人骨が墓坑底面で出土した。西頭位で、屈葬か。**遺物：**副葬品はなし。土師器 28g・黒色土器２g が出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。

SK386

種別：土葬墓。**位置：**２区Ⅲ P09 グリッド。**検出：**不鮮明ではあったが、隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（旧）SB24：遺構検出で確認。（新）SM33：土層断面で確認（第 87 図）。**埋土：**黒褐色土を主体とし、基本土層Ｖ層起源の黄褐色シルトブロックを多量に含む。**形態：**方位 N-85° -E。長さ 0.82m。幅 0.60m。深さ 0.53m。**構造：**平面形は、東西に長軸を持つ隅丸長方形。断面形は箱形。人骨が墓坑底面で出土した。埋葬頭位は不明。屈葬か。**遺物：**副葬品はなし。土師器 123g・黒色土器 10g が出土し、いずれも混入である。**時期：**中世以降。



第 90 図　墓跡（５）

3　焼成遺構

SF12

位置：1区Ⅲ U13 グリッド。**検出**：焼土・炭化物の広がりを遺構の輪郭として捉えた。**重複**：なし。**埋土**：被熱した底面の上に、粘性の強いにぶい黄褐色土が堆積する。**形態**：長さ 0.60m。幅 0.27m。深さ 0.06m。**構造**：被熱した底面が東西方向に広がるが、その範囲は不整形である。**遺物**：441 はカワラケである。**時期**：中世。

SF19

位置：2区Ⅲ Q01 グリッド。**検出**：第1検出面でL字状の土坑を検出した。検出面では被熱した壁面の焼土が認められた。**重複**：L字状の土坑として調査したが、2基の土坑が重複している可能性がある。**埋土**：埋土は暗褐色土を主体とし、炭化物の顕著な混入はみられない。**形態・構造**：平面形態はL字状で、長さ 0.52m。幅 0.50m、深さ 0.26m。壁面は全体的に被熱しているが、特に西壁が強く被熱している。**遺物**：442 は風炉である。長野市裾花川扇状地遺跡群栗田城跡・尾張城跡などで類似例が出土している（長野市教育委員会 1998・2014）。**時期**：中世。

SM61

位置：2区Ⅲ P10・15 グリッド。**検出**：焼土・炭化物の広がりを遺構の輪郭として捉えた。**重複**：(旧) SB30：遺構検出で確認。**埋土**：炭化物を多量に含む。**形態**：方位 N-110°-E。長さ 0.68m。幅 0.48m。深さ 0.13m。**構造**：平面形は、不整形な土坑に張り出し部をもつ。南壁中央付近が被熱する。火葬遺構と類似するが、焼骨は確認できなかった。**遺物**：土師器片1点出土したのみである。**時期**：中世以降。

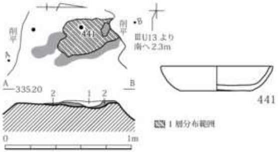
SM62

ヒトの歯が出土しているが、他の火葬施設より小さいので、焼成遺構とした。**位置**：2区Ⅲ P15 グリッド。**検出**：SD25-2 の埋土中で被熱した壁面が遺構の輪郭として捉えられた。**重複**：(旧) SD25-2：遺構検出で確認。**埋土**：炭化物を多量に含む。**形態**：方位 N-71°-E。長さ 0.58m。幅 0.25m。深さ 0.08m。**構造**：平面形は、東西に主軸を持つ楕円形。断面形は埦形。壁面は被熱しているが、底面は被熱していない。**遺物**：出土遺物なし。**時期**：中世以降。

SB16

位置：2区 P15 グリッド。**検出**：燃焼部は、円形の焼土の広がりを検出した。煙道部は、黒褐色の埋土の輪郭を検出した。当初、竪穴建物跡のカマドを想定し SB の遺構記号を用いたが、竪穴をもつ建物跡は確認できなかった。**重複**：(旧) SB30：遺構検出・土層断面観察で確認。**埋土**：黒褐色土を主体とし、焼土は少ない。**形態**：方位 N-6°-E。長さ 2.21m。幅 1.07m。深さ 0.23m。**構造**：燃焼部は、平面形円形で、北側に長煙道が付く。燃焼部壁面は、底面から内傾気味に立ち上がり、北側が強く被熱している。燃焼部底面には、薄く炭化物が広がる。煙道部は、燃焼部底面から一段わずかに高い位置に付き、水平に延びる。当初、燃焼部内から多量の軟質土器片が出土したことから、土器焼成遺構と想定した。しかし、出土した土器片はいずれも内耳鍋であり、内耳鍋を焼成するには燃焼部が小規模であることから、不明焼成遺構とした。周辺には火葬遺構もあることから、火葬施設の可能性もある。**遺物**：443 ～ 445 は内耳鍋、446 は土製品の一部と思われる破片である。この他、敲石（第 104 図 40）が1点出土した。**時期**：中世。

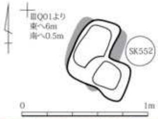
SF12



1　にぶい黄褐色 (10YR4/3)　しまりあり。粘性強。焼土ブロック・炭化物粒混。
2　赤黒色 (2.5YR2/1)　焼土（火床面）。

SF12 出土状況（東から）

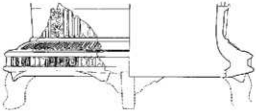
SF19



SF19 完掘（南から）

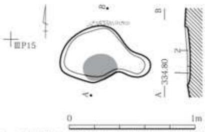
SF19 出土遺物

【参考資料】



裾花川扇状地遺跡群 尾張城跡出土 風炉

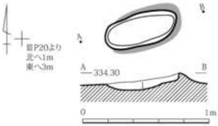
SM61



1　暗赤褐色 (2.5YR3/2)　しまりあり。粘性あり。被熱痕。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭多量混。

SM61 完掘（北から）

SM62

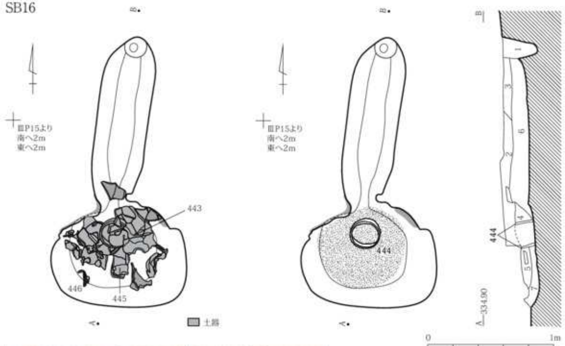


1　炭化物層。

SF62 完掘（南から）

第 91 図　焼成遺構（１）

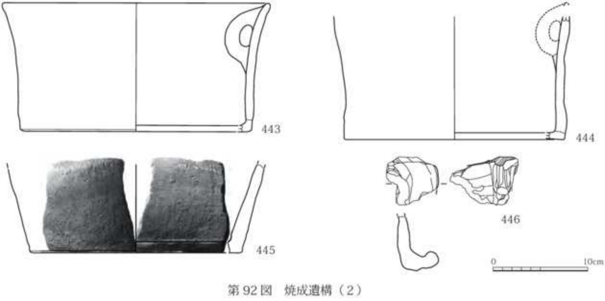
SB16



1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子微量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。焼土微量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。焼土微量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。炭化物微量混。
5　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。焼土・炭化物大量混。
6　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子大量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色土シルト主体。黄褐色シルト粒子微量混。

SB16 内耳鍋出土状況（南から）

SB16 出土遺物



第 92 図　焼成遺構（２）

4　井戸跡

SK231

位置：２区Ⅲ P01 グリッド。**検出**：円形の埋土の輪郭を検出した。底面は、重機によるたち割り調査によって確認した。**重複**：（新）SK77：遺構検出で確認。**埋土**：黒褐色土を主体とし、上層には大礫を多く含む。**形態**：長さ 1.20m。幅 1.06m。深さ約 2.20m。**構造**：素掘りの井戸である。平面形は円形。断面形は漏斗状で、検出面から約 40cm 下から壁面が垂直に落ちる。**遺物**：埋土内土器の総量は、土師器７g、須恵器 20g とわずかで、混入遺物である。**時期**：遺構検出面から平安時代から中世と判断した。

SK252

位置：２区Ⅲ P02 グリッド。**検出**：円形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：（旧）SB03・SB04：遺構検出で確認。（新）SK251：遺構検出で確認。**埋土**：下層には基本土層Ⅴ層起源の黄褐色シルトを多量に含む。**形態**：長さ 1.31m。幅 1.19m。深さ 1.60m。**構造**：平面形は上端は円形に近いが、下端は隅丸方形。壁面はやや傾斜するが直立気味である。底面は平坦。北東隅角と南東隅角から柱状木材が出土し、井桁材の可能性がある。**遺物**：447 はカワラケ、448 は青磁埦、449 は脚が付いた古瀬戸の深皿である。埋土内土器の総量は、土師器 166g、黒色土器 13g、須恵器 84g、灰釉陶器 132g、陶磁器 106g である。この他、銭貨２点（第 100 図 13・14）と釣針状の鉄製品１点が出土した。銭貨の１点は嘉祐通宝であるが、もう一点は欠損しており銭種不明である。**時期**：出土遺物から中世と判断した。

SK269

位置：２区Ⅲ P01 グリッド。**検出**：SB04 の埋土を掘り込む円形の輪郭を検出した。底面は、重機によるたち割り調査によって確認した。**重複**：（旧）SB04：遺構検出で確認。**埋土**：第１検出面の遺構埋土に多い暗灰黄色シルトを主体とする。**形態**：長さ 0.92m。幅 0.90m。深さ 1.60m。**構造**：素掘りの井戸である。平面形は不整な円形。壁面は直立する。埋土底面からは、人頭大礫がまとまって出土したが、廃棄されたものか、井戸の構築材かの判断はできなかった。**遺物**：450 は埋土上層から出土した唐津産陶器埦である。埋土内土器の総量は、土師器 360g、黒色土器３g、須恵器２g、灰釉陶器２g、陶磁器 51g である。**時期**：出土遺物から中世と判断した。

SK270

位置：２区Ⅲ P07 グリッド。**検出**：SB03 の埋土を掘り込む円形の輪郭を検出した。底面は、重機によるたち割り調査によって確認した。**重複**：（旧）SB03：遺構検出で確認。**埋土**：グライ化が進み、基本土層Ⅴ層起源のシルトブロックを多く含む。**形態**：長さ 1.12m。幅 0.92m。深さ約 2.2m。**構造**：素掘りの井戸である。平面形は楕円形。壁面は直立する。**遺物出土状況**：土器片が、埋土中に散在していた。薄い木片が、埋土下層から出土した。**遺物**：図示した土器はなく、埋土内土器の総量は、土師器 360g、須恵器 41g のみである。いずれも、混入遺物である。この他、石臼（第 105 図 50）が１点出土した。**時期**：遺構の重複関係から中世以降と判断した。

SK351

位置：２区Ⅲ P02 グリッド。**検出**：SB02・SB15 の埋土を掘り込む円形の輪郭を検出した。底面は深く、確認できなかった。**重複**：（旧）SB02・SB15：遺構検出で確認。**埋土**：レンズ状堆積をなす。下層はグライ化する。**形態**：長さ 2.42m。幅 2.14m。深さ 1.3m 以上。**構造**：素掘りの井戸である。平面形は不整円形。断面形は漏斗形。**遺物**：451 はカワラケである。この他、土師器 205g、黒色土器 17g 出土したのみであるが、これらは混入遺物である。**時期**：遺構の重複関係から中世以降と判断した。

SK560

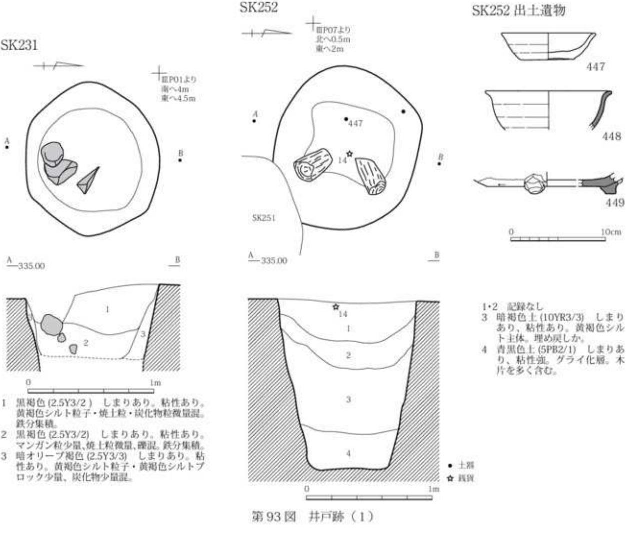
位置：２区Ⅲ L21 グリッド。**検出：**円形の埋土の輪郭を検出した。底面は、重機によるたち割り調査によって確認した。**重複：**なし。**埋土：**レンズ状堆積をなす。下層はグライ化する。**形態：**長さ 1.58m。幅 1.52m。深さ約 1.8m。**構造：**素掘りの井戸である。平面形は円形。壁面は、外側に向かって開き気味になる。**遺物：**図示した遺物はなく、埋土内土器の総量は、土師器 102g、黒色土器 10g、須恵器 40g のみである。この他、自然木と礫が出土した。**時期：**遺構検出面から古代から中世と判断した。

SK572

位置：２区Ⅲ L21 グリッド。**検出：**円形の埋土の輪郭を検出した。底面は、重機によるたち割り調査によって確認した。**重複：**なし。**埋土：**レンズ状堆積をなす。黒褐色土を主体とし、Ⅴ層起源の黄褐色シルトブロックを含む。**形態：**長さ 1.44m。幅 1.24m。深さ約 1.5m。**構造：**素掘りの井戸である。平面形の上端は円形だが、下端部は隅丸方形。壁面は外傾する。**遺物：**第 106 図１は板状木製品、２・３は桶または樽の底板である。この他、五輪塔地輪・水輪、石臼破片、大形礫、自然木、平安時代の土器片が出土した。**時期：**出土遺物から中世以降と判断した。

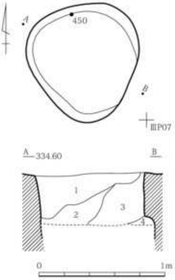
SK613

位置：２区Ⅲ P15 グリッド。**検出：**楕円形の埋土の輪郭を検出した。底面は深く、確認できなかった。**重複：**（旧）SB30：遺構検出で確認。（新）SD25-1：遺構検出で確認。**埋土：**黒褐色土を主体とする。**形態：**

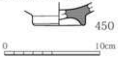


第 93 図　井戸跡（１）

SK269



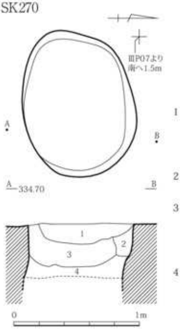
SK269 出土遺物



450

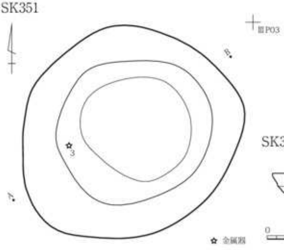
1　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)
しまりあり。粘性あり。炭化物・径 0.5cm 地山ブロック微量混。
2　暗灰黄色 (2.5Y4/2)
しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 地山ブロック少量混。
3　暗灰黄色 (2.5Y4/2)
しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 地山ブロック中量、径 1cm 黒褐色ブロック少量混。
4　暗灰黄色 (2.5Y4/2)
しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 地山ブロック少量、径 1cm 黒褐色ブロック微量混。

SK270

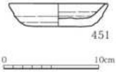


1　暗灰黄色 (2.5Y4/2)
しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子少量、炭化物・径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック微量混。
2　オリーブ褐色 (2.5Y4/3)
しまりあり。粘性ややあり。黄褐色土と３層の混合。
3　暗オリーブ灰色 (2.5Y3/3)
しまりあり。粘性あり。径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック・黄褐色シルト粒子少量、炭化物微量混。
4　暗褐色 (2.5Y3/2)
しまりあり。粘性強。炭化物・径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック微量混。

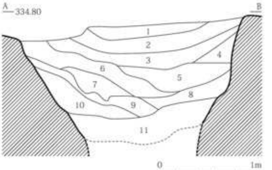
SK351



SK351 出土遺物

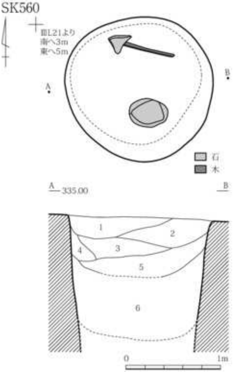


451



1　明黄褐色 (10YR7/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトを主体とする。炭層状に混。
2　灰黄褐色 (10YR5/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子を微量混。
3　灰黄褐色 (10YR5/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子を微量混。２層よりやや暗色。
4　明黄褐色 (10YR6/6)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトを主体とする。
5　褐灰色 (10YR5/1)　しまりあり。粘性あり。
6　褐灰色 (10YR5/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
7　褐灰色 (10YR4/1)　しまりあり。粘性あり。砂粒を微量混。
8　褐灰色 (10YR5/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック部分的混。
9　褐灰色 (10YR5/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
10　褐灰色 (2.5YR4/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。

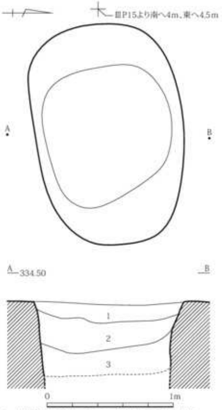
SK560



1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐０色シルトブロック多量混。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。１層よりやや暗色。
4　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、灰色粘土ブロック少量混。
5　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰色粘土ブロック多量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。

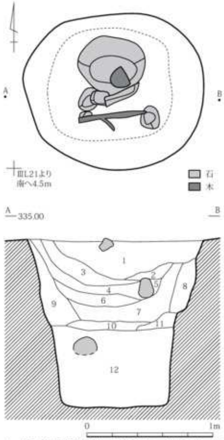
第 94 図　井戸跡（２）

SK613



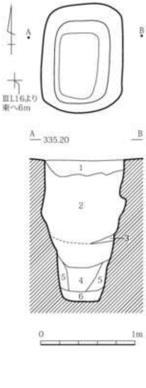
1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性強。黄褐色土シルトブロック少量混。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性強。黄褐色土シルトブロック少量混。２層より暗色。

SK572



1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。灰色粘土ブロック少量混。
2　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性強。灰色粘土質。
3　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・灰色粘土ブロック多量混。
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。
5　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。黄褐色シルトブロック微量混。
6　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。５層に類似。
7　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。黄褐色シルトブロック少量混。
8　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
9　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土主体。黄褐色シルトブロック少量混。
10　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
11　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
12　灰色 (N6/)　しまりあり。粘性強。粘土層。上面鉄分集積による硬化。

SK682



1　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。シルト。炭化物・焼土粒子・亜円礫・角礫混。土器片出土。
2　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。粘土質シルト。
3　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　砂。
4　灰色 (N4/0)　しまりなし。粘性あり。シルトブロック主体。自然木・枝混。
5　灰褐色 (10YR6/1)　しまりなし。粘性あり。砂質シルト。
6　灰色 (N4/~5/)　しまりなし。粘性あり。細粒砂。

第 95 図　井戸跡（３）

長さ 1.76m。幅 1.18m。深さ 0.6m 以上。**構造**：素掘りの井戸である。平面形は楕円形。壁面は直立する。**遺物**：埋土内土器の総量は、土師器 106g、黒色土器 20g、須恵器 40g、灰釉陶器 47g であり、いずれも混入遺物である。**時期**：遺構の重複関係から中世と判断した。

SK682

位置：２区Ⅲ L11・16 グリッド。**検出**：方形の埋土の輪郭を検出した。底面は、重機によるたち割り調査によって確認した。**重複**：なし。**埋土**：褐灰色シルトを主体とする。下層に自然木を含み、底面付近はグライ化する。**形態**：長さ 1.16m。幅 0.86m。深さ約 1.5m。**構造**：素掘りの井戸である。平面形は隅丸方形。壁面は外側に向かってわずかに開く。底面は平坦。**遺物**：埋土内土器の総量は、土師器 209g、黒色土器 2g、須恵器 25g のみで、いずれも混入遺物である。**時期**：遺構検出面から平安時代から中世と判断した。

5　土坑

SK222

位置：２区Ⅲ K17 グリッド。**検出**：明確な埋土の輪郭は捉えられず、遺構検出中に埋土の落ち込みを確認した。**重複**：なし。**埋土**：詳細不明。**形態**：方位 N-87°-E。長さ 2.48m。幅 1.37m。深さ約 0.10m。**構造**：円形の土坑の西側に張り出し部を持つ平面形である。断面形は浅く、皿状。**遺物**：452 はカワラケ、453 は牡丹陰花文の青磁碗である。この他、人頭大の礫がまとまって出土した。**時期**：出土遺物から中世と判断した。

SK251

位置：２区Ⅲ P02・07 グリッド。**検出**：一部 SB04 の埋土を切っていたが、平面方形の埋土の輪郭を検出した。**重複**：(旧) SB03・SB04・SK252：遺構検出で確認した。**埋土**：基本土層Ⅴ層起源のシルトブロックを多量に含み、人為堆積（埋戻し）である。**形態**：方位 N-19°-E。長さ 1.80m。幅 1.36m。深さ 1.00m。**構造**：平面形は、南北に主軸を持つ長方形。断面形は箱形。東西両壁とも北半が抉られたように拡張されている。とくに東壁中央には、ステップ状の段がみられた。**遺物**：454・455 はカワラケ、456 は青磁碗である。454 は黒色付着物が顕著に認められ底面の壁際から出土した。また、板状木製品（第 106 図４～６・９～11)、棒状木製品（第 106 図７)、草履の芯（第 106 図８）などの木製品が、埋土下層から出土した。この他、２cm 大の軽石３点が出土した。**時期**：出土遺物から中世と判断した。

SK384・SK385

位置：【SK384】２区Ⅲ K24 グリッド。【SK385】Ⅲ K25 グリッド。**検出**：SK384・SK385 の埋土輪郭を確認した。底面には、五輪塔を転用した礎石が据えてあり、掘立柱建物の柱穴と判断した。しかし、周辺には柱穴が確認できず、建物跡の形態・規模は把握できなかった。**重複**：【SK384】なし。【SK385】(旧) SB19：遺構検出で確認。**埋土**：掘方埋土には、黄褐色シルトを多く含む。**形態**：SK384 は長さ 0.44m、幅 0.41m、深さ 0.20m。SK385 は長さ 0.45m、幅 0.42m、深さ 0.40m。**構造**：平面形は、SK384 が不整な方形、SK385 が円形である。いずれも底面に火輪を逆位に据えて、礎石へ転用している。礎石上面の高さは、同一ではなく、約 20cm の差がある。**遺物**：それぞれの土坑から五輪塔火輪（第 103 図 26・27)が出土したのみで、土器は出土していない。**時期**：中世以降と判断した。

SK444-2

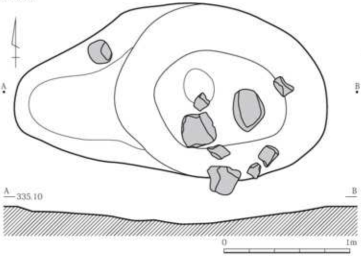
位置：２区Ⅲ P09・P10 グリッド。**検出**：検出面で五輪塔がみえており、１つの土坑として調査を始めたが、断面で２基の土坑が重複していることを確認し、それぞれ SK444-1、SK444-2 とした。**重複**：(旧) SK444-1。**埋土**：灰色シルトブロックを多量に含み、人為堆積（埋戻し）と推定できる。**形態**：長さ 0.48m。

幅 0.34m（現存値）。深さ 0.29m。**遺物：**五輪塔地輪が出土し、土坑周辺から別な地輪が出土した。土器は出土しなかった。**時期：**中世以降と判断した。

SK557

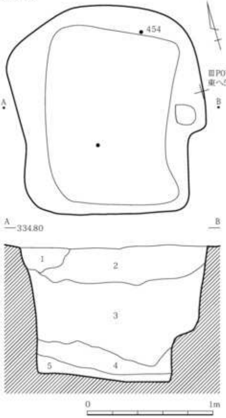
位置：２区Ⅲ L21、Ⅲ Q01 グリッド。**検出：**円形の埋土の輪郭を検出した。底面に地輪を転用した礎石が据えてあり、掘立柱建物の柱穴と判断した。しかし、周辺には柱穴が確認できず、建物跡の形態・規模は把握できなかった。**重複：**なし。**埋土：**上層には、基本土層Ｖ層由来の黄褐色シルトが堆積する。**形態：**長さ 0.41m。幅 0.41m。深さ 0.20m。**遺物：**五輪塔地輪１点が出土した。平安時代の土器がわずかに混入していた。**時期：**中世以降。

SK222

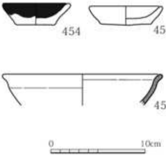


SK222 出土遺物

SK251



SK251 出土遺物



1　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまり、粘性あり。径 0.5cm 黄褐色シルトブロック中量混。鉄分集積。
2　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまり、粘性あり。径 0.5 ~ 2cm 黄褐色シルトブロック中量、炭化物微量混。鉄分集積。
3　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　しまり、粘性あり。径 0.5 ~ 3cm 黄褐色シルトブロックと炭化物少量混。
4　黒褐色 (10YR2/1)　しまり、粘性強。炭化物微量。細砂微量。グライ化。
5　緑黒色 (10G2/1)　しまりあり。粘性強。グライ化。

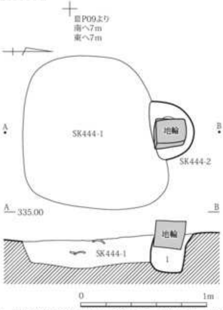
第 96 図　土坑（１）

SK633

位置：２区Ⅲ L11 グリッド。**検出：**隅丸方形の埋土の輪郭を検出した。**重複：**（旧）SK634：遺構検出で確認。**埋土：**黒褐色土を主体とし、焼土を含む。**形態：**方位 N-7°-E。長さ 2.20m。幅 0.84m。深さ 0.18m。**構造：**平面形は隅丸方形。断面形は箱形。南側にピット１基を持つ。底面には炭化物の広がりが２か所ある。**遺物：**457 ～ 459 はカワラケ、460 は内耳鍋である。この他、硯（第 104 図 42）１点、石臼（第 105 図 49）２点、刀のハバキ１点（第 101 図 79)、鉄釘７点、棒状鉄製品１点、焼けた粘土塊１点と被熱礫が出土した。**時期：**中世と判断した。

SK633 遺物出土状況（南から）

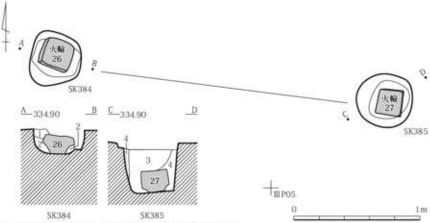
SK444-2



1　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。灰色シルトブロック多量混。

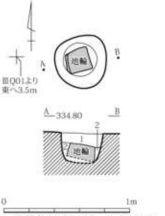
SK444 完掘（西から）

SK384・SK385



1　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性強。灰色シルト。
2　にぶい黄褐色 (10YR5/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色土シルトブロック多量混。掘方埋土。
3　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性強。灰色シルト。
4　にぶい黄褐色 (10YR5/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色土シルトブロック多量。

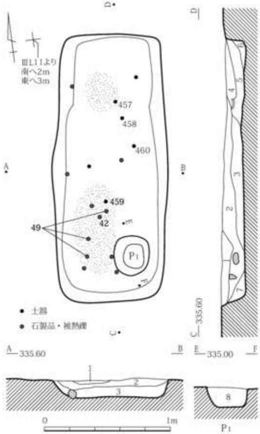
SK557



1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色土シルトブロック多量混。
2　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性あり。黒褐色土。

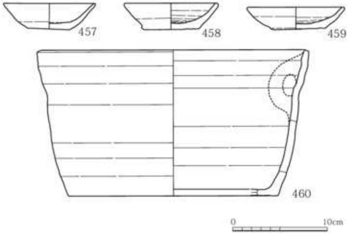
第 97 図　土坑（２）

SK633

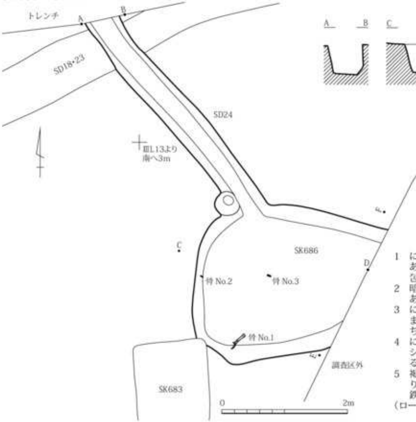


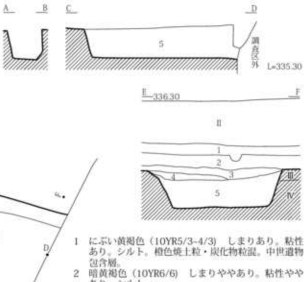
1　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性なし。径 0.1 ～ 0.5cm 焼土粒・径 0.1 ～ 0.5cm 炭化物粒微量混。
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性なし。径 0.5cm 焼土粒・径 0.5cm 炭化物粒微量混。
3　黒褐色 (10YR3/2)　しまりややあり。粘性ややあり。径 0.1 ～ 0.5cm 焼土粒・径 2cm 炭化物粒微量混。
4　黒褐色 (10YR3/2)　しまりなし。粘性あり。粒粗い。径 1 ～ 2cm 炭化物・径 1 ～ 2cm 焼土混。
5　黒褐色 (10YR3/1)　しまりなし。粘性あり。炭化物・径 1 ～ 2cm 焼土・粘土混。
6　黒褐色 (10YR3/1)　しまりなし。粘性あり。5 層に類似。焼土多量。
7　灰黄褐色 (10YR4/2)　しまりあり。粘性ややあり。2 層に類似。やや暗色。
8　褐灰色 (10YR4/1)　しまりなし。粘性あり。灰・径 0.1 ～ 0.2cm 炭化物粒・焼土粒混。

SK633 出土遺物



SK686・SD24





1　にぶい黄褐色（10YR5/3-4/3)　しまりあり。粘性あり。シルト。橙色焼土粒・炭化物粒混。中世遺物包含層。
2　暗黄褐色（10YR6/6)　しまりややあり。粘性ややあり。シルト。
3　にぶい黄褐色～にぶい黄橙色（10YR5/3-6/4)　しまりややあり。粘性あり。シルト。橙色斑文全体にちる。２区北東部に分布。
4　にぶい黄橙色（10YR6/4)　しまりあり。粘性あり。シルト。灰白色シルトブロック混。橙色斑状に広がる。
5　褐灰色～にぶい黄褐色 (10YR4/1-4/3)　しまりあり。粘性あり。シルト。下位褐灰色粘土質シルト混、鉄分集積。
(ローマ数字は基本層序に対応。)

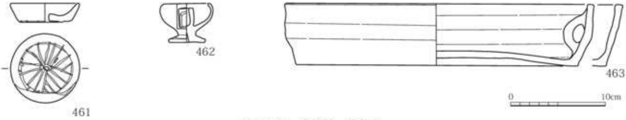
第 98 図　土坑（３）

SK686・SD24

位置：２区Ⅲ L13 グリッド。**検出：**埋土の輪郭は不明瞭で、トレンチによる土層断面観察によって遺構の規模・形態を捉えた。土坑（SK686）北西隅角に付く溝（SD24）は、土坑から埋土が連続することから、一連の遺構とした。**重複：**（新）SK659・SK683：遺構検出で確認。なお、SD18・23 と重複するが新旧関係は確認できなかった。**埋土：**褐灰色～にぶい黄褐色土を主体とする単層。鉄分の集積がある。**形態：**【SK686】長さ:2.66m（残存値）。幅:2.36m。深さ:0.48m。【SD24】長さ:3.95m（残存値）。幅:0.59m。深さ：0.36m。**構造：**土坑平面形は不整形で、断面形は逆台形。溝は、土坑北西隅角から北西方向へまっすぐ延びる。土坑と溝の接続部には、ピットが１基ある。**遺物：**埋土内土器の総量は、土師器 37g、黒色土器 12g のみである。この他、動物骨が埋土中から底面にかけて散在していた。**時期：**古代から中世と判断した。

6　遺構外の遺物

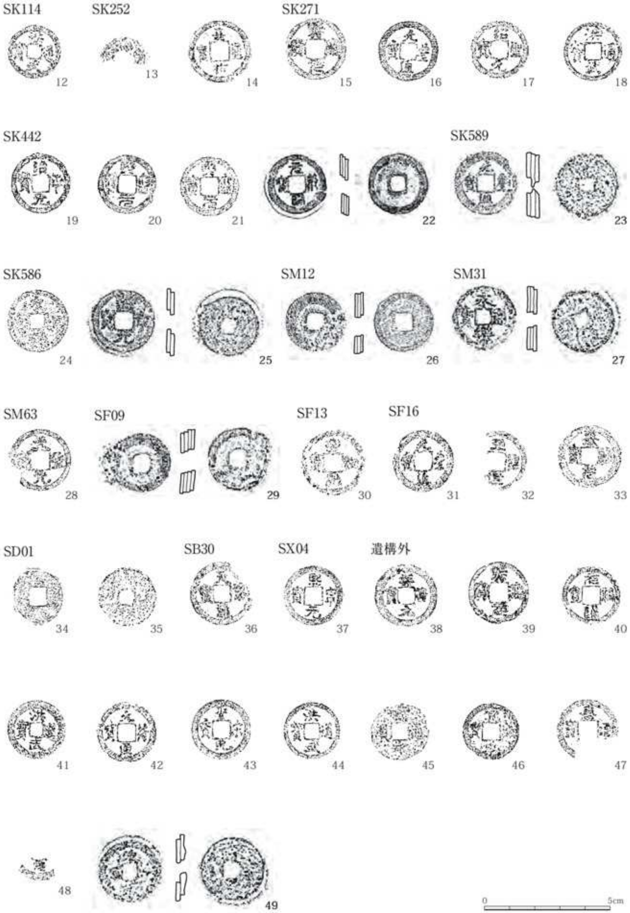
第 99 図 461 はカワラケで、底部中央に穿孔があり、底面には放射状の線刻がある。462 は秉燭（ひょうそく）、463 は内耳がある焙烙である。第 100 図 38 ～ 49 は銭貨、第 101 図 61 は鉄釘、第 103 図 28・32 は五輪塔水輪・地輪、35 は宝篋印塔笠部、第 104 図 43 は砥石、第 105 図 48 は石臼である。いずれも中世から近世の遺物である。



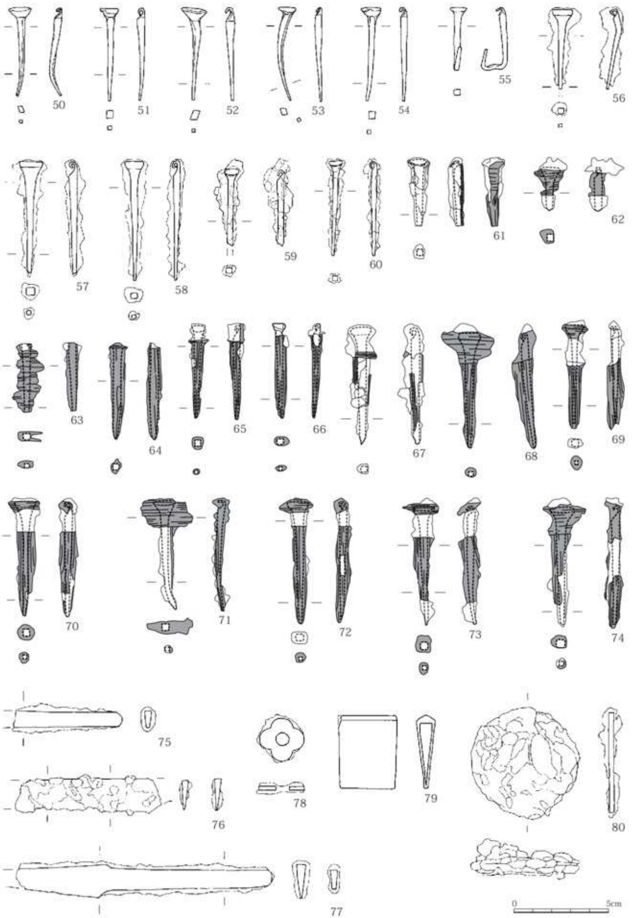
第 99 図　遺構外　遺物図

参考文献

大橋康二 1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会１０周年記念－』（図録）
長野市教育委員会 1998『裾花川扇状地遺跡群 尾張城跡』長野市の埋蔵文化財 89
長野市教育委員会 2014『裾花川扇状地遺跡群 栗田城跡（４）』長野市の埋蔵文化財 133
西田宏子・大橋康二 1988『別冊太陽 古伊万里』平凡社
藤沢良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』
藤沢良祐 1987「本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅵ』
藤沢良祐 1988「本業焼の研究（2）」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅶ』
藤沢良祐 1989「本業焼の研究（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅷ』
瑞浪陶磁資料館 1993『企画展 明治・大正・昭和のやきもの 富士を写す』


SK114
SK252
SK271
12
13
14
15
16
17
18
SK442
SK589
19
20
21
22
23
SK586
SM12
SM31
24
25
26
27
SM63
SF09
SF13
SF16
28
29
30
31
32
33
SD01
SB30
SX04
遺構外
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
5cm

第100図　銭貨

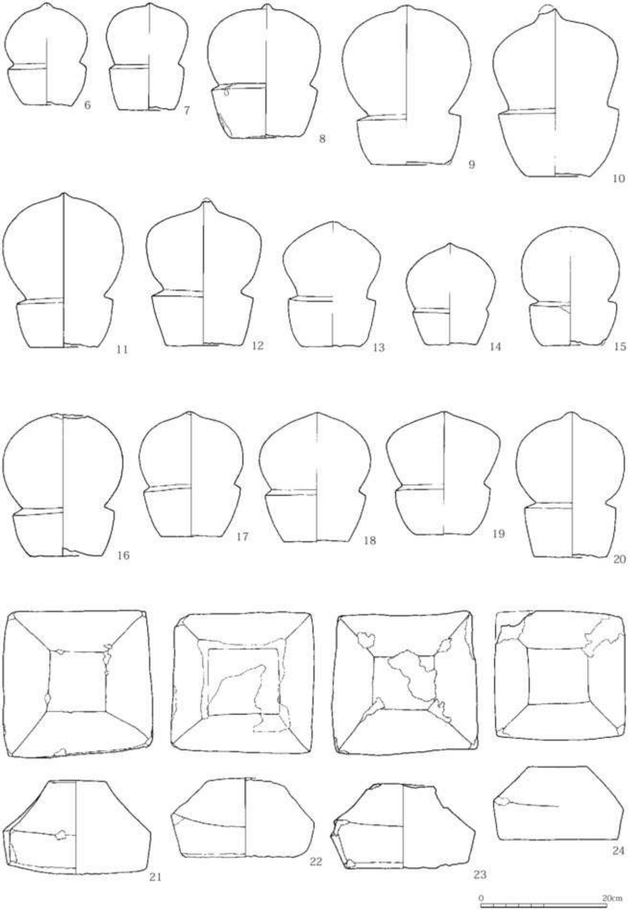

50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
0
5cm

第 101 図　金属製品

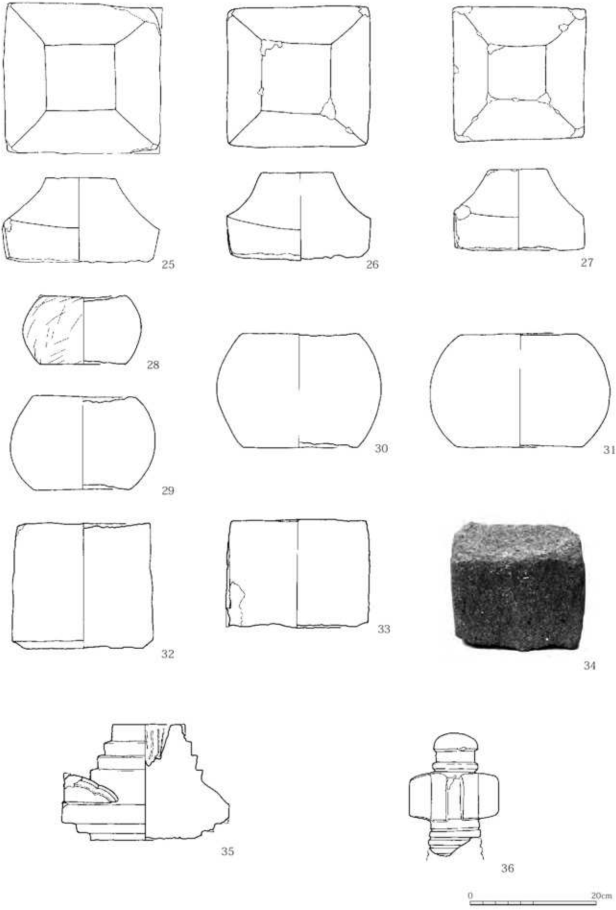
第８表　中世他の金属製品観察表

図版番号	PL番号	管理番号	材質	器種	出土位置	長さ 銭径(cm)	幅 銭内径(cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
12	PL36	62	銅	銭貨（洪武通宝）	SK114	2.1×2.1	1.7×1.7	0.2	2.3
13	PL36	64	銅	銭貨（判別不可）	SK252	1.9×（1.0）	-×-	0.1	(0.4)
14	PL36	63	銅	銭貨（嘉祐通宝）	SK252№2	2.5×2.5	2×2	0.2	3.3
15	PL36	56	銅	銭貨（熙寧元宝）	SK271№3	2.4×2.4	1.9×1.9	0.1	2.5
16	PL36	54	銅	銭貨（元豊通宝）	SK271№1	2.4×2.4	1.8×1.8	0.1	3.2
17	PL36	55	銅	銭貨（紹聖元宝）	SK271№2	2.3×2.3	1.8×1.8	0.1	3.0
18	PL36	57	銅	銭貨（洪武通宝）	SK271	2.4×2.3	1.9×1.9	0.2	4.4
19	PL36	190	銅	銭貨（治平元宝）	SK442金属№4	2.4×2.3	2×1.9	0.1	3.2
20	PL36	191	銅	銭貨（熙寧元宝）	SK442金属№5	2.4×2.4	1.9×1.9	0.1	3.1
21	PL36	192	銅	銭貨（熙寧元宝）	SK442金属№6	2.4×2.4	1.9×1.9	0.2	3.9
22	PL36	189	銅	銭貨（元符通宝）	SK442金属№1	2.4×2.4	1.9×1.9	0.4	7.9
23	PL36	195	銅	銭貨（元豊通宝）	SK589	2.5×2.5	1.8×1.8	0.5	8.3
24	PL36	194	銅	銭貨（永楽通宝）	SK586銭№2	2.5×2.5	2.1×2.1	0.2	2.7
25	PL36	193	銅	銭貨（○○元○）	SK586銭№1	2.5×2.5	2×2	0.3	5.3
26	PL36	65	銅	銭貨（判別不可）	SM12№1	2.4×2.5	1.9×1.9	0.4	8.1
27	PL36	198	銅	銭貨（永楽通宝）	SM31	2.5×2.5	2×2	0.4	7.3
28	PL36	201	銅	銭貨（天聖元宝）	SM63銭№1	2.5×2.5	2×2	0.2	2.8
29	PL36	66	銅	銭貨（判別不可）	SF09	2.5×2.9	1.6×1.6	0.5	12.2
30	PL36	67	銅	銭貨（○○元宝）	SF13	2.6×2.5	2.1×2	0.1	2.0
31	PL36	186	銅	銭貨（元豊通宝）	SF16古銭№1	2.5×2.5	1.9×1.9	0.2	3.6
32	PL36	188	銅	銭貨（熙寧元宝）	SF16古銭№2	2.5×2.5	2×2	0.1	2.4
33	PL36	187	銅	銭貨（景祐元宝）	SF16古銭№1	2.5×2.5	1.9×1.9	0.2	3.0
34	PL36	60	銅	銭貨（無文銭）	SD01	2.1×2.0	-	0.1	1.6
35	PL36	61	銅	銭貨（無文銭）	SD01中五輪搭集中	2.3×2.3	-	0.1	1.8
36	PL36	197	銅	銭貨（天禧通宝）	旧SB30 Pit22	2.5×(2.3)	2×2	0.1	2.1
37	PL36	68	銅	銭貨（熙寧元宝）	SX04	2.4×2.3	1.8×1.9	0.1	2.6
38	PL36	72b	銅	銭貨（祥符元宝）	ⅢK19№2	2.5×2.5	1.9×1.8	0.1	3.2
39	PL36	72a	銅	銭貨（熙寧元宝）	ⅢK19№2	2.5×2.5	2.1×2.1	0.2	3.0
40	PL36	73	銅	銭貨（元祐通宝）	ⅢP01 №4	2.3×2.3	1.8×1.8	0.1	2.1
41	PL36	199	銅	銭貨（洪武通宝）	ⅢP15銭№1	2.3×2.3	1.7×1.7	0.2	3.7
42	PL36	196	銅	銭貨（元符通宝）	ⅢP9№1	2.4×2.4	1.8×1.9	0.1	2.4
43	PL36	74	銅	銭貨（聖宋元宝）	ⅢP6	2.4×2.4	1.8×1.8	0.1	2.9
44	PL36	58	銅	銭貨（洪武通宝）	2区検出面	2.4×2.3	1.9×1.9	0.2	3.1
45	PL36	59	銅	銭貨（寛永通宝）	2区5トレ南壁	2.3×2.4	1.8×1.8	0.1	2.0
46	PL36	200	銅	銭貨（寛永通宝）	ⅢP8	2.3×2.3	1.8×1.9	0.1	1.5
47	PL36	69	銅	銭貨（嘉○通宝）	2区	(2.4)×2.4	1.9×1.9	0.1	1.9
48	PL36	70	銅	銭貨（○○元○）	検出	(0.87)×1.5	-	0.1	0.6
49	PL36	71	銅	銭貨（判別不可）	ⅢK19№1	2.7×2.5	-	0.4	4.6
50	PL35	90	鉄	釘	SK640	4.7	1.2	0.4	2.2
51	PL35	86	鉄	釘	SK640	4.9	1.0	0.4	2.1
52	PL35	87	鉄	釘	SK640	4.9	1.3	0.5	2.5
53	PL35	89	鉄	釘	SK640	5.0	1.0	0.4	1.8
54	PL35	88	鉄	釘	SK640	5.0	1.1	0.4	2.2
55	PL35	93	鉄	釘	SM32№1	3.3	1.0	0.4	2.5
56	PL35	102	鉄	釘	SM53№6	(4.2)	1.1	0.4	4.5
57	PL35	105	鉄	釘	SM53№8	5.7	1.4	0.5	5.5
58	PL35	101	鉄	釘	SM53№5	6,2	1.0	0.4	5.7
59	PL35	12	鉄	釘	SK71	(4.6)	0.7	0.7	5.3
60	PL35	9	鉄	釘	SF09	5.1	1.0	0.8	2.5
61	PL35	18	鉄	釘	ⅢP07	(3.6)	1.2	0.7	4.1
62	PL35	127	鉄	釘	SM53№28	(2.3)	1.1	0.5	3.2
63	PL35	167	鉄	釘	SM28①	(3.6)	1.4	0.4	3.1
64	PL35	98	鉄	釘	SM53№2	(5.1)	1.0	0.8	2.1
65	PL35	163	鉄	釘	SM28①	4.8	1.0	0.4	3.0
66	PL35	164	鉄	釘	SM28①	5.0	0.7	0.3	3.1
67	PL35	97	鉄	釘	SM53№1	(6.4)	1.2	0.4	6.4
68	PL35	130	鉄	釘	SM53№30	6.6	2.8	1.1	4.5
69	PL35	100	鉄	鉄	SM53№4	4.9	1.0	0.4	3.8
70	PL35	104	鉄	釘	SM53№8	6.0	1.1	0.4	5.4
71	PL35	126	鉄	釘	SM53№28	5.3	1.2	0.3	6.0
72	PL35	136	鉄	釘	SM53№2・上層	6.2	1.1	0.5	5.0
73	PL35	125	鉄	釘	SM53№27	6.2	1.4	0.4	5.9
74	PL35	124	鉄	釘	SM53№27	6.2	2.0	0.4	5,7
75	PL35	23	鉄	刀子	SB13南東	(5.8)	0.9	0.4	9.8
76	PL35	84	鉄	刀子	SD25(SD01)鉄№1	(7.7)	1.6	0.4	11.3
77	PL35	24	鉄	刀子	SK114	(13.6)	1.7	0.5	29.3
78	PL35	34	鉄	飾り金具か	SK251	2.3	2.3	0.2	4.0
79	PL35	145	銅	はばき	SK633	3.9	3.1	1.0	18,3
80	PL35	149	鉄	紡錘車紡輪	SB26南西	5.8	5.6	0.3	41.3

（　）内の数値は残存値を示す。

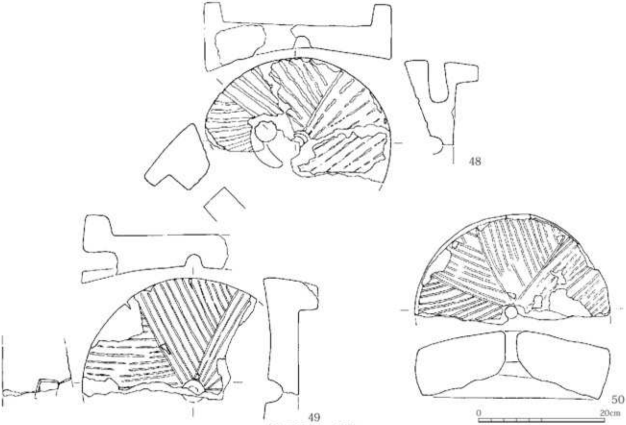


第 102 図　五輪塔 1

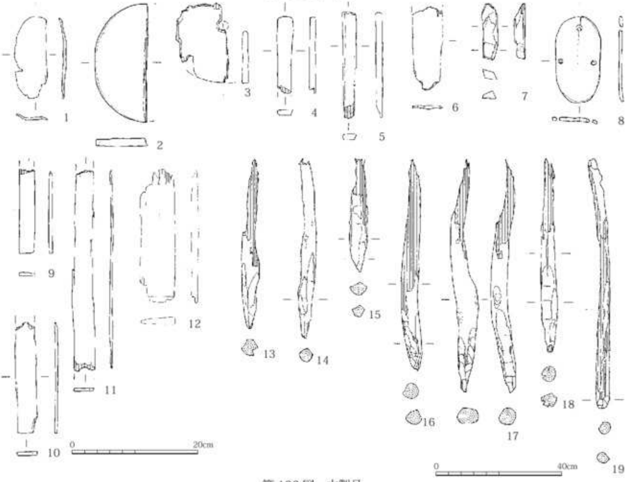


第 103 図　五輪塔２・宝篋印塔

第 104 図　石製品



第 105 図　石臼



第 106 図　木製品

第９表　中世以降の石製品観察表

図版番号	PL番号	管理番号	材質・石材	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
6	PL37	16	安山岩	五輪塔空風輪	SD01五輪塔№16	12.4	－	16.5	3,200
7	PL37	36	安山岩	五輪塔空風輪	SD01南ベルト中層	11.3	－	17.1	3,850
8	PL37	6	安山岩	五輪塔空風輪	SD01五輪塔№1	16.9	－	21.6	7,200
9	PL37	32	安山岩	五輪塔空風輪	SD01中央	16.6	－	25.5	10,500
10	PL37	23	安山岩	五輪塔空風輪	SD01五輪塔№8	19.2	－	(26.8)	11,100
11	PL37	20	安山岩	五輪塔空風輪	SD01五輪塔№15	15.2	－	24.6	8,600
12	PL37	24	安山岩	五輪塔空風輪	SD01ⅢP8No.1	16.0	－	(23.2)	7,000
13	PL37	8	安山岩	五輪塔空風輪	SD01五輪塔№2	13.9	－	20.1	5,200
14	PL37	17	安山岩	五輪塔空風輪	SD01	12.1	－	16.2	3,400
15	PL37	18	安山岩	五輪塔空風輪	SD01五輪塔№7	13.9	－	19.0	4,900
16	PL37	39	安山岩	五輪塔空風輪	SD01北 (五輪塔集中下層)	16.0	－	(22.5)	8,500
17	PL37	42	安山岩	五輪塔空風輪	SD01北 (五輪塔集中下層)	15.4	－	20.0	6,200
18	PL37	46	安山岩	五輪塔空風輪	SD01北	16.0	－	20.6	6,900
19	PL37	47	安山岩	五輪塔空風輪	SD01中央五輪塔集中	15.0	－	19.7	5,000
20	PL37	74	安山岩	五輪塔空風輪	SM55	14.5	－	23.3	7,400
21	PL37	4	安山岩	五輪塔火輪	SD01拡張五輪塔№3	23.6	－	15.1	11,200
22	PL37	30	安山岩	五輪塔火輪	SD01五輪塔№11	22.4	－	12.7	8,800
23	PL37	31	安山岩	五輪塔火輪	SD01五輪塔№12	23.1	－	13.6	7,800
24	PL37	40	安山岩	五輪塔火輪	SD01中央五輪塔集中	20.7	－	11.7	6,800
25	PL38	37	安山岩	五輪塔火輪	SD01中央五輪塔集中	25.0	－	13.5	10,600
26	PL38	68	安山岩	五輪塔火輪	SK384	23.0	－	14.0	8,000
27	PL38	69	安山岩	五輪塔火輪	SK385	20.6	－	12.9	7,400
28	PL38	77	安山岩	五輪塔水輪	ⅢQ01	18.9	－	11.0	4,700
29	PL38	38	安山岩	五輪塔水輪	SD01中央五輪塔集中	23.0	－	15.0	9,600
30	PL38	11	安山岩	五輪塔水輪	SD01五輪塔№4	26.2	－	18.1	16,600
31	PL38	34	安山岩	五輪塔水輪	SD01	28.6	－	18.1	18,300
32	PL38	70	安山岩	五輪塔地輪	ⅢP09・ⅢP10	21.2	－	20.0	17,700
33	PL38	3	安山岩	五輪塔地輪	SD01拡張五輪塔№2	21.7	－	17.5	19,500
34	PL38	71	安山岩	五輪塔地輪	SK444	19.0	－	14.5	10,700
35	PL38	82	安山岩	宝篋印塔笠部	2区	26.5	－	18.5	12,200
36	PL38	5	安山岩	宝篋印塔相輪	SD01ⅢK19五輪塔№4	(14.3)	－	(19.8)	1,600
37	PL39	56	凝灰岩	敲石	SD01	(8.0)	5.3	2.9	155.8
38	PL39	93	安山岩	敲石	SK307	8.5	2.7	2.6	86.9
39	PL39	94	安山岩	敲石	SK307	9.4	3.9	2.9	145.9
40	PL39	63	安山岩	敲石	SB16	12.5	3.8	3.2	229.0
41	PL39	92	硬砂岩	敲石	SK271	12.5	4.7	3.8	299.87
42	PL39	58	粘板岩	硯	SK633№18・Pit1上層	10.6	5.4	1.5	109.9
43	PL39	62	凝灰岩か	砥石	2区検出面	(7.7)	3.5	2.6	82.9
44	PL39	50	凝灰岩	砥石	SD01	(4.3)	2.6	2.5	39.3
45	PL39	88	軽石	有孔石製品	SD01検出面	6.3	6.2	3.4	32.33
46	PL39	49	軽石	有孔石製品	SD01西五輪塔集中	5.4	4.3	(3.0)	27.6
47	PL39	59	軽石	有孔石製品	SK636	5.0	3.6	3.5	20.2
48	PL38	60	安山岩	石臼	ⅢP14№1	(18.9)	29.8	12.0	5,010
49	PL38	57	安山岩	石臼	SK633№7・8・9	(19.4)	(23.0)	10.8	4,390
50	PL38	44	安山岩	石臼	SK270中層	(17.7)	31.0	8.3	6,820

(　) 内の数値は残存値を示す。

第 10 表　中世以降の木製品観察表

図版番号	PL番号	管理番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	炭素14年代測定 2σ暦年代範囲
1	PL40	4	板状木製品	SK572	13.2	(5.1)	0.5	15.6	
2	PL40	17	桶・樽底板	SK572	18.9	(8.2)	1.2	133.9	
3	PL40	18	桶・樽底板	SK572	(12.5)	(8.3)	1.0	55.7	
4	PL40	9	板状木製品	SD01北下層 (北五輪塔集中)	(12.3)	(2.5)	0.9	20.7	
5	PL40	10	板状木製品	SD01北下層 (北五輪塔集中)	(17.0)	(2.1)	1.0	24.1	
6	PL40	5	板状木製品	SK251	13.4	4.9	0.6	22.4	
7	PL40	6	棒状木製品	SK251	8.9	2.5	1.8	22.7	
8	PL40	7	草履の芯	SK251№2	13.8	7.2	(0.5)	39.6	
9	PL40	19	板状木製品	SK251	(13.4)	(2.6)	0.5	14.8	
10	PL40	20	板状木製品	SK251	(17.8)	(3.3)	0.4	19.2	
11	PL40	21	板状木製品	SK251	(31.8)	(3.4)	0.5	35.5	
12	PL40	8	板状木製品	SK251№2	(21.3)	(5.4)	1.1	70.7	
13	PL40	1	杭	SD01杭№6	(54.5)	5.6	5.2	477.0	
14	PL40	2	杭	SD01杭№2北	(57.0)	4.8	4.4	541.0	試料№1：PLD-38553 1480-1637 cal AD (95.4%)
15	PL40	3	杭	SD01杭№4北	(36.3)	6.0	4.0	419.2	
16	PL40	11	杭	SD01杭№1	(67.7)	5.4	5.1	937.3	試料№4：PLD-38556 1464-1529 cal AD (41.5%) 1544-1635 cal AD (53.9%)
17	PL40	12	杭	SD01北杭№3	(74.6)	6.8	5.3	1238.0	試料№5：PLD-38557(TKA-21306) 1470-1638 cal AD (95.4%)
18	PL40	13	杭	SD01北杭5	(62.0)	4.9	5.0	551.1	
19	PL40	14	杭	SK270中層	79.5	4.1	3.7	598.5	

（　）内の数値は残存値を示す。

第４章　塔鋺形合子

第１節　発掘調査の経過と出土状態の検討

１　発掘調査の過程

ここでは塔鋺形合子が出土したSB04の発掘調査過程と調査時における所見を述べる。

（１）遺構検出

2016（平成28）年８月18日。第１検出面（中・近世）での調査終了後、第２検出面（古代）において、竪穴建物跡と想定される方形の黒褐色土の広がりを捉えた（SB04）。全体的にシルト質の土であるため、一度乾燥すると白色を帯び、色調の違いが認識しづらいが、重機による表土除去直後の湿った状態で人力による検出作業を行ったため明確に埋土の輪郭を捉えることができた（第107図）。一辺６m近い方形であり、当初から竪穴建物跡を想定し、かつ北壁際に円形のピット（壁柱穴）を伴うことも確認できた。また東壁に焼土を伴う煙道状に突出する埋土の広がりがみられカマドを伴うこともわかった。

第107図　SB04検出状況（南から）

2016年８月19日。重複遺構の有無を精査するためにSB04埋土上の平面検出を行ったところ、埋土東部でより暗色を呈する一辺４m程度の方形の広がりを検出した。その規模からSB04を切る竪穴建物跡と想定し、SB03として調査することとした。SB03の調査は、SB04との重複関係を検証するために両遺構を通るように東西・南北の２ベルトを設定し、まずSB03の埋土から掘削することとした。ところが翌日以降、台風９号・10号をはじめとする降雨が続いたため現場は冠水し、連日の排水作業によってSB03の掘削作業は半月近く中断せざるを得なかった。

（２）重複する竪穴建物跡（SB03）の調査

2016年９月９日。SB03の調査を再開した。しかし今度は晴天によって現場内の乾燥が極度に進行し散水によっても保湿できず、当初確認できたSB03の埋土の広がりが視認できなくなっていた。そこで東西・南北の十字に設定した土層観察ベルトに沿ってサブトレンチを設け、土層断面観察によって遺構範囲の確認に努めた。

サブトレンチは、床面とみられる硬化面を確認したところで掘削を停止した。その高さはほぼ同一であり、すなわちSB03とSB04の部分で大差なかった。そこで再度、床面とみられるトレンチ底面を精査したところ、東西トレンチにおいて東側（SB03側）では貼床と思われる顕著な硬化面がみられるのに対して、西側（SB04側）ではみられないことがわかった。そしてトレンチ断面で土層観察を行ったところ、ちょうど貼床の切れる境でSB04の埋土を掘り込むSB03の壁面を確認した。とくに東側では炭化物層であるカマド８層を明確に切っており（第108図）、その状況は現地において調査員全員で確認した。

第108図　SB03･04土層断面（南から）

2016年９月13日。再び降雨によって現場内は冠水し、半月近く排水作業を繰り返すこととなった。水中ポンプをフル稼働しても降雨量の方が勝る状況であったが、シートを遺構に密着させることによって遺構を保護することができた。

2016年10月５日。排水が完了した後、SB03の掘削調査に移り、土層観察ベルトを残し、埋土の掘削

を開始した。なお冠水していた間、土層観察ベルトにシートを密着させていたためベルトは崩壊することなく、冠水前と同じ分層を行うことができた。土層断面観察によるSB03とSB04との重複関係を再確認した後、再度SB03の平面検出を試みた。しかし現場内は半日も経たずに急激に乾燥し、散水は浸透せずぬかるみを発生させるだけの状況であったため、SB03の検出は叶わなかった。そこでSB03の貼床範囲を追うことによってその埋土を掘削することとした。床面を精査すると、SB03とSB04の床面は、硬化具合とともに色調も異なっていたため（第109図）、SB03の床面範囲は比較的容易に捉えることができた。しかし、南東部に限っては、床面下から炭化物を確認したため、その上面付近まで掘削してしまった。後にその炭化物はSB04に伴うものと判明したが、掘削時にはSB03のものであるとみて掘削してしまい、結果として南東部のみ底面の高さが低くなってしまった。この南東部は、日陰にあたりちょうどその部分だけが乾燥せずぬかるみが不均一に残っていたために、硬化面が認識できずに床面を掘り抜いてしまったと思われる。埋土掘削後、土層断面の測量・写真撮影を行った。

第109図　SB03･04床面と土層断面（東から）

（3）塔鋺形合子の発見

2016年10月7日午後。SB03の土層観察ベルトを除去し、完掘状況の写真撮影の準備に入った。竪穴内の清掃後、周囲の清掃に入ったところ、SB03の西側（SB04の埋土上）において相輪部分がわずかに露出していることがわかった。その後、遺物周辺の土砂を除去していったところ、長さ10cmを超える銅製品（取り上げた後に塔鋺形合子であることがわかったのだが、以下「塔鋺形合子」と呼ぶ。）であることがわかった（第110図）。

現場周辺は翌日以降雨天の予報であり、再び滞水する危険性があったため早急に取り上げる必要があった。そこで急遽、周辺を精査し、土坑といった塔鋺形合子に伴う遺構がないことを確認した後、即日取り上げることにした。

第110図　塔鋺形合子出土状況（南から）

（4）SB04の調査

塔鋺形合子を取り上げた翌日以降、降雨による滞水はあったものの排水後も塔鋺形合子のインプリントは残存しており、それをもとに周辺をさらに詳細に調査することとした。まず、この塔鋺形合子が帰属する遺構の判別に努めた。再度、平面検出したが切り合う遺構は確認できなかった。そしてインプリントを半截し、土層断面観察によって遺構の有無を検討したところ、分層線が斜めに走るSB04の埋土堆積状況が確認されただけで、重複する遺構は確認できなかった（第111図）。以上のことから塔鋺形合子はSB04の埋土中から出土したものと判断した。

第111図　塔鋺形合子出土地点土層断面（西から）

その後、SB04の掘削調査に入った。埋土中に特徴的な出土状況を示すものは認められなかったことから床面まで掘削を行った。床面を精査したところ南東部において土坑を確認することができた。南東部はSB03の埋土掘削時にすでにSB04の床面を露出させてしまっていたが、部分的であったため土坑を検出できるまでには至っていなかった。土坑を半截すると、多量の土器が出土し、土層断面図の作成と併行して

第112図　土坑内出土状況と土層断面（南から）

土器の出土状況の把握に努めた（第112図）。土器は土坑埋土中から出土したが、平面検出時には全くみられなかったことから周囲からの転落といった状況は想定できず、いずれも土坑に伴うものと判断した。

また併行してカマドの調査も行った。平面検出の段階では、検出できたカマドがSB03とSB04のいずれに伴うものか明確ではなかった。土層断面観察ベルトをカマド前面に設定し、SB03の壁面がカマド埋土を切っていることが確認できたためSB04に伴うカマドと判断した（第113図）。

第113図　カマド付近 土層断面
（南から）

2　発掘調査の再検討

発掘調査の再検討を行った。そこでの主な検討事項は以下の２点である。

①塔鋺形合子が帰属する遺構について。SB04の遺物として間違いないか。

②重複するSB03との関係について。とくに土器集中について、SB03･SB04いずれに帰属する遺構なのか。

①について。塔鋺形合子は、SB04埋土中すなわち床面から浮いた位置から出土している。そこで塔鋺形合子がSB04を掘り込む別の遺構に伴う可能性について検討を行った。まずSB04に重複する遺構は、SB03以外にSK251・SK252・SK269・SK270があるが、いずれも塔鋺形合子の出土地点とは重ならない。また第１検出面で確認した遺構においても出土地点の直上にくるものはない（第116図）。次に平面検出の再検証として、平面検出時の写真と調査所見との照合を行った。SB04と重複する遺構の可能性として、SB04南西隅で他と異なる埋土の広がりを確認している。結果として遺構は確認されず、掘り込みであったとしても下のSB04を壊していないことから第１検出面で確認しきれなかった上層の遺構底面であると考えた。また塔鋺形合子の出土地点は、そこから40cm以上北へ外れており、この埋土には関係しないと判断した。さらに塔鋺形合子の出土地点をたち割った際の土層堆積状況を検証した。おおむねSB04の埋土堆積状況と相違ないが、周辺土層の対応関係は把握できなかった。また塔鋺形合子が出土した高さは、SB03の壁面上端より低く、SB03の棚状施設といった竪穴外施設に伴う可能性はないと判断した。

以上の検討から、塔鋺形合子はSB04の埋土中から出土したと判断した。

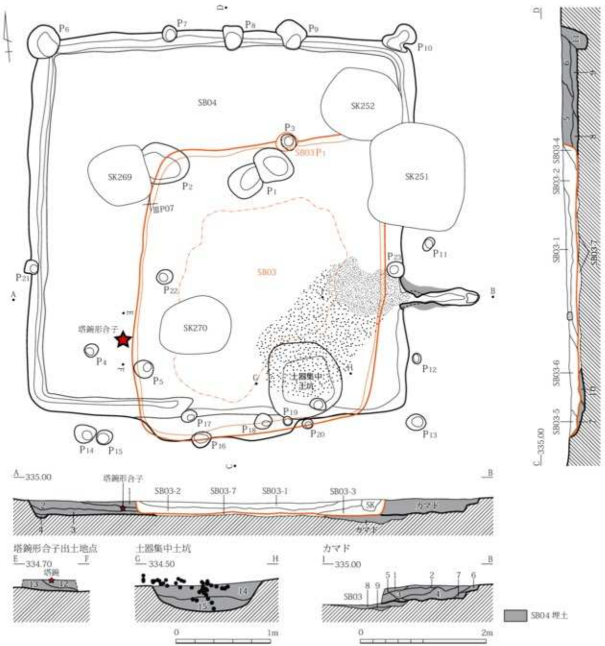
②について。発掘調査時においてはSB03調査後、SB04の埋土掘削中に土器集中を伴う土坑を確認した。そのような経緯からSB04に伴うものとみていたが、SB03とは床面の高さに大差なく、かつ土坑はSB03の竪穴内にもおさまる位置にあることから、再度SB03とSB04のいずれに伴うものか再検討を行った。

まず土坑埋土をみたところブロック状の炭化物が散在していることがわかった。その炭化物は土坑外にも確認され、その範囲はSB04のカマドから延びている（第114図）。この炭化物の広がりはSB03貼床の下で検出され、かつSB04の炭化物層（14層）は明確にSB03に切られている。また、SB03では埋土・床面において同様の炭化物はみられず、この炭化物はSB04に伴うものと判断した。さらに土坑内からはカマドの構築材と思われる被熱した礫が出土している（第115図）。カマドはSB03にはないことからSB04のカマド構築材とみられる。

以上の検討から、土器集中はSB04に伴うものと判断した。

第114図　炭化物の広がり
（西から）

第115図　土坑内出土状況
（南東から）



1　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。
2　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、炭化物微量混。
3　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、砂粒混。
4　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量、砂粒混。
5　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック少量混。
6　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック・炭化物微量混。
7　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性ややあり。シルトに砂粒均一混。
8　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。
9　暗褐色 (7.5YR3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、砂粒混。
10　褐灰色 (10YR6/4)　しまり強。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量、炭化物微量混。
11　灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルトブロック多量混。P8 埋土。
12　暗褐色 (7.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、炭化物微量混。1層相当。
13　暗褐色 (7.5Y3/4)　しまりあり。粘性ややあり。黄褐色シルト粒子多量、炭化物微量混。3層相当。
14　暗褐黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5cm 灰色シルトブロック中量、焼土粒・炭化物少量混。
15　暗褐黄色 (2.5Y4/2)　しまりあり。粘性あり。径 0.5cm 灰色シルトブロック・炭化物粒・砂粒少量混。鉄分集積。

カマド
1　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性ややあり。シルトに砂粒を均一に混。
2　オリーブ褐色 (2.5Y4/4)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子・径 0.5 ～ 1cm 焼土ブロック中量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量混。煙道天井部崩落土。
3　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、焼土粒少量混。
4　暗灰黄色 (2.5YR4/2)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック・焼土粒少量混。
5　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、焼土粒少量混。
6　暗灰黄色 (2.5YR4/2) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5 ～ 1cm 黄褐色シルトブロック中量、焼土粒微量混。
7　暗灰黄色 (2.5YR4/2) しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子多量、径 0.5cm 黄褐色シルトブロック少量、焼土粒微量混。
8　褐灰色 (10YR6/1)　しまりあり。粘性あり。黄褐色シルト粒子中量、炭化物多量混。
9　暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)　しまりあり。粘性ややあり。炭・シルト中量混。

第116図　SB04 及び塔鋺形合子・土器集中出土状況

第２節　外部観察による形態と模様

1　分析の経緯

塔鋺形合子の出土：2016（平成28）年10月７日、SB04から重なる円盤状の突起を持つ銅製品が出土した。当初は用途も名称も分からなかったが、栃木県日光男体山山頂遺跡出土品、法隆寺献納物や正倉院宝物の仏具（香合）に類似することが判明した。遺物名を「塔鋺形合子（とうまりがたごうす）」、その蓋であると結論付けた。国内遺跡出土品としては２例目、先端の一部を欠損するが良好な遺存状態であることなどの希少性や重要性から、遺跡調査指導委員会を設置し、指導、助言を受けながら、調査分析を実施した。

2　形態観察

塔鋺形合子蓋の形態や構造を把握するため、いくつかの観察・分析を実施した。以下にその内容および結果を記す。なお、塔鋺形合子各部位の名称については、第117図のとおりとした。

（1）肉眼観察

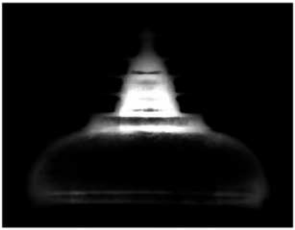
遺物取り上げ後（第118図)、筆による洗浄、竹串と医療用メスを使用した土砂の除去を実体顕微鏡も使用して行った。先端の宝珠を欠く以外、形状を損なう歪みや大きな欠損はみられない。上面からみると、相輪・基壇・身本体は同心円を呈する（PL34 1-2)。器面の内外面には、筆による洗浄では除去できない土砂が残っているが、模様が相輪上面と基壇上面（PL34 1-3)、蓋本体外面（PL34 1-4）に、鋲頭状の突起が塔部分内面上部（PL34 1-5・7）に確認できた。また、塔部分先端欠損部外面では、繊維状物質が付着しているのを実体顕微鏡で確認した。

第117図　塔鋺形合子各部位の名称

第118図　塔鋺形合子（出土直後）

（2）X線透過観察

2016年12月21日に、長野県立歴史館で実施した。蓋本体、塔部分に対し、金属の状態や構造について調べるため、出力を変えて複数回X線の照射を行い、鋳造品と考えられる特徴を確認した。しかし、塔部分の内部構造の観察は困難であった（第119・120図)。



第 119 図　Ｘ線透過画像

第 120 図　Ｘ線透過撮影風景

（3）Ｘ線 CT 観察

Ｘ線透過観察の結果を受け、内部構造の観察を目的に２回実施した。なお、Ｘ線 CT 観察の詳細については、第３節に記載している。

３　成分分析

非破壊による蛍光Ｘ線分析を２回実施した。非破壊分析のための塔鋺形合子蓋の表面部分に照射を行った（第 121 図）。

１回目は 2017（平成 29）年１月 20 日（金）に、長野県工業技術総合センターで実施した。口縁部２か所、胴部２か所、塔部分破断面１か所計５か所（第 121 図）を分析した。

２回目は 2018（平成 30）年１月 18 日（木）に、奈良国立博物館でＸ線 CT 観察時に実施した。５か所の成分分析を行い、その結果は第 12 表のとおりである。

第 121 図　蛍光Ｘ線分析位置

多少の数値のばらつきはあるが、銅、鉛、微量のスズと微量のヒ素が主成分である。スズが少なく、概ね古い銅合金の傾向であることを確認した。なお、ケイ素、カルシウム、マンガンは表面付着の土砂に由来していると考えられる。

第 11 表　蛍光Ｘ線分析結果（１回目）

			口縁部１		口縁部２		胴部１		胴部２		先端	
			質量濃度（%）	3σ（%）	質量濃度（%）	3σ（%）	質量濃度（%）	3σ（%）	質量濃度（%）	3σ（%）	質量濃度（%）	3σ（%）
14	Si	ケイ素	13.54	1.25	15.65	1.14	14.16	1.04	33.37	1.18	14.83	1.49
15	P	りん	11.42	0.74	9.17	0.58	10.72	0.61	3.73	0.48	0.46	0.40
20	Ca	カルシウム	1.29	0.12	0.99	0.10	1.48	0.12	0.99	0.10	0.17	0.08
25	Mn	マンガン	0.12	0.03	0.13	0.03	0.88	0.03	0.02	0.02	−	−
26	Fe	鉄	9.65	0.20	10.84	0.20	17.11	0.28	2.87	0.08	1.00	0.05
29	Cu	銅	48.90	0.84	44.74	0.69	30.94	0.46	45.96	0.85	59.90	1.11
33	As	ヒ素	6.01	0.15	5.32	0.12	5.09	0.11	2.53	0.08	9.51	0.23
47	Ag	銀	0.19	0.04	−	−	0.16	0.03	0.14	0.03	0.27	0.05
50	Sn	スズ	0.70	0.07	0.74	0.07	1.21	0.08	1.21	0.08	0.73	0.09
51	Sb	アンチモン	0.16	0.05	−	−	0.14	0.05	0.14	0.04	0.22	0.06
82	Pb	鉛	8.01	0.26	12.44	0.29	18.92	0.35	9.03	0.26	12.92	0.37

第12表　蛍光Ｘ線分析結果（２回目）

	蓋本体　a（黒い所）	蓋本体　b（aより左へ90度）	頂部　c（欠損部）	竜舎　d	竜舎　e（錆の少ない所）
銅	37％	62％	66％	63％	61％
鉛	29％	22％	20％	22％	24％
鉄	20％	6％	3％	6％	11％
ヒ素	11％	4％	10％	8％	11％
スズ	1.6％	3％	0.5％	1％	1％

４　塔鋺形合子の形態・模様

上記観察分析で得た結果をまとめると以下のとおりである。

法量：宝珠を除く高さ6.3cm、口径7.8cm、最大径8.2cm、竜舎直径1.6cm、相輪直径上段2.6cm、中段3.1cm、下段3.5cm、基壇上部直径3.9cm、重量97.2gを測る。厚さは0.07～0.20 cmで、1mmに満たない部分がある。

模様：竜舎上面、相輪３段各上面、基壇上面、蓋本体外面で確認。竜舎上面の模様はＸ線CT観察で確認。雲状曲線が極細沈線で３か所に刻まれる。その内側は極細の短い沈線が、外側は三角形状の刻みが、疎になされている（PL34 1-8）。相輪は３段とも、凹線による同心円が２本ほぼ同じ位置に確認できる。１本は外縁から1.5～2.0mm、もう１本は4.5～5.0mm、線幅は外側が0.2～0.5mm、内側が0.1～0.2mmである。基壇上面にも凹線による同心円が２本、外縁から1.0mm、6.0mmの位置に確認できる。蓋本体外面では基壇直下と真ん中あたりに２本で１単位となる沈線、身との接合部分直上に沈線１本が確認できる。

成分：銅を主成分とした合金で、鉛・鉄・ヒ素を含む。リン、カルシウム等は付着した土砂の影響と考えられる。

その他：鋳造品の可能性が高い。塔部分内面上部で確認された鋲頭状の突起は、軸がないことがＸ線CT観察で確認（PL34 1-6）され、この部分が組合わせで作られていないことが判明した。なお、塔部分先端欠損部外面に付着した繊維状物体の分析については、第４章４節に記載している。

第３節　塔鋺形合子のＸ線CTによる構造と制作技術の調査

小島・柳原遺跡群から出土した塔鋺形合子は上部の蓋部のみであったが、この部分の構造と制作技術を探るためにＸ線CTによる内部構造の調査を行った。

Ｘ線CT（X-ray Computed Tomography）は、観察対象の資料に対して360°のＸ線透過情報を取得し、コンピュータの計算処理によって資料内部の３次元イメージデータを構築する装置である。医療や産業分野での活用が主流であるが、最近では文化財調査にも盛んに用いられるようになってきた。

小島・柳原遺跡群出土塔鋺形合子は、奈良国立博物館設置のＸ線CTによって、最初の調査が行われた（2018年１月19日）（第122図）。用いた装置は、大型の仏像の３次元内部構造調査用に開発されたエクスロン・インターナショナル社製Y.CT Precision320 FDP、撮影条件は、Ｘ線出力：電圧320kV、電流２mA、ビュー数:900、積分時間700ms、フィルター：アルミ1.5mm＋銅1.5mm、空間分解能0.06mmである。塔鋺形合子は表面全体がサビで覆われており、塔部分の構造がわかりにくいため、Ｘ線CTの調査でこの部分の構造の解明が期待された。特に、輪と刹を含めた全体が一つの鋳型で作られているのか、あるいはそれぞれ別に作られたものが重ねて全体が構成されているのかが注目点であった。得られた塔全体の断面画像によって、全体がたいへんきれいな対称性を持って制作されていることが確認でき、全体が鋳造で制作されているようにも見受けられるが、部分的に接合されたのではないかという箇所も認められ、どちらとも結論付けるまでには至らなかった。そこで、元興寺文化財研究所に新たに設置されたマイクロフォーカスＸ線CTによって、クロスチェックを行った（2018年11月21日）（第123・124図）。用いた装置は、TOSCANER-32300-μFD-GCR（東芝ITコントロールシステム株式会社）、撮影条件は、0.5mm銅フィルター、電圧220kV、電流600μA、１回転での撮影枚数900枚、１枚当たりの積分時間285msec、積算回数２または４である。この装置は、比較的小ぶりな資料の細部を探ることを目的としているため、塔部分の構造に新たな知見が期待された。

第122図　Ｘ線CT観察風景（奈良国立博物館）

第123図　Ｘ線CT撮影風景（元興寺文化財研究所）

第124図　Ｘ線CT（元興寺文化財研究所）

空気中で金属製資料をＸ線CTで観察する時に、撮影条件によってメタルアーティファクト[1]が発生し、得られた画像の解釈に影響を与えるため、資料全体を傾けるなど、Ｘ線照射条件を変えて何度か撮影した。

塔部分の断面を改めて観察すると（第125図）、一番下の蓋胴体の口の立ち上がり部分、いわゆる基壇部分と基壇上面に被る

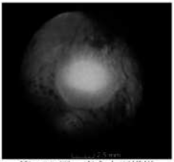
第125図　塔部分断面

1　アーティファクト（artifact）：実際の物体ではない、Ｘ線撮影時の条件によって二次的に発生する特有の擬似画像（異常画像）をアーティファクトと呼ぶ。装置由来と撮影条件由来があるが、メタルアーティファクトは、Ｘ線吸収率の低い物質（空気）内に吸収率の高い金属が存在する時に発生する。

ドーナツ型の板材の間に少しズレがあり（第125図○部分）、ドーナツ型板材外周部の下面が蓋本体にロウ付け接合されているとみられる。また、ドーナツ型の板材の内周の上部に少々厚めの塔部分がロウ付け接合されているのではないかと考えられる（第125図○部分）。○で囲んだ部分では、明らかに別材が縁ギリギリに載っている様子が見て取れる。ドーナツ型部材の上に載る塔部分の内壁の形状は安定しており、また厚みもほぼ一定である。相輪と刹の重なり部分に発生しているメタルアーティファクトの影響で実際の形が捉えづらいが、塔先端まで一体で鋳造されたとみてよいのではなかろうか。

従って、この塔鋺形合子は、鋳造後にロクロで整形仕上げされた蓋に、ドーナツ型の板材を被せ、さらに鋳造後にロクロで整形仕上げされた塔部分が載るという3パーツに分かれる構造ではないかと想定できる。ただ、最先端の宝珠が欠損しているのでここまで一体であったかは保証の限りではない。

今回の調査で、竜舎の上面に毛彫りの模様が施されていることが明らかになった（第126図）。サビの上からでは確認できなかったが、マイクロフォーカスX線CTによって、このような細かい線刻模様が明らかになったことは大きな収穫である。以前から知られている日光男体山出土の関連遺物の模様比較など、新たな見地からの検討を期待したい。


第126図　竜舎上面模様

今回の調査全体を通して残念であったことは、この遺物の材質をしっかり把握できなかったことである。ハンディタイプの蛍光X線装置による分析結果は出ているが、これはあくまで参考値であり、正確な材質を示しているとは言えない。銅合金は、長年月にわたる土中埋蔵の環境による銅の流出などによって表面に存在する元素が大きく変動することがわかっている（三ツ井ほか2018）。表面に存在する元素の情報しか得られない蛍光X線分析では本来含まれている元素と後から土中で付着した元素が混在して同時に検出されることになる。今回の分析値（第11・12表153・153頁）で、鉄がかなり検出されているがこれは土中の鉄分が付着したことに起因する。なお、銅製容器の材質の変遷（村上2007）から見て、鉛やヒ素が多く出ていることから、奈良時代よりも時代は下がるのではないかと考えられる。

銅合金は土中の埋蔵環境ではいずれも緑青サビで覆われてしまうが、この塔鋺形合子の正確な分析値が各部分でわかれば、正倉院宝物にあるような部分的に違う色を呈したカラフルな合子である可能性もあるのかもしれない。今後の調査に期待したい。

最後に、X線CTの調査に協力していただいた奈良国立博物館鳥越俊行氏、元興寺文化財研究所山田卓司氏にお世話になった。ここに記して謝辞とする。

（村上　隆）

参考文献

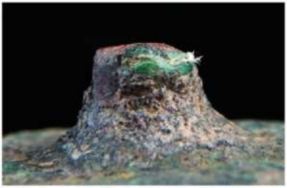
三ツ井誠一郎・村上　隆・上田典男・平林　彰・廣田和穂2018「長野県柳沢遺跡における青銅器の埋蔵環境と青銅器由来成分の挙動」『文化財科学』第77号

村上　隆2007『金・銀・銅の日本史』岩波新書

第４節　塔鋺形合子付着繊維状物体の分析

１　分析に至る経緯

実体顕微鏡を使用して塔鋺形合子蓋の土砂取り作業中、破損した相輪先端付近に微細な繊維状物体の付着を確認した（第127図）。器面に強固に付着し、土中で絡みついた草木根とは考えにくいため、塔鋺形合子に関係する繊維と判断し、種類等同定の分析を行うことにした。分析は、信州大学繊維学部に協力を依頼し、信州大学繊維学部　先進繊維・感性工学科児山研究室が実施した。なお、同研究室による報告及びデータは、本書に添付したDVDに収録した。以下に要約を記す。



第127図　相輪先端付近に付着した繊維状物体（拡大）

２　分析

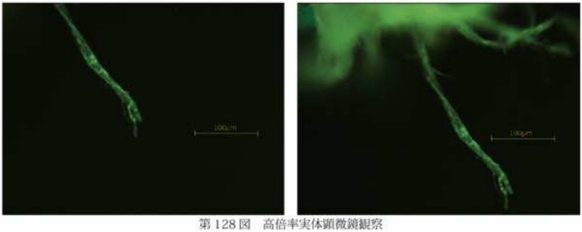
（１）１回目の分析

2017（平成29）年１月26日、信州大学繊維学部にて、赤外線分光光度計を用いた分析（FT-IR法）と高倍率実体顕微鏡観察（非破壊分析）を行った。

FT-IR法は、分析物に照射した赤外線が反射したものを拾い、その波長のスペクトルから何であるかを読み取るものである。最初は装置内に入れて赤外線を照射する方法（拡散照射）で分析を行った。その後、立体物にピンポイントで赤外線を照射できる光ファイバープローブ反射測定法でも分析を試みた。結果、どちらの方法でも絹・麻で現れる特徴的なスペクトルは明瞭に現れなかった。

高倍率実体顕微鏡観察では、付着物に撚りのようなものと節のようなもの（第128図）がみられるため、繊維であり、麻の可能性もあるという所見を得た。

これらの結果、塔鋺形合子の先端に付着しているものは、繊維であることが判明した。しかし、微量で形が崩れているため、現状では麻か絹かの断定はできなかった。



第128図　高倍率実体顕微鏡観察

（２）２回目の分析

繊維状物体の特定のため、2018（平成30）年６月信州大学と研究委託の契約を締結した。今回は、繊維状物体を取り外して分析をする。塔鋺形合子蓋からの繊維状物体取り外しは、埋文センター職員立会いの下、信州大学繊維学部児山研究室で実施した。取り外された繊維状物体は、「試料大」「試料小」の２つに分け、各分析に必要な前処理等を行った。分析後の試料は、元の形状を残さないが、白金スパッタリング処理を施した３つの加工試料で保存されている。

今回実施した分析は、実体顕微鏡、マイクロスコープ、エネルギー分散型微小部蛍光Ｘ線分析装置（μEDX）、フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）、走査型電子顕微鏡（SEM）である。各分析の概要は以下のとおりである。

①実体顕微鏡の分析結果

試料全体の外観を計測するために実体顕微鏡による分析を行った。装置はオリンパス株式会社製SZX7を使用。「試料大」、「試料小」とも三日月状であり、少し丸みをおびる。この丸みをおびた面（第129・130図）には明らかな異物（写真で水色に見える部分）が付着しており逆側の面には付着していないため、合子本体部と接着していた異物と予測される。

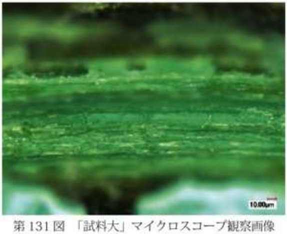
第129図　繊維状物体（試料大）の外観写真（内面）

第130図　繊維状物体（試料小）の外観写真（内面）

②マイクロスコープの分析結果

試料である繊維状物体の形状を詳細に分析するためにデジタルマイクロスコープを使用した。本装置に拡大レンズを使用して倍率を上げて計測する。

計測された画像より、繊維はほぼ直線的に平行に配列されており、所々に節のようなものが確認される（第131図）。繊維１本とみられる長さを計測したところ約20μmで、繊維の断面形は楕円に近い（第132図）。また、繊維が裂けて非常に細い毛羽のような状態（第133図）が存在することも確認できた。節の様に見えるものが、残存したセリシンの可能性もあるが、規則的に出現していないためその可能性は低い。



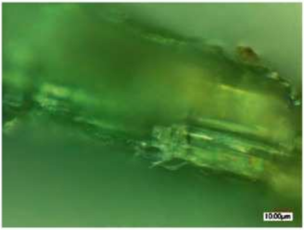
第131図　「試料大」マイクロスコープ観察画像

以上のマイクロスコープの結果から、繊維状物体は絹ではなく麻繊維または綿繊維であることが予測される。

③エネルギー分散型微小部蛍光Ｘ線分析装置（μEDX）での分析結果

繊維状物体に付着している元素を分析するため、エネルギー分散型微小部蛍光Ｘ線分析装置を使用した。

第 132 図　「試料小」マイクロスコープ観察画像 1



第 133 図　「試料小」マイクロスコープ観察画像 2

「試料大」では、内面を水色表示の異物部分（大 - 内面 - 異物）と、繊維が確認できる部分（大 - 内面 - 繊維）、外面は黒色表示の異物部分（大 - 外面 - 異物）と、繊維が確認できる部分（大 - 外面 - 繊維）を測定した。「試料小」では、内面を水色表示の異物部分 3 か所（小 - 内面 - 異物 -A、B、C）、外面は黒色表示の異物部分（小 - 外面 - 異物）と、繊維が確認できる部分（小 - 外面 - 繊維）を測定した（第 13 ～ 15 表）。

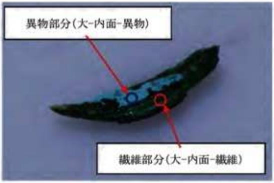
その結果は、以下のとおりである。

・第 134 図 - (a)、第 135 図 - (a) で水色に表示されている異物では、銅が 70 ～ 80%、次に砒素を多く検出。次いでリン、カルシウム、鉄が含まれ、場所によってはカリウム、珪素、亜鉛が検出された（第 13 表）。

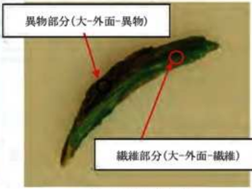
・第 134 図 - (b)、第 135 図 - (b) で黒色に表示されている異物では、銅が 90% 近く含まれ、砒素、鉄、珪素が検出された。水色の異物と比較すると銅の割合が多く、リンが検出されずカルシウムの割合も少なかった（第 14 表）。

・第 134・135 図で異物付着のない繊維状物体の部分では、銅が 95% 前後と非常に高い数値で検出された。また、砒素、鉄、珪素、カルシウムが検出されており、カリウムと亜鉛は検出されなかった。検出割合は異なるが検出された元素から見ると黒色の異物と結果が近いことがわかる（第 15 表）。

以上の結果より、画像上で水色に表示されている異物は繊維状物体とは明らかに異なる物体と考えられ、黒色に表示されている異物は繊維状物体に近いものであることが予測される。



(a)「試料大」内面部



(b)「試料大」外面部

第 134 図　「試料大」での μEDX 測定箇所

(a)「試料小」内面部　　(b)「試料小」外面部

第 135 図　「試料小」での μEDX 測定箇所

第 13 表　異物（水色）部分での μEDX 測定結果

異物（水色）	測定範囲での元素含有割合（%）							
	Cu	As	P	Ca	Fe	K	Si	Zn
大 - 内面 - 異物	79.6	6.8	5.1	4.0	2.5	2.0	−	−
小 - 内面 - 異物 A	78.4	13.5	4.3	1.9	1.1	0.8	−	−
小 - 内面 - 異物 B	79.1	8.3	1.0	1.0	4.2	−	6.4	−
小 - 内面 - 異物 C	69.8	−	−	−	6.2	−	−	24.0

第 14 表　異物（黒色）部分での μEDX 測定結果

異物（黒色）	測定範囲での元素含有割合（%）							
	Cu	As	P	Ca	Fe	K	Si	Zn
大 - 外面 - 異物	87.7	3.6	−	0.3	4.9	−	3.5	−
小 - 外面 - 異物	90.3	3.5	−	0.3	2.1	−	3.8	−

第 15 表　繊維部分での μEDX 測定結果

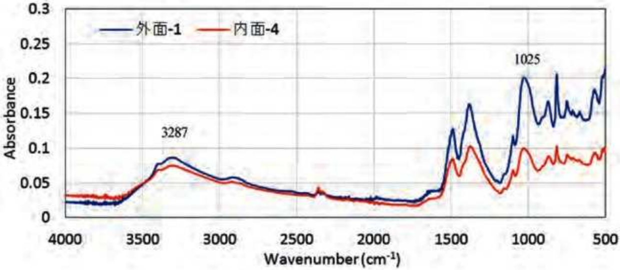
繊維	測定範囲での元素含有割合（%）							
	Cu	As	P	Ca	Fe	K	Si	Zn
大 - 内面 - 繊維	95.8	1.4	0.6	0.2	2.0	−	−	−
大 - 外面 - 繊維	96.1	2.1	−	0.1	−	−	1.6	−
小 - 外面 - 繊維	90.5	−	0.6	0.4	3.3	−	5.2	−

④フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）の分析結果

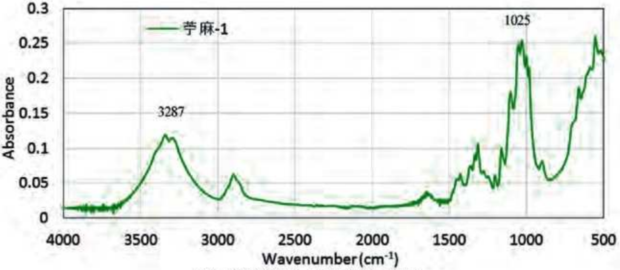
繊維状物体に含まれている有機物を分析するため、フーリエ変換型赤外分光光度計で分析した。FT-IR の φ 1.8 mm 人工ダイヤモンドプリズム上に試料を設置した ATR 法（全反射減衰法）で測定した。

「試料大」の内面および外面を計測した赤外吸収スペクトルを示す（第 136 図 -（A））。横軸は波数、縦軸は吸光度を示す。2000-500 cm-1 の吸光度（ベースライン）が異なるが、吸収スペクトルの形状はほぼ同一であった。よって、今回測定した範囲では内面および外面共に有機物としては同一のものであると示された。

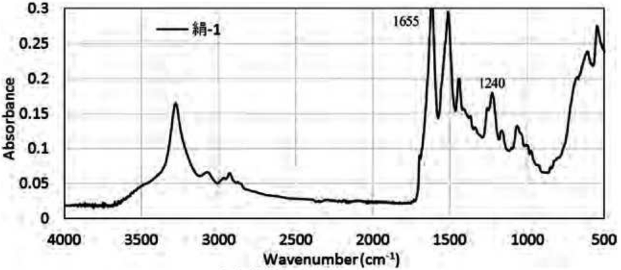
吸収ピークの波数に着目すると、試料大ではグルコシド結合（C-O-C 結合、1025 cm-1）および O-H 結



（A）「試料大」の赤外吸収スペクトル



（B）麻繊維（苧麻）の赤外吸収スペクトル



（C）絹繊維の赤外吸収スペクトル

第 136 図　「試料大」、麻繊維、絹繊維の赤外吸収スペクトル

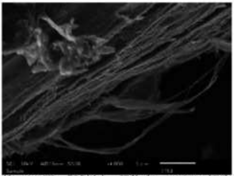
合（3287 cm-1）にピークが出現している（第 136 図 -（A））。セルロース系繊維、たんぱく質繊維の吸収スペクトルとして現生の麻繊維（苧麻）と絹とで比較すると、絹ではアミド -1（1655 cm-1）、アミド -3（1240 cm-1）に吸収ピークがあるが（第 136 図 -（C））、試料大では出現していない。一方、麻繊維（苧麻）では、グルコシド結合（C-O-C 結合、1025 cm-1）、O-H 結合（3287 cm-1）に吸収ピークが出現しており（第 136 図 -（B））、試料大と一致する。よって、計測した繊維状物体はセルロース系繊維のものであることが判明した[1]。

⑤走査型電子顕微鏡（SEM）での分析結果

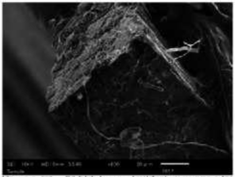
②でデジタルマイクロスコープを使用して試料形状を観察したが、さらに詳細に観察するため、走査型電子顕微鏡（SEM）を使用して分析する。試料には「試料小」が２つに破断した際の異物が少ない試料「試料小 - 異物少」を使用し、測定前に白金でのスパッタリング処理を施している。

SEM で計測した画像では、試料片の端面は繊維が裂けたような構造をしている（第 137 図）。裂けた繊維の直径は 1 μ m 以下。この構造が、自然劣化または繊維状物体を合子から取り外したときに形成されたかは不明であるが、少なくとも 1 本の繊維が裂けて形成されたことは明らかである。第 138 図は繊維状物体の断面を観察するために、第 137 図の試料に対して垂直に繊維状物体を切り出した「試料小 - c 」の断面画像である。こちらにも繊維質が引き裂かれているものが確認できる。また、第 139 図の断面部上の右上（図内の赤丸）および中央部（図内の青丸）に楕円形状の 1 本の繊維が確認できる。また、それぞれの繊維の中央部には空洞があることも確認できる。これら繊維の長さは長辺方向約 20 μ m、短辺方向約 10 μ m である。

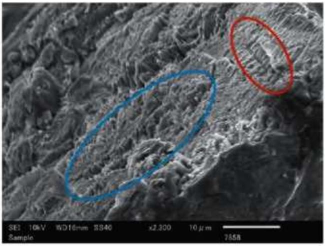
以上より、繊維状物体は約 20 × 10 μ m の大きさの楕円形状の繊維が直線状に配列されており、各繊維の中央部には空洞が存在することが確認された。



第 137 図　「試料小 - 異物少」の SEM 観察画像



第 138 図　「試料小 -c」切断面での SEM 観察画像



第 139 図　「試料小 -c」の切断面での SEM 観察画像拡大図

1　一般的に絹繊維が出土した際の赤外スペクトルがセルロース繊維のスペクトル形状に似ることも言われているが、古代絹の赤外スペクトルは 1600 cm-1 に大きな吸収ピークがあり、今回の試料とは一致しない（佐藤 2005）。

3　各分析結果を踏まえた最終結論

各分析結果からの判明したことは以下のとおりである。
・繊維状物体は絹繊維ではなくセルロース系繊維である。
・どのようなセルロース系繊維であるかの同定はできなかった。
・出土品であるため麻繊維であることも考えられるが、繊維が直線状でねじれや撚りが見られないため麻繊維でない可能性も存在する。
・いわゆる、草木類の葉を巻いていただけの可能性もあり、その場合には草木内の繊維が直線状で配列することになる。
・異物に関しては合子との接着面のみ検出されたため接着剤として使用されていたと考えられる。「塔鋺形合子（蓋）」の素材に銅、砒素、鉄が含まれているため、これを差し引くと、μ-EDX の結果で水色の異物のみカルシウムとリンの検出割合が繊維状物体よりも多いことがわかる。膠の主成分であるゼラチンにこの２つの元素は多く存在するが、さらに多く存在するナトリウムが検出されていないため、この異物は膠であるという断定は現状できない。

以上より、塔鋺形合子の先端に付着した繊維状物体は、植物由来（セルロース系）繊維であり、接着剤を用いていた可能性があることが判明した。極微量の繊維での分析であったため繊維の種類同定には至らなかったが、使用状況を考える上で興味深い結果を得ることができた。

参考文献

佐藤昌憲 2005「シンクロトロン顕微赤外分析による古代絹の材質分析」『奈良文化財研究所紀要』pp. 40-41

第５章　自然科学分析

第１節　出土骨鑑定

小島・柳原遺跡群では、平安時代の遺構を切る土葬墓・火葬墓・火葬施設が多く検出され、平安集落が断絶したのち墓域として利用された。墓跡、溝跡などから骨や歯が出土しており、これらについて、茂原信生、本郷一美、櫻井秀雄、五十嵐由里子の４氏に、鑑定指導をしていただいた。

出土骨鑑定は、原則骨表面に付着した土砂を除去した状態で実施したが、この時に劣化が激しく鑑定困難な骨は、全体を水洗して土砂を取り除き、歯が残存していないか確認した。

１　出土人骨について

焼けた人骨は細片化するものが多く、四肢骨や頭蓋骨片がまんべんなく出土している。出土骨は、いずれも生の状態で焼かれたことを物語る鱗状の亀裂が見られ、再葬骨を火葬した状態のものは見られない。火葬されず埋葬されたものも多く検出されているが、骨の遺存状況はよくない。年齢を推察できる生骨では、２歳前後や５～６歳程度と考えられる乳歯列を持った子供の歯が多くみられる。あまり高齢のものは見られない。埋葬品をほとんど伴わないため、時代の特定は困難なものが多い（第 16 表）。なお、本文および表で用いる、幼児は１～６歳（第１大臼歯が生えるまで）、少年は６～ 12 歳、青年は 18 ～ 30 歳程度、壮年は 30 ～ 40 歳程度を指す（保志 1988 一部改変）。

SM01 出土人骨：中世以降（第 140 図１・２）

土葬墓出土の生骨である。顔を西に向けた屈葬で、股関節と膝関節を深く曲げる。頭蓋骨は土圧で横方向に圧平されているが、顔の下半部と下顎骨は残りがよい。頭蓋骨片がかなり出土しており、ほぼ頭蓋全体程度の量である。頭蓋冠の骨は厚くない。眉間は発達していない。乳様突起は小さい。外後頭隆起は突出していない。これらの特徴を合わせて考えると女性の可能性が高い。

上顎には左ではＭ３までが残り、右ではＭ２までが残る。下顎には左右がＭ３まで残る。上顎中切歯はシャベル型である。上顎の左Ｍ３は楕円形をなす。上顎のＭ１の舌側半は完全に象牙質が露出している。しかし、Ｍ２、Ｍ３の咬耗はさほどではない。また、前歯部でも一部の象牙質が露出しているが顕著ではない。さほど高齢ではない。下顎骨の角前切痕が顕著である。

オトガイ部から臼歯の植立する後方まで下顎骨は次第に高さを減じている。オトガイ高は 34.7mm で、第２大臼歯部の下顎体高は 23.9mm である。歯の咬耗はやや進んでおり、青年から壮年程度と思われる。

SM02 出土人骨：中世以降

土葬墓出土の生骨である。手足を強く曲げた屈葬。左側頭骨錐体部を含む頭蓋骨片や距骨片、指骨、尺骨筋部、上腕骨遠位骨幹、外後頭隆起部、などがある。右大腿骨上部骨幹では、外側に殿筋隆起が張り出している。後面の粗線はさほど顕著ではないが明瞭である。骨体上横径は 31.6mm、骨体上矢状径は 24.7mm で、骨体上断面示数（扁平示数）は 78.2 で扁平大腿骨である。歯では下顎右Ｐ２の歯冠と数点の破片が出ている。この歯は小さい。成人であろう。かなりの量の火葬骨が混在している。

SM12 出土人骨：中世以降

土葬墓出土の生骨である。残りは悪い。顔面を西に向けた側臥屈葬。右上肢は肘を強く曲げており、左は 90 度程度肘を曲げている。左右とも膝は強く曲げている。右大腿骨は土圧で扁平になっている。細い。

中央付近の幅は 21mm ほど。粗線はやや発達しているので柱状性は高い。

SM14 出土人骨：中世以降

火葬墓出土の焼骨である。左距骨は、やや小さめである。寛骨の耳状面の破片がある。不明の四肢骨片が多数ある。

SM17 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りは悪い。下顎歯右 dp １、左 dp ２が残っている。乳歯の咬耗はないので、萌出寸前のものであろう。形成中の上下切歯永久歯が残っている。２歳程度の幼児であろう。

SM18 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りは悪い。生骨。屈葬で、左上腕は肘を強く曲げ手を頸付近に置いている。股関節も強く曲げているようである。

SM19 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りは悪い。上顎歯左Ｍ１、右 dp ２・Ｍ１、下顎歯左 dp １・dp ２、右 dp １・dp ２が残っている。下顎歯左右のＭ１があるが、全く咬耗はないので萌出はしていなかったであろう。他に形成中の上顎中切歯と側切歯の歯冠があるので、５歳程度の幼児であろう。

SM21 出土人骨：中世以降

土葬墓。全体で同じ歯種の歯はなく、同一個体のものである。成人だがさほど高齢ではない。歯が 18 本と歯片が出土している。上顎が左Ｉ１・Ｃ、右Ｉ１・Ｃ・Ｐ１・Ｍ１かＭ２・Ｍ３、下顎は左Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ１かＭ２、、右Ｐ１・Ｐ２、である。他に顎の右Ｐ１と思われる舌側半、下顎左右大臼歯近心半、矮小歯のようなものがある。咬耗は軽度である。

SM22 出土人骨：中世以降

土葬墓。左肘はほぼ直角に曲げて手は腹部に置いている。下肢は股関節・膝関節ともに強く曲げている。下顎骨歯槽部には、歯が残る。右下顎体大臼歯部片があり歯槽はあるが歯はない。

歯は 18 本が残る。上顎が右Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ２、左Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１。下顎は右Ｃ・Ｐ２・Ｍ１、左Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２が残る。咬耗はやや進んでおり、Ｍ１は歯冠の半分程度が失われている。咬耗に左右の偏りがあり右側の咬耗が進んでいる。咬耗はやや進んでおり、上の犬歯は舌側に顕著な磨耗がある。成人であろう。

左大腿骨近位骨幹が残っている。頑丈で後面の粗線はよく発達しておりいわゆる柱状大腿骨である。上部はやや扁平である。男性のものであろう。

SM24 出土人骨：中世以降

火葬墓。頭蓋骨片などがある。右側頭骨錐体部や肋骨片などが確認できる。

SM26 出土人骨：中世以降

火葬墓。頭蓋骨片・大腿骨片などがある。大腿骨近位骨頭部や距骨などが確認できる。

SM28 出土人骨：中世以降（第 140 図３）

火葬墓。３つの火葬墓が SM28 として取り上げられたものである。

SM28-①：下顎骨体がほぼ残っている。さほど頑丈ではない。Ｍ２の歯槽が退縮しており、これより遠心の歯は生前に脱落していたのであろう。それより近心の歯は左右とも植立していた(歯は失われている)。上顎骨が残る。右では小臼歯の歯槽が狭まっており上顎骨外面に孔が空いている。歯根膿胞で穿孔したのであろう。上顎左右のＭ１の歯槽は確認できるがそれより遠心の歯槽はない。

かなりの量の頭蓋骨片がある。頭蓋冠の骨も多く残る。外後頭隆起はよく発達している。左右側頭骨の乳様突起の一部が残る。乳様突起はやや大きく厚い。男性的である。下顎骨の右筋突起部がある。高いが

さほどの厚さはない。

歯根が何点か出土している。下顎大臼歯が含まれる。

SM28-②：頭蓋骨片がかなりある。肩甲棘部が残る。右外耳道部と左側頭骨乳様突起がある。頭蓋冠の骨は薄い。

SM28-③：歯根が何点か見られるが歯種は不明。鋸歯状の縫合は明瞭である。さほど高齢ではないだろう。

SM33 出土人骨：中世以降

土葬墓。左右側頭骨の錐体がある。外後頭隆起部の後頭骨があり、外後頭隆起はやや発達している。歯が残っているが３本と数点の歯片である。下顎は右Ｍ２と思われるものと左Ｍ３で、上顎は右Ｐ２である。咬耗は下顎のＭ２と思われるもので遠心に象牙質の露出がある。小さな歯である。左大腿骨骨幹近位部が残る。後面の粗線はやや発達しているが、大腿骨自身は太くない。上部は扁平である。

SM34 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りは悪い。顔をやや右に向け、肘は左右ともに深く曲げて手を頸付近に置いている。股関節はほぼ 90 度にまげ、膝は左に倒しており膝を強く曲げている屈葬である。下顎骨右下顎体はあまり厚くない。歯は上顎の左右中切歯があり、明瞭なシャベル型切歯である。他に上左Ｉ２、Ｍ３か、下右Ｐ２、左Ｍ２がある。咬耗は軽度である。下のＭ２の遠心面に隣接面磨耗があるのでＭ３が萌出していたと考えられ成人には達していたと思われる。

SM49 出土人骨：中世以降

土葬墓。北頭位の側臥屈葬で、残りは悪い。頭蓋骨片は細片化する。下顎の切歯部片が認められる。歯は 31 個の歯冠と少々の破片である。上顎右がＩ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ２・Ｍ３の７本、左がＩ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３の７本が残る。下顎は右がＩ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３の８本すべてが残り、左も８本すべてが残っている。咬耗は下顎のＭ１の頬側の咬頭部に象牙質の露出が見られるがＭ２、Ｍ３には見られず、上顎のＭ３の咬耗もごくわずかである。20 歳代前半程度の青年であろう。性別は不明である。重複する部分はなく形も左右が似ており同一個体のものであろう。

四肢骨は細片である。１点大腿骨の後面の粗線がある。よく発達しており成人であろう。１点焼骨の頭蓋骨片が混入する。

SM50 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りが悪い。乳歯が残る。下顎右ｄｐ１と下顎左ｄｐ２が残る。どちらも咬耗はなく、歯冠が形成されているので１歳程度と思われる。

SM51 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りが悪い。歯が残る。上顎が左Ｉ１・Ｃ・Ｍ３と思われる変形歯、右Ｃ・Ｐ２、下顎は右Ｃ・Ｐ２・Ｍ１、左Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１が残る。小さな歯である。咬耗はごく軽度で、象牙質の露出があるのは下顎Ｍ１のみである。まだ若い個体であろう。ただし上顎のＭ３と思われる変形歯が正しくＭ３なら成人に達していた可能性はある。女性ではないかとの印象を持つ。他に歯片が数点出土している。

SM52 出土人骨：中世以降

火葬墓。頭蓋骨片など多数ある。右側頭骨錐体部や肋骨片などが確認できる。

SM53 出土人骨：中世以降（第 140 図７）

土葬墓で残りが悪い。歯が残る。上顎は左Ｃ、右Ｃ・Ｐ２、下顎は左Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１、右Ｃ・Ｐ１・Ｐ２で、他に上顎の切歯唇側半エナメル質がある。下上顎左側切歯の唇側半の切縁は咬耗している。下顎左Ｍ１はやや咬耗しており頬側半は象牙質が露出している。小臼歯も咬耗しており、成人には達していた可能性がある。少なくとも子供ではない。上層に焼骨が混入する。

SM54 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りが悪いが、１体分である。顔を右に向けている。右肘は軽く曲げており、股関節や膝関節は強く曲げている。歯が残る、上顎右はＩ１からＭ２まで、左はＩ１からＭ３までが残る。下顎右はＩ１からＭ１まで、左はＩ１からＭ１までが残る。咬耗はごく軽度で、象牙質の露出はほとんど見られない。成人になったくらい、20 歳前後であろう。

SM55 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りが悪い。歯は残るが、それ以外は骨片である。上顎は右Ｉ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２、左Ｉ１からＭ１まで、下顎が左Ｉ１・Ｃ、右Ｉ１、Ｃ、Ｐ１、Ｐ２、である。咬耗はやや進んでいるが大臼歯の咬耗は軽度である。さほど高齢ではない。壮年程度か。性別は不明

SM56 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りは悪い。歯、下顎体が残る。下顎体はさほど厚くない。歯は比較的小さい。上顎が右Ｉ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２、左Ｉ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２、下顎は右Ｉ１・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２、左Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２、である。咬耗はやや進んでおり、前歯部は切縁に明瞭に象牙質の露出がある。上顎Ｍ１は舌側半の磨耗が顕著である。26 本が残る。壮年程度であろう。女性的な印象である。

SM60 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくないが、北頭位の側臥屈葬である。左手を折り曲げて、手を右胸に置いている。顔を西に向けている。右手は下方に伸ばしているようである。膝は強く曲げている。足は臀部付近まで上がっている。左側が上。

歯が出土している。歯は 25 本ある。上顎が右Ｉ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３、左Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３、である。下顎は右はＩ１・Ｉ２・Ｃ・Ｐ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３の８本すべて、左Ｉ１・Ｐ２・Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３である。上顎の右Ｍ３は圧平された形である。咬耗はあまり進んでおらず、象牙質が露出するのはＭ１で、他は小さな露出に過ぎない。成人であるがまだ若い青年であろう。性別は不明である。虫歯が見られる。

SM62 出土人骨：中世

火葬施設としては規模が小さいので、焼成遺構と考えられる土坑から出土。上顎歯上右Ｍ１の破片、下顎歯右Ｃ、Ｍ１が同定できる。Ｃや下顎のＭ１は咬耗もなく形成途中であろう。まだ若い２歳前後の幼児と思われる。

SM65 出土人骨：中世以降

土葬墓。骨のみ出土。骨の残りはよくない。歯が残っており、乳歯列である。永久歯は上顎左Ｍ１とした下顎（確認）左Ｍ１が残っており、どちらも形成途中である。他に上顎の左右の中切歯の歯冠の切縁部や下顎の切歯の切縁部などがある。乳歯は上顎が右 dc・dp １、左 dp ２、下顎は右 dc・dp １・dp ２、左 dp ２、である。２歳前後の幼児である。

SF11 出土人骨：中世以降

火葬施設から出土。同定できた焼骨は以下の通りである。頭蓋骨片、中節骨、足の基節骨、左尺骨遠位端、足の中節骨、歯根片、歯冠片、四肢骨片多数。

SF14 出土人骨：中世以降

火葬施設から出土。右肩甲骨肩甲棘、四肢骨片がある。黒色化しているものが多いが、焼骨とは様子が異なる。それ以外の四肢骨片も黒化している骨の割合が多いようである。焼成温度が低かったのであろう。

SK383 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。歯が残る。上顎が右Ｉ１からＭ２まで、左Ｉ２、下顎は右ＣからＭ１まで、左Ｉ１・Ｍ２の 14 本が残っている。咬耗はごく軽度で象牙質の露出はほとんどない。10 代前半程度の少年であろう。

SK390 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。上顎が左 dp１・dp２、右 dp１、下顎は左 dp１・dp２、である。２歳前後の幼児である。

SK530 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。上顎が左右 dp１・dp２、下顎は左 dp１・dp２、右 dp２、である。他に形成中の永久歯の上顎中切歯片がある。２～３歳程度の幼児であろう。

SK531 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。上顎が右 dp１、下顎は右 dp２、である。dp１、dp２はわずかな咬耗がある。２歳前後の幼児である。

SK563 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。永久歯のＭ１は上下とも埋伏していて萌出していない。歯冠は形成されているので５歳前後の幼児であろう。上顎が右 dp１・dp２、左 dp１・dp２・Ｍ１、下顎は左 dp１・dp２・Ｍ１、右 dc・dp１・dp２・Ｍ１が残る。植立状態で出土したのは上顎の左 dp１と dp２、下顎の左 dp１と dp２および埋伏したＭ１である。

SK581 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。上顎が右 dc・dp１・dp２、左 dp２、下顎は右 dc と左右の dp１、dp２、である、咬耗はほとんどないので２歳前後の幼児である。

SK584 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。上顎が右 dp２、下顎は左 dp２、右 dp１、ならびに永久歯の上Ｍ１があるが形成中である。咬耗は軽度なので２～３歳程度の幼児と推測される。

SK641 出土人骨：中世以降

土葬墓で残りはよくない。乳歯が残る。上顎が右 dc・dp１、下顎は右 dp１・dp２の４本である。咬耗は軽度なので２～３歳前後の幼児であろう。

２　出土動物骨について

小島・柳原遺跡群から出土した動物骨は、第 17 表のとおりである。SD01 からは、ウマ、シカ、イノシシの歯や四肢骨などが出土している（第 141 図１～３・５～７）。また、トリやイノシシの骨片が、墓跡に混入している事例もある。

参考文献

保志宏 1988『ヒトの成長と老化 ―発生から死にいたるヒトの一生―』　てらぺいあ

第 16 表　出土人骨一覧

遺構名	出土位置	種別	焼骨生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版番号
SM01	-	ヒト	生骨	頭蓋骨・歯	上 :I1 ～ M3/I1 ～ M2 下 :I1 ～ M3/I1 ～ M3	上：左／右 下：左／右	青年～ 壮年	上顎中切歯シャベル型 女性の可能性高い	第 140 図 1・2
SM02	-	ヒト	生骨	頭蓋骨 上腕骨 尺骨 大腿骨	外後頭隆起部 遠位骨幹 近位部 上部骨幹	- - - 右	成人	-	-
SM02	-	ヒト	生骨	歯	下 :P2	右	-	-	-
SM03	拡張	ヒト	焼骨	頭蓋骨 肩甲骨	- -	- 右	-	-	-
SM04	拡張	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM05	拡張	ヒト	焼骨	指骨 歯 大腿骨	- 下：大臼歯 骨幹	- - 右	-	-	-
SM06	-	ヒト	生骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM06	-	ヒト	生骨	下肢骨	-	-	-	-	-
SM06	-	ヒト	生骨	下肢骨	-	-	-	-	-
SM07	-	ヒト	焼骨	歯 頭蓋骨 肩甲骨 上腕骨 上腕骨 尺骨 尺骨 尺骨 第 2 中手骨 第 2 中手骨 第 4 中手骨 大腿骨 大腿骨 中足骨	- - 関節面 遠位骨端 遠位骨幹 骨幹部 遠位骨幹 骨幹部 近位半分 遠位半分 遠位半分 遠位骨端外側関節部 後面遠位骨幹部 近位半	- - 右 左 右 左 右 右 右 右 右 右 右 -	-	-	-
SM08	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM09	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 橈骨	- 近位骨端	-	-	-	-
SM10	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM11	-	ヒト	焼骨	距骨	-	右	-	-	-
SM12	-	ヒト	生骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM12	-	ヒト	生骨	側頭骨 歯 大腿骨	錐体部 下 :P2 -	右 - 右	-	柱状大腿骨 上部は扁平	-
SM12	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM12	-	ヒト	生骨	不明	-	-	成人	-	-
SM13	-	ヒト	焼骨	脛骨 大腿骨	骨幹 遠位端	左 左	-	-	-
SM13	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 距骨 大腿骨	- - 骨頭	- 左 左	-	-	-
SM14	-	ヒト	焼骨	四肢骨片	-	-	-	-	-
SM14	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 寛骨 距骨	-	-	-	- - 距骨やや小さい	-
SM15	-	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM15	-	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM17	-	ヒト	生骨	歯	下 :dp2/dp1	左／右	2 歳前後	上下切歯の永久歯形成中	-
SM18	-	ヒト	生骨	頭蓋骨 歯	- 上 :I2	- 右	-	上右 I2 やや咬耗	-
SM18	No.1	ヒト	生骨	歯	-	-	-	-	-
SM18	No.3	ヒト	生骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SM18	No.4	ヒト	生骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SM19	-	ヒト	生骨	頭蓋骨 歯	- 上 :M1/dp2,M1 下 :dp1,dp2,M1/ dp1,dp2,M1	- 上：左／右 下：左／右	5 歳程度	下左右 M1 全く咬耗ないので萠出なし 上顎中切歯と側切歯の歯冠形成中	-
SM19	No.1	ヒト	生骨	歯	-	-	-	-	-
SM19	No.2	ヒト	生骨	歯	-	-	5 歳程度	-	-
SM20	-	ヒト	生骨	下顎骨	後部	左	-	高さ低く、頑丈ではない	-
SM20	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM21	-	ヒト	生骨	頭蓋骨	-	-	成人	-	-

遺構名	出土位置	種別	焼骨生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版番号
SM21	- 歯 No.1 ～ 3	ヒト	生骨	歯	上 :I1,C/I1,C,P1 ,M1 か M2,M3 下 :I2 ～ M2/P1,P2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	成人	成人だが高齢ではない 歯が 18 本残る	-
SM21	No.4	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM21	No.18- No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM22	-	ヒト	生骨	下顎骨・歯	上 :I2 ～ M1/C ～ P2,M2 下 I2 ～ M2/C,P2,M1	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	成人	歯が 18 本残る	-
SM22	-	ヒト	生骨	大腿骨	近位骨幹	-	-	男性	-
SM22	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM22	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM22	-	ヒト	生骨	頭蓋骨 四肢骨	-	-	-	-	-
SM24	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 肋骨 側頭骨 大腿骨 大腿骨 膝頭骨	- - 錐体部 遠位端関節面外側 骨幹後面粗線部 -	- - 右 左 右 左	-	-	第 140 図 5
SM25	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 下顎頭 側頭骨 中手骨 脛骨 中節骨	- - 錐体部 - 遠位端外側 -	- 左 右 - 左 -	若年	-	-
SM26	-	ヒト	焼骨	頭蓋片 側頭骨 大腿骨 大腿骨 距骨 第 1 中足骨 中足骨	- 錐体部 骨幹部後面 近位骨頭部 - 近位端 近位	- 右 左 左 / 右 右 左 右	-	-	第 140 図 6・8・ 9・10
SM27	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 下顎頭 側頭骨	- - 錐体部	- 左 左	-	-	-
SM27	-	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM28	①	ヒト	焼骨	頭蓋骨 上顎骨 下顎骨 歯	- - - -	- - 右 -	-	歯根膿胞か 男性的	第 140 図 3
SM28	②	ヒト	焼骨	頭蓋骨 肩甲骨	外耳道部　他 棘部	右 -	-	-	-
SM28	③	ヒト	焼骨	頭蓋 四肢	- -	-	成人	さほど高齢ではない	-
SM28	④	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM29	骨 No.1	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM29	骨 No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM29	骨 No.3	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM29	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM30	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 歯根	- -	- -	-	-	-
SM31	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 四肢骨 指骨 歯	- - - -	- - - -	-	-	-
SM31	-	ヒト	焼骨か	不明	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 四肢骨	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 四肢骨	-	-	-	-	-
SM32	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 四肢骨	-	-	-	-	-
SM33	骨 No.1	ヒト	生骨	頭蓋骨 歯	側頭骨錐体 上 :P2 下 :M3/M2 か	左右 上 : 右 下 : 左 / 右	-	-	-
SM33	骨 No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-

遺構名	出土位置	種別	焼骨生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版番号
SM33	骨 No.3	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM33	骨 No.4	ヒト	生骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SM33	骨 No.5	ヒト	生骨	大腿骨	骨幹近位	左	-	左大腿骨骨幹片太くはない	-
SM33	骨 No.6	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM34	骨 No.1	ヒト	生骨	下顎骨 歯	-	-	成人	-	-
SM34	骨 No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM34	骨 No.3	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM34	骨 No.4・ 骨 No.5	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM34	骨 No.6	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM34	骨 No.7	ヒト	生骨	歯	上 :I2,M3 か 下 :M2/P2	上 : 左 下 : 左 / 右	-	上左右中切歯、明瞭なシャベル型	-
SM34	骨 No.8	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM34	骨 No.9	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM35	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 上顎右大臼歯 上顎骨 下顎骨 乳様突起部 眼窩上縁部 側頭骨 尺骨 橈骨 腰椎 仙骨　仙椎 椎骨 大腿骨 大腿骨 膝蓋骨 脛骨 第4中足骨 基節骨 中手か中足骨	- - 歯槽部 歯槽部 P2 歯根 - - 錐体部 近位骨幹部 / 骨幹部 関節部内側 - - - 骨幹部後面粗線部分 骨頭部 - 近位骨端関節面 遠位端 遠位端 -	- 右 - 右 左 / 右 左 - 左 - - - - 左 右 - 左 - - -	-	-	第 140 図 4
SM36	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM37	-	ヒト	焼骨	歯 頭蓋骨 寛骨 大腿骨 脛骨	- - 腸骨翼 骨頭 -	- - - - 右	-	-	-
SM38	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM39	-	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM40	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 橈骨 第1中手骨 中手骨 大腿骨 脛骨 脛骨 踵骨 中足骨 中節骨 第1中足骨	- 遠位 遠位部 骨幹部 骨幹部後面 遠位部端外側 前面外側 - - - -	- 右 - - 左 左 右 左 左 - 左	-	-	-
SM41	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 指骨	- -	- -	-	-	-
SM42	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 四肢骨 指骨 歯	- - - 上 M3/ 下 M3	- - - 左	-	-	-
SM43	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM44	-	ヒト	焼骨	歯 歯 頭蓋骨	上 :P2 下 :M1 か /P2,M1 -	上 : 左 下 : 左 / 右 -	-	-	-
SM44	-	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM45	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM46	-	ヒト	焼骨	歯 頭蓋骨	歯冠 -	-	若い個体	焼骨だが歯冠が残る。未石灰化の過程で焼かれた。	-
SM47	-	ヒト	生骨	頭蓋骨	-	-	成人	-	-
SM48	-	ヒト イノシシか	焼骨	歯 不明	- -	- -	-	-	-

遺構名	出土位置	種別	焼骨生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版番号
SM48	-	不明	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM49	四肢骨 1/3	ヒト	生骨	歯	上 :I2 ~ M3/I1 ~ P2,M2,M3 下 :I1 ~ M3/I1 ~ M3	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	20 歳代前半	同一個体の歯 31 本残る。	-
SM49	四肢骨 2/3	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM49	四肢骨 3/3	ヒト	生骨・焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM50	骨 No.1 ~ No.3	ヒト	生骨	歯	下 :dp2/dp1	下 : 左 / 右	1 歳程度	誕生前後に死亡	-
SM51	-	ヒト	生骨	歯	上 :I1,C,M3 か / 右 C,P2 下 :C ~ M1/C,P2,M1	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	成人	上 M3 と思われる歯は変形歯 女性か	-
SM52	-	ヒト	焼骨	肋骨 頭蓋骨	-	-	-	-	-
SM53	骨 A (歯)	ヒト	生骨	歯	上 :C/C,P2 下 :P1 ~ M1/C ~ P2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	成人	部位 2 の記述は、SM53 出土の歯全体のもの	-
SM53	骨 B (歯)	ヒト	生骨	歯	-	-	-	-	-
SM53	骨 C (頭西側)	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	骨 D (頭東側)	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	骨 E・骨 F	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	上層焼骨	ヒト	焼骨	頭蓋骨 側頭骨 基節骨 上腕骨 大腿骨 大腿骨	- 錐体部 - 骨幹部前面 遠位骨端関節面左 近位骨幹部後面	- 左 - 右 右 左	-	混入	第 140 図 7
SM53	下層	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	下層	ヒト	生骨	歯	-	-	-	-	-
SM53	上層	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	フク土 (上)	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	フク土 (下)	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM53	フク土	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM54	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM54	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM54	No.1	ヒト	生骨	歯	上 :I1 ~ M3/I1 ~ M2 下 :I1 ~ M1/I1 ~ M1	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	20 歳前後	歯 27 本残る	-
SM54	No.2 ~ 5	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM55	No.1	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM55	No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM55	No.3	ヒト	生骨	歯	上 :I1 ~ M1/I1 ~ M2 下 :I1,C/I1,C ~ P2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	壮年	歯 17 本残る 性別不明	-
SM56	No.1	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.3	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.4	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.5	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.6	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.7	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM56	No.8	ヒト	生骨	歯	上 :I1 ~ M2/I1 ~ M2 下 :C ~ M2/I1,C ~ M2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	壮年	女性か 歯 26 本残る 上右 I1 シャベル弱く、ダブルシャベル　上顎右側側切歯斜切痕	-
SM58	No.1	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM58	No.2	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM58	No.3	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM58	No.4	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM58	No.5	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM59	No.1	ヒト	生骨	歯	上 :M1/I2 か ,P2,C 下 :P1/P1,M1,M2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	-	-	-
SM59	No.3	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM59	No.4	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM59	No.5	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-

遺構名	出土位置	種別	焼骨生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版番号
SM59	No.2　A	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM59	-　B	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM59	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM60	No.1	ヒト	生骨	ほぼ全身 歯	上左 P1 ～ M3/ 右 I1 ～ P1,M1 ～ M3 下左 I1,P2,M1 ～ M3/ 右 I1 ～ M3	-	成人（若い青年）	歯 25 本残る 虫歯	-
SM60	No.2	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM62	-	ヒト	生骨	歯	上 :M1 下 :C,M1	上 : 右 下 : 右	2 歳前後	C と下顎 M1 は咬耗なく形成途中	-
SM64	-	ヒト	生骨	不明	-	-	-	-	-
SM64	-	ヒト	生骨	長骨片	-	-	-	-	-
SM65	No.1	ヒト	生骨	歯	上 :dp2/dc,dp1 下 :dp2/dc,dp1,dp2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	2 歳前後	上左 M1、左 M1 形成途中	-
SF11	-	ヒト	焼骨	歯 頭蓋骨 中節骨 基節骨（足） 中節骨（足）	- - - - -	-	-	-	-
SF11	-	ヒト	焼骨	歯 頭蓋骨 左尺骨 中節骨（足） 不明	- - 遠位端 - -	- - 左 - -	-	-	-
SF13	-	ヒト	-	歯根	上 :M3	上 : 右	-	-	-
SF14	-	ヒト	焼骨	肩甲骨	肩甲棘	右	-	-	-
SF14	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 不明	-	-	-	黒化の割合が多い	-
SB01	フク土上層	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SB08	南東	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SB14	北東	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	一部 SX02 含む	-
SB15	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SB24	南西	ヒト	生骨	歯	上 :dm2/M1 下 :M1,M2/dm2 -	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右 -	-	-	-
SB32	-	ヒト	生骨	歯	上 :M1/dp1,dp1 か 下 :M1,M2/M1 切歯 , 不明	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右 -	-	-	-
SK269	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SK383	骨 No.1	ヒト	生骨	歯	上 : I2/I1 ～ M2 下 : I1,M2/C ～ M1	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	10 代前半	歯 14 本残る 咬耗ごく軽度 象牙質露出ほとんどなし	-
SK386	骨 No.1	ヒト	生骨	四肢骨	骨幹	-	-	-	-
SK386	骨 No.3	ヒト	生骨	四肢骨	骨幹	-	-	-	-
SK390	-	ヒト	生骨	歯	上 : dp1,dp2/dp1 下 : dp1,dp2	上 : 左 / 右 下 : 左	2 歳前後	-	-
SK442	骨 No.1	ヒト	生骨	脳頭蓋	-	-	-	-	-
SK442	骨 No.3	ヒト	焼骨	歯	-	-	-	-	-
SK442	骨 No.4	ヒト	生骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SK530	-	ヒト	生骨	歯	上 : dp1,dp2/dp1,dp2 下 : dp1,dp2/dp2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	2 ～ 3 歳	永久歯上顎中切歯形成中	-
SK531	-	ヒト	生骨	歯	上 : dp1 下 : dp2	上 : 右 下 : 右	2 歳前後	わずかな咬耗がある	-
SK563	-	ヒト	生骨	歯	上 : dp1,dp2,M1/ dp1,dp2 下 : dp1,dp2,M1/dc, dp1,dp2,M1	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	5 歳前後	永久歯 M1 は上下とも埋伏、萌出していないが、歯冠は形成 上顎左 dp1･dp2、下顎左 dp1･dp2･M1 は植立下状態	-
SK563	-	ヒト	生骨	歯	-	-	-	形成中の I1 片などがある	-
SK581	-	ヒトか	焼骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SK581	-	ヒト	生骨	歯	上 : dp2/dc,dp1,dp2 下 : dp1,dp2,M1/dc, dp1,dp2	上 : 左 / 右 下 : 左 / 右	2 歳前後	咬耗ほとんどない	-
SK584	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 歯根 四肢骨	-	-	-	-	-
SK584	-	ヒト	生骨	歯	上 : dp2 下 : dp2/dp1	上 : 右 下 : 左 / 右	2 ～ 3 歳	軽度の咬耗 永久歯上 M1 形成中	-
SK587	-	ヒトか	焼骨	四肢骨	-	-	-	-	-
SK640	-	ヒトか	焼骨	不明	-	-	-	-	-

遺構名	出土位置	種別	焼骨生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版番号
SK641	-	ヒト	生骨	歯	上：dc,dp1 下：dp1,dp2	右 右	2～3歳	-	-
SD01	No.27	ヒト	焼骨	四肢骨	骨幹	-	-	-	-
SD01	No.29	ヒト	生骨	歯	下:M2	右	-	磨耗、虫歯	-
SD01	No.33	ヒト	生骨	歯	下:M2	右	-	-	-
SD01	北溝（掘下げ）	ヒト	焼骨	不明	-	-	-	ヒト・動物混入	-
SD01	中央上層	ヒト	焼骨	下顎骨 肩甲骨 上腕骨	- 棘 -	右 左／右 左	-	-	-
SD01	中央五輪塔集中付近出土	ヒト	-	頭蓋骨 上腕骨 不明	外後頭隆起部 近位 骨幹 -	- 右	-	-	-
SD01	Ⅲ P14 下層	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
SD01	-	ヒトか	-	頭蓋骨	眼窩	右	-	-	-
SD01	北溝（掘下げ）	ヒト	-	寛骨	坐骨	左	-	男性か	-
SD01	北溝（掘下げ）	ヒトか	-	脛骨	近位端	-	-	-	-
SD01	中央上層	ヒト	-	下顎骨	関節突起	右	-	-	-
SD01	中央上層	ヒト	-	上腕骨	近位骨頭、遠位骨幹	左	-	-	-
SD01	中央上層	ヒト	-	椎体	-	-	-	-	-
SD15	-	ヒト	生骨	肩甲骨	肩甲棘	左	-	-	-
SX05	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨 下顎骨 側頭部 椎骨 椎体 肩甲骨 大腿骨 上腕骨か大腿 足　中節骨 不明	- 関節頭 錐体部 - - - 骨幹部 骨頭 - -	- 左 右 - 右 左 左 - - -	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	椎骨	椎体	-	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	側頭骨	錐体部	右	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	大腿骨	骨幹	左	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	下顎骨	関節頭	左	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	中節骨	-	-	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	頸椎	-	-	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	上腕骨か大腿骨	骨頭	-	-	SF15からSX05に変更	-
SX05	-	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	SF15からSX05に変更	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土）	ヒト	焼骨	側頭骨 頭蓋骨片 橈骨 距骨	錐体部 - - -	右 - 左 左	-	-	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土層）	ヒト	焼骨	側頭骨 頭蓋骨	錐体部 -	左 -	-	-	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土）	ヒト	焼骨	橈骨	骨幹	左	-	-	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土）	ヒト	焼骨	側頭骨	錐体部	右	-	-	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土）	ヒト	焼骨	距骨	-	左	-	-	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土層）	ヒト	焼骨	頭蓋	-	-	-	黒く焦げている	-
Ⅲ K20	カクラン（粘土層）	ヒト	焼骨	側頭骨	錐体部	左	-	-	-
Ⅲ K23	検出面	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
Ⅲ P03	-	ヒト 不明	焼骨 -	歯 -	下:P3 -	右 -	-	象牙質のみ	-
Ⅲ P04	土器集中拡張中	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
Ⅲ P06	検出面（下面）	ヒト	-	頭蓋骨	-	-	-	-	-
-	検出面	ヒト	焼骨	頭蓋骨	-	-	-	-	-
-	検出	ヒト	-	頭蓋骨	-	-	-	-	-

第 17 表　出土動物骨一覧

遺構名	出土位置	種別	焼骨 生骨	部位	部位詳細	左右	年齢	特記事項	図版 番号
SM05	拡張	トリ	焼骨	上腕骨	骨幹	-	-	-	
SM25	-	トリ	焼骨	不明	-	-	-	-	-
SM66	-	ウシ	生骨	下顎骨・歯	P4-M2	-	-	-	-
SK126	-	イノシシ	生骨	下顎歯	M3 破片	右	-	歯冠のみ	第 141 図 4
SK383	骨 No.1	シカ	生骨	下顎骨	歯槽部（P4-M1）	-	-	-	-
SK383	骨 No.3	ウマ	生骨	四肢骨	骨幹	-	-	橈骨か	-
SK686	No.1	ウマか	生骨	四肢骨	骨幹	-	-	中手骨または橈骨	-
SK686	No.2	ウマ	生骨	歯	P/ M	-	-	-	-
SK686	No.3	ウマ	生骨	歯	P/ M	左	若成獣	-	-
SD01	No.28	シカ	-	下顎骨・歯	**P3,P4,M2,M3**	左	-	-	第 141 図 5
SD01	Ⅲ K-23 No.23	ウマ	生骨	**上顎骨・歯**	-	-	-	-	第 141 図 1・2・ 3
SD01	北溝（掘下げ）	シカ	生骨	距骨	-	左	-	-	第 141 図 6
SD01	中央上層	ウマ	生骨	下顎歯	M2	右	-	**下記の下顎歯と統一個体**	-
SD01	中央五輪塔集中付近出土	ウマ	生骨	下顎骨・歯	P2,P4,M3	右	-	上記の M2 と同一個体	-
SD01	北端中層	シカ	焼骨	大腿骨	近位	左	成獣	黒く焦げている	第 141 図 7
SD01	北端中層	ウマ	生骨	脛骨	遠位骨幹部前面	-	成獣	-	-
SD01	北端中層	大型獣	生骨	脛骨近位または 大腿骨遠位	骨幹	-	-	-	-
SD01	Ⅲ P13 上層	ウマ	生骨	橈骨	骨幹	右	若い	-	-
SD01	北端東壁 上層	シカ 不明	生骨 生骨	下顎歯 -	P2,P3,P4 破片 ,M1 -	左 -	-	-	-
Ⅲ K20	カクラン （粘土層）	シカ	生骨	角	-	-	-	黒く焦げている	-
Ⅲ K23	検出面	種不明 中型	生骨	脛骨か	骨幹	-	-	**下記のシカ脛骨と同一個体か**	-
Ⅲ K23	検出面	シカか	生骨	**脛骨**	**骨幹破片**	-	-	-	-
Ⅲ P06	骨 No.1	イノシシ	生骨	歯	臼歯	-	-	-	-
Ⅲ P06	検出面 （下面）	シカ	焼骨	脛骨	骨幹破片	左	-	-	-
-	検出面	トリ	焼骨	不明	-	-	-	-	-
-	Pit3	シカ	生骨	角	-	-	-	黒く焦げている	-
-	検出面	トリ	焼骨	上腕骨	-	右	-	灰色に焦げている	-

※出土位置は、骨取上時の現場での位置等情報。

1　頭蓋骨右側面観（SM01）

2　頭蓋骨左側面観（SM01）

3　下顎骨上面（SM28）

4　右下顎骨歯槽部（SM35）

5　右側頭骨錐体部（SM24）

6　右側頭骨錐体部（SM26）

7　左側頭骨錐体部（SM53）

8　右大腿骨近位骨頭部（SM26）

9　左大腿骨近位骨頭部（SM26）

10　左大腿骨近位骨頭部（SM26）

第 140 図　小島・柳原遺跡群出土の人骨

1　ウマ左上顎骨および切歯部（SD01）

2　ウマ左上顎歯 P2 － M3（頬側側面観）（SD01）

3　ウマ左上顎歯 P2 － M3（咬合面）（SD01）

4　イノシシ右下顎歯 M3（SK126）

5　シカ左下顎骨 P3、P4、M2、M3（SD01）

6　シカ左距骨（SD01）

7　シカ左大腿骨（SD01）

5cm

第 141 図　小島・柳原遺跡群出土の動物骨

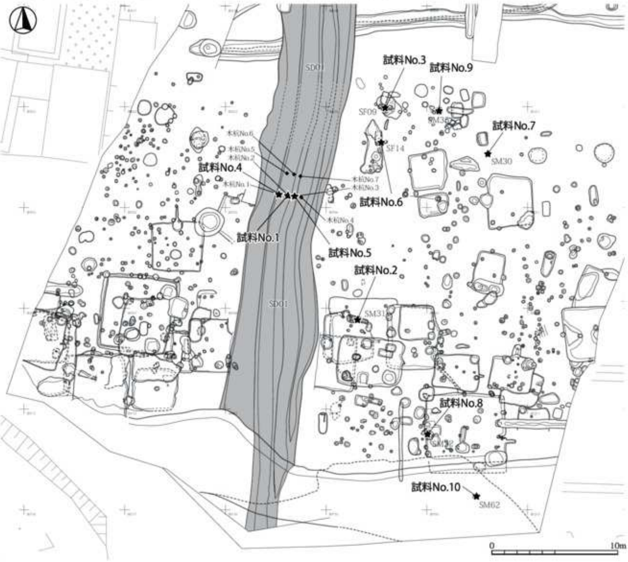
第２節　放射性炭素年代測定

１　分析の概要

本遺跡は、遺構検出面が２面あり、第１面では、中近世の火葬墓を中心とした墓跡群や大溝が検出されている。第２面では、主に平安時代（９世紀末から 10 世紀）の集落跡が検出されている。下位の検出面では、遺構から一定量の共伴する土器が出土し、集落跡の年代が限定できたが、上位については、副葬品などの遺物が共伴していないあるいは少なく、時期決定が難しい。火葬関連施設を含む墓群や共伴していても遺物の年代幅がある大溝（SD01）については、相対年代だけでは時期を限定できない。よって、これらの遺構に共伴した炭化材等を、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を専門業者（株式会社パレオ・ラボ）に委託して実施した。なお、同社 AMS 年代測定グループによる報告及びデータは、本書に添付した DVD に収録した。

２　分析結果

測定した試料は第 18 表のとおりである。なお、第 142 図に採集した地点を示す。



第 142 図　測定試料採集地点（1：300）

第 18 表　測定試料一覧

No.	測定番号	遺構	試料データ
1	PLD-38553	SD01 杭 No.2	生材、最終形成年輪あり
2	PLD-38554	SM31	炭化材、部位不明
3	PLD-38555	SF09	炭化材、部位不明
4	PLD-38556	SD01 杭 No.1	生材、最終形成年輪あり
5	PLD-38557	SD01 杭 No.3	生材、最終形成年輪あり、微量のため、東大で測定（TKA-21306）
6	PLD-38558	SF14	炭化材、最終形成年輪あり
7	PLD-38559	SM30	炭化材、最終形成年輪あり
8	PLD-38560	SM32	炭化材、部位不明
9	PLD-38561	SM35	炭化材、部位不明
10	PLD-38562	SM62	炭化材、部位不明

試料１、４、５が大溝 SD01 の杭（No. １～３）である。３本とも伐採年代に近い値が得られることが期待される樹皮直下の最終形成年輪が確認されている。

試料３、６は、いずれも火葬関連遺構 SF09、SF14、試料２、７～ 10 は、いずれも火葬墓 SM30 ～ 32、35、62 である。

その結果は第 19 表のとおりである。

第 19 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}C$（‰） 暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ） ^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
		1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
試料 No.1 PLD-38553	-27.53 ± 0.15 337 ± 19 335 ± 20	1495-1525 cal AD (21.0%) 1558-1602 cal AD (34.5%) 1616-1632 cal AD (12.7%)	1480-1637 cal AD (95.4%)
試料 No.2 PLD-38554	-24.06 ± 0.15 309 ± 18 310 ± 20	1523-1573 cal AD (54.9%) 1630-1642 cal AD (13.3%)	1513-1600 cal AD (72.9%) 1616-1646 cal AD (22.5%)
試料 No.3 PLD-38555	-26.67 ± 0.16 296 ± 20 295 ± 20	1524-1558 cal AD (47.2%) 1631-1646 cal AD (21.0%)	1516-1595 cal AD (67.0%) 1617-1651 cal AD (28.4%)
試料 No.4 PLD-38556	-27.59 ± 0.17 349 ± 20 350 ± 20	1485-1522 cal AD (29.7%) 1574-1628 cal AD (38.5%)	1464-1529 cal AD (41.5%) 1544-1635 cal AD (53.9%)
試料 No.5 PLD-38557 (TKA-21306)	-33.50 ± 0.60 341 ± 27 340 ± 25	1490-1525 cal AD (23.4%) 1558-1603 cal AD (30.6%) 1610-1631 cal AD (14.2%)	1470-1638 cal AD (95.4%)
試料 No.6 PLD-38558	-27.28 ± 0.16 328 ± 18 330 ± 20	1514-1529 cal AD (10.7%) 1544-1599 cal AD (43.8%) 1617-1634 cal AD (13.6%)	1490-1603 cal AD (76.6%) 1612-1640 cal AD (18.8%)
試料 No.7 PLD-38559	-27.92 ± 0.21 123 ± 19 125 ± 20	Post-bomb NH2 2013: 1685-1700 cal AD (9.8%) 1702-1706 cal AD (2.0%) 1719-1732 cal AD (7.6%) 1808-1819 cal AD (6.8%) 1833-1881 cal AD (33.4%) 1915-1928 cal AD (8.5%) 1954-1954 cal AD (0.2%)	Post-bomb NH2 2013: 1681-1737 cal AD (27.5%) 1756-1762 cal AD (1.2%) 1803-1893 cal AD (51.9%) 1906-1937 cal AD (14.0%) 1952-1955 cal AD (0.8%)
試料 No.8 PLD-38560	-25.06 ± 0.19 306 ± 18 305 ± 20	1523-1572 cal AD (53.9%) 1630-1643 cal AD (14.3%)	1515-1598 cal AD (71.9%) 1617-1648 cal AD (23.5%)
試料 No.9 PLD-38561	-20.22 ± 0.11 433 ± 19 435 ± 20	1438-1455 cal AD (68.2%)	1430-1474 cal AD (95.4%)
試料 No.10 PLD-38562	-26.75 ± 0.17 618 ± 19 620 ± 20	1301-1322 cal AD (28.5%) 1348-1368 cal AD (26.7%) 1382-1392 cal AD (13.1%)	1295-1330 cal AD (37.1%) 1338-1398 cal AD (58.3%)

第19表については、分析受託者の説明は以下のとおりである（要約）。

同位体分別効果（安定同位体である炭素13と炭素12の比率は生化学プロセス、測定試料の代謝や呼吸回路の違いによって異なる）のため、標準試料と比較するために補正をする。その補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）と同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値とさらに較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代が表示されている。

なお、今後現在標準となっている暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行う必要が生じた場合に備え、暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値が記載されている。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用している。また、付記した^{14}C年代誤差（$\pm 1\sigma$）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率は68.2%である。

大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、暦年較正は、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものが算出されている。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13、Post-bomb NH2）が使用されている。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味している。

3　所見

測定結果についても、2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、遺構ごとに結果を以下のように整理されている。

大溝SD01の杭列のうち、試料No.1（杭No.2）は1480-1637 cal AD（95.4%）、試料No.4（杭No.1）は1464-1529 cal AD（41.5%）および1544-1635 cal AD（53.9%）、試料No.5（杭No.3）は1470-1638 cal AD（95.4%）であった。大溝SD01の杭は3本とも15世紀後半～17世紀前半の暦年代範囲を示している。いずれも最終形成年輪が残っていることが確認され、測定年代にそれほどばらつきがないことや試料は巨木でないことから今回の測定された年代は、杭の原木の伐採年と近接しているとみたい。

火葬関連施設SF09の試料No.3は1516-1595 cal AD（67.0%）および1617-1651 cal AD（28.4%）で、16世紀前半～17世紀中頃の暦年代範囲を示している。ただし、試料No.3の炭化材は部位が不明（最終形成年輪がわからない）のため、古木効果の影響で木材の伐採年より古い年代が得られている可能性がある。一方採集年輪形成が判明している火葬関連施設SF14の試料No.6は1490-1603 cal AD（76.6%）および1612-1640 cal AD（18.8%）で、大溝SD01の杭同様の15世紀末～17世紀中頃の暦年代範囲であった。

最終形成年輪が認められた火葬墓SM30の試料No.7は、1681-1737 cal AD（27.5%）、1756-1762 cal AD（1.2%）、1803-1893 cal AD（51.9%）、1906-1937 cal AD（14.0%）、1952-1955 cal AD（0.8%）で。17世紀後半～20世紀中頃の暦年代範囲が示された。

一方部位不明の炭化材である火葬墓SM31の試料No.2は1513-1600 cal AD（72.9%）および1616-1646 cal AD（22.5%）、SM32の試料No.8は1515-1598 cal AD（71.9%）および1617-1648 cal AD（23.5%）で、16世紀前半～17世紀中頃、火葬墓SM35の試料No.9は1430-1474 cal AD（95.4%）で、15世紀、SM62の試料No.10は1295-1330 cal AD（37.1%）および1338-1398 cal AD（58.3%）で13世紀末～14世紀末といった暦年代範囲が示された。最終形成年輪が認められた試料No.7以外の、部位が不明の試料No.2、8、9、

10の炭化材は、他の遺構と比較してもばらつきがみられる。古い年代が示された試料No.10は、古木効果（より早く成長が停止した芯材は樹皮や辺材より古い年代を示す）の影響で木材の伐採年より古い年代が得られている可能性がある。

以上の結果を総合的に考えると、まず最終形成年輪が得られている大溝SD01の杭については15世紀後半から17世紀に収まっている。大溝SD01は、杭が打設された中層から古代から中世末までの遺物が出土しており、近世と想定されている溝SD25に切られている。原木伐採後、直ちに杭に加工、打設されたと考えて、矛盾はない。

一方、火葬関連施設や火葬墓については、13世紀末から17世紀後半までとばらついた年代が得られた。これについては、火葬関連施設や火葬墓の炭化材はそもそも火葬を行った際の燃料材が火葬骨などとともに混入したものであり、杭と違って若い樹木を使うとは限らないために年代がばらついたとも考えられるが、火葬墓を含む墓群には、共伴遺物は極めて少ないが、北宋銭から明銭（洪武通宝、永楽通宝）が出土しており、墓群は鎌倉時代から室町～安土桃山時代（江戸時代以前）に形成されたと考えられているので、これを裏付けるものと考えたい。

第６章　総括

第１節　日本出土塔鋺形合子における小島・柳原遺跡群出土品の位置付け

１　塔鋺形合子とは

塔鋺形合子は、仏具（法具）の一つであり、「塔鋺」「塔形合子」とも呼ばれる。仏塔の相輪形鈕をもつ蓋と台脚付身で一組となる金属製合口造の容器である。玉虫厨子（飛鳥時代７世紀 法隆寺所蔵）須弥座正面の舎利供養図や、刺繍釈迦供養図（唐時代 奈良国立博物館所蔵）では、向かい合う比丘が柄香炉と共に塔鋺形合子を捧持している姿が描かれており、法会等で使用された供養具（香合、香の入れ物）と考えられている（奈良国立博物館 1954）。

祖型は、紀元前インドの石製舎利容器にあるとされる。中国河南省洛陽市龍門禅宗七祖荷沢神会墓出土品（唐代・金銅製）[1]、韓国慶尚北軍威麟角寺出土品（統一新羅時代・金銅製）では、柄香炉と共に出土しており、この頃には香合として用いられたことがうかがえる（洛陽市文物工作隊 1992、崔 2010）。新疆ウイグル自治区トルファン近郊トヨク千仏洞では、彩色を施された鮮やかな木製の出土品（８～９世紀）も確認されている（阪田 1992）。日本では出土地や伝来が明らかなものとして、日光男体山山頂遺跡出土品 13 点、法隆寺献納宝物塔鋺１合、正倉院宝物金銅大合子他 10 合が知られる。

塔鋺形合子の研究は、仏塔、銅鋺、仏教工芸関連で取り上げられている。仏塔研究のなかでは、石田茂作（1982）がスツーパから始まる塔の変遷のなかに塔鋺形合子を位置づけている。銅鋺研究では、小田富士雄（1975）、毛利光俊彦（1978・1991）、桃崎祐輔（2000）が銅鋺編年で、塔鋺形合子を銅鋺の一形態として分類している。仏教工芸では、阪田宗彦（1992）、内藤栄（2005）、関根俊一（2005）、成瀬正和（2007）、崔応天（2010）、加島勝（2011）、西川明彦（2019）が工芸・材料科学、技法、仏教儀礼等で論じている。

２　小島・柳原遺跡群出土品の検討

（１）器形の特徴

第４章２節に記載した以外の特徴としては、以下の点があげられる。

- 相輪外縁と相輪上面の刻線は同一角度の線上に並ぶ（第 143 図１・２）。
- 相輪３段は、刹から縁辺に向けてわずかに上向きになる。ただし、上段については、相輪下面は上向きになるが、上面はやや膨らみ気味の断面形を示す。
- 蓋本体の厚さは均一ではなく、上が薄く、下になるほどやや厚くなる（第 143 図３）。
- 竜舎縁辺の欠損、相輪３段のわずかな歪みはあるが、上からみると整った同心円が重なる（PL34 1-2）。

（２）模様の特徴

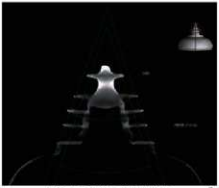
第４章２節に記載した以外の特徴としては、以下の点があげられる。

- 竜舎上面：極細刻線で雲状曲線を３か所、雲状曲線の内側にやや長い打刻状直線で形象的な模様を描き、雲状曲線間の空間に短い打刻を疎に施している（X 線 CT 画像で確認、第 144 図）。

1　荷沢神会（687 ～ 758）は禅宗七祖の一人。1983 年に河南省洛陽市竜門にある宝応寺遺跡内の荷沢身塔の地下石室内から獅子鎮柄香炉、銅製浄瓶などと共に塔鋺形合子がみつかる。神会の没年が 758 年、荷沢身塔入塔が 765 年であるとの銘文が石室に刻まれていた（加島 2011）。

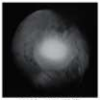
・相輪および基壇上面：断面形がＶ～Ｕ字形になる刻線が、相輪の縁辺と、刹と相輪縁の中間付近２か所に円形に刻まれる。刻線が２重になるところもみられるが、全周しない（第145・146図）。

相輪の角度　1


相輪上面刻線の位置と角度　2

蓋本体の厚さ　3

第143図　Ｘ線CT画像による各断面


Ｘ線CT画像

実測図

デジタルカメラ写真

第144図　竜舎上面模様

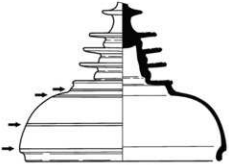
上段

中段

下段

第145図　相輪上面刻線

第146図　基壇上面刻線


第147図　蓋本体刻線

・蓋本体：蓋を一周する極細刻線が、基壇直下と蓋本体中ほど２か所では２本１単位で、口縁直上では１本１単位で刻まれる（第147図）。

（３）製作技法等の検討

基本的には、鋳造後ロクロ挽きによって仕上げていると考えられる。相輪部分の内面に鋲止めのような痕跡があるが、Ｘ線観察の結果、鋲止めで相輪上部を固定していないことが判明している。一鋳で製作さ

れたのか、幾つかの部位をそれぞれ鋳造して組立てた別鋳で製作されたのか、については第４章３節にあるように、蓋本体・基壇上面・相輪部分で分割して鋳造して組み合わせた可能性もあるが、確定するには至っていない。現段階では、一鋳、別鋳どちらの可能性もあるという見解にとどまる。

３　類例の検討

（１）法隆寺献納宝物　塔鋺（N254）

東京国立博物館が所蔵する。塔鋺（N254）は、1878（明治 11）年に法隆寺から皇室に献納され、第二次世界大戦後に国へ移管された宝物の１つである。錫・鉛を含む響銅製鋳造品で、奈良時代８世紀の製作とされる。蓋と台脚付身の一組。台脚付身は身と台脚とを別に作り組み合わせている。ただし、身の底面一部と台脚は欠損、台脚は木製の後補である。蓋本体と鈕部分は一鋳で、ロクロ挽き仕上げをしている。鈕部分の模様は精巧である。高さ 9.3cm、径 6.5cm。

（２）正倉院宝物

正倉院南倉に金銅大合子４合、赤銅合子３合、金銅合子・黄銅合子・佐波理合子各１合が伝えられる。南倉に納められている仏具の大半は、平安時代中頃の天暦４年（950）に東大寺羂索院の双院が老朽化したため移納されたものと記録されている。３層以上の相輪鈕をもつのは金銅大合子第１～４号、赤銅合子第３号、黄銅合子、佐波理合子の計７合である。これ以外のものは、宝珠、宝珠と竜舎で鈕を形成している。なお、これら合子は熟覧していないため、以下の記述は正倉院展図録等（奈良国立博物館 2006・2008・2011、東京国立博物館 2019 他）を元にしている。

金銅大合子第１～４号（南倉 27）

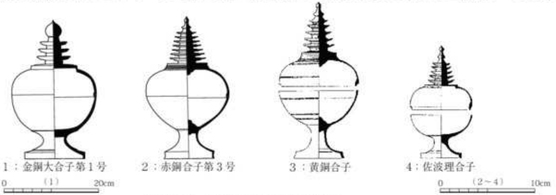
３層の相輪形鈕をもつ。蓋本体と鈕部分、身と台脚は一鋳でつくられる。銅製、ロクロ挽き仕上げをした後、全面に鍍金を施す。高さ 28 ～ 29cm、17.5 ～ 18.1cm と他と比べ大きい（第 148 図１）。

赤銅合子第３号（南倉 29-3）

７層の相輪形鈕をもつ。相輪と座金は黄銅、銀を使用するが、本体はほぼ純銅製。鋳造後ロクロ挽き仕上げ。鈕は７枚の輪と刹と基壇を、宝珠から蓋裏まで届く心棒に通し、蓋内側に５枚の黄銅製座金を敷き、心棒に半球頭の鋲を打っている。輪と刹との間には、輪の上側で２枚、下側で１枚の黄銅製座金を挟んでいるが、輪の下部の座金は厚めに作られ、周縁部を鋸歯状に削っている。鈕の基台は胴との間に黄銅、銀、黄銅の順で３枚の薄い座金を敷いている。細工は鈕に集中する。蓋、身とも内部全体に抹香様のものが付着する。高さ 15.0cm、径 8.8cm（第 148 図２）。

黄銅合子（南倉 30）

５層の相輪形鈕を持つ。銅と亜鉛の合金である真鍮（黄銅）製。鋳造後ロクロ挽き仕上げ。蓋・身とも別に作った相輪や台脚を組み上げている。蓋は５枚の輪と刹および鈕基台を、宝珠から蓋内面にのびる心



第 148 図　正倉院宝物の塔鋺形合子

棒に通し、蓋内側で半球形頭の鋲を打って固定している。輪と刹との間には、それぞれ銀製座金と黄銅製座金を、基台と蓋本体との間には銀製と黄銅製の座金をはさむ。鈕には入念な細工が施される。高さ15.9cm、径 8.5cm（第 148 図３）。

佐波理合子（南倉 31）

５層の相輪形鈕を持つ。塔形の鈕、蓋、身、台脚をそれぞれ鋳造した後、ロクロ挽き仕上げ。鈕は蓋の頂部に作り出した基壇状部分に、鈕の下部の枘を差し込み、内側からかしめて固定する。身と台脚は蝋付し、身に作り出した枘先を台の裏でかしめている。佐波理ではなく、銅と錫が主成分であることが蛍光Ｘ線分析で判明している。高さ 10.9cm、径 6.5cm（第 148 図４）。

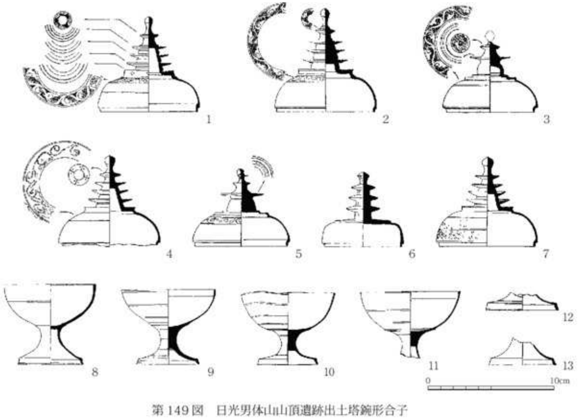
（３）日光男体山山頂遺跡出土品

日光男体山は、勝道上人が奈良時代に開いた山岳信仰の山として知られる。山頂西側約 2,470m に位置する太郎山神社周辺で蓋７点、台脚付身６点が出土している（第 149 図）。1959（昭和 34）年に発掘調査が実施され、該当資料は「塔形合子」の名称で報告されている。調査では、奈良時代後半から江戸時代の仏教関連遺物、鏡、銅印、鉄剣、銭貨、農工具、陶磁器など膨大な遺物が出土し、一部遺物の年代は古墳時代までさかのぼる。

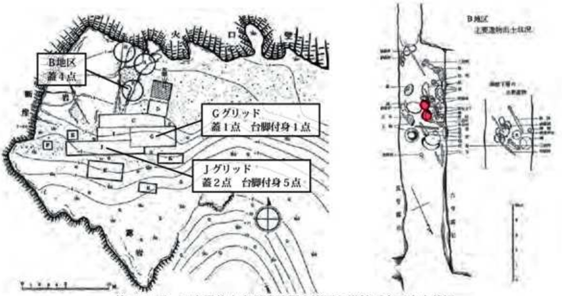
「塔形合子」（報告書での報告名称）は、調査を実施したＡ～Ｃ調査地点およびＤ～Ｋグリッドのうち、３か所から出土している（第 150 図）。蓋と台脚付身が組になるものはないが、遺存状況は良好なものが多い。

Ｂ地区からは、蓋４点、（第 149 図２・３・６・７）出土している（第 150 図右、赤丸が合子）。東西幅 20 ～ 30cm、南北幅 100cm 余り、深さ 60 ～ 130cm の間に、多くの遺物が「（略）雑然と、しかもぎっしりと重複堆積していた（略）」と報告されている。この地区は、太郎山神社西側の岩場の隙間である。

Ｇグリッドからは蓋１点と台脚付身１点（第 149 図４・８）、Ｊグリッドからは蓋２点（第 149 図１・５）



第 149 図　日光男体山山頂遺跡出土塔鋺形合子



第 150 図　日光男体山山頂遺跡調査範囲と塔鋺形合子出土状況

と台脚付身５点（第 149 図９～13）が出土している。G・J グリッドは、太郎山神社南側 C・D グリッドのさらに南に位置する。「(略) C・D 両トレンチの南側は、約 30 度程の傾斜を示しながら男体山山頂部を形成しているのであるが（略)」と報告書の記載があり、地形図からも急斜面に設定されたグリッドであることがわかる。塔形合子に限らず、この遺跡での出土品は遺棄、流れ込みが考えられ、出土状況から年代を特定することは難しい。

出土した塔鋺形合子の蓋は内面が平滑なことから基本的に一鋳と考えられる。ただし、別鋳で作られた可能性がある出土品も存在する。また、６は蓋のかえり（げじょう）の形態や相輪の形状が他の６点と差異があり、製作年代が異なると考える。制作年代については、奈良時代後半期（関根 2005・奈良国立博物館 2005)、奈良時代よりもやや時代の降る頃（日光二荒山神社 1963)、10 世紀後半以降（水澤 2011）といくつかの年代が示されている。ただし、いずれも正倉院のものより時代が下ることについて一致している。

（4）塔鋺形合子鋳型

埼玉県富士見市宮脇遺跡出土鋳型

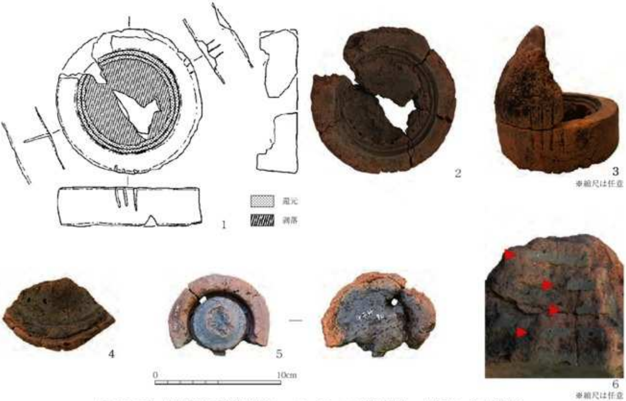
宮脇遺跡第８地点の第７号住居址[2]（平安時代)、第 17 地点第 28 号住居址（９世紀後半）より仏具の鋳型が多数出土している。塔鋺形合子のほかに、柄香炉、獣脚と推察される鋳型破片もある。報告書非掲載の良好な鋳型も多く良好な資料である。

塔鋺形合子の蓋、台脚付身の鋳型と考えられる破片は複数確認できる。組合わせを示す沈線を鋳型周縁部に刻んでいるもの（第 151 図１・２・３)、変色した痕跡から相輪部分の鋳型破片と推察できるもの（第 151 図６)、湯口が分かる台部分鋳型と思われるもの（第 151 図５）などがあり、これらは製作方法を考える上で、非常に重要な資料である。塔鋺形合子の鋳型は、複数個あったと思われ、鋳型周縁部の刻みには類似した特徴がみられる。鋳型の状態から、塔鋺形合子の蓋、台脚付身をそれぞれ一鋳で製作した鋳型と考えられる。

群馬県高崎市黒熊・徳山遺跡出土鋳型

１号住居跡より鋳型が出土している（第 151 図４)。台脚の鋳型内型と考えられ金属が鋳込まれる面は、平滑に成形されており、宮脇遺跡出土の鋳型と同じである。しかし、底部の直径が 10cm 弱と推定され、現存する塔鋺形合子法隆寺伝世品（約 4.5cm)、正倉院伝世品（約 4.5 ～６cm、金銅大合子は除く)、日光

2　報告書では性格不明の土製品が検出されたと記載されている。資料調査時に水子貝塚資料館長　加藤秀之氏よりご教示いただいた。



第 151 図　塔鋺形合子他鋳型（１～３、５～６ 宮脇遺跡　４ 黒能・徳山遺跡）

男体山出土品（約５～６cm）とくらべると大きい。

寺院跡やそれに伴う集落跡が近隣で確認されており（群馬県教育委員会 1992）、仏教関連金属製品の台脚の鋳型と考えられる。塔鋺形合子台脚付身の鋳型であると断定はできないが、寺院と工房との関係を考える上で、注目すべき事例であろう。

４　小結

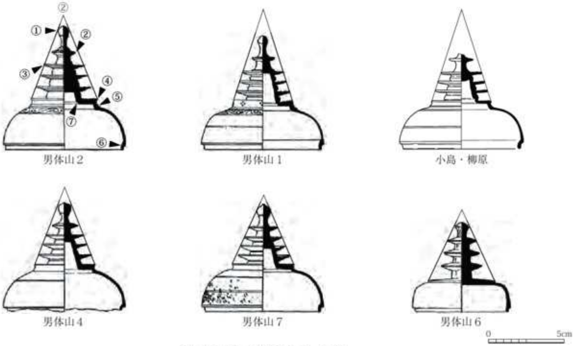
（１）編年の検討

塔鋺形合子の年代は、古いものから法隆寺塔鋺、正倉院合子、日光男体山出土品と考えられている。本遺跡出土品は、日光男体山出土品のうち相輪３段をもつ蓋５点（第 149 図男体山１・２・４・６・７）と類似するため、この６点を比較することで、器形の変化を検討する。まず、以下に挙げる蓋の部位に着目した。なお､変化の始点は塔形鈕を持つ合子で古いとされる正倉院黄銅合子と赤銅合子第３号とした。（下線が正倉院の形状）。

①宝珠の断面形	：	a 縦長
		b やや縦長（男体山１・２）
		c やや横長（男体山４・６・７）
②竜舎の断面形	：	a そろばん状（男体山２）
		b 扁平（小島・柳原、男体山１・４・７）
		c なし（男体山６）
③基壇・相輪外縁の位置関係	：	a 同一線上＋竜舎は線より内側（小島・柳原、男体山１・２・４）
		b 基壇・相輪・竜舎外縁同一線上（男体山７）
		c 同一線上にならない（男体山６）
④基壇の上段外縁の形状	：	a 外反する（小島・柳原、男体山１・２・４）
		b 外反しない（男体山６・７）

⑤基壇から蓋本体への形状	：	a 座金が重なりやや裾広がり
		b 有段でやや裾広がり（男体山１・２）
		c やや裾広がり（小島・柳原、男体山４）
		d ほぼ直角（男体山６・７）
⑥口縁付近の内面形状	：	a 内側に入る（小島・柳原、男体山１・２・４・７）
		b 真っすぐ（男体山６）
⑦内側の基壇から刹部分	：	a 空間なし
		b 段を有する（小島・柳原、男体山１・２）
		c 段が消滅（男体山４・６・７）

上記①～⑦はａ→ｂ→ｃ→ｄと変化したと仮定した場合、男体山２→男体山１→小島・柳原→男体山４→男体山７→男体山６と変遷したと考えることができよう（第152図）。なお、男体山６は他の蓋と比べ相違点が多く、他の塔鋺形合子蓋とは一線を画する。



第152図　塔鋺形合子　器形

模様は、竜舎上面、相輪上面、基壇上面と側面、身本体に施され、詳細は以下のとおりである。

①竜舎上面	：	a 線刻模様＋線刻内部を魚々子・打刻・線刻等で充填（小島・柳原、男体山１・２）
		b 魚々子４個の菱形文（男体山４）
		c なし（男体山６・７）
②相輪上段・基壇の圏線	：	a 刻みの連続による圏線＋線刻（男体山１・２）
		b 線刻（小島・柳原、男体山４・７）
		c なし（男体山６）
③相輪中段・下段の圏線	：	a 線刻（小島・柳原、男体山１・２・４・７）
		b なし（男体山６）
④基壇側面	：	a 魚々子４～５個からなる菱形文か十字文（男体山１・２）
		b なし（小島・柳原、男体山・４・６・７）

⑤身本体上面	：ａ 唐草文（線刻＋魚々子等による充填）＋２本刻線（男体山１・２） ｂ 唐草文（魚々子連続打刻）＋２本刻線（男体山４） ｃ ２本刻線（小島・柳原、男体山７） ｄ なし（男体山６）
⑥身本体中央	：ａ ２本一組刻線（小島・柳原、男体山１・７） ｂ なし（男体山２・４・６）
⑦身本体口縁付近	：ａ １本刻線（小島・柳原、男体山１・２・７） ｂ なし（男体山４・６）

模様の基本的な変化もａ→ｂ→ｃ→ｄと仮定した場合、器形の変遷と大きな相違は見られない。模様は簡略化して消滅すると考えられる（第153図）。

以上の検討より、本遺跡出土品は、日光男体山出土品１と４の間に位置付けられるといえよう。

第153図　塔鋺形合子　模様（男体山１・２・４、小島・柳原遺跡群）

（２）小島・柳原遺跡群出土塔鋺形合子の位置付け

本遺跡出土品は、９世紀後半から10世紀後半の土器が出土する竪穴建物跡の埋土から出土している。竪穴建物跡が廃棄された下限は10世紀後半と考えられ、製作された時期は、これより前といえる。

また、塔鋺形合子は類例が少ないため制約があるが、遺跡の遺構内から出土したことは重要といえよう。富士見市宮脇遺跡での塔鋺形合子鋳型の出土からわかるように、古代仏教に係る仏具等が畿内からの持ち込みではなく地方でも製作していたことは間違いなく、地方での仏教の在り方を考える資料となろう。

第 20 表　塔鋺形合子一覧

報告番号	部 位	高さ (cm)	口径 (cm)	胴部最大径 (cm)	底径 (cm)	重さ (g)	相輪数	備 考	文献
法隆寺塔鋺（N254）	蓋・身 蓋 身	7.1 4.75 (2.85)	— 6.75 6.75	— — —	— — —	(165) — —	2	台脚除く 台脚欠損	東京国立博物館 2004
正倉院 金銅大合子 第１号	蓋 台脚付身	29.0	—	17.5	—	5,205	3	南倉 27-1	阪田 1992
正倉院 金銅大合子 第２号	蓋 台脚付身	28.0	—	18.1	—	5,840	3	南倉 27-2	阪田 1992
正倉院 金銅大合子 第３号	蓋 台脚付身	29.0	—	17.7	—	4,634	3	南倉 27-3	奈良国立博物館 2011
正倉院 金銅大合子 第４号	蓋 台脚付身	29.0	—	17.8	—	5,179	3	後補の蓋部分含む 南倉 27-4	奈良国立博物館 2011
正倉院 金銅合子	蓋 台脚付身	12.5	—	8.7	—	504.3	—	南倉 28	奈良国立博物館 2004
正倉院 赤銅合子 第１号	蓋 台脚付身	11.5	—	7.3	—	310.3	—	南倉 29-1	奈良国立博物館 2011
正倉院 赤銅合子 第２号	蓋 台脚付身	12.2	—	7.5	—	335.0	—	南倉 29-2	阪田 1992
正倉院 赤銅合子 第３号	蓋 台脚付身	15.0	—	8.8	—	310.4	7	南倉 29-3	阪田 1992
正倉院 黄銅合子	蓋 台脚付身	15.9	—	8.5	—	406.1	5	南倉 28	阪田 1992
正倉院 佐波理合子	蓋 台脚付身	10.9	—	6.5	—	208.6	5	南倉 31	奈良国立博物館 2011
日光男体山 1	蓋	7.5	7.6	8	—	＊ 117.2	3		※ 1
日光男体山 2	蓋	8.2	7.7	8	—	181.2	3		※ 1
日光男体山 3	蓋	(5.5)	6.9	7.5	—	(98.2)	1	宝珠欠損	※ 1
日光男体山 4	蓋	7.1	7.4	8	—	(＊ 99.3)	3	口縁端部一部欠損有	※ 1
日光男体山 5	蓋	6.1	7.3	7.7	—	(＊ 80.7)	1	相輪一部欠損	※ 1
日光男体山 6	蓋	5.9	6.1	6.5	—	141.5	3		※ 1
日光男体山 7	蓋	7.1	7.5	8	—	128.8	3		※ 1
日光男体山 8	台脚付身	6.3	7.2	—	5	87.5	—		※ 1
日光男体山 9	台脚付身	5.9	7.4	—	4.9	＊ 82.7	—		※ 1
日光男体山 10	台脚付身	5.8	7.4	—	4.7	＊ 71.8	—		※ 1
日光男体山 11	台脚付身	(5.2)	7.9	—	—	(68.8)	—	脚～台欠損	※ 1
日光男体山 12	台脚付身	(1.3)	欠損	—	5.8	(19.3)	—	身～脚欠損	※ 1
日光男体山 13	台脚付身	(2.2)	欠損	—	5.5	(19.7)	—	身～脚欠損	※ 1
荷沢神会墓（中国）	蓋 台脚付身	15.6	8.2	—	—	—	7		洛陽市 1992 加島 2011
麟角寺（韓国）	蓋 台脚付身	18.0	8.5	—	5.8	—	7		崔 2010 加島 2011
小島・柳原遺跡群	蓋	(6.3)	7.8	8.2	—	(97.2)	3	宝珠欠損	

（ ）は残存値　　＊印は修復補填剤を含む重さ

※ 1　重量は資料調査時の計測値　それ以外は報告書（日光二荒山神社 1963）実測図から計測

参考文献

石田茂作 1982『塔　塔婆・スツーパ』日本の美術 77　至文堂

小田富士雄 1975「日本の古墳出土銅鋺について」『百済研究』６号

加島勝 2011『柄香炉と水瓶』日本の美術 540　ぎょうせい

河田貞 1989『仏舎利と経の荘厳』日本の美術 280　至文堂

椙山林繼 2006「山岳信仰遺跡の再検討」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集

宮内庁正倉院事務所 1986「年次報告」『正倉院年報』８号
蔵田蔵 1967『仏具』日本の美術 16 至文堂
群馬県教育委員会 1992『黒熊中西遺跡（１）』
崔応天 2010「軍威麟角寺出土仏教金属工芸品の性格と意義」『先史と古代』32 号
埼玉県富士見市教育委員会 1987「第７章　宮脇遺跡第７・８地点」『富士見市遺跡群Ⅴ』富士見市文化財報告 37
埼玉県富士見市教育委員会 1993「第３章　宮脇遺跡第 17 地点」『富士見市内遺跡Ⅰ』富士見市文化財報告 43
阪田宗彦 1992「正倉院宝物の塔鋺形合子」『佛教藝術』200 号　毎日新聞社
鈴木規夫 1989『供養具と僧具』日本の美術 283　至文堂
関根俊一 2005『山岳信仰の美術 日光』日本の美術 467 至文堂
高崎市教育委員会 2011『黒熊・徳山遺跡　黒熊・中原遺跡』
帝室博物館 1939『正倉院御物図録　十二』
東京国立博物館 1999『法隆寺宝物館』
東京国立博物館 2004『法隆寺献納宝物特別調査概報ＸＸⅣ』
東京国立博物館 2019『ご即位記念展　正倉院の世界－皇室が守り伝えた美－』
時枝務 1991「日光男体山頂遺跡出土遺物の性格－新資料を中心として－」『MUSEUM』479 号　東京国立博物館
時枝務 2003「日光男体山頂遺跡出土の密教法具」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集
内藤栄 2005「古密教展概説」『古密教―日本密教の胎動―』奈良国立博物館
奈良国立博物館 1954『正倉院展目録』
奈良国立博物館 2004『第 56 回正倉院展』
奈良国立博物館 2006『第 58 回正倉院展』
奈良国立博物館 2008『第 60 回正倉院展』
奈良国立博物館 2011『第 63 回正倉院展』
成瀬正和 2007「正倉院宝物に見える黄銅材料」『正倉院紀要』29 号　宮内庁正倉院事務所
西川明彦 2019『正倉院宝物の構造と技法』中央公論美術出版
日光二荒山神社 1963『日光男体山　山頂遺跡発掘調査報告書』　角川書店（名著出版 1991 再刊）
日光市史編さん委員会 1979『日光市史』上巻
日光市史編さん委員会 1986『日光市史』資料編　上巻
関根俊一 2005『山岳信仰の美術　日光』日本の美術 467　至文堂
水澤幸一 2006「密教法具考－出土仏具を中心にして－」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集
水澤幸一 2011「古式錫杖考－日光男体山山頂遺跡出土錫杖の位置付けをめぐって－」『経塚考古学論攷』
三田覚之 2015「百済の舎利荘厳美術を通じてみた法隆寺伝来の工芸作品」『MUSEUM』658 号 東京国立博物館
桃崎祐輔 2000「風返稲荷山古墳出土銅鋺の検討『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会
毛利光俊彦 1978「古墳出土銅鋺の系譜」『考古学雑誌』64 巻１号
毛利光俊彦 1991「10　青銅製容器・ガラス容器」『古墳時代の研究』 8
洛陽市文物工作隊 1992「洛陽唐神会和尚身塔塔基清理」『文物』1992-03 期

図版出典

第 148 図　帝室博物館 1939（再トレース）・宮内庁正倉院事務所 1986
第 151 図　埼玉県富士見市教育委員会 1993
第 149・150・152・153 図　日光二荒山神社 1963（一部加筆）

第２節　塔鋺形合子が出土した竪穴建物跡

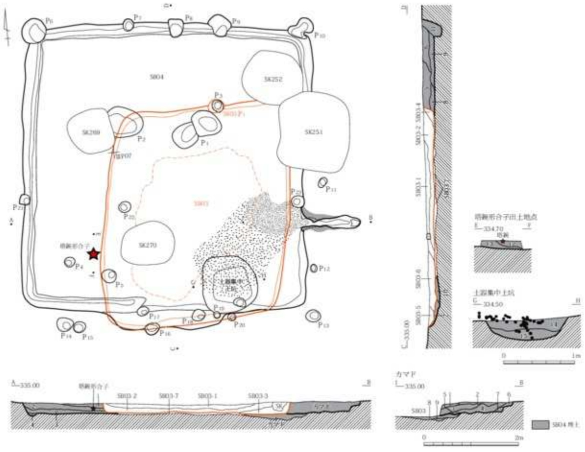
はじめに

塔鋺形合子が出土した竪穴建物跡 SB04 は、構造と内容に大きな特徴がある。第４章１節で詳述したとおり塔鋺形合子自体は埋土の中位から出土していることから、第一義的には竪穴建物の廃絶過程と深い関係があり、構造や内容という建物が機能している段階の特徴との関係は第二義的なものと考えられる。しかしながら、塔鋺形合子がなぜ SB04 の埋土から出土したのかという課題を洞察するためには、竪穴建物の構造や内容に対する理解が欠かせない。

本節では、まず、第一義的な問題である塔鋺形合子の廃棄の問題を再整理し、次に、竪穴建物の構造と施設の特徴について解説を加え、なぜ、SB04 から合子が出土したのかを考えていきたい。

１　竪穴建物の廃絶と塔鋺形合子の廃棄

前節で述べたとおり、塔鋺形合子は、SB04 と重複する他の遺構に伴うものではなく、明らかに本竪穴建物跡の埋土から出土している。また、その出土状態から考えて、埋納されたわけではなく、廃棄されたものである。ここでは、SB04 が機能停止してから埋没完了までの過程を、塔鋺形合子が廃棄される場面を含めて追ってみる。



第 154 図　SB04

（１）竪穴建物の機能停止から塔鋺形合子の廃棄まで

SB04の竪穴建物としての機能停止は、カマドの破壊から始まる。カマドは、天井部はもちろんのこと、袖部が確認できないほど徹底的に破壊されている。破壊されたカマド構築材のうち袖石は、竪穴南東の土器集中土坑から出土している。カマドから土坑内へ向かって床面上に炭が広がっているので、袖石だけを手で抜き取って運んだのではなく、なんらかの道具（耕具か）によって、カマドを被覆する粘土や炭もろとも、土坑内に引きずり込むように廃棄した可能性が高い。

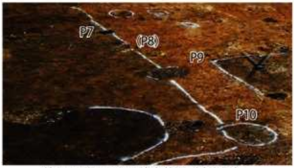
この土坑からは、カマドの構築材や炭とともに多量の土師器坏が出土している。袖石を構成していたと考えられる礫や炭が土器に被っているようにも見えるが（第115図）、土坑埋土14層にも15層にも灰色シルトブロックや炭化物が含まれているため、土器とカマド構築材や炭との前後関係は判然としない（第24･154図G - H断面）。事実記載に従えば、カマド構築材と土器の廃棄はほぼ同時期と見てよいであろう。

続いて、床面上に３層、９・10層、７・８層が堆積する。８層や10層には黄褐色シルトブロックが多量に含まれている点から、人為堆積の可能性が高い。この上に１・２層や５・６層の堆積状況は、周辺壁外から流れ込んでいるようにも見えるため自然堆積かもしれない。自然堆積だったとすると、塔鋺形合子は偶然流れ込んだと解釈することもできる。しかし、５・６層中にも少量ながら黄褐色シルトブロックが含まれているため人為堆積の蓋然性が高いと考える。

塔鋺形合子は、竪穴建物跡の南西寄り、１層に相当する粘性としまりがある暗褐色土中から出土している。したがって、竪穴埋没の最終段階で廃棄されていたことになる（第154図）。

（２）竪穴建物跡の解体

SB04を検出した際、北壁際に並ぶ壁柱穴の輪郭を検出することができた（第155図）。竪穴部分の埋土を切っているため、通常であればSB04を切る別の土坑と判断されるところである。しかし、その位置は、北壁壁面にきれいに沿っており、かつ間隔は左右対称に配置されていることから、SB04を構成する柱穴として間違いないだろう。断面で見ても、壁柱穴のP8にかかわる11層が６層を切っていることから、竪穴が埋没完了後に、壁際柱が抜き取られたということになる。



第155図　SB04検出状況（東から）

壁際柱が最後まで残っていたのならば、壁も屋根（＝上屋）も残したまま竪穴が埋められた可能性もある。例えば、建物が火災で焼失した時、煙筒効果（周囲より高温の空気が発生すると、浮力が生まれる現象）により上屋が激しく焼失しても、柱材は燃え残ることが多い。この時、柱材が再利用されないで、残ったまま竪穴が埋没するというケースも想定される。木材が貴重であった古代において、柱材を理由なく放置したまま埋没させるということは考えにくい。長野市川田条里等では、廃材が水田の畦畔などの構築材として再利用される例が知られている（長野県埋文センター2000）。しかも、そもそもSB04は焼失家屋ではない。

つまり、竪穴建物が機能を失ってただちに、上屋が解体された後に廃棄されたのではなく、壁際柱さらには、上屋が残されたまま、竪穴が埋め戻され、塔鋺形合子も廃棄された可能性がある。SB04の主柱穴は、掘方調査で確認できた北側２基しかない。したがって、主柱穴が梁や桁を支えるというより、壁と壁際柱によって梁や桁が支えられていたと想定した。竪穴の埋土からは灯明皿（第26図27・46）が出土しているが、これもたまたま埋土に混入したというよりは、使われ廃棄され埋没したものあるとすれば、塔鋺形合子は、上屋がある灯明皿が必要な閉ざされた空間で、使われ廃棄されたものという解釈も考えられる。

一方、上屋の解体と竪穴の埋立てとの先後関係は、明確ではない。床面直上には3層あるいは7～10層が堆積しているが、これらと主柱穴P1やP2の埋土との関係は把握できなかった。したがって、竪穴建物の機能停止直後にP1・P2の柱が抜き取られていたか、あるいは竪穴建物埋没後に抜き取られたかは不明である。上屋や壁際柱がない場合に比べてはるかに労力を有すると考えられるので、上屋や壁際柱が存在したまま、竪穴を人為的に埋めたという解釈とは整合的でない。したがって、なんらの理由で壁際柱が残ったが、主柱穴に支えられた上屋は撤去されてから、竪穴が埋め立てられたという解釈も成り立つことを付言しておく。

2　竪穴建物の構造

SB04については、第3章3節で説明したが、ここで再度整理する。

平面は、軸線を東西南北方向に合わせたほぼ正方形で、南側中央がやや張り出している。検出面での寸法は南北6.30m、東西は5.95m、検出面以下の壁高は最も高い部分で26cmである。床はほぼ平坦で、地山を硬化させている。壁は北、西ともにほぼ垂直に立ち上がるが、南側張出し部分の立ち上がりは緩い。この張出し部分には壁溝がないため、竪穴への出入口と考えてよかろう。床には掘方調査で検出したものを含め、7基の土坑がある。このうち、P1とP2が主柱穴で、カマド近くに後で詳述する土器集中土坑がある。残る土坑のうちP3はP1の補助柱穴と見ることもできるが、P4とP5の性格は分からない。また、壁際にはP6～21の小土坑が巡っている。カマドは、東壁のやや南寄りに設けられる。燃焼部は徹底的に破壊されているため構造は不明だが、煙道は壁を刳り貫いて竪穴外へまっすぐ斜めに上昇し、壁から煙道先までの長さは約90cmと比較的長い（第154図）。

以上をまとめると、SB04の構造には以下のとおり3つの特徴がある。

① 竪穴建物の軸が南北軸に合う

② 竪穴建物の平面寸法が大きい

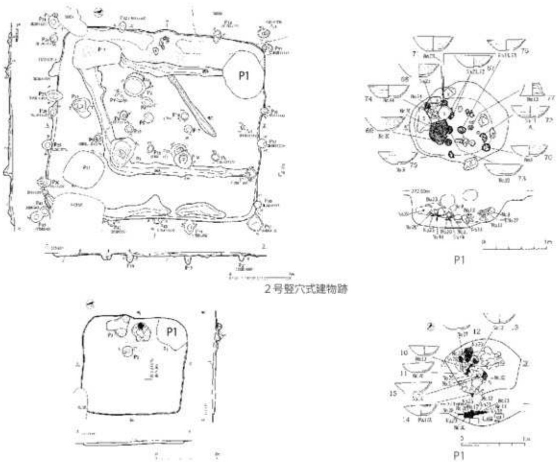
③ 主柱穴は2本しかないが、一部を除き、壁際柱穴や壁溝がある

まず、竪穴の軸線である。ほぼ同時期の竪穴建物跡21軒中、真北から東西に10度程度しか振り幅がないものは15軒である。SB05・06・28のように南北軸からのズレが大きいものもあるが、遺構配置図を見ても、調査した竪穴は概ね南北軸に合わせて造られていたことが分かる（第11図）。これは、次節で述べるとおり、当地域周辺に設計された条里地割と無関係ではないだろう。

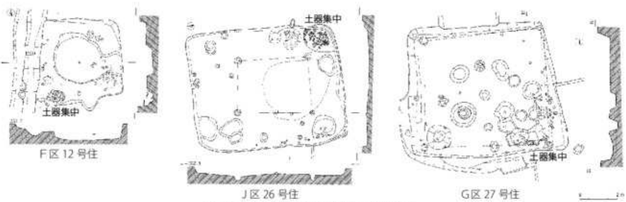
次に平面寸法である。一辺の長さが6mを超える竪穴建物跡は全26軒中3軒しかなく、そのうち、SB04は最大である。ただし、SB06とSB30は南北長が不明なため、SB04より大きかった可能性はある（遺構一覧表）。

最後に壁際柱穴だが、北壁の柱穴は、ほぼ左右対称に配置されている。掘方は、壁を半円状に掘り込んでいる。柱穴底面の高さは、主柱穴P1・P2の底面よりも高く、竪穴床面の高さと大差ない。また、南側は壁外に柱穴が確認でき、全体的にみると、北と南に重点がおかれ、それ以外は比較的簡素である（第154図）。これらの壁際柱穴と床面の主柱穴から上屋を類推すると、主柱で棟を上げ、壁際柱間に渡した桁に垂木を掛けた壁立式竪穴建物を想定できる。類似する形態はSB30にも見ることができる（第47図）。SB30の壁柱穴は壁面を掘り込んだものが北壁、西壁および東壁で確認できる。南壁は後世の流路によって欠損しており不明である。北壁には両端と中央に柱穴が配されている。主柱穴が4基確認でき、竪穴中央へ寄っている。これも、SB04同様壁立式の竪穴建物であろう。西壁際中央には、出入口施設と考えられる方形の高まりがある。注意しておきたい。

調査範囲内で確認した竪穴建物跡の多くが一辺4m内外の伏屋式竪穴建物であったのに対して、SB04



3号竪穴式建物跡
第156図　千曲市社宮司遺跡の土器集中



第157図　長野市南宮遺跡の土器集中

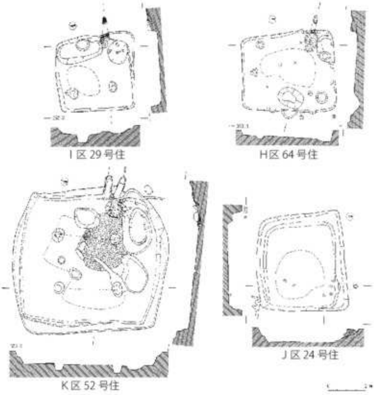
とSB30の2軒は平面的にも立体的にも規模が大きく、しかも他の竪穴建物とは異なる形態であったため、集落内でひと際目立つ建物であったことが分かる。

SB04に代表される大型の竪穴建物跡は、千曲市社宮司遺跡や長野市南宮遺跡でも確認されている。社宮司遺跡は、出挙帳の漆紙文書が出土するなど、更科郡衙との関連が想定されている遺跡である（長野県埋文センター2006）。2号竪穴式建物跡は6.8m × 6.2mの隅丸方形を呈し、壁際に柱穴を巡らせていた壁立式である。いずれも、平安時代中期の大集落にあって、注目を集める建物だったに違いない（第156図）。南宮遺跡は、10世紀中頃に最盛期を迎えた古代斗女郷の中心的集落とみられている（長野市埋文センター1992・2000）。G区27号住は、7.8m × 7.5mの竪穴建物跡で四隅に柱穴がある。壁立式とはいえないが、竪穴の規模は他を圧している（第157図）。

3　竪穴建物の施設

前項で整理したSB04の説明から、施設にかかわる部分を抜粋すると、まず、南側に出入口があり、東壁の南寄りに長煙道のカマドが設置され、カマド付近に土器集中土坑があるということになる。本項では、こうした竪穴建物の施設の特徴を見ていくことにする。

SB04の出入口は南側にあるが、類似した壁立式竪穴建物のSB30の出入口は西側にあると考えられる（第47図）。この違いは何か。出土した土器を比較してみると、両者にはほとんど時期差がない（第26・50図）。いずれも平安時代中期、9世紀末から10世紀の資料とみてよい。SB04とSB30は同時併存していた可能性がある。一方で、出入口が西側（つまりSB04側）にあるSB30からはSB04が見えるが、その逆は見えにくい。とすれば、SB30はSB04を意識して作られた。つまり、SB04より後に造られたと解釈もできよう。SB04とSB30を分析する上では、合子の出土の如何にかかわらず、SB04が主であると考える。



第158図　長野市南宮遺跡の長煙道カマドの竪穴建物跡

そのSB04カマドには水平に竪穴外へ伸びる長煙道が付く。一辺4m内外の伏屋式竪穴建物跡の煙道は、短く上方に立ち上がるものが多いが、規模が大きいSB06やSB30も同様に長煙道をもつカマドを有している。煙道の長短は、竪穴建物の構造と関連していると解釈できる。また、SB30はカマドの位置もSB04と同じで、東壁の南寄りにある。これについて、南宮遺跡では、9世紀までは長煙道を有するものはほとんどが北カマドであるのに対して、小島・柳原遺跡群で集落が営まれる9世紀末から10世紀になると、東壁の南寄りというSB04と共通する位置に長煙道を有するものが主体となる（第158図29・52・64号住）。また、その頃から南宮遺跡では、長煙道を有する南カマドも出現する（第158図24号住）[1]。

最後に、土器集中土坑について触れておきたい。SB04の南東部で確認した土坑からは、図化できたものだけでも35点という多量の土器が出土している。土師器坏を主体とし、灰釉陶器も含まれるが、甕といった煮沸具が認められないのが特徴的である（第26図）。土師器などの坏は、細片に破砕し投棄されたものではなく、整然と配置されてはいないものの、数点が重ねられているところもある（第112図）。土器集中には、カマド構築材やカマド由来の炭も伴っており、カマド解体と大きく関わっている。しかし、カマドにかけられであろう甕などの煮沸具は伴っていないため、カマドで使う土器をこの土坑に廃棄したのではないことが見て取れる。

土器は、土坑埋土中から出土しており、土坑底面には認められなかった（第154図右）。これは土坑を

1　南宮遺跡では、9世紀代の竪穴建物跡は北カマドが70%に対して、東カマドは25%であるが、10世紀代になると北カマドは全体の10%以下になるのに対して、東カマドは60%、南カマドが30%を占めるようになる。長煙道の南カマドは北東北に多いという事実が知られている（北東北古代集落研究会2014）。先進的な仏具というと、視点が都城地域にのみ向きがちだが、古代地域社会では多様な交流があったことがうかがえる。

埋める途中に土器を廃棄したためであり、建物の埋立てと連動したものと考えられる。同様の状況はSB06やSB30でもみることができる。SB30では、土器集中土坑から出土した緑釉陶器（第50図248）が、竪穴内の別の土坑P4出土の破片と接合しており、土坑に廃棄される前に土器が破砕されていたことを示している。

このような土器集中は、さきに紹介した社宮司遺跡や南宮遺跡にも同様の事例がある（第156･157図）。

社宮司遺跡２号竪穴式建物跡では、南東隅のP1において認められる。出土状況図をみると、土坑埋土中から礫とともに多量の土器が出土している。廃棄された土器は土師器や黒色土器坏が主体となっており、９世紀末～10世紀初頭に位置付けられている。同遺跡の３号竪穴式建物跡は、小型隅丸方形の竪穴建物跡で、カマドは東壁中央に設置されている。土器集中はカマド右手、南東隅のP1において認められ、埋土中から土器とともに礫が出土している。廃棄された土器は、土師器や黒色土器の坏が主体となっている。

南宮遺跡F区12号住は中型の竪穴建物跡で、西壁の南寄りにカマドを設置している。土器集中はカマドの左手、南西隅にある。廃棄された土器は土師器坏を主体としており、土坑内からは礫も出土している。出土した土器から、10世紀中頃に位置付けられている。J区26号住は7.7m × 6.3mの大型の竪穴建物跡で、東壁の南寄りにカマドを設置している。土器集中はカマドの右手、南東隅角にある。廃棄された土器は土師器坏が主体で、10世紀末～11世紀初頭に位置付けられている。G区27号住では、南東隅の土坑から土器が多量に出土しているようである。廃棄された土器は土師器坏が主体となっており、10世紀前半に位置付けられている。

こうして見てくると、この地域の平安時代中期竪穴建物内に残る土器集中には、以下の共通点がある。

① 坏や埦といった飲食器が主体となっていること

② カマド周辺の土坑にみられること

③ 土坑の埋土中からまとまって出土していること

飲食器は土師器坏を主体としており、灰釉陶器・緑釉陶器が数点含まれることがある。飲食器とともに礫が出土するのも特徴的である。これらの礫の由来は必ずしも明らかではないが、小島・柳原遺跡群ではいずれも礫は被熱しており、全ての事例においてカマドが解体されていることから、カマドの構築材である可能性は高い。土器集中は、カマドの解体と大きく関わる一回限りのものである。土器集中土坑は、現状では10世紀に多く認められる[2]。

土器集中はカマドの解体と連動していることからも、建物内での調理・飲食の停止に関わる儀礼であろう。そこに大量の飲食器が伴うことは、大量の飲食物が用意された可能性がある[3]。とくに、本遺跡のSB04やSB30、南宮遺跡G区27号住、社宮司遺跡２号竪穴式建物跡など、大型で特異な竪穴は、一般の竪穴建物とは異なり、集落の構成員全体、あるいは集落外からの客も含めた共同の飲食を伴う儀礼が行われていたのかもしれない。

4　まとめ

塔鋺形合子は、SB04の埋没最終段階に竪穴南西寄りに廃棄されていた。

SB04が、集落内の一般的な建物とは規模や形態上大きく異なり、しかも、施設の様相や飲食器の出土状態から集落の共同施設であった可能性を類推した。これはSB30も同様である。

2　カマド廃棄の土坑は、古墳時代後期からみられるものに由来するものであろう。

3　日光男体山を開山した勝道上人が、民衆に食物を施したことに由来する強飯式は、埦坏に高く盛った飯を強制的に食べさせる修験道の儀式であるが、いわゆる椀飯振舞であり、農耕儀礼の要素も多分に含んでいる（宮本1981）。

竪穴建物が機能停止した後、埋没が完了するまで上屋が残っていたか否かという結論はひとまず置くとしても、集落の構成員は、SB04やSB30が他の建物と異なる性格を持っていることを承知していたのだろう。

つまり、かつて「お堂のような性格をもっていた」かもしれない建物跡だからこそ、廃棄したと考えられないか。しかし、集落全体を見渡すと、今回の調査で明らかになった遺構・遺物からは、官衙や寺社との関連を伺わせる要素は少ないので、そうした解釈にも苦慮する点である。

これ以上の類推はひとまず置いて、この集落に塔鋺形合子が持ち込まれた理由はなにか。それを次節で見ていくことにする。

参考文献

北東北古代集落研究会 2014『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』

長野市埋蔵文化財センター 1992『南宮遺跡』長野市の埋蔵文化財 43　長野市教育委員会

長野市埋蔵文化財センター 2000『南宮遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財 96　長野市教育委員会

長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 10　川田条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 47

長野県埋蔵文化財センター 2006『一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 1　社宮司遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 78

宮本常一 1981『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論社

第３節　土地利用からみた小島・柳原遺跡群

１　はじめに

塔鋺形合子がなぜ小島・柳原遺跡群（以下「遺跡群」という。）の本集落に持ち込まれたか。この疑問を多少なりとも解決するためには、遺跡群周辺の土地利用への理解が欠かせない。遺跡群周辺は、北八幡川を幹線水路として、そこから多くの小水路が分岐し、複雑な水路網を形成している。これらのなかには人工的に開削された水路もあり、この一帯における土地利用の変遷と大きく関わっている。

今回の発掘調査においては、２区北側に古代の溝３条が横断し、２区中央には中世の大溝が縦断していることがわかった。これらの溝と周辺の水路は深く関係している。現代に続く周辺の水路を時代的にさかのぼり、調査範囲の溝との関係をみることによってその機能を明らかにし、集落の位置づけを考えてみたい。

２　遺跡周辺の水路

（1）北八幡川の名称をめぐって

遺跡群一帯は、千曲川と北八幡川の２つの河川に接している。特に北八幡川は、生活の幹線水路となっており、また地形の形成にも大きく影響を与えている。しかし、北八幡川の名称をめぐっては、若干の整理が必要である。

現在の北八幡川は、裾花川から取水された八幡川を源とし、柳原において長沼用水と分岐し、東方向へ走り柳原の布野地区にある柳原排水機場で千曲川と合流している（第５・７図）。

北八幡川の表記が見られるのは近代以降であり、それまでは八幡川（堰）と呼ばれていたようである。八幡川（堰）は島津堰とも呼ばれ、中世に島津氏が開削したと言われている（第２章２節）。

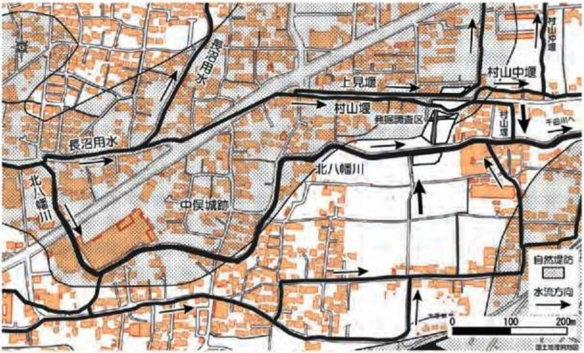
近代以降においても、八幡川（堰）の表記が一部で見られ、おそらく地元の呼称としては使われ続けていたのであろう。『善光寺平農業水利改良事業沿革史』（長野縣 1938）によると、北八幡川は現在の長沼用水の流路を指しており、末端部は浅川に接続している。一方、現在の北八幡川は、分岐する途中の排水路と見ていたようである。　1973 年（昭和 48）年の国土基本図をみても、長沼用水の方を「北八幡川」と記載している。

ところが、1988（昭和 63）年に現在の北八幡川の末端部、千曲川との合流地点で排水機場が稼働し、そのあたりから、地図上の表記が現在の流路の方を指すようになっている。北八幡川の整備にあたっては、近代では農業用水路としての安定的な配水が主な目的であったが、現代になると市街地内水路の氾濫によって起こる都市型洪水を食い止めるための排水という防災機能も課せられるようになってきている。このことから千曲川に接続する柳原排水機場が重要視されたことにより、河川呼称が代わっていったのではないかと推測される。

このように、現在の北八幡川の地図上の表記は現代になされたもので、本来の流路は、長沼用水と呼ばれる浅川に接続する河川であったと確認できる。ここでは、特に断りのない限り、現在用いられている呼称を使用する。

（2）現在の遺跡周辺水路（第 159 図）

現在、北八幡川の流路は微高地を貫流している。この微高地内には、北八幡川や長沼用水から分岐する小水路もあり、水路網が人工的に形成されたものであることが分かる。これら各水路は、それぞれ異なった機能・用途をもっている。



第159図　現在の遺跡周辺の水路

北八幡川は、小島地区付近で長沼用水と分岐した後、中俣城跡付近で微高地南端を迂回し、東流して千曲川へと接続する。長沼用水と分岐した後は用水路ではなく、基本的に排水路として機能している。その末端部に排水機場があることからもわかるように、この一帯における主要排水路となっている。一方の長沼用水は、微高地内を貫流した後北流し、微高地北側に広がる水田の用水となり、最終的に浅川へと合流する。

長沼用水から東へ分岐する村山堰は、微高地を横断した後、本調査区の東側で南折し、北八幡川と合流する。つまり村山堰は、北八幡川を水源とし、北八幡川に排水するバイパス状の水路になっている。そして村山堰から分岐する上見堰や村山中堰は、微高地北側の用水となっている。このように村山堰は、不要となった水を北八幡川を経て千曲川へ排水する機能と共に、上見堰や村山中堰を経て北側の水田地帯に配水する用水の役割をあわせもった水路であると言える。

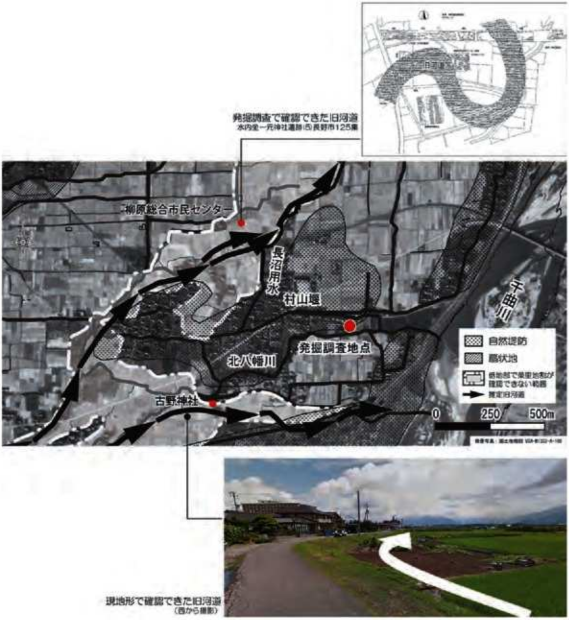
現在、村山堰と村山中堰との分岐地点には水門が設置されており、村山堰からの配水量が調整できるようになっている。村山中堰で不要となった水が、北八幡川へと排水されているのである。

3　旧河道の復元（第160図）

北八幡川は裾花川に源を発するが、その裾花川は、現在は犀川へと合流している。しかし、これは江戸時代における改修によるものであり、本来は、裾花川と北・南八幡川は一本の川で、直結していたとされている[1]。北八幡川は扇状地内をわずかに南へ弧を描くように流れているが、これは扇状地の形成によって南側へ押し出されたことと関係しており、自然流路のおおよその流れとして捉えることができる（第3図）。北・南八幡川と分岐した先の裾花川が人工的な流路と考えてよい。

ただし、細部をみると、現在の北八幡川は直線的な流路となっている箇所も多く、幾度にもわたる改修を経てきている。そこで微高地（＝自然堤防）・後背湿地・旧河道跡等の地形と終戦直後に撮影された米軍空撮写真等による地割を重ね合わせることによって、遺跡群周辺の旧河道を復元した（石丸 2019）（第160図中）。

1　松代城代花井吉成・吉雄父子によって裾花川は改修されたと語り伝えられており、その功績は多くの文献にも記されている。



第 160 図　遺跡周辺の旧河道

遺跡群は、北八幡川によって形成された島状の自然堤防上に立地しており、周囲は後背湿地に囲まれている。この後背湿地は、北八幡川の旧河道によって形成されたもので、遺跡群が立地する自然堤防を挟み込むように広がっている。

北側の旧河道は、分岐した後、現在の柳原総合市民センターあたりを蛇行しながら流れていたことが発掘調査から分かっている（長野市埋文センター 2010）（第 160 図上）。その後、長沼用水の流れる一帯を北流している。一方の南側に分岐した旧河道は、古野神社の南前面を東流していたことが現在も観察することができ（第 160 図下）、そのまま千曲川へと合流していたものと推定できる。

4　発掘調査で確認した溝跡と周辺水路との関係

（１）中世（162 図上）

中世の溝 SD01 は、２区において確認した。幅 5.70m、深さ 1.77m で、全長は 52.24m の長大なもので、現在の村山堰と北八幡川を繋ぐように南から北へ流れている。古代の竪穴建物跡を切っており、埋土下層

は自然埋没であるが、中層から上層にかけて五輪塔がまとめて廃棄されており、周辺墓域の廃棄とともに埋め立てられている。る（第80・81図）。一方、２区の南端を西から東へ流れる溝SD25-２も、古代の竪穴建物跡を壊しており、さらにその埋土がSD01に切られているため、平安末期に掘削され、SD01が造られた中世のある段階には埋まっていた（第83・84図）。

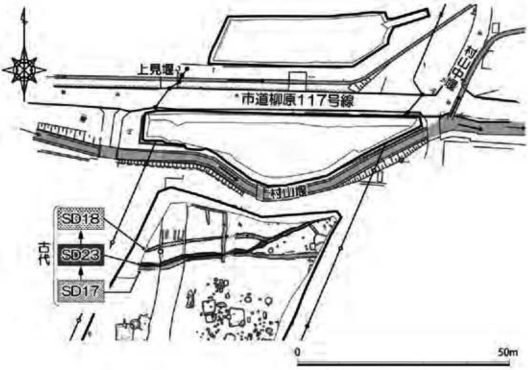
周辺の水路を見ると、村山堰はすでに人工的に開削され、自然堤防内を貫流している。また、北八幡川は調査区西方において、中俣城の外堀をなすようにコの字形の流路をなしており、「中世に」掘削された可能性が極めて高い。したがって、SD01が掘削された段階では、調査区北側の村山堰を流れる水がSD01を通じて北八幡川に流れ込み、千曲川へと排水を行っていたと考えられる。現在の村山堰も、調査区から約200m東で南へ折れ曲がり、北八幡川へ排水している。これは北側水田への配水量の調整を目的としているので、当時のSD01もこの機能を有していたと想定できる。

現在、北八幡川の南側に広がる各水路は、いずれも北八幡川へ排水されている。つまり北八幡川一帯が最低所であり、開削される以前は旧河道で著しい滞水もあっただろうと推測できる。北八幡川の開削は、当地における排水機能の強化にほかなく、またその一部が中俣城の外堀をなしていることからも、開発主体は中俣城と関係していることは疑いない。北八幡川の排水機能は、現在まで引き継がれており、その原型は少なくとも中世にまで遡るのである。

（２）古代（第161・162図下）

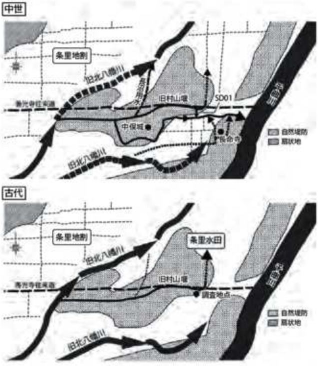
古代の溝は、２区北側で３条確認しており、それらは切り合っていることから時期的な変遷をたどることができる。まず、東西に直線的に横断するSD17が掘削される。次いでSD23が掘削され、西半部分はSD17とほぼ重なるが、途中から屈曲して北東方向へ流路を変える。最後にSD18がSD17・23の北側に通り、東半部分はSD23の流路と重なりながら、北東方向へと進路を変えている。

周辺の水路を見ると、２区の南側や１区には古代以前の河道跡は確認できない。したがって、北八幡川は復元した旧河道に近い位置を流れていたものと考えられる（第162図下の矢印）。



第161図　古代の水路

一方、SD18の北側には現在の村山堰がある。SD18は東寄りで南へわずかに屈曲した後、北東方向へ向かっている。これは、現在の村山堰と類似した流形である。村山堰の旧流路と判断してよいだろう（第161図）。現在の村山堰は村山中堰を通じて水田に必要な水を運ぶ重要な役割を担っている。古代にあっても、自然堤防上を流れるこの水路が、北側後背湿地に広がる水田地帯への用水機能を果たしていたと考えられる。SD23や18の流形は、ちょうどこの一帯が微高地の縁辺部にあたっているため、屈曲させることによって増す流勢を効率的に利用する役割があったのだろう。



第162図　古代・中世の条里地割と用水路

5　塔鋺形合子が持ち込まれた集落

２区の北側で検出したSD17・23・18が、いずれも平安時代にさかのぼる村山堰の祖源的な水路であり、周辺の土地利用を図る上で重要な役割を果たしてきたことがわかった。そして、この水路が、市道柳原117号線に沿って流れていることは、さらに重要な意味を持っている。

旧河道の復元を試みた通り、遺跡群内における古墳時代までの集落は、おおよそ自然堤防の末端、旧河道に近い位置に展開しており、旧河道を含む自然流路からの小規模な用水によって耕作が行われていたと想定される。しかし、第２章２節で触れたように、古代になると集落立地に大きな変化がみられる。その背景として考えられるのが、「条里制」である。

小穴芳美氏や小出章氏は、遺跡群を含む周辺地域における条里地割の存在を指摘している（小穴1992・小出1992）。その南端部の基線は、おおよそ布野の渡しから善光寺の旧本堂地点とされる仁王門までをほぼ直線に結んでおり、市道柳原117号線は、ちょうどその沿線上の位置にあたる。江戸時代に「中道」と呼ばれていたこの道について福島正樹氏は、律令時代には水内郡と高井郡とを最短で結ぶ官道であったと想定している（福島2000）。

さきに、２区の北側で見つかった古代の溝跡は、周辺の土地利用を図る上で重要な役割を果たしていたことに触れた。自然堤防における水路の開削は、古代条里制に基づいて実施された大規模な開発の一断面である。今回発見した溝跡は、本集落以北の水田開発を促し、水田経営を支える重要な役割を担っており、本集落は、その意味で地理的に要の位置にあったと言える。裾花川からの乱流の制御は、古代の地域社会にとっても、重要な課題であったことは想像に難くない。こうした開発や防災上の重要な場所に忽然と集落を構えた新来の集団は、最先端の灌漑技術を持っていた。一般に古代の大規模開発と仏教系集団は深い関わりがあったとことが知られている。彼らを介して、しかも善光寺道（中道）とされる街道の脇にある本遺跡に、塔鋺形合子という「珍奇な金属製品」が持ち込まれてもおかしくない。

さらに、古代においては、自然堤防北側には、条里地割が確認されておらず（第１章２節）、中世に排水路的機能を有したSD01の成立まで、北側の開発には成功していないと推測される。古代の集落も短期間しか存続しておらず、廃絶している。つまり、水路、水田開発の成否と集落の盛衰が一致しており、このことが塔鋺形合子の廃棄とも関連があると考えたい。

つまり、ここが浅川・裾花川扇状地の東端であり、古代水田開発の基軸たる条里地割の基点を兼ね備えた要衝であったことは、千曲川に面するという地理的な要因だけではなく、水路網整備の東端部という水利権の及ぶ領域の境界に当たっていたので、当地は開発の象徴的な地点であったため、ここに塔鋺形合子が持ち込まれ、廃棄されたとも考えられる[2]。

しかし、推論に推論を重ねることは、これからの研究の障害となりかねない。よって、塔鋺形合子という極めて貴重な仏教系遺物が、小島・柳原遺跡群における平安時代中期の竪穴建物跡の埋土から出土した背景を探る作業は、ここまでとしたい。

参考文献

石丸敦史 2019「遺跡調査における GIS の活用―小島・柳原遺跡群における水路の復元―」『長野県埋蔵文化財センター年報』35　長野県埋蔵文化財センター

小穴芳実 1992「善光寺平の条里瞥見」『地域史研究法』信毎書籍出版センター

小出　章 1992「善光寺平の条里遺構」『文化財信濃』18 巻 4 号

長野市埋蔵文化財センター 2010『水内坐一元神社遺跡（5）・中俣遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財 125　長野市教育委員会

長野縣經濟部耕地課 1938『善光寺平農業水利改良事業沿革史』　信濃毎日新聞株式会社

福島正樹 2002「古代における善光寺平の開発について」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第 96 集

2　井原今朝男氏に歴史的環境について御指導いただいたところ、本調査地点を含む布野が善光寺領であったことにも同様な意義があった可能性があるという。調査地点と当地域の要衝である村山橋や布野の渡しの間に、水利とかかわる近世の有力な名主の居宅（国有形登録文化財小坂家住宅）が位置していることも参考になろう。

おわりに

1　塔鋺形合子出土の衝撃

発掘調査が開始されてまもなく現場を見学した。厚い盛土が撤去され、遺構検出の作業中であったが、遺物はほとんどなく遺構らしきものも見えていなかった。調査地点は本当に遺跡なのかと思ったりもしたが、その後遺構遺物が確認され、調査が進められていった。やがて、SB04から塔鋺形合子の蓋が出土した。当初は銅製の器であるが、名称も何も見当がつかなかったという。それもそのはずで、類例は東京国立博物館蔵の法隆寺献納品1組、正倉院南倉の10組、日光男体山山頂遺跡出土の13点の24点が国内で確認されているにすぎなかったからである。このようなものが長野県の一般的な集落遺跡から出土したことに対して、塔鋺形合子に接してきた専門家は「まさか」と衝撃を受けたという。

塔鋺形合子は、法隆寺の玉虫厨子に僧侶が柄香炉と一緒に手にしている様子が描かれていて、柄香炉と共に法会に際して使われた香合である。塔鋺形合子の存在は、仏教文化が波及していたことを示している。とはいえ、接したことはなく、国内25例目の塔鋺形合子という貴重品に対して、専門家の指導が得なくては対応できない。そこで、遺跡調査指導委員会が設置された。

指導委員会では、現状をできる限り丁寧に観察した記録の作成、最新の機器を駆使して製作技法の解明と金属成分の分析、先端部付着の繊維状物体の解明、既存の24点の調査、型式と編年、さらに復元品の製作の必要性等、塔鋺形合子についての研究・追究の方向性が示された。また、出土状況の確認、出土竪穴建物の性格、関連遺物や類似品の収集等、塔鋺形合子を含めた遺跡の性格の解明の必要性が指摘された。こうした指導事項に対して調査担当者は丁寧に対応され、その成果が第4章及び第6章にまとめられた。詳細はそちらに譲るが、塔鋺形合子をここまで徹底して調査したのは全国初である。今後、この調査成果が塔鋺形合子をはじめ、仏具研究の基礎資料となるはずである。

さて、希少な塔鋺形合子が今後遺跡等から発見される可能性はあるのだろうか。結論から言えば可能性はあるといえる。塔鋺形合子と柄香炉の鋳型が、埼玉県富士見市宮脇遺跡の平安時代の住居址から出土し、合子の鋳型は複数個あるというからである（第6章1節）。平安時代東国には、塔鋺形合子や柄香炉製作する技術者がいて、製品は寺院等へ供給されたと考えられる。中には鋳つぶされて他の器物に作り替えられたものもあろうが、廃寺跡はもとより、本事例のように遺跡から出土する可能性は十分考えられる。中には、現在まで伝世しているものもあるかもしれない。

一方、塔鋺形合子と一緒に使われた柄香炉の火炉部分が、上伊那郡箕輪町北城遺跡22号住居址から出土している（第163図1）。口径17.4cm、高さ4.0cmで、正倉院宝物や法隆寺献納物の作品に比べて大型で、口縁が強く広がる形は同じであるが、相当に浅いものである。出土遺構は9世紀後半から10世紀前葉と考えられる竪穴建物跡で、柄香炉は平安時代前期の所産のものと見られている（久保2010）。また、長野市三輪遺跡1号住居跡出土の火熨斗形土製品（第163図2）は、柄香炉の形に似るとの指摘があった[1]。柄香炉も全国的に見て出土例はほとんど無いといい(久保2010)、北城事例も本事例と同様重要である。

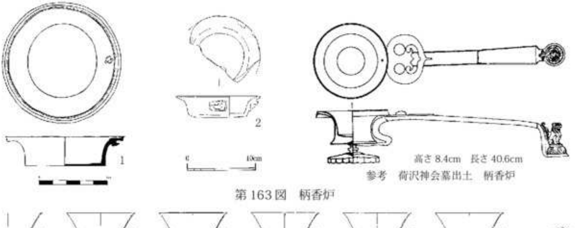
塔鋺形合子や柄香炉の出土は、その用途からどうしても宗教施設との関連性で考察されるが、本事例・北城事例はともに竪穴建物跡からの出土である。本事例が出土したSB04は壁立建物、北城事例は床面に大小のピットがあり遺物量が多く祭祀的な要素が濃厚な建物跡と報告されており、2事例が出土している建物跡は、一般の建物跡とはその様相が異なっているのである。しかし、このことを持って直ちに宗教施

1　第2回遺跡調査指導委員会での長野市内の仏教関連遺物視察調査時

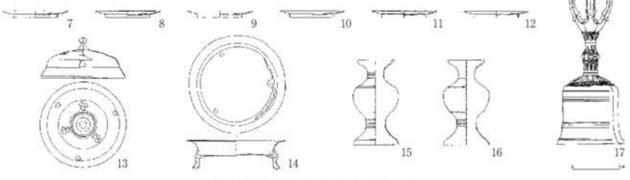
設と結びつけることはいかがかと考える。二つはセットで使用されたものであるが、本事例も北城事例もそれぞれ完形、完品でないばかりか、片一方のみの出土である。このことは、両事例の保持者が仏具としての用途をどこまで理解して保持し、廃棄したのかも含めて考えていく必要があろう。さらに、本事例の場合、製作年代は相輪上面の文様から奈良時代末～平安時代初頭と指導委員会で指摘された一方、SB04は9世紀後半～10世紀後半の平安時代中期の竪穴建物跡で、製作から廃棄、埋没までには数十年のライムラグがある。製作されて廃棄されるまでの履歴はわからないが、当初の保持者から手離れ、複数回の移動があったとすれば仏具として認識され続けていたかどうかも考慮する必要であろう。

一方、千曲市扇平で密教の儀式で使われる法具一式が、完形、完品の状態で採集されている。それらは六器6点（第164図1～12）・火舎香炉1点（第164図13・14）・華瓶2点（第164図15・16）に加えて五鈷鈴1点（第164図17）で、時期は平安時代後期12世紀とされている。出土状態は不明であるが、採集地は冠着山の中腹で岩陰に埋納されたか、現地にお堂があってそこに置かれていた法具の可能性もあるという。冠着山麓には山岳信仰に関わる伝承地が複数ある一方、採集された法具は、古代の信仰の存在をモノから想定できる資料とされている（千曲市森将軍塚古墳館2019）。法具が一式で採集された扇平事例は、仏具本来の用途が理解されて使われていた事例と考えられる。

本事例・北城事例は、塔鋺形合子や柄香炉が仏具として保持され、廃棄されたものなのか疑問があるとした。一方、扇平事例は法具一式が一括で採集されていることから仏具本来の用途が理解されて使われていた結果ではないかとした。前者は平安時代中期、後者は後期と時期差がある。このことは、平安時代中期には、仏具は存在したものの、末端部まで本来の用途が理解されて保持されてはいなかったが、後期段階になると仏具本来の用途がきちんと理解されて保持され、使われるようになったと考えられるのである。それは、地方で仏教が根付いていった過程とも捉えられ、地方での本格的な仏教文化の定着は扇平事例から、少なくとも12世紀前後ではないかと考えられるのである。



第163図 柄香炉



第164図 千曲市扇平出土密教法具

2　調査地点はどんな遺跡だったのか

小島・柳原遺跡群は、長野市東部にあって千曲川と北八幡川によって形成された後背湿地、微高地上に立地している。全長3.5km、幅1.2kmほどで範囲は広い。今回の調査地点は遺跡群の南端に位置し、これまで周辺の発掘調査は行われておらず未知であった。長野市教育委員会の試掘調査で遺跡として本調査が必要であることが確認され、今回の発掘調査となった。そして、遺跡群南端部の遺跡内容が明らかにされると期待が寄せられた。その結果、調査地点は「平安時代の集落域」と「中世の墓域」の遺跡であった。

平安時代の集落域について

第10図の層序の対応関係にあるように、調査2区の第1検出面にあたるⅣ層上面高に対して、1区は約－25cm、3b区は約－50cmと比高差はわずかであるが、2区は東西に延びる尾根状の高まりの一部であった。2区と1区の間には北八幡川が東流しているが、並行するように近世以降とされるSD25、平安時代中期のSB30を浸食しているSD25-2が検出されたことからして、集落が形成される以前から東流する流路があったのではないかと考えられる。すなわち、水辺の高まりを選地して平安集落は形成されたのである。

本報告にあるように、集落は平安時代前期（8世紀末～9世紀後半）に始まる。前期及び前期から中期にかけての遺構は、7棟の竪穴建物跡と3棟の竪穴状遺構である。前期とされた竪穴建物跡の中には灰釉陶器を含むものがあり、中期に近い前期と考えられる。出土遺物は日常の生活具である須恵器坏、土師器坏、黒色土器坏、甕が主で、SB22出土の双耳坏は注目される。平安時代以前では、数点の古墳時代の土器が出土しているものの、奈良時代のものは出土しておらず、平安時代前期になって未開発の地に突如集落が形成されたといえる。集落は東西方向に延びる可能性はあるが、大規模ではなく、背景には私的な開発者の進出も考えられるが、当時の社会や政治事情が関係していると思われる。集落は東西方向に延びる可能性はあるが、大規模ではなかったと思われる。

未開の地に突如形成された集落は、中期（9世紀後半～10世紀後半）に継続している。竪穴建物跡18棟、竪穴状遺構7棟が密集し、切り合って発見された。SB05やSB06のように調査区外に延びている建物跡があり、集落の範囲と規模は拡大している。そうした中でSB04・06・30は大きな建物跡で、内部から土師器坏、黒色土器坏、土師器埦、黒色土器埦といった食膳具が折り重なった土器集中土坑が検出されている。また、SB04・30には、壁柱穴が穿たれていて壁立建物と考えられ、他とは異なった外観であったといえる。さらに、SB04の埋土からは、前述した塔鋺形合子が出土している。他の竪穴建物跡からは土師器坏、黒色土器坏、土師器埦、黒色土器埦、甕といった日常の生活具が主に出土しているが、SB06の盤、SB24の石製の丸鞆は注目される。中期の時間幅を100年前後と想定すると、2～3世代継続した集落と考えられる。その間、土器などには画期といえるような変化は認められない。伝統的な生活が維持され、集落の営みは安定していたと考えられ、小規模な竪穴建物が建ち、その中に外観が異なる壁立の建物がある集落景観が想定される。

集落が2～3世代に渡って安定した営みが維持されるには、それなりの生産力が必要である。調査地点の南北には後背湿地が広がっており、水田に適した環境にあるが、そうした集落に塔鋺形合子や丸鞆、双耳坏が持ち込まれていた理由を考える必要がある。調査区を横断する市道柳原117号線沿線上には、古代の道が想定されていて、その道は北に広がる条里地割の南端部の基線であり、布野の渡しから善光寺旧本堂地点とされる仁王門までをほぼまっすぐに結ぶ道であり、水内郡衙と高井郡衙を結ぶ官道との見解もある。とすれば、発見された集落は、古代の道沿いに展開した集落ということになる。また、2区の北寄りには、村山堰に並行するSD17・18・23があり、それらは高まりに掘削された水路で、北の水田に配水す

る灌漑水路であったとされた。ということは、集落は灌漑水路の要所に位置したことになる。こうした点から調査された平安集落は、単なる農村集落ではなく、古代の道及び灌漑水路の管理に携わっていた可能性が考えられる。塔鋺形合子や丸鞆等が持ち込まれたのはそうした特性によるのではないだろうか。

後期（10 世紀末～ 11 世紀）になると、竪穴状遺構 SB01、焼成遺構 SF08 や土坑 SF17 などがある。SB01 からは銅鋺状の青銅製品が出土しているものの、遺構数は極端に少なくなる。前期に誕生し、中期に拡大した集落は、後期で縮小終焉したといえる。その終焉にはおそらく大きな社会事情の変動が影響したと思われる。

中世の墓域について

平安時代中期の SB30 は SD25-2 に浸食される。SD25-2 からは古瀬戸の挟み皿・深皿、内耳鍋が出土しており、SD25-2 は SD01 に切られている。SD01 は、北から南へほぼまっすぐ伸び、長さ 52.24m（残存値）、幅 5.70m、深さ 1.77m と大規模で、薬研掘状、底面は平で幅は約 0.8 ～ 1.7m の人工溝跡である。中層の有機物層より上位から、焙烙・内耳鍋・天目茶碗や投げ込まれたような状態の五輪塔が出土している。掘削時期の上限は不明であるが、出土遺物から 15 世紀～ 16 世紀代を中心とする溝と考えられる。この年代感は、埋没途中に構築された木杭列 3 本の放射性炭素年代測定の 15 世紀後半～ 17 世紀前半の暦年代範囲と整合的である。平安時代後期の 11 世紀頃に遺跡としては終焉した調査地点は、少なくとも 15 世紀頃には遺跡として復活していたといえる。ちなみに、SD01 はその規模と形態から大規模な区画溝とも予想されたが、村山堰と北八幡川を結ぶ掘削水路と判断されている。

SD01 の両側の平坦地からは、9 基の井戸跡や多数のピットが検出されている。井戸跡からはカワラケ・青磁・古瀬戸などが出土し、五輪塔の一部を礎盤石に用いたピットもあって建物跡が想定されたが、建物跡は確認されず、居住域ではなかったといえる。

平坦地からは、多数の火葬墓・土葬墓が発見されている。遺構記号 SM・SF・SK が付された遺構 73 基から出土した人骨は、34 基が生骨、39 基が焼骨と鑑定されている。副葬品としては、火葬遺構の SM31 で永楽通宝（1408 初鋳）、SF16 で元豊通宝（1078 初鋳）・景祐元宝（1034 初鋳）・熙寧元宝（1068 初鋳）が出土したが、他は鉄釘や桶のタガ等で時期の決め手を欠いているが、出土した炭化材の放射性炭素年代測定が行われた。その測定値は、SM62 が 14 世紀代、SM35 が 15 世紀代、SM31・32・SF14 が 15 世紀末～ 17 世紀前半、SM30 が 19 世紀～ 20 世紀前半で、長い期間墓域であったといえる。ただし、五輪塔は壊されて SD01 に投げ込まれていたり、二次使用されたりしており、墓域として平穏ではなかった様子が伺える。

3　調査成果を活かした今後

本遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけての大規模集落が存在した中核的な遺跡として著名であったが、今回の調査で古代史・中世史に関わる遺構遺物が出土し、調査成果は、本報告書に詳細にまとめられた。これによって本遺跡群及び地域史研究の新たな出発点に立つことができた。調査成果を活かした今後について、若干を述べて終わりにしたい。

塔鋺形合子について

○今回、国内の塔鋺形合子の 14 例を現物調査した。今後同様な調査が可能になるかわからない。その意味で重要な悉皆的な調査といえる。得られた成果を基準に新たな関連資料の掘り起こしが必要である。

○地元柳原地区では、塔鋺形合子の出土を受けて大人から子どもまで高い関心が寄せられたという。地域住民の盛り上がりが絶えないように、調査成果に基づく新たな研究成果を発信していく必要がある。

○塔鋺形合子は、将来にわたって損傷することなく、適切に保存保管されなくてはならない。それによっ

て塔鋺形合子に接する機会は少なくなり、忘れられていくことを危惧する。危惧解消のためには、復元品を製作し、常設展示できるようにする必要がある。

遺跡について

○古代の遺跡が遺跡群の南に移動しているとの見解は、これまでの各種調査によって予想されていた。今回の調査は、この予想を裏付けている。この事実の背景を追究していく必要がある。

○調査された平安集落の時期は、善光寺の所領として開発が進んだ時期と重なるとの考察がある（柴田 2019）。調査された平安集落を基点にして、律令期や古墳時代終末期へと遡る資料収集や関連性の考察によって、古代水内郡の実態をこれまで以上に具体化していく必要がある。

○調査地点は中世においては墓域であった。古代集落終焉後、墓域となるまでの間や墓域形成後の動向について文献史料とも関連させて追究していく必要がある。

いずれにせよ、発掘調査で明らかになることは多々ある一方で、そこから数多くの課題も出てくる。しかし、課題解明へのヒントが調査成果の中に秘められているように思える。本報告書が基になって新たな古代、中世史が今まで以上に具体的になっていけば、報告書作成者の多大な労苦が報われます。

（市澤英利）

参考文献

久保智康 2010「銅柄香炉」『法華経の光　天台法華宗、信濃へ』常楽寺美術館

柴田洋孝 2019「古代信濃国水内郡における寺院と周辺遺跡にみる土地利用状況」『国士舘考古学』第 7 号 国士舘大学考古学会

千曲市森将軍塚古墳館 2019『さらしな　はにしな　寺　仏』

図版出典

戸倉町誌編さん委員会 1999『戸倉町誌第二巻歴史編上』

長野市埋蔵文化財センター 2015『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（7）　三輪遺跡（8）』長野市の埋蔵文化財 140 長野市教育委員会

箕輪町教育委員会 1977『木下北城遺跡』

洛陽市文物工作隊 1992「洛陽唐神会和尚身塔塔基清理」『文物』1992-03 期

土器・土製品観察表

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
1	PL18	17	2区	SB02 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
2	PL18	16	2区	SB02 No.5・北東・東南・南西	土師器	坏	平安	ロクロナデ、墨書	ロクロナデ	回転糸切
3	PL18	14	2区	SB02 No.6	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
4	PL18	15	2区	SB02 北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
5	PL18	18	2区	SB02 No.8	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切
6	PL18	19	2区	SB02 No.7・No.14	灰釉陶器	埦	平安	漬け掛けか	漬け掛けか	―
7	PL18	20	2区	SB02 ｶﾏﾄﾞ	須恵器	長頸壺	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	―
8	PL18	22	2区	SB02(ⅢP1No.50・58	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	静止糸切
9	PL18	21	2区	SB02 No.7・No.15	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ、粘土紐接合痕跡	―
10	PL18	23	2区	SB02 No.5	須恵器	甕	平安	タタキ	ハケ	―
11	PL18	78	2区	SB03･04 床	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
12	PL18	76	2区	SB03･04南東、SB04南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
13	PL18	75	2区	SB03･04No.18・南東・南東角	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
14	PL18	24	2区	SB03 No.4	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
15	PL18	25	2区	SB03 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
16	PL18	26	2区	SB03 No.6	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
17	PL18	77	2区	SB03･04 床	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
18	PL18	27	2区	SB03	灰釉陶器	皿	平安	施釉（漬け掛け）	施釉（漬け掛け）	―
19	PL18	28	2区	SB03北東	灰釉陶器	埦	平安	施釉（漬け掛け）	施釉（漬け掛け）	―
20	PL18	79	2区	SB04北西、SB03･04南西、ⅢP07	灰釉陶器	鉢	平安	ロクロナデ→ケズリ→施釉	ロクロナデ→施釉（漬け掛け）	―
21	PL18	30	2区	SB03南東角	須恵器	長頸壺	平安	胴部：ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ、器面剥落で不明瞭	底部：糸切→高台貼付・ナデ
22	PL18	80	2区	ⅢP07	灰釉陶器	長頸壺	平安	施釉	ロクロナデ、頸部釉	―
23	PL18	31	2区	SB03 No.5・No.7	灰釉陶器	壺	平安	施釉	ロクロナデ	―
24	PL18	29	2区	SB03 No.8	土師器	甕	平安	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ→ヨコミガキ	―
25	PL19	64	2区	SB04 Pit16	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
26	PL19	53	2区	SB04 南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
27	PL19	69	2区	SB04 No.25	土師器	坏	平安	ロクロナデ・口縁部黒色付着物	ロクロナデ・口縁部黒色付着物	―
28	PL19	67	2区	SB04 No.29 ｶﾏﾄﾞ	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
29	PL19	34	2区	SB04北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
30	PL19	52	2区	SB04 No.77・No.78・南東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
31	PL19	40	2区	SB04 No.45・No.52・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
32	PL19	46	2区	SB04 No.43	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
33	PL19	48	2区	SB04 No.38・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
34	PL19	38	2区	SB04 No.67・No.76・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
35	PL19	42	2区	SB04 No.56・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
36	PL19	54	2区	SB04 No.16・No.19・No.21	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
37	PL19	51	2区	SB04 No.14	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
38	PL19	50	2区	SB04 No.46	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
39	PL19	33	2区	SB04 No.58	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
40	PL19	45	2区	SB04 No.37・No.38	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
41	PL19	41	2区	SB04 No.54・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
42	PL19	57	2区	SB04 北西	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
43	PL19	65	2区	SB04 No.57・No.59	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
44	PL19	49	2区	SB04 No.42・No.41	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
45	PL19	39	2区	SB04 No.35	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
46	PL19	68	2区	SB04 No.25	土師器	坏	平安	ロクロナデ・口縁部黒色付着物	ロクロナデ・口縁部黒色付着物	回転糸切(右)
47	PL19	55	2区	SB04 No.16・No.15	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
48	PL19	56	2区	SB04 No.81	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
49	PL19	66	2区	SB04 No.70・77	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
50	PL19	43	2区	SB04 No.50・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
51	PL19	47	2区	SB04 No.9・No.40・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
52	PL19	35	2区	SB04 No.46・No.45	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
53	PL19	37	2区	SB04 No.59・No.65・No.68	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
54	PL19	44	2区	SB04 No.19・No.53・No.69・No.72・南東集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
55	PL19	36	2区	SB04 No.60	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
56	PL19	32	2区	SB03 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
57	PL19	59	2区	SB04 No.31	土師器	坏	平安	ロクロナデ・黒色付着物	ロクロナデ・底面に黒色付着物	回転糸切(右)
58	PL19	58	2区	SB04 No.32・No.36・No.64・南東集	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	底部欠損
59	PL19	62	2区	SB04 No.35・No.74・No.75	土師器	皿	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	高台貼付
60	PL19	61	2区	SB04 No.5	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切→高台貼付
61	PL19	60	2区	SB04 No.47・No.51・No.62	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	糸切→高台貼付
62	PL19	74	2区	SB03 南東角、SB04 No.20・南東下層床	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切→高台貼付
63	PL19	71	2区	SB04 ｶﾏﾄﾞ	灰釉陶器	埦	平安	漬け掛けか	漬け掛けか	高台貼付
64	PL19	63	2区	SB04 No.39・No.44・No.48	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛け	漬け掛け	回転ナデ→高台貼付け
65	PL19	70	2区	SB04 No.11	灰釉陶器	埦	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
66	PL19	73	2区	SB04 南東集	須恵器	平瓶	奈良平安	—	—	—
67	PL19	72	2区	SB04 No.26 ｶﾏﾄﾞ	土師器	甕	平安	ロクロナデ	黒色処理か、摩耗して不明瞭	回転糸切→ナデ
68	PL20	84	2区	SB05 西	須恵器	坏蓋	平安	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ、自然釉	—
69	PL20	82	2区	SB05 東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
70	PL20	83	2区	SB05 No.13	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
71	PL20	100	2区	SB05・06 南東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
72	PL20	81	2区	SB05 No.16	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
73	PL20	101	2区	SB05・06北西、SB05東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
74	PL20	102	2区	SB05・06 南東	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)→高台貼付
75	PL20	85	2区	SB05 No.3	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛けか	漬け掛けか	回転糸切→高台貼付
76	PL20	103	2区	SB05・06 南東	灰釉陶器	短頸壺	平安	灰釉	ロクロナデ	—

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
77	PL20	86	2区	SB05 No.2	土師器	甕	平安	ロクロナデ＋タタキ	ロクロナデ＋当て具痕	―
78	PL21	87	2区	SB06 No.7下	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
79	PL21	88	2区	SB06 No.6・NO.23・ｶﾏﾄﾞ	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
80	PL21	93	2区	SB06 No.6	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
81	PL21	91	2区	SB06 No.10・北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ、灰色付着物	回転糸切(右)
82	PL21	92	2区	SB06 No.9・北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
83	PL21	90	2区	SB06 No.10・北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
84	PL21	94	2区	SB06 No.30・ｶﾏﾄﾞ	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
85	PL21	89	2区	SB06 No.33	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
86	PL21	95	2区	SB06 No.19・No.34	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切→高台貼付
87	PL21	96	2区	SB06 北東	灰釉陶器	長頸壺	平安	灰釉	灰釉	―
88	PL21	97	2区	SB06 No.13・No.21	須恵器	甕	平安	タタキ	当て具痕	―
89	PL21	98	2区	SB06 No.20・No.12, SB05・06 南東	須恵器	甕	平安	タタキ	当て具痕	―
90	PL21	99	2区	SB06 No.17・No.18	須恵器	甕	平安	タタキ	タタキ	―
91	PL21	383	2区	SK368 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
92	PL21	384	2区	SK368 No.3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
93	PL21	387	2区	SK368 No.8	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
94	PL21	389	2区	SK368 No.11	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
95	PL21	392	2区	SK368 No.27・東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
96	PL21	395	2区	SK368 No.32・東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
97	PL21	398	2区	SK368 No.27・No.41・東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
98	PL21	400	2区	SK368 No.7・No.45・東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
99	PL21	391	2区	SK368 No.19	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
100	PL21	396	2区	SK368 No.33・東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
101	PL21	388	2区	SK368 No.9	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
102	PL21	385	2区	SK368 No.4	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
103	PL21	386	2区	SK368 No.6	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
104	PL21	390	2区	SK368 No.18	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
105	PL21	394	2区	SK368 No.29・No.39	土師器	坏	平安	ロクロナデ→一部ケズリか	ロクロナデ	回転糸切(右)
106	PL21	397	2区	SK368 No.39	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
107	PL21	393	2区	SK368 No.27・東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
108	PL21	399	2区	SK368 No.44	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
109	PL21	402	2区	SK368 No.43	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→高台貼付
110	PL21	401	2区	SK368 No.29	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ミガキ	高台貼付
111	PL21	403	2区	SK368 No.13・No.15・No.17・東	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
112	PL21	404	2区	SK368 No.13・No.15・東	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
113	PL21	405	2区	SK368 No.20・東	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切→高台貼付
114	PL21	406	2区	SK368 No.14	須恵器	甕	平安	タタキ	当て具痕	―
115	PL20	104	2区	SB07	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
116	PL20	105	2区	SB07	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
117	PL20	106	2区	SB07 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
118	PL20	107	2区	SB07 No.2	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ→ケズリ	黒色処理、ミガキ	静止ヘラケズリ

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
119	PL20	108	2区	SB07	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	糸切→高台貼付
120	PL20	109	2区	SB05･06北東、SB07東	黒色土器	鉢	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	—
121	PL20	114	2区	SB08 Pit	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	—
122	PL20	110	2区	SB08 南西	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
123	PL20	111	2区	SB08	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
124	PL20	113	2区	SB08 №5	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
125	PL20	112	2区	SB03 №8、SB08南西・下層～床	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
126	PL20	115	2区	SB09 №2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切(右)
127	PL20	116	2区	SB09 №5	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
128	PL20	117	2区	SB09 №1	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
129	PL20	118	2区	SB09 №3	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ミガキ	高台貼付
130	PL22	119	1区	SB10 Pit4 №1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
131	PL22	120	1区	SB10 Pit5 №1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
132	PL22	121	1区	SB10 №4	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
133	PL22	123	1区	SB10 №7	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
134	PL22	122	1区	SB10 Pit4№2・№3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
135	PL22	125	1区	SB10 №9・ｶﾏﾄﾞ付近	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
136	PL22	124	1区	SB10 №10	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
137	PL22	129	1区	SB10 №11	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
138	PL22	126	1区	SB10 №5	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
139	PL22	127	1区	SB10 №5	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
140	PL22	128	1区	SB10 №8	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
141	PL22	130	1区	SB10 床付近・ｶﾏﾄﾞ付近	土師器	埦	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	高台貼付
142	PL22	131	1区	SB10 床付近	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	暗文	回転糸切(右)→高台貼付
143	PL22	132	1区	SB10	灰釉陶器	(輪花)埦	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
144	PL22	136	1区	SB10･11	緑釉陶器	埦	平安	緑釉	緑釉	—
145	PL22	137	1区	SB11北東、SB10･11	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ハケ	—
146	PL22	151	2区	SB13 №1・北西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(左)
147	PL22	152	2区	SB13 北西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
148	PL22	146	2区	SB13 北西	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
149	PL22	147	2区	SB13 北西	土師器	坏	平安	ロクロナデ→底部付近ケズリ	ミガキ	回転ヘラカケズリ
150	PL22	149	2区	SB13 №2・北西	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
151	PL22	148	2区	SB13 北西	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
152	PL22	150	2区	SB13 北西床下	黒色土器	皿	平安	黒色処理、ミガキ	黒色処理、ミガキ	—
153	PL22	153	2区	SB13 北西	灰釉陶器	埦	平安	流し掛け	ロクロナデ	高台貼付
154	PL23	158	2区	SB14 南西	土師器	坏	平安	摩耗して不明瞭	摩耗して不明瞭	回転糸切
155	PL23	156	2区	SB14 №14	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
156	PL23	157	2区	SB14 北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
157	PL23	159	2区	SB14 №5･№10･№12･№2･北東	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ→ナデ・ミガキ	ハケメ→当て具痕	—
158	PL23	160	2区	SB14 №7	須恵器	甕	平安	ロクロナデ→波状文＋直線文	ロクロナデ	—
159	PL22	154	2区	SB15	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
160	PL22	155	2区	SB15	須恵器	坏	奈良平安	ロクロナデ	ロクロナデ	ー
161	PL23	161	2区	SB17 ｶﾏﾄﾞNo.22	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
162	PL23	163	2区	SB17 ｶﾏﾄﾞNo.1	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ、摩耗して不明瞭	回転糸切(右)
163	PL23	164	2区	SB17 ｶﾏﾄﾞNo.9	黒色土器	坏	平安	摩耗して不明瞭	黒色処理、摩耗して不明瞭	回転糸切、摩耗して不明瞭
164	PL23	165	2区	SB17 No.2	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	
165	PL23	162	2区	SB17 北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
166	PL23	166	2区	SB17 ｶﾏﾄﾞNo.2・ｶﾏﾄﾞNo.28・ｶﾏﾄﾞNo.30	灰釉陶器	埦	平安	ロクロナデ→底部付近ケズリ→漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
167	PL23	167	2区	SB17 No.1・No.3・南東	灰釉陶器	埦	平安	ロクロナデ→底部付近ケズリ→漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
168	PL23	168	2区	SB17 ｶﾏﾄﾞNo.4	土師器	甕	平安	ロクロナデ	ハケメ（摩耗して不明瞭）	ー
169	PL23	169	2区	SB17 ｶﾏﾄﾞNo.18	須恵器	甕	平安	ロクロナデ→底部付近ケズリ	ロクロナデ	未調整
170	PL22	210	2区	SK411 No.15	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
171	PL22	211	2区	SB22 北西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
172	PL22	207	2区	SK411 No.14	黒色土器	双耳坏	平安	ロクロナデ	黒色処理か、ミガキ	高台貼付
173	PL22	209	2区	SB22 No.1	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→高台貼付
174	PL22	208	2区	SB22 南西	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ナデ	ナデか
175	PL22	212	2区	SK411 No.11	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ハケメ	ー
176	PL23	182	2区	SB23	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	ー
177	PL23	183	2区	SB23 南東	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	ー
178	PL23	184	2区	SB23 南東	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	ー
179	PL23	181	2区	SB23 南東	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色土器、ミガキ	ー
180	PL23	185	2区	SB23 南東	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ナデ	ー
181	PL24	190	2区	SB24 No.3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
182	PL24	189	2区	SB24 ｶﾏﾄﾞNo.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
183	PL24	192	2区	SB24 No.5	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
184	PL24	191	2区	SB24 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗して不明瞭
185	PL24	193	2区	SB24 ｶﾏﾄﾞNo.7	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理か	回転糸切(右)
186	PL24	194	2区	SB24 No.7	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
187	PL24	195	2区	SB24 Pit1	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
188	PL24	196	2区	SB24 南西	須恵器	甕	平安	タタキ→ナデ	ナデ	ー
189	PL24	447	2区	SB24 北西	須恵器	土錘	平安	ケズリか→ナデ	-	ー
190	PL24	201	2区	SB27 北西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
191	PL24	202	2区	SB27 北東	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	ー
192	PL24	203	2区	SB27 ｶﾏﾄﾞNo.1・ｶﾏﾄﾞNo.4・No.7・北東	土師器	甕	平安	ロクロナデ、ハケメ→タタキ	口縁部：ナデ、胴部：ハケ+当て具痕	ー
193	PL24	204	2区	SB27 北東	須恵器	甕	平安	タタキ→ナデ	ナデ	ー
194	PL24	205	2区	SB28 No.6	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ	摩耗して不明瞭
195	PL24	206	2区	SB28 北	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	ー
196	PL24	197	2区	SB29 南東	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理？、摩耗して不明瞭	回転糸切(右)
197	PL24	199	2区	SB29 北東・東・床下	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理？、ミガキ	静止ヘラケズリ
198	PL24	198	2区	SB29 No.11・南東	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
199	PL24	200	2区	SB29 南東床下	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
200	PL24	477	2区	SB29 No.10	土師器	甕	平安	ロクロナデ	ナデ	−
201	PL25	222	2区	SB30 床下Pit1 No.1、SB31 床下Pit1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
202	PL25	12	2区	SB30 (SD01 集No.59)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→ナデ
203	PL25	7	2区	SB30 (SD01 集No.24)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
204	PL25	3	2区	SB30 (SD01集No.3)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
205	PL25	257	2区	SB30(SD01集No.10・下層)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
206	PL25	223	2区	SB30 No.4	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
207	PL25	227	2区	SB30 ｶﾏﾄﾞNo.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
208	PL25	259	2区	SB30(SD01集No.46・集No.47・集No.48)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
209	PL25	2	2区	SB30 (SD01集No.1)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
210	PL25	13	2区	SB30 (SD01 集No.62)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
211	PL25	252	2区	SB30(SD01 集No.44・集1層)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
212	PL25	9	2区	SB30 (SD01 集No.55)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
213	PL25	254	2区	SB30(SD01 集No.27・集No.29・集No.32)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
214	PL25	6	2区	SB30(SD01 集No.14・集No.27)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
215	PL25	249	2区	SB30(SD01 集No.63・集No.64・集No.65)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
216	PL25	258	2区	SB30(SD01 集No.2・集No.45)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
217	PL25	264	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15中層・SB30(SD01集	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
218	PL25	265	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15中層・SD01集)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
219	PL25	266	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15 中層)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
220	PL25	263	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15 中層・集)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
221	PL25	250	2区	SB30(SD01 集No.42)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
222	PL25	261	2区	SB30(SD01 集下層)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	静止ヘラケズリ
223	PL25	253	2区	SB30(SD01 集No.39・集No.61)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
224	PL25	267	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15中層)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
225	PL25	260	2区	SB30(SD01 集No.13)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
226	PL25	224	2区	SB30 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
227	PL25	256	2区	SB30(SD01 集No.41)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
228	PL25	225	2区	SB30 Pit20No.1・南西床下	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→ケズリ・ナデ
229	PL25	251	2区	SB30(SD01 集No.60・集東)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
230	PL25	8	2区	SB30(SD01 集No.35・集)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
231	PL25	228	2区	SB30 北東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、摩耗して不明瞭
232	PL25	226	2区	SB30 ｶﾏﾄﾞNo.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
233	PL25	255	2区	SB30(SD01 集No.23)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
234	PL25	268	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15中層)	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
235	PL25	262	2区	SB30(SD01 集No.4・集No.11・集下層)	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	―
236	PL25	230	2区	SB30 Pit4	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
237	PL25	269	2区	SB30(SD01 Ⅲ P15下層・17層)	土師器	盤or塊	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	―
238	PL25	229	2区	SB30 床下No.1・南西	土師器	塊	平安	摩耗して不明瞭	摩耗して不明瞭	高台貼付
239	PL25	5	2区	SB30(SD01 集No.9・集No.25)	土師器	塊	平安	ロクロナデ	黒色処理、摩耗して不明瞭	高台貼付
240	PL25	11	2区	SB30(SD01 集No.57)	土師器	塊	平安	ロクロナデ	黒色処理、摩耗して不明瞭	回転糸切→高台貼付
241	PL25	231	2区	SB30 南東	黒色土器	盤or鉢	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	―
242	PL25	10	2区	SB30(SD01 集No.56)	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
243	PL25	4	2区	SB30(SD01 集No.5・集No.34)、SB30 集西7	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
244	PL25	232	2区	SB30 No.1・南西	灰釉陶器	塊	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
245	PL25	235	2区	SB30 南西	灰釉陶器	塊	平安	ケズリ→漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
246	PL25	233	2区	SB30 床下	灰釉陶器	塊	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
247	PL25	234	2区	SB30 南西	灰釉陶器	塊	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
248	PL25	1	2区	SB30(SD01 集No.54)、SB30 南西7・Pit4No.1	緑釉陶器	塊	平安	緑釉	緑釉	高台貼付
249	PL24	214	2区	SB31 北西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
250	PL24	215	2区	SB31 南東床・南東床下	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
251	PL24	217	2区	SB31 北西・南東	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
252	PL24	218	2区	SB31 南西・北西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
253	PL24	216	2区	SB31 北西・南西床下・南東床下	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
254	PL24	219	2区	SB31 No.1	須恵器	坏B	奈良平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→高台貼付
255	PL24	213	2区	SB31 南東床下	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	―
256	PL24	221	2区	SB31 南西上層	土師器	甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
257	PL24	220	2区	SB31 南東・南西・北西・北東	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ハケメ	―
258	PL26	237	2区	SB33 ｶﾏﾄﾞ床下	黒色土器	椀	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	―
259	PL26	236	2区	SB33 No.1	土師器	高坏	古墳	ナデ	指頭圧痕	―
260	PL26	240	2区	SB34 No.1	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
261	PL26	239	2区	SB32 、SB34ｶﾏﾄﾞ・南東	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
262	PL26	241	2区	SB32、SB34北西床下・北東、SB35北	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
263	PL26	238	2区	SB34	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
264	PL26	242	2区	SB34 Pit11・北東	黒色土器	皿	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	―
265	PL27	243	2区	SB32	土製品	ﾐﾆﾁｭｱ土器	平安	ナデ→ケズリ	ナデ	回転糸切
266	PL26	245	2区	SB34 ｶﾏﾄﾞNo.5・ｶﾏﾄﾞNo.10	土師器	鉢	平安	ロクロナデ→ケズリ	ミガキ	―
267	PL26	246	2区	SB34 ｶﾏﾄﾞNo.4	土師器	鉢	平安	ケズリ	ミガキ	ナデか

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
268	PL26	244	2区	SB34 ｶﾏﾄﾞ No.3	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ハケメ	—
269	PL26	332	2区	SX01 No.8	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
270	PL26	331	2区	SX01 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
271	PL26	333	2区	SX01 No.6	黒色土器	塊	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ、摩耗して不明瞭	高台貼付
272	PL26	334	2区	SX01	黒色土器	ﾐﾆﾁｭｱ土器	平安	ナデ	黒色処理、ミガキ	未調整
273	PL26	342	2区	SX05 No.20	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
274	PL26	344	2区	SX05 No.16	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
275	PL26	339	2区	SX05 No.3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
276	PL26	341	2区	SX05 No.14	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
277	PL26	343	2区	SX05 No.19	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
278	PL26	317	2区	SX05(SF15)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
279	PL26	318	2区	SX05(SF15)	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
280	PL26	338	2区	SX05 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
281	PL26	345	2区	SX05 No.11	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
282	PL26	347	2区	SX05 No.18	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
283	PL26	346	2区	SX05 No.12	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→ナデか
284	PL26	348	2区	SX05 No.15	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
285	PL26	349	2区	SX05 No.21	土師器	坏	平安	摩耗して不明瞭	摩耗して不明瞭	回転糸切
286	PL26	350	2区	SX05 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ミガキか、摩耗して不明瞭	回転糸切(右)
287	PL26	340	2区	SX05 No.8	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
288	PL26	319	2区	SX05(SF15)	黒色土器	塊	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
289	PL26	351	2区	SX05 No.17	黒色土器	塊	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、摩耗して不明瞭	高台貼付
290	PL26	352	2区	SX05 No.5	土師器	甕	平安	ロクロナデ→胴部ケズリ	ナデ	—
291	PL27	247	2区	SB01 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
292	PL27	248	2区	SB01 北西	黒色土器	塊	平安	黒色処理、ミガキか	黒色処理、ミガキ	高台貼付
293	PL27	133	1区	SB11 南西	須恵器	蓋	奈良平安	—	—	—
294	PL27	134	1区	SB11 No.1	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	—
295	PL27	135	1区	SB11 南西	須恵器	凸帯付四耳壺	奈良平安	タタキ→凸帯貼付	当て具痕	
296	PL27	140	1区	SB12 西	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
297	PL27	138	1区	SB12 西	黒色土器	坏	平安	摩耗して不明瞭	黒色処理	回転糸切(右)
298	PL27	141	1区	SB12 西	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
299	PL27	143	1区	SB12	緑釉陶器	塊	平安	緑釉	緑釉	—
300	PL27	142	1区	SB12	灰釉陶器	塊	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
301	PL27	144	1区	SB12	灰釉陶器	長頸壺	平安	灰釉	灰釉	—
302	PL27	139	1区	SB12 No.1	土師器	高坏	古墳	摩耗して不明瞭	指押さえ	—
303	PL27	145	1区	SB12 西・東	土師器	甕	平安	ケズリ	当て具痕→ナデ	丸底
304	PL27	173	2区	SB18 北	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
305	PL27	171	2区	SB18 南	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
306	PL27	170	2区	SB18 北	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切、摩耗して不明瞭
307	PL27	172	2区	SB18 付近	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
308	PL27	174	2区	SB18 南	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	—

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
309	PL27	178	2区	SB19	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
310	PL27	177	2区	SB19 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
311	PL27	176	2区	SB19 No.3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
312	PL27	175	2区	SB19	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
313	PL27	179	2区	SB20 南	黒色土器	埦	平安	－	黒色処理	高台貼付
314	PL27	180	2区	SB20 北	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	－
315	PL27	186	2区	SB25 西	灰釉陶器	埦	平安	ロクロナデ→ケズリ→漬け掛け		高台貼付
316	PL27	187	2区	SB26 北東・南東	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
317	PL27	188	2区	SB26 南西	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
318	PL28	270	1区	SD02	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
319	PL28	271	1区	SD03	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	－
320	PL28	273	1区	SD03 検出面	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	－
321	PL28	272	1区	SD03	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ハケメか、摩耗して不明瞭	－
322	PL28	282	1区	SD04	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ニクロナデ	回転糸切(右)
323	PL28	280	1区	SD04	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ホクロナデ	回転糸切(右)
324	PL28	281	1区	SD04 No.2	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
325	PL28	283	1区	SD04	須恵器	甕	奈良平安	凸帯＋波状文	ハケメ	－
326	PL28	275	1区	SD05	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
327	PL28	276	1区	SD05	須恵器	壺	平安	ロクロナデ、自然釉	ロクロナデ、自然釉	－
328	PL28	277	1区	SD06	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
329	PL28	278	1区	SD06	灰釉陶器	長頸壺	平安	灰釉	ロクロナデ、頸部接合部打ち欠き痕	－
330	PL28	287	2区	SD17	灰釉陶器	埦	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
331	PL28	288	1区	SD17 No.1	灰釉陶器	壺	平安	－	ロクロナデ	高台貼付
332	PL28	306	2区	SF01 No.1	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
333	PL28	307	2区	SF05 No.1	土師器	甕	平安	ケズリ→タタキ→ナデ	ハケメ→当て具痕	－
334	PL28	309	2区	SF08 No.1	土師器	皿	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
335	PL28	310	2区	SF08 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
336	PL28	311	2区	SF08	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
337	PL28	312	2区	SF08	土師器	埦	平安	ロクロナデ	摩耗して不明瞭	高台貼付
338	PL28	313	2区	SF08 付近	灰釉陶器	埦	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
339	PL28	315	2区	SF08 付近	土師器	羽釜	平安	ナデ	ナデ	－
-	PL28	314	2区	SF08	灰釉陶器	小瓶	平安	ケズリ	ロクロナデ	回転糸切(右)
340	PL28	335	2区	SX03 No.1・No.4	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(左)
341	PL28	336	2区	SX03 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
342	PL28	337	2区	SX03 No.3	灰釉陶器	埦	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
343	PL29	320	2区	SF17	土師器	坏	平安	回転糸切痕＋ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
344	PL29	321	2区	SF17 No.2・No.4・No.9	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切
345	PL29	322	2区	SF17	黒色土器	鉢	平安	ナデ→口縁ミガキ	黒色処理、ミガキ	－
346	PL29	324	2区	SF17 No.1・No.5・No.7・No.11	土師器	盤	平安	ロクロナデ	ハケメ	－
347	PL29	323	2区	SF17	土師器	羽釜	平安	ナデ	ハケ→ナデ	－
348	PL29	354	2区	SK78 No.3	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
349	PL29	353	2区	SK78 No.4	黒色土器	皿	平安	黒色処理、ミガキ	黒色処理、ミガキ	高台貼付

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
350	PL29	355	2区	SK78 №2	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ→ナデ	ハケメ→当て具痕	—
351	PL29	364	2区	SK267 №2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
352	PL29	367	1区	SK303 №2・№3	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理	摩耗して不明瞭
353	PL29	366	1区	SK303 №1	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ→胴下部ケズリ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
354	PL29	368	1区	SK304	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
355	PL29	369	1区	SK305	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ナデ	未調整
356	PL29	370	1区	SK319 №3	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
357	PL29	449	1区	SK319 №2	土製品	羽口	平安	–	–	—
358	PL29	448	1区	SK319 №1	土製品	羽口	平安	–	–	—
359	PL29	371	2区	SK332	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
360	PL29	372	1区	SK344 NO.1	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ	高台貼付
361	PL29	374	1区	SK353 №1	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ	静止ヘラケズリ
362	PL29	377	2区	SK357	須恵器	坏B	奈良平安	ロクロナデ	ロクロナデ	高台貼付
363	PL29	375	2区	SK357	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
364	PL29	376	2区	SK357 №1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
365	PL29	378	2区	SK357	黒色土器	鉢	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	—
366	PL30	379	1区	SK366 №2	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
367	PL30	380	1区	SK366 №1・№3・№4・№5・№9	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ハケメ→ナデ	—
368	PL29	382	2区	SK367 床下№1	須恵器	坏B	奈良平安	—	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→高台貼付
369	PL29	381	2区	SK367 №1	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
370	PL30	407	2区	SK369	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
371	PL30	408	2区	SK369	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ナデ	—
372	PL30	409	2区	SK370	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
373	PL30	411	2区	SK373 上層上	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
374	PL30	410	2区	SK373 上層下	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
375	PL30	412	2区	SK374 西	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
376	PL30	413	2区	SK374	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
377	PL30	414	2区	SK375	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
378	PL30	415	2区	SK375	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリ	ナデ・ハケメ	—
379	PL30	416	2区	SK377 №1	須恵器	坏B	奈良平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→高台貼付
380	PL30	417	2区	SK377 №4	須恵器	壺	平安	ナデ	ナデ	回転糸切
381	PL30	418	2区	SK378	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
382	PL30	419	2区	SK396	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
383	PL30	451	2区	SK147	土製品	羽口	不明	–	–	—
384	PL30	450	2区	SK147	土製品	羽口	不明	–	–	—
385	PL30	423	2区	SK444 №9・№12	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理	高台貼付
386	PL30	422	2区	SK444 №4・№8・№17	黒色土器	椀	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
387	PL30	424	2区	SK444 №2・№5・№10	土師器	甕	平安	ロクロナデ→ケズリか	ロクロナデ	—
388	PL30	425	2区	SK445 №3	黒色土器	鉢	平安	ナデ→胴下半ケズリ	黒色処理、ミガキ	静止ヘラケズリ
389	PL30	426	2区	SK445 №6・№11	土師器	甕	平安	ロクロナデ	ナデ	—
390	PL30	427	2区	SK447 №3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
391	PL30	428	2区	SK447 №3	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
392	PL30	429	2区	SK447 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
393	PL30	431	2区	SK447 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
394	PL30	432	2区	SK447 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
395	PL30	430	2区	SK447 No.2	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
396	PL30	433	2区	SK477 No.1	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、摩耗して不明瞭
397	PL30	443	2区	SK529 No.1	土製品	土錘	平安	−	−	−
398	PL30	444	2区	SK529 No.2	土製品	土錘	平安	−	−	−
399	PL30	445	2区	SK529 No.3	土製品	土錘	平安	−	−	−
400	PL30	446	2区	SK529	土製品	土錘	平安	−	−	−
401	PL30	434	2区	SK567	黒色土器	皿	平安	摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ	高台貼付
402	PL30	435	2区	SK611	土師器	盤	平安	ナデ	摩耗して不明瞭	高台貼付
403	PL31	325	2区	SX02 No.7	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
404	PL31	326	2区	SX02 No.10・集	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理か、ミガキ	回転糸切(右)→沈線→高台貼付
405	PL31	327	2区	SX02 No.6・No.14・集	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
406	PL31	328	2区	SX02 No.2	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切→高台貼付
407	PL31	329	2区	SX02 No.19	須恵器	壺	平安	ナデ→ケズリ	ナデ	高台貼付
408	PL31	330	2区	SX02 No.3・No.4・No.5・No.8・No.9・No.11・No.15・No.13・No.17・No.18	須恵器	甕	平安	タタキ→底部付近ナデ	ナデ	ナデ
409	PL31	462	2区	遺構外	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
410	PL31	456	1区	遺構外	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	−
411	PL31	461	2区	遺構外	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	−
412	PL31	420	2区	遺構外(SK442)	黒色土器	坏	平安	ロクロナデ、摩耗して不明瞭	黒色処理、ミガキ	回転糸切(右)
413	PL31	284	2区	遺構外(SD12)	黒色土器	埦	平安	ロクロナデ	黒色処理	回転糸切→沈線→高台貼付
414	PL31	463	3C区	遺構外(3c区No.1)	黒色土器	埦	平安	−	黒色処理	高台貼付
415	PL31	436	2区	遺構外(SK613)	灰釉陶器	皿	平安	漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
416	PL31	454	1区	遺構外(ⅢU06 No.1)	灰釉陶器	小瓶	平安	ロクロナデ→胴下部ケズリ→灰釉	ロクロナデ	回転糸切(右)
417	PL31	453	1区	遺構外(ⅢU03 No.2)	須恵器	長頸壺	平安	ロクロナデ→胴下部ケズリ	ロクロナデ	回転糸切→高台貼付
418	PL31	421	2区	遺構外(SK442 No.10)	須恵器	壺	平安	ロクロナデ→胴下部ケズリ	ロクロナデ	高台貼付
419	PL31	285	2区	遺構外(SD12)	土師器	小甕	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
420	PL31	308	2区	遺構外(SF06)	土師器	小甕	平安	ケズリ	ロクロナデ	回転糸切(右)
421	PL31	460	2区	遺構外	土師器	甕	平安	ロクロナデ	ハケメ	−
422	PL31	458	2区	遺構外(ⅢP07)	土師器	高坏	古墳	ミガキ	指押さえ	−
423	PL31	455	1区	遺構外(ⅢU07 No.1)	須恵器	四耳壺	平安	タタキ、ナデ、耳貼付	当て具痕、ナデ	タタキ→ナデ
424	PL31	464	2区	遺構外	瓦	平瓦	奈良平安	布目	格子目叩き	
425	PL31	293	2区	SD01 No.A	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→圧痕
426	PL31	294	2区	SD01	土師器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
427	PL31	295	2区	SD01 南	土師器	耳皿	平安	黒色処理	黒色処理	回転糸切→ナデ→穿孔
428	PL32	296	2区	SD01 ⅢK14上層	陶器	皿	中世	鉄釉	鉄釉	−
429	PL32	297	2区	SD01	陶器	天目茶碗	中世	下部錆釉→上部鉄釉	鉄釉	−
430	PL32	300	2区	SD01 北	土師器	甑	平安以降	ロクロナデ	ナデ+ハケメ	ケズリ
431	PL32	298	2区	SD01 ⅢK13・14・ⅢK13・14中層	土師器	内耳鍋	中世	ナデ	ナデ	−
432	PL32	299	2区	SD01 ⅢK13・14	土師器	内耳鍋	中世	ナデ	ナデ	−

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土位置	種別	器種	時代	外面器面調整等	内面器面調整等	底部調整
433	PL31	279	1区	SD09 №1	須恵器	坏	平安	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
434	PL32	286	2区	SD13	青磁	埦	中世	口縁に雷文帯→施釉	施釉	—
435	PL31	305	2区	SD25（SD01東西ⅢP13)	須恵器	蓋	平安	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	—
436	PL32	301	2区	SD25（SD01東西ⅢP13)	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
437	PL32	304	2区	SD25（SD01東西ⅢP13)	陶器	古瀬戸挟み皿	中世	施釉	施釉	—
438	PL32	303	2区	SD25（SD01東西ⅢP13)	陶器	古瀬戸深皿	中世	ロクロナデ→ケズリ	ナデ	回転ヘラケズリ→脚貼付
439	PL32	302	2区	SD25（SD01東西ⅢP13)	土師器	内耳鍋	中世	ナデ→底部付近ケズリ	ナデ＋耳部貼付	—
440	PL32	441	2区	SF16	陶器	合子蓋	中世	施釉	ナデ	—
441	PL32	316	1区	SF12 №1	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ＋ナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)→押圧痕
442	PL32	442	2区	SF19	陶器	風炉	中世	—	—	—
443	PL32	290	2区	SB16 ｶﾏﾄﾞ №5	土師器	内耳鍋	中世	ナデ	ナデ、内耳貼付	—
444	PL32	289	2区	SB16 ｶﾏﾄﾞ №6	土師器	内耳鍋	中世	ナデ（摩耗して不明瞭)	ナデ	—
445	PL32	291	2区	SB16 ｶﾏﾄﾞ №9	土師器	内耳鍋	中世	ナデ	ナデ	—
446	PL32	292	2区	SB16 ｶﾏﾄﾞ №12	土製品か	不明	中世	—	—	—
447	PL33	361	2区	SK252 №1	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(左)
448	PL33	363	2区	SK252	青磁	埦	中世	玉縁、釉	釉	—
449	PL33	362	2区	SK252	陶器	古瀬戸深皿	近世	ケズリ	施釉（ハケ塗りか)	ケズリ→脚貼付
450	PL33	365	2区	SK269 №1	陶器	埦	中世	釉	釉	高台貼付
451	PL33	373	2区	SK351 南東	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗して不明瞭
452	PL33	356	2区	SK222	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ナデ	ナデ	回転糸切(右)
453	PL33	357	2区	SK222	青磁	埦	中世	連弁→釉	牡丹陰花文→釉	高台
454	PL33	358	2区	SK251 №1	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ナデ	ナデ	回転糸切
455	PL33	359	2区	SK251	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ナデ	ナデ	摩耗して不明瞭
456	PL33	360	2区	SK251	青磁	埦	中世	玉縁、釉	釉	—
457	PL33	437	2区	SK633 №2	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→押圧痕
458	PL33	438	2区	SK633 №3	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、摩耗して不明瞭
459	PL33	439	2区	SK633 №6	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→ナデ
460	PL33	440	2区	SK633 №4	土師器	内耳鍋	中世	ナデ	ナデ	未調整
461	PL33	459	2区	遺構外	土師器	皿(ｶﾜﾗｹ)	中世	ナデ	ナデ	
462	PL33	457	2区	遺構外(ⅢP02)	陶器	秉燭	近世以降	鉄釉	鉄釉	回転糸切
463	PL33	452	2区	5T	土師器	焙烙	中近世	ナデ	ナデ、内耳2ヶ所	未調整
	77図	465	2区	ⅢP01 No. 5A	黒色土器	坏		ロクロナデ→下端部ケズリ	黒色処理→ミガキ	回転糸切→静止ヘラケズリ
	77図	466	2区	ⅢP01 No. 1	土師器	埦		ロクロナデ	ロクロナデ	糸切→高台貼付
	77図	467	2区	ⅢP02 No. 2	土師器	坏		ロクロナデ+ハケか	ロクロナデ	回転糸切(右)
	77図	469	2区	ⅢP07 検出面	灰釉陶器	皿		漬け掛け	漬け掛け	高台貼付
	77図	470	2区	ⅢP07	土師器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(左)
	77図	471	2区	ⅢP15 No. 1	土師器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
	77図	472	2区	ⅢK22 検出面	土師器	坏		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)
	77図	476	1区	ⅢU12 No. 1	土師器	小甕		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切(右)

遺構一覧表

竪穴建物跡一覧

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方位	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	形態	時期	図版番号	備考
			長軸	短軸	深さ						
SB02	2区	Ⅲ P02	4.43	3.58	0.13	N1E	△ SK25,SK351	正方形	平安中期	19,20	-
SB03	2区	Ⅲ P01・02・06・07	4.65	3.50	0.26	N10E	△ SM01,SF08,SK251,SK252,SK270 ▼ SB04	長方形	平安中期	21,22,23	-
SB04	2区	Ⅲ P01・02・06・07	6.30	5.95	0.26	N95E	△ SB03,SK251,SK252,SK269,SK270	正方形	平安中期	23,24,25,26	塔鋺形合子蓋出土 壁柱穴有
SB05	2区	Ⅲ P06	4.39	(2.20)	0.28	N110E	▼ SB06,SK357 （不）SK332	方形	平安中期	27	-
SB06	2区	Ⅲ P06	6.04	(3.00)	0.25	N118E	△ SB05,SD25,SK357 ▼ SB07,SB09,SB13,SK377 （不）SK332	方形	平安中期	28,29,30	-
SB07	2区	Ⅲ P06	4.44	(2.95)	0.39	N91E	△ SB06,SK332,SK357 ▼ SK377	方形	平安中期	31	-
SB08	2区	Ⅲ P07	4.25	(3.80)	0.23	N92E	△ SD01,SK358,SK378 ▼ SK367,SK370,SK373,SK375,SK376	方形	平安中期	32	-
SB09	2区	Ⅲ P06,Ⅲ P07	4.38	(3.49)	0.05	N95E	△ SB06,SD25,SX04 ▼ SB13	方形	平安中期	33	-
SB10	1区	Ⅲ U06	5.28	(1.58)	0.23	N90E	▼ SB11	方形	平安中期	34,35	-
SB13	2区	Ⅲ P06	(5.03)	4.08	0.32	N8W	△ SB06,SB09,SD25	方形	平安前期	36	-
SB14	2区	Ⅲ P07	3.55	2.87	0.31	N8E	△ SB01,SK369,SX02	隅丸正方形	平安中期	37	-
SB15	2区	Ⅲ K22・23,Ⅲ P02・03	3.10	2.35	(0.38)	N22E	△ SD01,SK351	方形	平安前期	38	-
SB17	2区	Ⅲ P10,Ⅲ Q06	3.33	2.91	0.21	N9E	△ SK451,SK517 ▼ SB28,SK689,SK690	方形	平安中期	39,40	-
SB22	2区	Ⅲ K25,Ⅲ L21,Ⅲ P05・01	3.95	3.60	0.15	N86W	△ SF18	方形	平安前期～中期前半	41	双耳坏出土
SB23	2区	Ⅲ P05	3.31	2.20	0.15	N12E	△ SF17,SK577,SK578	長方形	平安前期～中期	42	埋土内焼土(SF20)
SB24	2区	Ⅲ P09	5.17	3.72	0.23	N6E	△ SM33,SM58,SM59,SK383,SK386,SK387,SK599 ▼ SB31,SB33,SB34,SK636	長方形	平安中期	43	丸鞆出土
SB27	2区	Ⅲ P04・05・09・10	2.69	2.69	0.20	N0	△ SK392,SK589,SK590 ▼ SB31	正方形	平安前期	44	-
SB28	2区	Ⅲ P10,Ⅲ Q06	(3.02)	2.75	0.20	N115E	△ SB17,SK517,SK519 （不）SB30	隅丸正方形	平安中期	45	-
SB29	2区	Ⅲ P10	3.57	2.92	0.09	N81E	△ SK452,SK453,SK454,SK455,SK579,SK580,SK581 ▼ SB31,SD19	長方形	平安中期	46	-
SB30	2区	Ⅲ P09・10・14・15	6.34	(5.16)	0.33	N87E	△ SB16,SD13,SD25,SM32,SM61,SK444,SK450,SK613,SK639 （不）SB28,SD19	方形	平安中期	47,48,49,50	壁柱穴有
SB31	2区	Ⅲ P04・05・09・10	5.13	4.1	0.55	北カマド N82E 南カマド N95E	△ SB24,SB27,SB29,SK390,SK391,SK394,SK420,SK582,SK584,SK585,SK586,SK587,SK588,SK589,SK591,SK611 （不）SB26,SB32,SD19	長方形	平安前期	51,52	-
SB33	2区	Ⅲ P08・09	4.21	(3.39)	0.13	N0	△ SB24,SD01 ▼ SB34,SB35	方形	平安中期	53	-
SB34	2区	Ⅲ P08・09	4.09	(3.97)	0.48	N0	△ SB24,SB33,SM31,SM63,SK389,SK687,SK688 ▼ SB26,SB32,SB35,SK636	方形	平安中期	54	-
SB35	2区	Ⅲ P08・09	2.39	(0.34)	(0.49)	N2E	△ SB33,SB34	方形	平安前期～中期	54	-
SX01	2区	Ⅲ K24	(2.76)	(0.42)	0.39	-	△ SD01,SK262	不整形	平安中期	55	-
SX05	2区	Ⅲ K24	(4.28)	(1.15)	0.26	-	△ SM22,SF14	不整形	平安中期	56	SF15 含む

（）内の数値は現存値を示す。

竪穴状遺構一覧

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方位	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	形態	時期	図版番号	備考
			長軸	短軸	深さ						
SB01	2区	Ⅲ P07	3.96	1.57	0.16	N4E	△ SF08 ▼ SB14,SK369,SX02	不整な長方形	平安後期	57	中世の可能性有
SB11	1区	Ⅲ U06	3.51	2.71	0.26	-	△ SB10,SK308 ▼ SD07	隅丸方形	平安前期～中期	58	-
SB12-1	1区	Ⅲ U02, Ⅲ U07	(2.28)	(1.18)	0.48	-	△ SB12-2 ▼ SK353	方形か	平安中期	59	遺物は SB12-1,SB12-2 の区別なし
SB12-2	1区	Ⅲ U02, Ⅲ U07	(1.82)	(1.57)	0.43	-	▼ SB12-1	方形か	平安中期	59	遺物は SB12-1,SB12-2 の区別なし
SB18	2区	Ⅲ Q01・06	4.30	(2.99)	0.35	N3W	△ SK515,SK528 ▼ SB20 （不）SK529,SK694	方形	平安前期～中期	60	-
SB19	2区	Ⅲ K24・25, Ⅲ P04・05	2.41	1.78	0.17	N11W	▼ SK385	隅丸長方形	平安中期	61	-
SB20	2区	Ⅲ Q01	(3.32)	(2.56)	0.38	N17W	△ SB18,SK530	方形	平安前期～中期	62	-
SB21	2区	Ⅲ K24・25	2.90	2.89	0.15	N9W	△ SM38,SM39,SK419, SK533,SK534 ▼ SB28	正方形	平安	63	-
SB25	2区	Ⅲ P10・15, Ⅲ Q06・11	2.52	(1.12)	0.07	N5E	△ SD13	方形	平安中期以降	64	-
SB26・32	2区	Ⅲ P04・09	5.42	(1.24)	-	N0	△ SB34,SB35,SM31, SM60,SK389,SK390, SK391 （不）SB31	方形	平安中期	65	SB26 と SB32 は同一遺構

（）内の数値は現存値を示す。

溝跡一覧

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方向	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	断面形	時期	図版番号	備考
			長さ	幅	深さ						
SD01	2区	Ⅲ K08・09・ 13・14・18・ 19・23・24, Ⅲ P03・07・ 08・12・13・18	(52.24)	5.70	1.77	北－南	△ SK379,SK671, SD25-1 ▼ SB08,SB15,SB33, SD17,SD18,SD22・23, SD25-2,SX01,SK378	V 字形	平安末～近世	80,81	五輪塔出土
SD02	1区	Ⅱ Y09・14	(12.6)	0.48	0.24	北－南	△ SK274,SK281 ▼ SD03	U 字形	平安	66	-
SD03	1区	Ⅱ Y14・15	(8.78)	0.76	0.21	東－西	△ SD02,SK280,SK283 ▼ SK279	V 字形	平安	66	-
SD04	1区	Ⅱ Y10・15, Ⅲ U06	(10.02)	3.44	0.20	北－南	△ SK304,SK305,SK355	垸形 逆台形	平安	67	-
SD05	2区	Ⅲ P01	(2.98)	0.96	0.18	西－東	△ SK334,SK335 ▼ SK332	垸形	平安	67	-
SD06	1区	Ⅱ Y10・15	(0.70)	1.76	0.58	北－南	-	U 字形 V 字形	平安	67	-
SD07	1区	Ⅲ U06・11	(5.22)	0.78	0.12	北－南	△ SB11	垸形	平安	67	-
SD08	1区	Ⅲ U08	(2.60)	0.85	-	北西－南東	△ SK364	-	古代か	-	流路
SD09	1区	Ⅲ U09	(2.28)	0.44	0.31	西－東	-	U 字形	中世	82	-
SD10	2区	Ⅲ P09・P14	6.26	0.3	0.06	北－南	▼ SK445	-	古代以降	-	-
SD11	2区	Ⅲ P09	2.16	0.79	0.23	西－東	▼ SK448,SK449	-	中世以降	-	-
SD12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
SD13	2区	Ⅲ P15, Ⅲ Q11	(5.42)	0.74	0.43	西－東	▼ SB25,SB30	垸形	中世以降	82	-
SD14	2区	Ⅲ K24	0.81	0.2	0.1	北－南	-	-	不明	-	-
SD15	2区	Ⅲ K25	2.08	0.5	0.06	西－東	▼ SM53,SM54	-	中世以降	-	-
SD16	2区	Ⅲ K10・15・ 20	(11.82)	0.87	0.23	北－南	△ SK645,SK646, SK679 ▼ SD17,SD18,SD22・23 （不）SD20	垸形	中世以降	82	-
SD17	2区	Ⅲ K17・18・ 19・20, Ⅲ L11・16・ 17・18	(42.32)	1.03	0.32	西－東	△ SD01,SD16,SD22・23, SK665,SK666,SK684	垸形	平安	68	-
SD18	2区	Ⅲ K13・14・ 15・18, Ⅲ L01・12・ 13	(43.07)	1.21	0.15	西－東	△ SD01,SD16,SK649, SK651,SK658,SK672, SK675,SK676,SK685 ▼ SD22・23	逆台形	平安	68	-
SD19	2区	Ⅲ P10	3.07	0.47	0.30 (0.16)	北西－南東	△ SB29 （不）SB30,SB31	-	古代	-	-

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方向	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	断面形	時期	図版番号	備考
			長さ	幅	深さ						
SD20	2区	Ⅲ K09･10	(8.42)	0.45	0.07	北西－南東	▼ SD21 （不）SD16	浅い窪み状	平安	68	-
SD21	2区	Ⅲ K09･10･14･15	(4.06)	0.64	0.08	北－南	△ SD20	浅い窪み状	平安	68	-
SD22･23	2区	Ⅲ K15･17･18･19･20, Ⅲ L11･16	(29.50)	1.64	0.18	西－東	△ SD01,SD16,SD18 ▼ SD17	埦形	平安	68	SD22 と SD23 は同一遺構
SD25-1	2区	Ⅲ P06･11･12･13･14･15･18･19･20, Ⅲ Q11･16	(35.34)	4.79	2.78	西－東	▼ SB06,SB09,SB13,SB30,SD01,SD25-2,SM62,SK613	逆台形	近世以降	83,84	-
SD25-2	2区	Ⅲ P12･13･14･15･18･19･20, Ⅲ Q16	－	－	－	西－東	△ SD01,SD25-1,SM62 ▼ SB30	-	中世	83,84	地山崩落

（）内の数値は現存値を示す。

墓跡・火葬遺構一覧

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方位	重複関係 △新 ▼旧 （不）不明	平面形	時期	土葬墓 火葬墓 火葬遺構	図版番号	備考
			長さ	幅	深さ							
SM01	2区	Ⅲ P07	1.10	0.66	0.15	N2E	▼ SB03,SK135	長方形	中世以降	土葬	86	-
SM02	2区	Ⅲ K19	0.92	0.47	0.21	N30W	-	長楕円形	中世以降	土葬	86	-
SM03	2区	Ⅲ K19	0.22	0.20	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM04	2区	Ⅲ K19	0.11	0.09	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM05	2区	Ⅲ K19	0.14	0.12	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM06	2区	Ⅲ P04	0.84	0.48	0.16	N10W	-	長楕円形	中世以降	土葬	86	-
SM07	2区	Ⅲ K19	0.22	0.20	-	-	▼ SX03	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM08	2区	Ⅲ K24	0.27	0.23	-	-	▼ SX03	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM09	2区	Ⅲ K24	0.25	0.23	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM10	2区	Ⅲ K24	0.24	0.21	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM11	2区	Ⅲ K24	0.49	0.42	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM12	2区	Ⅲ K19	0.98	0.51	0.15	N19E	▼ SX03	長方形	中世以降	土葬	86,87	-
SM13	2区	Ⅲ K24	0.13	0.10	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	-
SM14	2区	Ⅲ K24	0.19	0.11	-	-	-	楕円形	中世以降	火葬	87	-
SM15	2区	Ⅲ K24	0.14	0.11	-	-	-	円形	中世以降	火葬	87	-
SM16	2区	Ⅲ K19	1.15	0.29	-	-	▼ SF09･13,SX03	不整形	中世以降	土葬	87	遺構図のみ
SM17	2区	Ⅲ K19	0.26	0.24	-	-	▼ SF09･13,SX03	円形	中世以降	土葬	86,87	遺構図のみ
SM18	2区	Ⅲ K19	-	-	-	N28W	▼ SF09･13,SX03	不明	中世以降	土葬	86,87	骨のみ
SM19	2区	Ⅲ K19	-	-	-	-	▼ SF09･13,SX03	不整形	中世以降	土葬	86,87	骨のみ 遺構図のみ
SM20	2区	Ⅲ K19	-	-	-	-	▼ SX03	円形	中世以降	土葬	86,87	骨のみ 遺構図のみ
SM21	2区	Ⅲ K19	-	-	-	-	▼ SX03	不明	中世以降	土葬	86,87	骨のみ
SM22	2区	Ⅲ K24	0.90	0.52	0.3	N3W	△ SF14 ▼ SX05	長方形	中世以降	土葬	86,87	-
SM24	2区	Ⅲ K20･25	0.19	0.13	(0.07)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM25	2区	Ⅲ K25	0.12	0.10	(0.02)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM26	2区	Ⅲ K25	0.15	0.11	(0.01)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM27	2区	Ⅲ P09	0.12	0.10	(0.05)	-	-	円形	中世以降	火葬	-	-
SM28	2区	Ⅲ K24･25	0.48	0.10	(0.13)	-	▼ SB21,SK534	方形	中世以降	火葬	86,87	遺構図のみ
SM29	2区	Ⅲ K25	-	-	-	-	▼ SK604	不明	中世以降	土葬	87	骨のみ
SM30	2区	Ⅲ K25	0.19	0.18	(0.04)	-	-	方形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM31	2区	Ⅲ P09	1.74	0.58	0.21	N114E	▼ SB26･32,SB34	長楕円形	中世以降	火葬遺構	86	-
SM32	2区	Ⅲ P14･15	0.92	0.56	0.18	N118E	▼ SB30	長方形	中世以降	火葬遺構	87	-
SM33	2区	Ⅲ P09	1.13	(0.79)	0.17	N77W	▼ SB24,SK386	長方形	中世以降	土葬	87	-
SM34	2区	Ⅲ P14	1.33	0.81	0.45	N5W	-	長楕円形	中世以降	土葬	87	-
SM35	2区	Ⅲ K25	0.28	0.27	(0.50)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM36	2区	Ⅲ K25	0.12	0.09	(0.01)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM37	2区	Ⅲ K25	0.12	0.11	(0.01)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM38	2区	Ⅲ K25	0.15	0.13	(0.08)	-	▼ SB21	隅丸方形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM39	2区	Ⅲ K25	0.13	0.12	(0.06)	-	▼ SB21	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM40	2区	Ⅲ K25	0.27	0.19	(0.10)	-	▼ SM41,SM47	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ

遺構名	区	グリッド	規模（m） 長さ	幅	深さ	方位	重複関係 △新 ▼旧 (不) 不明	平面形	時期	土葬墓 火葬墓 火葬遺構	図版番号	備考
SM41	2区	Ⅲ K25	(0.23)	0.16	(0.01)	-	△ SM40 ▼ SM47	不整形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM42	2区	Ⅲ K25	0.19	0.12	(0.03)	-	-	不整形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM43	2区	Ⅲ K25	0.35	0.15	(0.03)	-	-	不整形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM44	2区	Ⅲ K25	0.14	0.11	(0.02)	-	-	円形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM45	2区	Ⅲ K25	0.18	0.17	(0.10)	-	-	不整形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM46	2区	Ⅲ K25	0.27	0.08	(0.04)	-	▼ SM47	不整形	中世以降	火葬	87	遺構図のみ
SM47	2区	Ⅲ K25	0.59	(0.37)	0.02	-	△ SM40, SM41,SM46	円形	中世以降	土葬	87	-
SM48	2区	Ⅲ K20	0.44	0.42	0.12	-	-	円形	中世以降	火葬	87,88	-
SM49	2区	Ⅲ K20	0.94	0.58	0.11	N09W	-	隅丸長方形	中世以降	土葬	87,88	-
SM50	2区	Ⅲ K19･20, Ⅲ K24	0.44	0.43	0.21	-	-	円形	中世以降	土葬	87	遺構図のみ
SM51	2区	Ⅲ K20	0.80	0.61	0.10	N113E	-	楕円形	中世以降	土葬	87,88	-
SM52	2区	Ⅲ P04	0.36	0.27	(0.27)	-	-	不整形	中世以降	火葬	-	-
SM53	2区	Ⅲ K20･25	1.22	0.95	0.37	N0	△ SD15 ▼ SM54	隅丸方形	中世以降	土葬	87,88	-
SM54	2区	Ⅲ K25	1.04	0.63	0.12	N5E	△ SD15,SM53	長楕円形	中世以降	土葬	87,88	-
SM55	2区	Ⅲ K25	1.05	0.85	0.33	N5W	-	隅丸長方形	中世以降	土葬	87,88	-
SM56	2区	Ⅲ L21	1.64	0.66	0.14	N12W	-	隅丸方形	中世以降	土葬	88	-
SM57	2区	Ⅲ P04	0.23	0.06	-	-	-	不整形	中世以降	火葬	-	-
SM58	2区	Ⅲ P05	-	-	-	-	▼ SB24	不明	中世以降	土葬	89	骨のみ
SM59	2区	Ⅲ P09	-	-	-	N22E	▼ SB24	不明	中世以降	土葬	89	骨のみ
SM60	2区	Ⅲ P04･09	-	-	-	-	▼ SB26・32	不明	中世以降	土葬	89	骨のみ
SM63	2区	Ⅲ P09	-	-	-	-	▼ SB34	不明	中世以降	土葬	-	骨のみ
SM64	2区	Ⅲ P13･14	1.67	0.66	0.07	N0	-	隅丸長方形	中世以降	土葬	89	-
SM65	2区	Ⅲ L12	-	-	-	-	-	不明	中世以降	土葬	-	-
SM66	2区	Ⅲ L11	-	-	-	-	-	不明	中世以降	-	-	-
SF09	2区	Ⅲ K19･24	1.16	0.74	0.22	-	△ SM16～19	不整形	中世	火葬遺構	87,89	SF13 と同一遺構
SF11	2区	Ⅲ K19	0.90	0.38	0.11	N98E	-	長楕円形	中世以降	火葬遺構	87,89	-
SF13	2区	Ⅲ K19	0.73	0.19	0.08	N99E	△ SM16～19	長楕円形	中世	火葬遺構	87,89	SF09 と同一遺構
SF14	2区	Ⅲ K24	0.95	0.32	0.17	N82E	▼ SX05,SM22	隅丸長方形	中世以降	火葬遺構	87,89	-
SF16	2区	Ⅲ P10	1.06	0.23	0.10	N89E	-	不整な楕円形	中世	火葬遺構	90	-
SK383	2区	Ⅲ P09	0.82	0.78	0.40	N83E	▼ SB24	隅丸方形	中世以降	土葬	90	墓跡
SK386	2区	Ⅲ P09	0.82	0.60	0.53	N85E	△ SM33 ▼ SB24	隅丸長方形	中世以降	土葬	87	墓跡
SK390	2区	Ⅲ P09	0.85	0.77	0.46	-	▼ SB31	不整形	中世以降	土葬	-	墓跡
SK530	2区	Ⅲ Q01	(1.44)	(0.98)	0.34	-	▼ SB20	長楕円形	中世以降	土葬	-	五輪塔出土墓跡
SK531	2区	Ⅲ K24･25	0.43	0.38	0.15	-	-	楕円形	中世以降	土葬	-	墓跡
SK563	2区	Ⅲ L21	0.48	0.46	-	-	-	隅丸方形	中世以降	土葬	-	墓跡
SK581	2区	Ⅲ P10	0.48	0.48	0.48	-	▼ SB29,SB31	円形	中世以降	土葬	-	墓跡
SK584	2区	Ⅲ P10	0.54	0.49	0.13	-	▼ SB31	隅丸方形	中世以降	土葬	-	墓跡
SK641	2区	Ⅲ P04	0.21	0.19	0.20	-	▼ SB26・32	楕円形	中世以降	土葬	-	墓跡

( )内の数値は現存値を示す。

焼成遺構一覧

遺構名	区	グリッド	規模（m） 長さ	幅	深さ	方位	重複関係 △新 ▼旧 (不) 不明	平面形	時期	図版番号	備考
SF01	2区	Ⅲ K22	3.38	0.66	0.20	N5E	△ SK152,SK154,SK155	楕円形	平安	69	-
SF02	2区	Ⅲ K19	0.53	0.50	-	-	-	円形	中世以降	87	遺構図のみ
SF03	2区	Ⅲ K22	0.42	0.40	0.20	-	△ SK250	円形	古代以降	-	-
SF04	2区	Ⅲ P04	0.52	0.45	0.13	-	▼ SF07	円形	平安	69	中世以降の可能性有
SF05	2区	Ⅲ P04	0.95	0.38	0.14	N2E	△ SK259 ▼ SK264	楕円形	平安	69	中世以降の可能性有
SF07	2区	Ⅲ P04	0.58	0.56	0.15	-	△ SF04	円形	平安	69	中世以降の可能性有
SF08	2区	Ⅲ P07	0.72	0.46	0.08	-	▼ SB01,SB03	不明	古代	69	-
SF10	2区	Ⅲ K19	0.26	0.20	0.18	-	-	円形	中世以降	87	遺構図のみ

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方位	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	平面形	時期	図版番号	備考
			長さ	幅	深さ						
SF12	1区	Ⅲ U13	0.60	0.27	0.06	-	-	不整形	中世	91	-
SF18	2区	Ⅲ P05	1.58	0.81	0.20	N38E	▼ SB22	不整形	平安以降	-	-
SF19	2区	Ⅲ Q01	0.52	0.50	0.26	-	-	L字形	中世	91	風炉出土 土坑2基重複か
SF21	2区	Ⅲ K15	1.08	0.20	0.08	-	△ SK640	不整形焼土	中世以降	-	-
SM61	2区	Ⅲ P10･15	0.68	0.48	0.13	N110E	▼ SB30	不整形	中世以降	91	焼成遺構
SM62	2区	Ⅲ P15	0.58	0.25	0.08	N71E	▼ SD25-2	楕円形	中世以降	91	焼成遺構
SB16	2区	Ⅲ P15	2.21	1.07	0.23	N6E	▼ SB30	不整形	中世	92	焼成遺構
SX03	2区	Ⅲ K19･24	2.20	1.37	0.17	-	△ SM07,SM08,SM12,SF13,SM16,SM17,SM18,SM19,SM20,SM21,SF09	涙滴形	平安中期	70	-

（ ）内の数値は現存値を示す。

土坑等一覧（報告書掲載分）

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方位	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	平面形	時期	図版番号	備考
			長さ	幅	深さ						
SK78	2区	Ⅲ P01	0.92	0.60	0.12	-	-	土坑2基重複	平安中期	71	9C後半～10C前半
SK222	2区	Ⅲ K17	2.48	1.37	0.10	N87E	-	張り出しを持つ円形	中世	96	-
SK231	2区	Ⅲ P01	1.20	1.06	2.20	-	△ SK77	円形	平安～中世	93	井戸跡
SK251	2区	Ⅲ P02･07	1.80	1.36	1.00	N19E	▼ SB03,SB04,SK252	長方形	中世	96	-
SK252	2区	Ⅲ P02	1.31	1.19	1.60	-	△ SK251 ▼ SB03,SB04	上端：円形 下端：隅丸方形	中世	93	井戸跡
SK269	2区	Ⅲ P01	0.92	0.90	1.60	-	▼ SB04	不整円形	中世	94	井戸跡
SK270	2区	Ⅲ P07	1.12	0.92	2.2	N84W	▼ SB03	楕円形	中世	94	井戸跡
SK303	1区	Ⅲ Y09	0.68	0.63	0.12	-	-	円形	平安	71	-
SK304	1区	Ⅱ Y10, Ⅲ U 06	1.84	(1.07)	0.33	-	▼ SD04	隅丸方形	平安	72	-
SK305	1区	Ⅱ Y10･15, Ⅲ U 06･11	1.99	1.35	0.24	-	▼ SD04	楕円形	平安	72	中世の可能性有
SK319	1区	Ⅲ U 09	0.63	0.49	0.28	-	-	不整な円形	平安前期～中期	72	羽口・坏
SK332	2区	Ⅲ P 01	(1.92)	(0.92)	0.10	-	△ SB06,SB07,SD05,SK333,SK334	不明	平安	-	遺物のみ掲載
SK344	1区	Ⅲ U 04	0.28	0.26	0.10	-	-	円形	平安	71	-
SK351	2区	Ⅲ P 02	2.42	2.14	1.3以上	-	▼ SB02,SB15	不整な円形	中世	94	井戸跡 SK71と同一遺構
SK353	1区	Ⅲ U 02･07	(1.48)	(0.85)	0.19	-	△ SB12-1	隅丸方形	平安前期～中期	72	-
SK357	2区	Ⅲ P06	2.06	0.96	0.30	N7E	△ SB05 ▼ SB06,SB07	隅丸長方形	平安前期	72	-
SK358	2区	Ⅲ P 07	1.16	1.10	(1.00)	N2W	▼ SB08 （不） SK370,SK376	隅丸方形	平安前期～中期	71	-
SK366	1区	Ⅲ U 08	1.00	0.80	0.10	-	-	楕円形	平安前期～中期	72	-
SK367	2区	Ⅲ P07	1.82	0.94	0.22	N1E	△ SB08 ▼ SK375	隅丸長方形	平安前期～中期	72	-
SK369	2区	Ⅲ P07	0.52	0.35	0.11	-	△ SB01	隅丸方形	平安中期～後期	72	-
SK370	2区	Ⅲ P07	1.02	(0.78)	0.55	-	△ SB08,SK358 （不） SK373,SK376	不整な円形	平安前期～中期	71	-
SK373	2区	Ⅲ P07	1.50	0.53	0.52	-	△ SB08,SK358 （不） SK370	不整な長楕円形	平安前期～中期	71	-
SK374	2区	Ⅲ P07	0.73	0.53	0.19	-	△ SB03,SB04	円形	平安前期～中期	-	遺物のみ掲載
SK375	2区	Ⅲ P07	(1.79)	(1.27)	0.30	-	△ SB08,SK367 ▼ SK356	不整な方形	平安中期	72	-
SK376	2区	Ⅲ P07	(0.98)	0.91	0.47	-	△ SB08,SK358 （不） SK370	不整な円形	平安前期～中期	71	-
SK377	2区	Ⅲ P01･06	1.54	1.30	0.56	-	△ SB06,SB07	不整な円形	平安前期～中期	73	-
SK378	2区	Ⅲ P08	(1.28)	(0.70)	(0.43)	-	-	不明	平安	-	遺物のみ掲載

遺構名	区	グリッド	規模（m）			方位	重複関係 △新 ▼旧（不）不明	平面形	時期	図版番号	備考
			長さ	幅	深さ						
SK384	2区	Ⅲ K24	0.44	0.41	0.20	-	-	不整な方形	中世以降	97	五輪塔再利用
SK385	2区	Ⅲ K25	0.45	0.42	0.40	-	▼ SB19	円形	中世以降	97	五輪塔再利用
SK396	2区	Ⅲ P04・05	0.66	0.59	0.19	-	-	楕円形	平安	-	遺物のみ掲載
SK417	2区	Ⅲ K24	0.25	0.23	0.13	-	-	円形	平安	73	中世以降の可能性有
SK444-1	2区	Ⅲ P09･10	1.22	1.13	0.26	-	△ SK444-2 ▼ SB30	隅丸方形	平安前期～中期	73	-
SK444-2	2区	Ⅲ P09･10	0.48	(0.34)	0.29	-	▼ SK444-1	円形	中世以降	97	-
SK445	2区	Ⅲ P14	0.91	0.69	0.10	-	△ SD10	不整な楕円形	平安	73	-
SK447	2区	Ⅲ Q06	1.62	0.88	0.24	-	-	不整な楕円形	平安中期以降	73	-
SK477	2区	Ⅲ P05	1.23	0.71	0.2	-	-	楕円形	平安	-	遺物のみ掲載
SK529	2区	Ⅲ Q06	(0.98)	(0.66)	0.23	-	▼ SK691,SK692 (不) SB18	円形	平安以降	73	-
SK557	2区	Ⅲ L21･ Ⅲ Q01	0.41	0.41	0.20	-	-	円形	中世以降	97	五輪塔再利用
SK560	2区	Ⅲ L21	1.58	1.52	1.8以上	-	-	円形	古代～中世	94	井戸跡
SK567	2区	Ⅲ Q01	0.29	0.26	0.19	-	-	隅丸方形	平安	73	-
SK568	2区	Ⅲ Q01	0.25	0.22	0.17	-	-	隅丸方形	平安以降	73	-
SK572	2区	Ⅲ L21	1.44	1.24	1.50	-	-	上端：円形 下端：隅丸方形	中世以降	95	井戸跡
SK611	2区	Ⅲ P04･09	0.77	0.61	0.3	-	△ SK391 ▼ SB31	楕円形	平安中期以降	73	-
SK613	2区	Ⅲ P15	1.76	1.18	0.6以上	N79E	△ SD25-1 ▼ SB30	楕円形	中世	95	井戸跡
SK633	2区	Ⅲ L11	2.2	0.84	0.18	N7E	▼ SK634	隅丸方形	中世	98	ハバキ出土
SK682	2区	Ⅲ L11・16	1.16	0.86	1.50	N3E	-	隅丸方形	平安～中世	95	井戸跡
SK686	2区	Ⅲ L13	(2.66) (3.95)	2.36 0.59	0.48 0.36	-	△ SK659,SK683 (不) SD18,SD23	不整形	中世以降	98	SD24は関連遺構 上段値：SK686 下段値：SD24
SF17	2区	Ⅲ P05	1.83	0.52	0.28	N57E	▼ SB23	土坑2基重複	平安後期	71	土坑
SX02	2区	Ⅲ P 07	0.84	0.80	-	-	△ SB01 ▼ SB14	不整形	平安	-	土器集中 遺物のみ掲載

（）内の数値は現存値を示す。

写真図版

遺跡遠景（北から）2016 年 11 月撮影

遺跡遠景（南西から）2017 年 6 月撮影

1区・２区空中写真　2016 年 11 月撮影

1区・２区空中写真（2016 年・2017 年撮影を合成）

SB01 全景（南から）

SB02 完掘（南から）

SB03 完掘（南から）

SB05 完掘（西から）

SB04 完掘（西から）

遺構２（古代竪穴建物跡・竪穴状遺構）

SB06 完掘（西から）

SB07 完掘（南東から）

SB08 完掘（南から）

SB09 カマド遺物出土状況（西から）

SB10･11 完掘（北西から）

SB12 完掘（東から）

SB13 完掘（南東から）

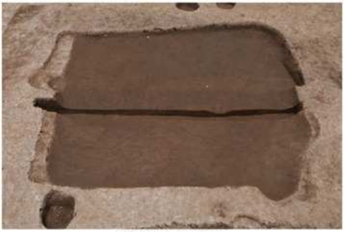
SB14 遺物出土状況（南から）

SB17 完掘（南から）

SB15 完掘（南から）

SB18 完掘（西から）

SB19 完掘（南から）


SB21 完掘（南から）

SB22 完掘（東から）

SB23 完掘（北から）

SB24 完掘（西から）

SB25 完掘（南から）

SB27 完掘（南から）

SB28 完掘（西から）

SB29 完掘（西から）

SB30 完掘（南から）

SB31 炭検出状況（西から）

SB33 完掘（南から）

SB34 完掘（南から）

SB34･35 掘方完掘（南から）

SX05 完掘（東から）

SD02 完掘（南から）

SD04·06 完掘（南から）

SD05 完掘（東から）

SD18 完掘（西から）

SD17·23 完掘（東から）

SD07 完掘（南から）

SF01 完掘（西から）

SF08 炉検出状況（南から）

SF12 出土状況（東から）

SX03 完掘（南東から）

SF17 完掘（西から）

SK304 完掘（東から）

SK305 完掘（東から）

SK319 遺物出土状況（南から）

SK353 完掘（南から）

SK357 完掘（南から）

SK367 完掘（東から）

SK369 遺物出土状況（南から）

SK375 完掘（南東から）

SK377 遺物出土状況（南東から）

SK444 完掘（西から）

SX02 遺物出土状況（西から）

SD01 全景（北から）

SD09 完掘（北から）

SD13 完掘（東から）

SD16･17･18 完掘（西から）

SD25 完掘（東から）

SM02 骨出土状況（南から）

SM06 骨出土状況（東から）

SM07 検出状況（南東から）

SM12 骨出土状況（南から）

SM18･19･20･21 検出状況（南から）

SM22 全景（南から）

SM28 骨出土状況（北から）

SM29 骨出土状況（南から）

SM31 完掘（南から）

SM32 完掘（西から）

SM33 骨出土状況（東から）

SM34 完掘（東から）

SM47 骨出土状況（西から）

SM40 ～ 46 骨出土状況（東から）

SM49 骨出土状況（東から）

SM51 完掘（北から）

SM53 骨出土状況（西から）

SM54 骨出土状況（東から）

SM55 骨出土状況（西から）

SM56 骨出土状況（南から）

SM58 骨出土状況（南から）

SM59 骨出土状況（南から）

SM60 骨出土状況（南から）

SM64 完掘（南から）

SF11 検出状況（南東から）

SM07、SF09・13 検出状況（南東から）

SF14 完掘（南西から）

SF16 完掘（西から）

SK383 完掘（南から）

SK386 完掘（東から）

SM61 完掘（北から）

SM62 完掘（南から）

SB16 完掘（南から）

SK231 完掘（南東から）

SK252 完掘（西から）

SK269 完掘（南から）

SK270 完掘（西から）

SK351 完掘（南西から）

SK560 完掘（南から）

SK572 完掘（東から）

SK682 上半完掘（東から）

SK251 完掘（南から）

SK384 完掘（北から）

SK385 完掘（南から）

SK557 完掘（北から）

SK633 完掘（南から）

SK686 完掘（西から）

Ⅲ L13 グリッド SK 群（北東から）

SB02 土器

SB03 土器

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
※ 56 は SB03 出土

SB04 土器

SB05 土器

SB07 土器

SB08 土器

SB09 土器

78
79
80
81
82
83
84
85
87
86
88
89
90
Pit1（SK368）
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114

SB06 土器

SB10 土器

SB13 土器

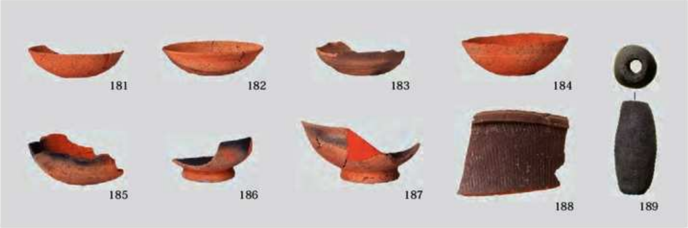
SB15 土器

SB22 土器

SB14 土器

SB17 土器

SB23 土器



SB24 土器

SB28 土器　　SB27 土器

SB29 土器

SB31 土器

201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248

SB30 土器

SB33 土器

SX01 土器

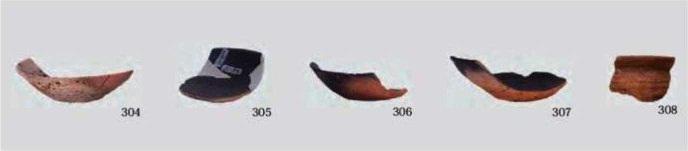
SB34・SB35 土器

SX05 土器

SB01 土器

SB11 土器

SB12 土器



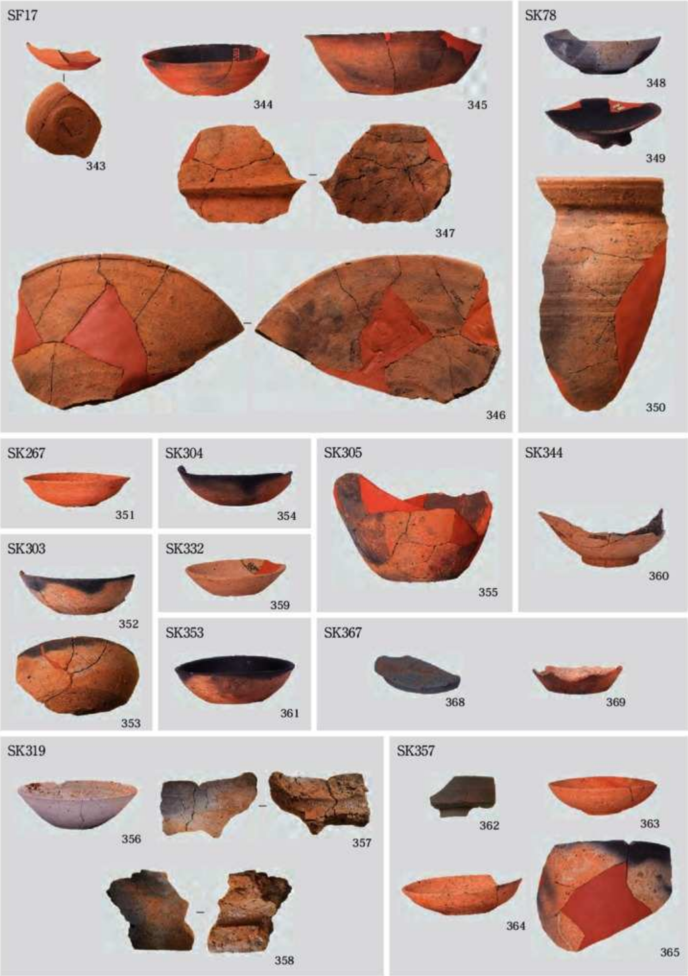
SB18 土器

SB19 土器

SB20・SB25・SB26・SB32 土器

SD02・03・04・05・06・17 土器

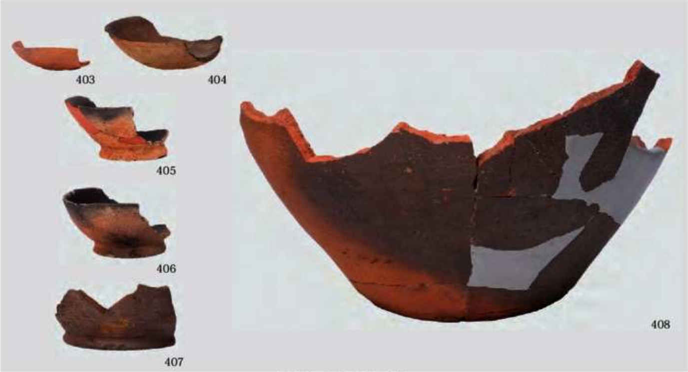
SF01・05・08・12、SX03 土器


SF17
343
344
345
347
346
SK78
348
349
350
SK267
351
SK304
354
SK305
355
SK344
360
SK303
352
353
SK332
359
SK353
361
SK367
368
369
SK319
356
357
358
SK357
362
363
364
365

土坑出土土器１

SK366
366
367
SK369
370
371
SK370
372
SK374
375
376
SK373
373
374
SK375
377
378
SK377
379
380
SK378
381
SK396
382
SK147
383
384
SK444
385
386
387
SK445
388
389
SK447
390
391
392
393
394
395
SK477
396
SK529
397
398
399
400
SK567
401
SK611
402

土坑出土土器２

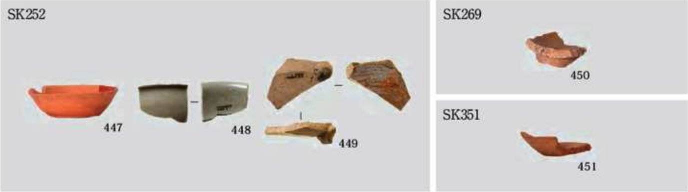


遺物集中（SX02）土器

遺構外土器

溝跡（SD01・09・13・25）出土土器

墓跡・焼成遺構出土土器

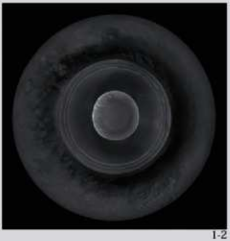


井戸跡出土土器

土坑出土土器

遺構外出土土器

1


1-2

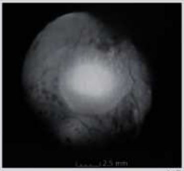
1-3

1-4

1-5

1-6

1-7


1-8

2

3

銅製品（1～3は2：3、1-2～1-8は任意）

古代から中世の金属製品（1：2）

SK114
SK252
SK271
SK442
SK586
SM12
SM31
SM63
SF09
SF13
SF16
SD01
SB30
SX04
遺構外
12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22
23 24 25 26 27
28 29 30 31 32
33 34 35 36 37
38 39 40 41 42 43
44 45 46 47 48 49

銭貨（1：1）

6　7　8　9　10

11　12　13　14　15

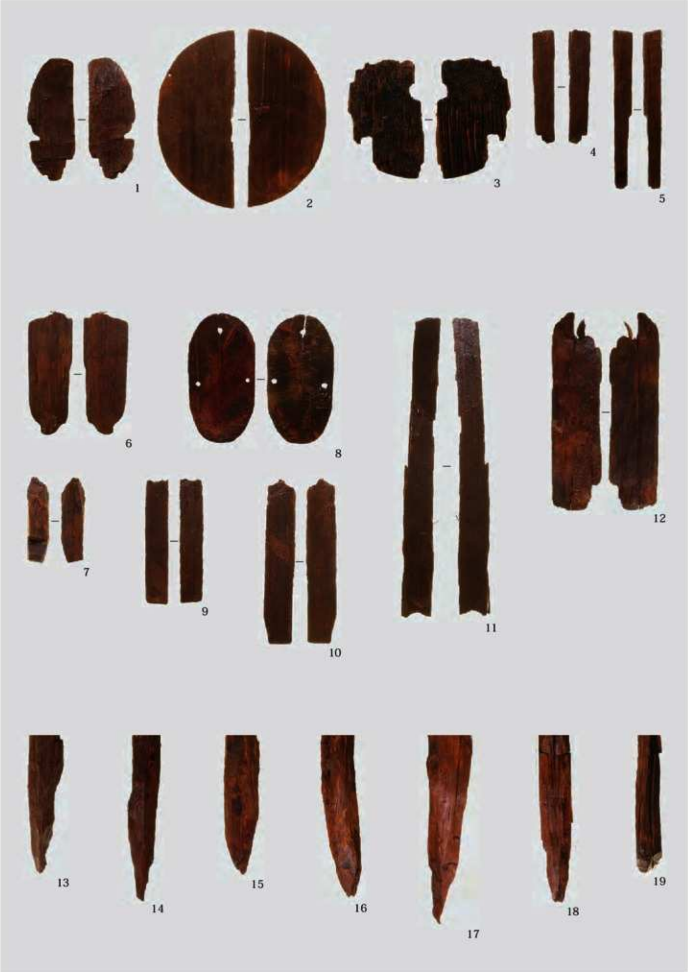
16　17　18　19　20

21　22　23　24

五輪塔（1：6）

五輪塔・石臼他（1：6）

石製品他（1：2）



古代から中世の木製品（1：6）

報告書抄録

ふりがな	ながのし　こじま・やなぎはらいせきぐん
書名	長野市　小島・柳原遺跡群
副書名	一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	127
編著者名	寺内貴美子　石丸敦史　鶴田典昭　平林　彰　川崎　保
編集機関	（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4　℡ 026-293-5926
発行年月日	2020年3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小島（こじま）・柳原（やなぎはら）遺跡群（いせきぐん）	長野県長野市（ながのけんながのし） 柳原（やなぎはら）1561他	20201	B-1	36°39′34″ （世界測地系）	138°15′35″ （世界測地系）	20160601 ～20170106 20170403 ～20171218 20180402 ～20180831	3,000㎡ 1,800㎡ 1,500㎡	一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小島・柳原遺跡群	集落跡	平安	竪穴建物跡26、竪穴状遺構10、溝跡14、焼成遺構6、土坑26	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、土錘、金属器、石製品、木製品	塔鋺形合子蓋、双耳坏 石製丸鞆（金属鋲付）
		中世～近世	溝跡7、墓跡69、焼成遺構7、土坑約650	かわらけ、陶磁器、五輪塔、石製品、木製品、骨	

要約

本遺跡群は、長野市東部の千曲川左岸の自然堤防上に位置する。今回の調査では、平安時代と中世以降を中心とした遺構遺物がみつかっている。平安時代では、東西に細長く広がる微高地上に中期を中心とした竪穴建物が展開する。竪穴建物跡から奈良時代末から平安時代初頭に遡る仏具（塔鋺形合子蓋）が出土した。中世は、墓、土坑群や溝跡だけで、建物跡は検出されていない。しかし、溝跡の中には、幅6m、深さ2mを越える調査区をほぼ南北に縦断し、村山堰と北八幡川をつなぐ中世の用水路跡や調査区を東西に横断する長野盆地の条里地割の基軸に沿った平安時代の遺構が検出されており、当地が、中世のみならず古代にも水利や交通の拠点であったことがうかがえる。

2020 年 3 月 19 日　　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　127

小島・柳原遺跡群

一般国道 18 号（長野東バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者　国土交通省関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp
印刷者　カシヨ株式会社
〒 381-0037 長野県長野市西和田 1-27-9
Tel 026-251-0510　Fax 026-251-0500